高松市埋蔵文化財調査報告書　第51集

高松港頭地区再開発関連事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

鬼無藤井遺跡
（きなしふじいいせき）

2001.3

高松市教育委員会

『高松港頭地区再開発関連事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 鬼無藤井遺跡』2001.3

正誤表

頁	行	誤	正
はじめに	14	一体にわたり	一帯に…
5	23	土抗等を	土坑等を
31	8	3の内頸面には	3の内傾面…
34	下6	直口しながら	直行し…
35	下2	胎動や影響関係	胎土や影響…
42	下3	石錘で	石錐で
46	13	時期特定の特定できる	時期の特定できる
52	13	石錘で	石錐で
55	9	およそ70㎡前後と	30～40㎡と
95	下8	緑柚陶器	緑釉陶器
114	下2	柚を	釉を
158	2	D3区南東部	D1区…
185	下5	SD3301	SD-E-301
192	下17	20（SD3216）	SD-E-216
198	9	ある事とても	ある事とも
202	下7	緑灰（10Y6/）	灰（10Y6/）

＊「遺物観察表」，第4章については，対象外とした。

前期弥生土器　高坏

前期弥生土器　甕

中世土器類

鬼無藤井遺跡　環濠集落（復原想像図）

はじめに

21世紀が幕を開け，高松ではその表玄関の一新に勤しんでいます。一足早く香西・鬼無地区におきましては移転してきたＪＲ貨物ヤード等の再開発事業が完了し，新しい世紀に相応しい景観が整ってまいりました。また当地は，中世に活躍した香西氏の名を留める香西地区や桃太郎伝説のある鬼無地区にあり，歴史的趣が現在でも強く残っております。近年，この再開発事業等に伴って当地周辺において発掘調査が行われています。これまで周辺部では例の乏しかった発掘調査ではありますが，すでに報告いたしました香西南西打遺跡等，この地におきまして埋蔵文化財の見地から歴史の一端を再見することができるようになりました。

鬼無藤井遺跡と名づけられた本遺跡では，大陸から水稲が伝わって間もない頃の弥生時代前期の集落跡が見つかりました。この集落については，その居住区の周囲に環濠と呼ばれる堀を２重に巡らしたものが確認されており，水稲に必要な土地占有等をめぐる当時の緊張関係が伝わってくるようです。また中世，香西氏の名が歴史上に見られる頃では周辺部一体にわたり施行されていた条里と呼ばれる土地区画のもと，人々は建物や田畑といった生活の基盤を築いていたようです。この他におきましても当遺跡では縄文時代～近代に至る先人たちの生活の痕跡を見ることができます。

最後になりましたが，今回の調査に際し多大なご理解とご協力をいただきました地元の方々や関係者に感謝の意を表するものです。

平成13年３月

高松市教育委員会

教育長　浮田　清市

例　　言

1　本書は，高松港頭地区再開発関連事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書で，高松市鬼無町藤井に所在する鬼無藤井遺跡の調査報告を収録した。

2　発掘調査および整理作業については，高松市教育委員会が実施した。

3　調査から報告書作成に至るまで，下記の関係機関ならびに方々の助言と協力を得た。記して謝意を表したい。

香川県教育委員会　　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
土井ヶ浜遺跡人類学ミュージアム

4　本遺跡の調査は，平成８年度試掘及び本調査を文化振興課文化財専門員山元敏裕と讃岐文化遺産研究会末光甲正が行い，平成９，10年度本調査を山元・小川と讃岐文化遺産研究会中西克也が行った。整理作業は，平成12年度に末光，小川が行った。

5　本報告書製作は第２章第５節を末光，第２章縄文・弥生土器原稿及び第３章第２節を徳島文理大学大学院生川部浩司が分担し執筆し，その他及び編集は小川が行った。

6　本文の挿図として，高松市都市計画図２万５千分の１を一部改変して使用した。

7　発掘調査で得られたすべての資料は，高松市教育委員会で保管している。

8　本書で用いた高度値は海抜高であり，方位はすべて座標北を表す。

9　本書で用いる遺構の略号は次のとおりである。

ＳＡ：柵列　ＳＢ：掘立柱建物　ＳＤ：溝　ＳＥ：井戸　ＳＨ：竪穴住居　ＳＫ：土坑
ＳＰ：柱穴　ＳＲ：旧河道　ＳＸ：不明遺構

10　遺構番号は本書作成にあたり再編し，遺構略号と遺構番号との間の英数は主要に検出された調査区を示す。

11　本書掲載の石器図面で網箇所は摩滅痕を，輪郭線は敲打痕の範囲を示す。また木製品の色箇所は漆付着の範囲を示す。

12　土層の名称及び土器胎土観察にあたっては，標準土色帖（農林水産省農林技術会議事務局　監修）を用いた。

目　　次

はじめに
例言
目次

第１章　調査の経緯・経過と調査区の設定
第１節　調査の経緯…… 1
第２節　調査の経過…… 1
第３節　整理作業の経過…… 2
第４節　調査区の設定…… 2

第２章　調査の成果
第１節　Ａ調査区…… 5
第２節　Ｂ調査区…… 79
第３節　Ｃ調査区…… 139
第４節　Ｄ調査区…… 155
第５節　Ｅ調査区…… 167
第６節　Ｆ調査区…… 208

第３章　まとめ
第１節　遺構の変遷…… 221
第２節　鬼無藤井遺跡の前期弥生土器と環濠集落…… 223

第４章　自然科学的分析
鬼無藤井遺跡における樹種同定…… 233
高松市鬼無藤井遺跡の中世人骨…… 251
鬼無藤井遺跡の花粉化石…… 263
鬼無藤井遺跡のプラント・オパール…… 269

図　版　目　次

図版１－１　ＳＤ－Ａ１－01
図版１－２　Ａ１区南部
図版１－３　Ａ１区水田跡
図版２－１　ＳＤ－Ａ１－02
図版２－２　ＳＤ－Ａ１－03
図版２－３　環濠遺物出土状況
図版３－１　ＳＨ－Ａ２－01
図版３－２　ＳＨ－Ａ２－03
図版３－３　ＳＢ－Ａ２－01
図版４－１　ＳＤ－Ａ２－06
図版４－２　Ａ２区中央部
図版４－３　ＳＫ－Ａ２－05
図版５－１　ＳＤ－Ａ２－07
図版５－２　ＳＤ－Ａ２－02，４（Ａ３区より）
図版５－３　ＳＤ－Ａ３－09
図版６－１　Ａ３区中央部
図版６－２　ＳＤ－Ａ３－01
図版６－３　ＳＤ－Ａ３－08
図版７－１　ＳＤ－Ａ５－05
図版７－２　ＳＤ－Ａ５－06
図版７－３　ＳＤ－Ａ４－02
図版８－１　Ａ６区全景（北より）
図版８－２　ＳＢ－Ａ５－01
図版８－３　Ａ４区全景（南より）
図版９－１　ＳＤ－Ａ５－01人骨出土状況１
図版９－２　ＳＤ－Ａ５－01人骨出土状況２
図版９－３　ＳＤ－Ａ５－01人骨出土状況３
図版10－１　ＳＫ－Ｂ１－07遺物出土状況
図版10－２　ＳＫ－Ｂ１－07
図版10－３　Ｂ１区全景（北より）
図版11－１　ＳＢ－Ｃ１－01
図版11－２　ＳＢ－Ｂ３－01
図版11－３　Ｂ３区全景（南より）
図版12－１　ＳＥ－Ｃ１－01
図版12－２　ＳＫ－Ｂ３－01
図版12－３　ＳＫ－Ｂ３－01遺物出土状況
図版13－１　ＳＢ－Ｂ５－01
図版13－２　ＳＤ－Ｂ５－04
図版13－３　Ｂ５区北半溝跡群
図版14－１　ＳＤ－Ｂ４－01
図版14－２　ＳＲ－Ｂ－01
図版14－３　ＳＤ－Ｂ５－20
図版14－４　ＳＤ－Ｂ５－12，13
図版15－１　Ｃ１区全景（北より）
図版15－２　ＳＤ－Ｄ１－02
図版15－３　Ｄ１区全景（北より）
図版16－１　Ｃ４区全景（北より）
図版16－２　Ｃ２区完掘状況
図版16－３　ＳＢ－Ｃ４－02
図版17－１　Ｅ２→Ｅ１区遠景
図版17－２　Ｅ２→Ｅ４区遠景
図版18－１　ＳＨ－Ｅ１－201検出状況
図版18－２　ＳＤ－Ｅ１－118掘削状況
図版19－１　ＳＤ－Ｅ２－101～109
図版19－２　ＳＥ－Ｅ２－201完掘状況
図版20－１　ＳＤ－Ｅ３－301完掘状況
図版20－２　ＳＫ－Ｅ４－101完掘状況
図版21－１　ＳＤ－Ｅ１－107～112
図版21－２　ＳＤ－Ｅ２－210他
図版21－３　ＳＤ－Ｅ２－209他
図版21－４　ＳＤ－Ｅ３－301遺物出土状況
図版21－５　ＳＥ－Ｅ２－202導水溝（配石）
図版22－１　ＳＤ－Ｅ３－216遺物出土状況
図版22－２　ＳＫ－Ｅ４－101遺物出土状況
図版22－３　ＳＫ－Ｅ４－101遺物出土状況
図版22－４　ＳＫ－Ｅ４－101砥石出土状況
図版22－５　ＳＫ－Ｅ４－101完掘状況
図版22－６　ＳＡ－Ｅ４－101
図版22－７　ＳＡ－Ｅ４－102
図版23－１　ＳＤ－Ｆ１－03
図版23－２　Ｆ１区全景（南より）
図版23－３　Ｆ１区全景（北より）
図版24　ＳＲ－Ａ－01出土遺物
図版25　ＳＤ－Ａ５－05出土遺物
図版26　環濠出土遺物１
図版27　環濠出土遺物２

図版28－１　ＳＤ－Ａ１－02出土遺物
図版28－２　ＳＤ－Ａ１－03（Ａ１区）出土遺物
図版29－１　ＳＤ－Ａ１－03（Ａ２区）出土遺物
図版29－２　ＳＤ－Ａ２－06出土遺物
図版30－１　ＳＤ－Ａ２－07出土遺物
図版30－２　ＳＫ－Ａ２－05出土遺物
図版31－１　ＳＤ－Ａ４－02出土遺物
図版31－２　ＳＫ－Ｂ１－07出土遺物
図版32－１　前期弥生土器
図版32－２　前期弥生土器等
図版33　前期弥生土器等
図版34　前期弥生土器
図版35　前期弥生土器
図版36　Ａ１区水田土壌化層直上部出土遺物
図版37－１　Ｃ３区包含層出土遺物
図版37－２　ＳＤ－Ａ５－01出土遺物
図版38－１　ＳＫ－Ｂ３－01出土遺物
図版38－２　ＳＤ－Ｂ５－04出土遺物
図版39－１　Ｂ２区出土遺物
図版39－２　ＳＤ－Ａ２－01出土遺物
図版39－３　ＳＢ－Ｂ５－01出土遺物
図版40　出土遺物１
図版41　出土遺物２
図版42　出土遺物３
図版43－１　須恵器坏片
図版43－２　須恵器坏片等
図版44－１　砥石
図版44－２　弥生土器片
図版44－３　土錘
図版45－１　土師質小皿
図版45－２　土師質坏
図版46－１　磁器片
図版46－２　備前焼茶入れ（底部欠）
図版46－３　青磁碗等片
図版47－１　擂鉢片
図版47－２　須恵器甕口縁片
図版48－１　土師質鍋片
図版48－２　土師質鍋，羽釜，同脚部片
図版49－１　土師質（高坏）坏部
図版49－２　土師質高坏脚台部
図版49－３　須恵質坏
図版49－４　須恵器坏
図版49－５　小児下駄（裏）
図版49－６　小児下駄（表）
図版50－１　刻印丸瓦片
図版50－２　軒丸瓦片
図版50－３　布目平瓦片（凹面）
図版50－４　同上（凸面）
図版50－５　瓦質甕口縁片
図版51－１　瓦質焙烙口縁片
図版51－２　土製竈等口縁片
図版51－３　灯盞
図版51－４　土管
図版51－５　土製浅鉢
図版52　Ｂ３区出土木製品
図版53　内環濠出土石器
図版54－１　Ａ２区出土石器
図版54－２　外環濠出土石器
図版55－１　Ａ２区遺構上面精査中出土石器
図版55－２　ＳＫ－Ａ２－05出土石器
図版56－１　ＳＸ－Ａ１－01出土石器
図版56－２　Ａ６区包含層出土石器
図版56－３　Ｓ36
図版56－４　Ｓ36

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図(1/50,000)
第２図　調査区設定図(1/2,000)
第３図　Ａ区遺構配置図(1/300)
第４図　Ａ１区東壁土層図(1/40)
第５－１図　Ａ２区東壁土層図(1/40)
第５－２図　Ａ３区東壁土層図(1/40)
第６図　Ａ３区西壁土層図(1/40)
第７－１図　Ａ４区東壁土層図(1/40)
第７－２図　Ａ４区南壁土層図(1/40)
第８－１図　Ａ５区東壁土層図(1/40)
第８－２図　Ａ６区東壁土層図(1/40)
第９図　ＳＲ－Ａ－01出土遺物
第10図　ＳＸ－Ａ１－01出土石器
第11図　ＳＤ－Ａ１－02断面図(1/40)
第12図　ＳＤ－Ａ１－03断面図(1/40)
第13図　ＳＤ－Ａ１－03(Ａ２区)
遺物出土状況図(1/20)
第14図　ＳＤ－Ａ２－06断面図(1/40)
第15－１図　ＳＤ－Ａ２－06，07平面図
(1/100)
第15－２図　ＳＤ－Ａ１－02，03平面図
(1/100)
第15－３図　ＳＤ－Ａ４－02，Ａ５－05，06
平面図(1/100)
第16図　ＳＤ－Ａ２－07断面図(1/40)
第17図　ＳＤ－Ａ５－05断面図(1/40)
第18図　ＳＤ－Ａ５－05遺物出土状況図
(1/20)
第19図　ＳＤ－Ａ５－06断面図(1/40)
第20図　ＳＤ－Ａ４－02断面図(1/40)
第21図　ＳＤ－Ａ１－02出土遺物
第22図　ＳＤ－Ａ２－07出土遺物
第23図　ＳＤ－Ａ５－06出土遺物
第24図　ＳＤ－Ａ６－01出土遺物
第25図　ＳＤ－Ａ４－02出土遺物
第26図　ＳＤ－Ａ５－05出土遺物
第27図　ＳＤ－Ａ１－03(Ａ２区)出土遺物
第28図　ＳＤ－Ａ１－03(Ａ１区)出土遺物
第29図　ＳＤ－Ａ２－06出土遺物
第30図　外環濠出土石器１
第31図　外環濠出土石器２
第32図　外環濠出土石器３
第33図　内環濠出土石器１
第34図　内環濠出土石器２
第35図　Ａ６区包含層出土石器
第36図　ＳＨ－Ａ１－01平・断面図(1/80)
第37図　ＳＨ－Ａ２－01平・断面図(1/80)
第38図　ＳＨ－Ａ２－02平・断面図(1/80)
第39図　ＳＨ－Ａ２－03平・断面図(1/80)
第40図　ＳＤ－Ａ２－18出土遺物
第41図　ＳＢ－Ａ２－01平・断面図(1/80)
第42図　ＳＫ－Ａ２－03断面図(1/40)
第43図　ＳＫ－Ａ２－03出土遺物
第44図　ＳＫ－Ａ２－05断面図(1/40)
第45図　ＳＫ－Ａ２－05出土遺物
第46図　ＳＫ－Ａ２－05出土石器
第47図　ＳＫ－Ａ２－08断面図(1/40)
第48図　ＳＫ－Ａ２－08出土遺物
第49図　ＳＰ－Ａ２－07出土遺物
第50図　Ａ区出土遺物
第51図　Ａ２区出土石器１
第52図　Ａ２区出土石器２
第53図　Ａ２区遺構上面精査中出土石器
第54図　Ａ１区水田土壌化層直上部
出土遺物
第55図　Ａ１区水田跡(1/100)
第56図　Ａ４区土壌化層出土遺物
第57図　ＳＤ－Ａ１－04断面図(1/40)
第58図　ＳＤ－Ａ１－04検出時出土遺物
第59図　ＳＤ－Ａ１－05，06断面図(1/40)
第60図　ＳＤ－Ａ２－01断面図(1/40)
第61図　ＳＤ－Ａ２－01出土遺物
第62図　ＳＤ－Ａ２－04断面図(1/40)
第63図　ＳＤ－Ａ２－04出土遺物
第64図　ＳＤ－Ａ２－02断面図(1/40)
第65図　ＳＤ－Ａ２－02出土遺物

第66図　ＳＤ－Ａ２－03断面図(1/40)
第67図　ＳＤ－Ａ２－03出土遺物
第68図　ＳＤ－Ａ２－05断面図(1/40)
第69図　ＳＤ－Ａ２－05出土遺物
第70図　Ａ２区遺構配置図(1/100)
第71図　ＳＤ－Ａ２－16出土遺物
第72図　Ａ２区ピット群等出土遺物
第73図　ＳＤ－Ａ３－01出土遺物
第74図　ＳＤ－Ａ３－02出土遺物
第75図　ＳＤ－Ａ３－03出土遺物
第76図　ＳＤ－Ａ３－04断面図(1/40)
第77図　ＳＤ－Ａ３－04出土遺物
第78図　ＳＤ－Ａ３－05断面図(1/40)
第79図　ＳＤ－Ａ３－07断面図(1/40)
第80図　Ａ１～３区遺構面精査中出土遺物
第81図　ＳＤ－Ａ５－01出土遺物
第82図　ＳＤ－Ａ５－01人骨出土状況図(1/20)
第83図　ＳＢ－Ａ５－01平・断面図(1/80)
第84図　Ａ５区遺構面上部堆積層出土遺物
第85図　ＳＤ－Ａ１－01断面図(1/40)
第86図　ＳＫ－Ｂ１－04断面図(1/40)
第87図　ＳＫ－Ｂ１－05断面図(1/40)
第88図　ＳＫ－Ｂ１－05出土遺物
第89図　ＳＫ－Ｂ１－06断面図(1/40)
第90図　Ｂ区遺構配置図(1/300)
第91図　Ｂ１区東壁土層図(1/40)
第92－１図　Ｂ２区東壁土層図(1/40)
第92－２図　Ｂ３区東壁土層図(1/40)
第93－１図　Ｂ４区東壁土層図(1/40)
第93－２図　Ｂ５区北半東壁土層図(1/40)
第94図　Ｂ５区南半東壁土層図(1/40)
第95図　ＳＫ－Ｂ１－07平・断面図(1/20)
第96図　ＳＫ－Ｂ１－07出土遺物
第97図　ＳＫ－Ｂ１－08断面図(1/40)
第98図　ＳＫ－Ｂ１－09断面図(1/40)
第99図　ＳＫ－Ｂ１－10断面図(1/40)
第100図　ＳＫ－Ｂ１－12断面図(1/40)
第101図　ＳＫ－Ｂ１－13断面図(1/40)
第102図　ＳＫ－Ｂ１－14断面図(1/40)
第103図　ＳＫ－Ｂ１－15断面図(1/40)
第104図　ＳＫ－Ｂ１－17断面図(1/40)
第105図　ＳＫ－Ｂ２－06断面図(1/40)
第106図　ＳＫ－Ｂ２－07断面図(1/40)
第107図　ＳＤ－Ｂ５－20断面図(1/40)
第108図　ＳＤ－Ｂ５－20出土遺物
第109図　ＳＤ－Ｂ１－03断面図(1/40)
第110図　ＳＤ－Ｂ１－04断面図(1/40)
第111図　ＳＤ－Ｂ１－05断面図(1/40)
第112図　ＳＤ－Ｂ１－05出土遺物
第113図　ＳＤ－Ｂ１－06，07断面図(1/40)
第114図　ＳＤ－Ｂ１－08断面図(1/40)
第115図　ＳＤ－Ｂ１－10断面図(1/40)
第116図　ＳＤ－Ｂ１－11断面図(1/40)
第117図　ＳＤ－Ｂ１－11出土遺物
第118図　ＳＥ－Ｂ１－01断面図(1/40)
第119図　ＳＫ－Ｂ１－01断面図(1/40)
第120図　ＳＫ－Ｂ１－02断面図(1/40)
第121図　ＳＫ－Ｂ１－03断面図(1/40)
第122図　ＳＫ－Ｂ１－11断面図(1/40)
第123図　ＳＫ－Ｂ１－16断面図(1/40)
第124図　Ｂ１区包含層出土遺物
第125図　Ｂ２区ピット出土遺物
第126図　ＳＫ－Ｂ２－01断面図(1/40)
第127図　ＳＫ－Ｂ２－02平・断面図(1/20)
第128図　ＳＫ－Ｂ２－02出土遺物
第129図　ＳＫ－Ｂ２－03断面図(1/40)
第130図　ＳＫ－Ｂ２－04断面図(1/40)
第131図　ＳＫ－Ｂ２－05断面図(1/40)
第132図　ＳＫ－Ｂ２－08断面図(1/40)
第133図　ＳＫ－Ｂ２－09断面図(1/40)
第134図　ＳＫ－Ｂ２－10断面図(1/40)
第135図　ＳＫ－Ｂ２－11断面図(1/40)
第136図　ＳＫ－Ｂ２－12断面図(1/40)
第137図　ＳＫ－Ｂ２－13断面図(1/40)
第138図　ＳＫ－Ｂ２－13出土遺物
第139図　ＳＫ－Ｂ２－14断面図(1/40)
第140図　ＳＤ－Ｂ２－01断面図(1/40)
第141図　ＳＡ－Ｂ２－02平・断面図(1/80)

第142図　ＳＡ－Ｂ２－01平・断面図(1/80)
第143図　Ｂ３区褐灰色砂質シルト層出土遺物
第144図　ＳＤ－Ｂ３－05断面図(1/40)
第145図　ＳＤ－Ｂ４－01断面図(1/40)
第146図　ＳＤ－Ｂ４－02断面図(1/40)
第147図　ＳＢ－Ｂ５－01出土遺物
第148図　ＳＢ－Ｂ５－02平・断面図(1/80)
第149図　ＳＢ－Ｂ５－02出土遺物
第150図　ＳＢ－Ｂ５－01平・断面図(1/80)
第151図　ＳＲ－Ｂ－01出土遺物
第152図　ＳＤ－Ｂ５－03断面図(1/40)
第153図　ＳＤ－Ｂ５－01,02断面図(1/40)
第154図　ＳＤ－Ｂ５－04断面図(1/40)
第155図　ＳＤ－Ｂ５－04出土遺物
第156図　B4，5区遺構配置図(1/100)
第157図　ＳＤ－Ｂ５－05断面図(1/40)
第158図　ＳＤ－Ｂ５－06断面図(1/40)
第159図　ＳＤ－Ｂ５－07断面図(1/40)
第160図　ＳＤ－Ｂ５－08断面図(1/40)
第161図　ＳＤ－Ｂ５－09，10断面図(1/40)
第162図　ＳＤ－Ｂ５－11断面図(1/40)
第163図　ＳＤ－Ｂ５－12，13断面図(1/40)
第164図　ＳＤ－Ｂ５－14断面図(1/40)
第165図　ＳＤ－Ｂ５－15断面図(1/40)
第166図　ＳＤ－Ｂ５－15出土遺物
第167図　ＳＤ－Ｂ５－16断面図(1/40)
第168図　ＳＤ－Ｂ５－16出土遺物
第169図　ＳＤ－Ｂ５－17断面図(1/40)
第170図　ＳＤ－Ｂ５－18断面図(1/40)
第171図　ＳＤ－Ｂ５－19断面図(1/40)
第172図　Ｂ５区南半鋤溝群出土遺物
第173図　ＳＲ－Ｂ－02出土遺物
第174図　ＳＤ－Ｂ１－09断面図(1/40)
第175図　ＳＫ－Ｂ２－15断面図(1/40)
第176図　ＳＤ－Ｂ３－01断面図(1/40)
第177図　ＳＤ－Ｂ３－04出土遺物
第178図　ＳＤ－Ｂ３－06断面図(1/40)
第179図　Ｂ３区第１構面遺構配置図(1/100)
第180図　ＳＢ－Ｂ３－01平・断面図(1/80)
第181図　ＳＢ－Ｂ３－02平･断面図(1/80)
第182図　ＳＥ－Ｂ３－01平・断面図(1/20)
第183図　ＳＫ－Ｂ３－01遺物出土状況図(1/20)
第184図　ＳＫ－Ｂ３－01出土遺物１
第185図　ＳＫ－Ｂ３－01出土遺物２
第186図　ＳＫ－Ｂ３－01出土遺物３
第187図　ＳＫ－Ｂ３－01出土遺物４
第188図　ＳＫ－Ｂ３－01出土木製品１
第189図　ＳＫ－Ｂ３－01出土木製品２
第190図　ＳＫ－Ｂ３－01出土木製品３
第191図　ＳＫ－Ｂ３－01出土木製品４
第192図　ＳＫ－Ｂ３－01出土木製品５
第193図　ＳＫ－Ｂ３－02出土遺物
第194図　ＳＫ－Ｂ３－10出土遺物
第195図　ＳＫ－Ｂ３－11出土遺物
第196図　Ｂ３区ピット群出土木製品
第197図　ＳＤ－Ｃ１－01断面図(1/40)
第198図　ＳＤ－Ｃ１－01出土遺物
第199図　ＳＤ－Ｃ１－02～04出土遺物
第200図　Ｃ区遺構配置図(1/300)
第201－１図　Ｃ２区東壁土層図(1/40)
第201－２図　Ｃ１区東壁土層図(1/40)
第202－１図　Ｃ３区東壁土層図(1/40)
第202－２図　Ｃ４区東壁土層図(1/40)
第203図　ＳＤ－Ｃ１－02～04断面図(1/40)
第204図　Ｃ３区包含層出土遺物
第205図　ＳＤ－Ｃ３－01断面図(1/40)
第206図　ＳＤ－Ｃ３－02断面図(1/40)
第207図　ＳＢ－Ｃ４－01平・断面図(1/80)
第208図　ＳＢ－Ｃ４－02平・断面図(1/80)
第209図　ＳＢ－Ｃ４－03平・断面図(1/80)
第210図　ＳＢ－Ｃ４－03出土遺物
第211図　ＳＢ－Ｃ４－04平・断面図(1/80)
第212図　ＳＢ－Ｃ４－05出土遺物
第213図　ＳＤ－Ｃ４－01断面図(1/40)
第214図　ＳＤ－Ｃ４－01出土遺物
第215図　ＳＤ－Ｃ５－01断面図(1/40)
第216図　ＳＢ－Ｃ１－01平・断面図(1/80)

第217図　ＳＥ－Ｃ１－01出土遺物
第218図　ＳＥ－Ｃ１－01平・断面図(1/20)
第219図　ＳＤ－Ｄ１－01断面図(1/40)
第220図　ＳＤ－Ｄ３－01断面図(1/40)
第221図　ＳＤ－Ｄ３－01出土遺物
第222図　ＳＤ－Ｄ１－03断面図(1/40)
第223図　ＳＤ－Ｄ１－03出土遺物
第224図　ＳＤ－Ｄ１－02断面図(1/40)
第225図　ＳＤ－Ｄ１－02出土遺物
第226図　ＳＫ－Ｄ１－01平･断面図(1/40)
第227図　Ｄ区遺構配置図(1/300)
第228図　Ｄ１区東壁土層図(1/40)
第229図　Ｄ２区東壁土層図(1/40)
第230図　Ｄ３区東壁土層図(1/40)
第231図　Ｅ区遺構配置図(1/300)
第232－１図　Ｅ１区東壁土層図(1/40)
第232－２図　Ｅ１区南壁土層図(1/40)
第233－１図　Ｅ２区東壁土層図(1/40)
第233－２図　Ｅ３区東壁土層図(1/40)
第233－３図　Ｅ３区南壁土層図(1/40)
第234図　Ｅ４区東壁土層図(1/40)
第235図　ＳＨ－Ｅ１－201平・断面図
第236図　ＳＨＰ－Ｅ１－213出土遺物
第237図　Ｅ1，2区遺構変遷図(1/150)
第238図　Ｅ3，4区遺構変遷図(1/150)
第239図　ＳＤ－Ｅ１－201等出土遺物
第240図　ＳＥ－Ｅ２－202導水溝
第241図　ＳＥ－Ｅ２－201平・断面図
第242図　ＳＤ－Ｅ３－301断面土層
第243図　ＳＡ－Ｅ４－101,102柱穴列
第244図　ＳＫ－Ｅ４－101平・断面図
第245図　ＳＤ－Ｅ２－201～209出土遺物
第246図　ＳＥ－Ｅ２－201出土遺物
第247－１図　ＳＥ－Ｅ２－201出土遺物
第247－２図　ＳＥ－Ｅ２－201，ＳＥ－Ｅ２－202
導水溝出土遺物
第248図　ＳＤ－Ｅ３－203～216出土遺物
第249図　ＳＰ－Ｅ３－201，ＳＫ－Ｅ３－201
出土遺物
第250図　ＳＤ－Ｅ３－301出土遺物
第251図　ＳＤ－Ｅ４－100,105,
ＳＰ－Ｅ４－107出土遺物
第252－１図　ＳＫ－Ｅ４－101Ⅰ層出土遺物
第252－２図　ＳＫ－Ｅ４－101Ⅰ，Ⅱ層
出土遺物
第253－１図　ＳＫ－Ｅ４－101Ⅲ層出土遺物
第253－２図　ＳＫ－Ｅ４－101Ⅴ層出土遺物
第254－１図　ＳＫ－Ｅ４－101Ⅵ層出土遺物
第254－２図　ＳＫ－Ｅ４－101底面出土遺物
第255図　ＳＤ－Ｅ１－101～109出土遺物
第256図　ＳＤ－Ｅ２－102出土遺物
第257図　ＳＤ－Ｅ２－102,102－２出土遺物
第258図　Ｅ１区１面包含層出土遺物
第259図　Ｅ１区２面包含層出土遺物
第260図　Ｅ２区１面包含層出土遺物
第261図　Ｅ２区２面包含層出土遺物
第262－１図　Ｅ３区１面包含層出土遺物
第262－２図　Ｅ３区２面包含層出土遺物
第262－３図　Ｅ３区３面包含層出土遺物
第262－４図　Ｅ４区包含層出土遺物
第263図　ＳＢ－Ｆ１－01平・断面図(1/80)
第264図　ＳＢ－Ｆ１－01出土遺物
第265図　ＳＫ－Ｆ１－01断面図(1/40)
第266図　ＳＤ－Ｆ１－02出土遺物
第267図　ＳＤ－Ｆ１－03平・断面図(1/20)
第268図　ＳＤ－Ｆ１－03出土遺物
第269図　ＳＡ－Ｆ２－01平・断面図(1/80)
第270図　Ｆ区遺構配置図(1/300)
第271図　Ｆ１区西壁土層図(1/40)
第272図　Ｆ２区西壁土層図(1/40)
第273図　鬼無藤井遺跡内環濠出土土器１
第274図　鬼無藤井遺跡内環濠出土土器２
第275図　鬼無藤井遺跡外環濠出土土器
第276図　ＳＤ－Ａ１－01出土土器

自然科学的分析挿図，挿表目次

鬼無藤井遺跡における樹種同定

表１　鬼無藤井遺跡における樹種同定結果

鬼無藤井遺跡の木材　Ⅰ

鬼無藤井遺跡の木材　Ⅱ

鬼無藤井遺跡の木材　Ⅲ

鬼無藤井遺跡の木材　Ⅳ

鬼無藤井遺跡の木材　Ⅴ

鬼無藤井遺跡の木材　Ⅵ

鬼無藤井遺跡の木材　Ⅶ

鬼無藤井遺跡の木材　Ⅷ

鬼無藤井遺跡の木材　Ⅸ

鬼無藤井遺跡の木材　Ⅹ

鬼無藤井遺跡の木材　ⅩⅠ

鬼無藤井遺跡の木材　ⅩⅡ

鬼無藤井遺跡の木材　ⅩⅢ

鬼無藤井遺跡の木材　ⅩⅣ

高松市鬼無藤井遺跡の中世人骨

表１　出土人骨一覧

表２　年齢区分

表３　上腕骨計測値（女性，右，㎜）

表４　大腿骨計測値（男性，右，㎜）

表５　大腿骨計測値（女性，右，㎜）

表６　上腕骨計測値（㎜）

表７　橈骨計測値（㎜）

表８　大腿骨計測値（㎜）

第１図　遺跡の位置

鬼無藤井１号人骨（男性，壮年）

鬼無藤井２号人骨（女性，年齢不明）

鬼無藤井遺跡の花粉化石

表１　産出花粉化石一覧表

図１　14ライン地点の花粉化石分布図

図版１　高松市鬼無藤井遺跡の花粉化石

図版２　高松市鬼無藤井遺跡の花粉化石

鬼無藤井遺跡のプラント・オパール

表１　試料１ｇ当たりのプラント・オパール個数

図１　５ライン北側地点のプラント・オパール分布図

図２　５ライン南側地点のプラント・オパール分布図

図３　17－18ライン北側地点のプラント・オパール分布図

図４　17－18ライン南側地点のプラント・オパール分布図

図５　14ライン地点のプラント・オパール分布図

図版　高松市鬼無藤井遺跡のプラント・オパール

第１章　調査の経緯・経過と調査区の設定

第１図　遺跡位置図（１/50,000）

第１節　調査の経緯

高松平野の西部，鬼無藤井遺跡が所在する鬼無町藤井は，西に勝賀山を望む本津川の扇状地帯に位置する。のどかな田園地帯が広がっているが，近年における開発事業等によりその景観も徐々に変化しつつある。現在,香川県と高松市が高松港頭地区再開発事業の推進を行っており,それに伴いＪＲ貨物ヤード移転を本体とする香西・鬼無地区での開発事業が本遺跡の調査契機となっている。

香川県と高松市との間の平成７年３月１日付けで締結された基本協定書から，香西・鬼無地区における関連事業において各分担が定まり，県が主体となる木太鬼無線以北のＪＲ貨物施設用地内では西打遺跡として，高松市については香西地区の市道建設部分を香西南西打遺跡，鬼無地区の市道部分及び木太鬼無線以南のＪＲ貨物施設用地を鬼無藤井遺跡として埋蔵文化財発掘調査が行われた。

第２節　調査の経過

平成８年11月土地買収の一括調印を受けて，同年度で香西及び鬼無地区の開発部分について一部用地交渉のある箇所を除き試掘調査が実施され，開発予定箇所における調査範囲の確定がなされた。平成８～10年度の期間，調査の順序は香西地区（香西南西打遺跡）を含めた範囲で工事の工程上から急がれる箇所から随時行うこととなった。調査期間等の詳細は後述する各調査区概要のとおりだが，平成８年度では遺跡南部にあたる調査範囲のうち約822㎡を，平成９年度では遺跡の大半部分となる約7,478㎡につ

いて調査を行った。平成10年度では用地交渉等のため残った約319㎡について調査を行っており，調査した総面積は，8,619㎡となった。

第３節　整理作業の経過

整理作業は，発掘調査期間中に現場事務所で行った作業と調査終了後に円座整理事務所で行った作業がある。前者は出土遺物の洗浄が主であり，後者の作業は平成12年度に以下の工程のように実施した。

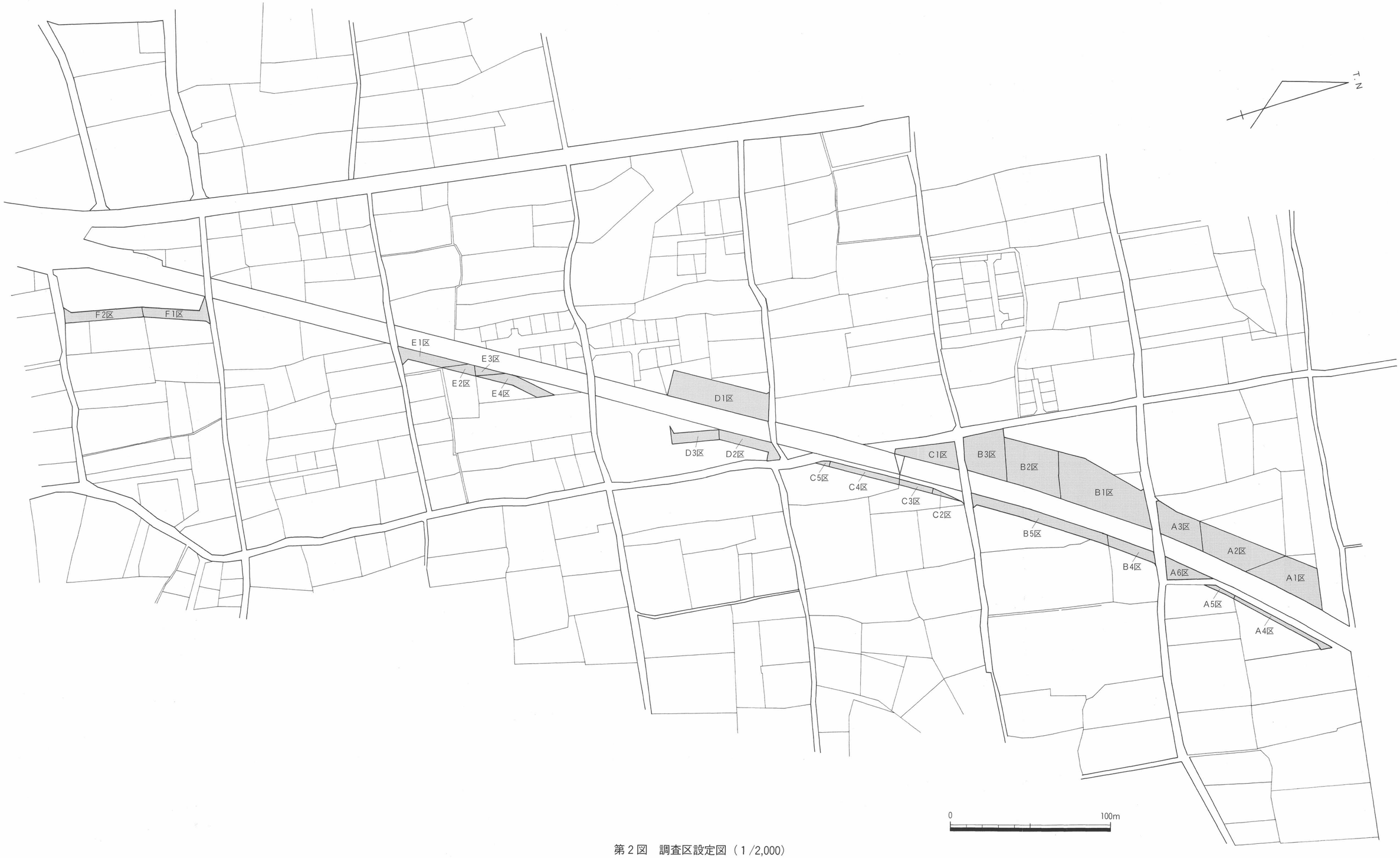
期間 / 作業の項目	平成12年									平成13年		
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
遺物の注記												
遺物の接合・復原												
遺構図整理												
遺物実測・トレース												
遺構トレース												
原稿執筆												
遺物写真撮影												
レイアウト												
編集												

第１表　整理作業工程表

第４節　調査区の設定（第２図）

本遺跡はＪＲ予讃本線を挟んで建設される２本の市道部分が主な調査の対象地となっており，現況に見られる条里型の地割からすれば，調査範囲は２本の斜め方向に筋掘りを行ったかたちとなっている。またその範囲が南北方向に約800mに延長されるため，個々の地点で見られる遺跡の様相もやや異なったものとなっている。調査は概ね線路の東側となる市道予定地を先に行った後，西側に取り掛かっており，整理作業以前では調査を実施した順序に従って１～13区と呼称していたものであるが，本報告にあたっては東西に分割された調査区を現況の地割に従ってその一町分を単位としＡ～Ｆ区に設定し直した。これらの調査区は現有コンクリート壁等調査を行えなかった箇所によりさらに細分化をしているが，その調査期間，工程等は後述の各調査区概要のとおりである。

第２章　調査の成果



第２図　調査区設定図（１/2,000）

第１節　Ａ調査区

概要

現況と調査区の分割（第２図参照）

Ａ区は当遺跡において最北端の調査区になり，条里呼称では香川郡10条18里29・28坪内に位置する。地図上で示される当地区周辺部は現地表面の標高およそ4.35～4.7m，現況は条里型に区画された水田等の耕作地として利用されているが，南北に想定される29･28坪界ラインが明確ではなく，また約200m以東では本津川の氾濫原に達するとみられ地割が乱れているのが分かる。

Ａ区は現有道路，線路，コンクリート畦畔等により６分割される。調査時においては調査範囲を東西に分断するＪＲ予讃本線を境に東側を５－①～③，西側を11～13区として調査を行ったが，本報告にあたりＡ１～Ａ６区に再編した。

調査期間

Ａ４～Ａ６区は一部Ｂ区と調査を平行し平成９年８月27日～10月22日迄，Ａ１～Ａ３区は平成10年３月10日～３月31迄で行った。

調査の工程

調査は平成８年度に行った試掘により得られたデータを基に，概ね遺構面の上面までを重機により掘削しその後遺構の検出及び掘削を人力により行った。遺構等の測量はＡ４～Ａ６区については本体工事の測量図等を基準に，調査員及び補助員が測量を行った。またＡ１～Ａ３区については航空測量を行った。

主な遺構（第３図参照）

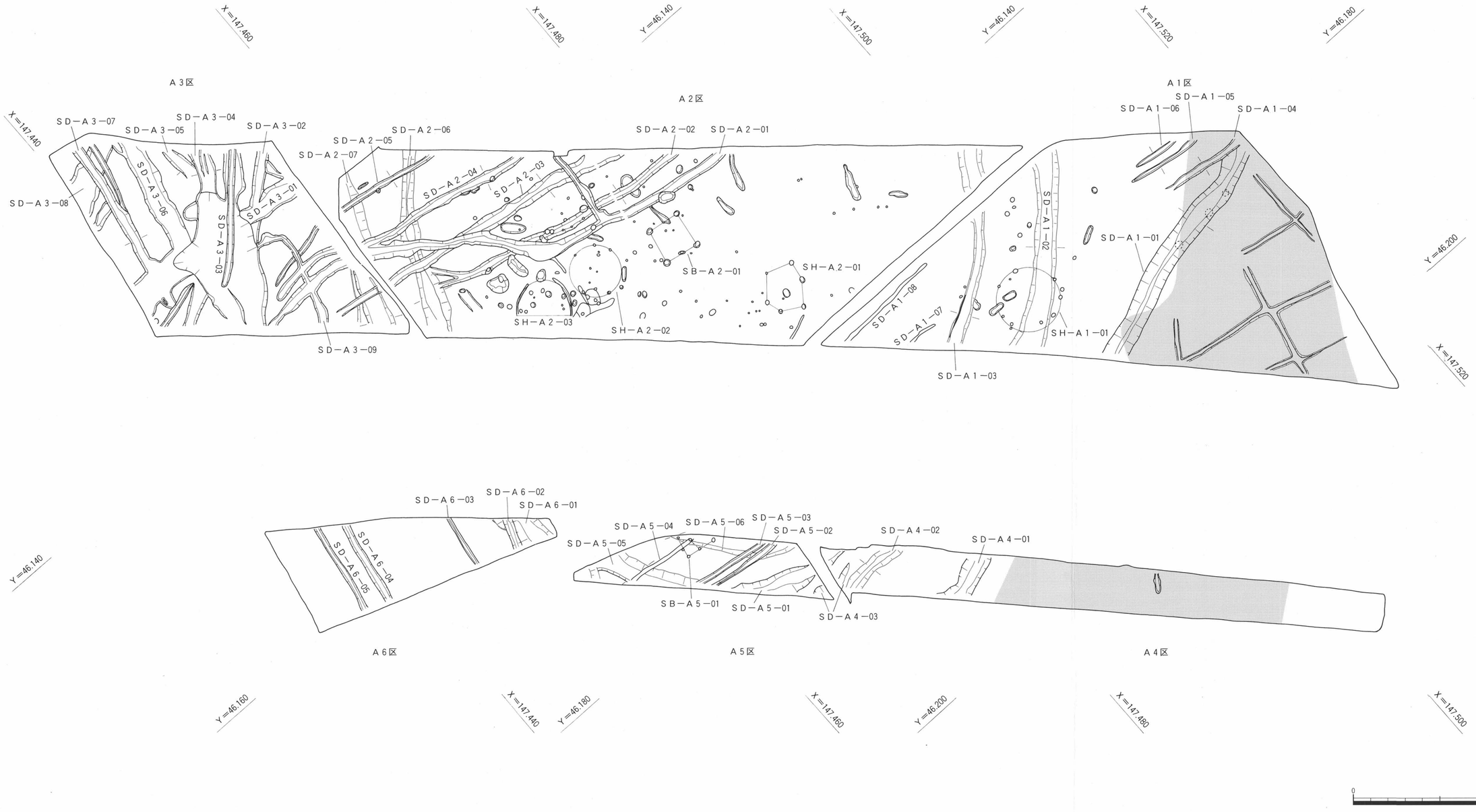
縄文時代ではＳＲ－Ａ－01より晩期に属する浅鉢等の土器片が出土した他，当該期に所属するとみられる性格不明の遺構（ＳＸ－Ａ１－01～03）が確認された。

弥生時代前期ではＡ２区を中心とし２重に巡らされた環濠（赤線部分）が検出されている。またその内側となるＡ２区では多数のピット，土抗等を検出し，遺存の状況は悪いが竪穴住居３棟，掘立柱建物跡１棟を検出した。

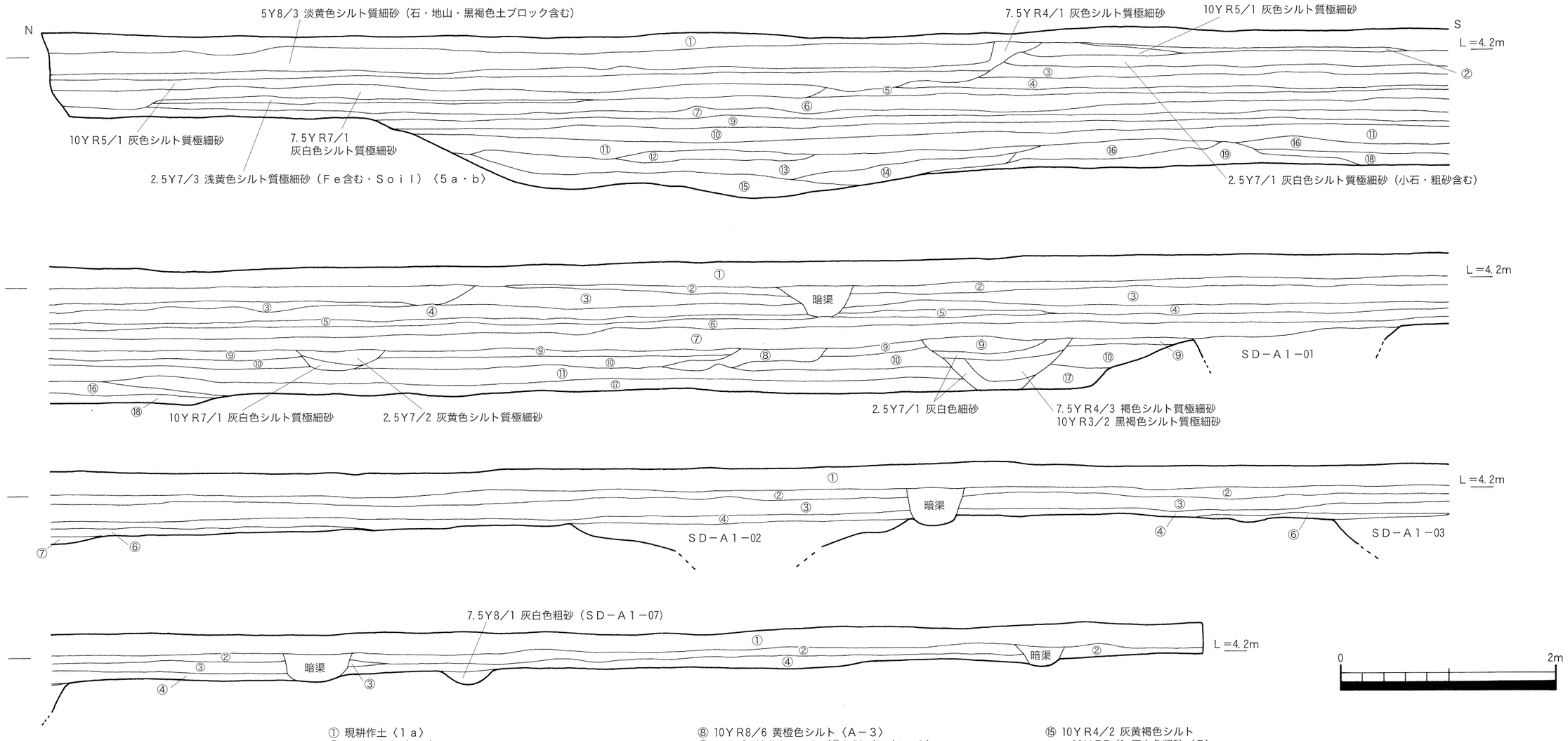
古代・中世では埋没したＳＲ－Ａ－01上でプラント・オパールが一定量検出された水田跡と考えられる畦畔状の遺構や条里方向を示す溝跡が検出された他，Ａ３区では多数の溝跡が交差して検出されておりその中央は池状の窪みとして確認されている。またＡ２区においては先行する環濠に伴った遺構に混在し，ピット等が多数検出されている。

堆積状況（第４～８図参照）

微高地にあたるＡ２区では，遺構上面の堆積層が薄くまた弥生時代前期～近世に至る遺構をほぼ同一の遺構面で検出したことから，耕作地等のため随時遺構が削平を受けたと考えられる。A1，4区はＳＲ－Ａ－01が埋没しており，その埋土については複雑な堆積層に分割されるが，上位の堆積層は近世・近代の整地及び撹乱層を除きほぼ水平に堆積しており，主に耕作地として利用されたものと推察される。Ａ３区は西から東へ下る谷状の地形が推察され，同方向に沿った溝が掘削されている。またＡ６区の堆積状況から弥生時代前期においては，環濠の南部A3，6区が低地であったと考えられ，その埋没後に中世の条里溝が掘削されている。



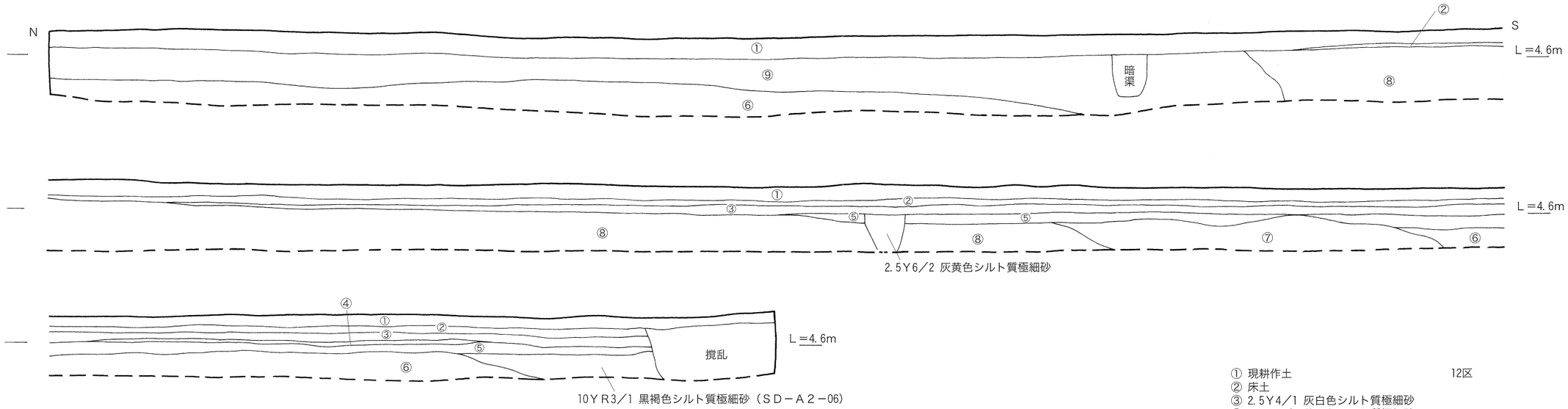
第３図　Ａ区遺構配置図（１/300）



① 現耕作土〈1a〉
② 現水田床土〈1b〉
③ 5Y8／2 灰白色シルト質極細砂（Soil）〈2a〉
2.5Y7／6 明黄褐色シルト質極細砂〈2b〉
④ 2.5Y8／3 淡黄色シルト質極細砂（Soil・Fe含む）〈3a・b〉
⑤ 2.5Y8／4 淡黄色シルト質極細砂（Soil・Fe含む）〈4a・b〉
⑥ 5Y6／1 灰色シルト質極細砂（砂礫を含む）〈6a〉
⑦ 10YR3／2 黒褐色シルト質極細砂（検出水田層）〈7a〉
⑧ 10YR8／6 黄橙色シルト〈A－3〉
⑨ 5Y8／4 淡黄色シルト（⑳と似る）〈A－1〉
⑩ 5Y7／4 浅黄シルト（Fe含む）〈A－2〉
⑪ 10YR2／1 黒色シルト〈B〉
⑫ ⑪＋灰白色粗砂〈C〉
⑬ 10YR3／2 黒褐色シルト〈D〉
⑭ 10YR4／2 灰黄褐色シルト〈E〉
⑮ 10YR4／2 灰黄褐色シルト
＋10YR7／1 灰白色粗砂〈F〉
⑯ 10YR4／4 褐色シルト
＋10YR4／2 灰黄褐色シルト〈G〉
⑰ 10YR4／4 褐色シルト〈H〉
⑱ 10YR4／4 褐色シルト
＋10YR7／1 灰白色細砂〈I〉
⑲ 2.5Y5／2 暗灰黄色細砂～粗砂〈J〉
⑳ 10YR8／6 黄橙色シルト（地山）

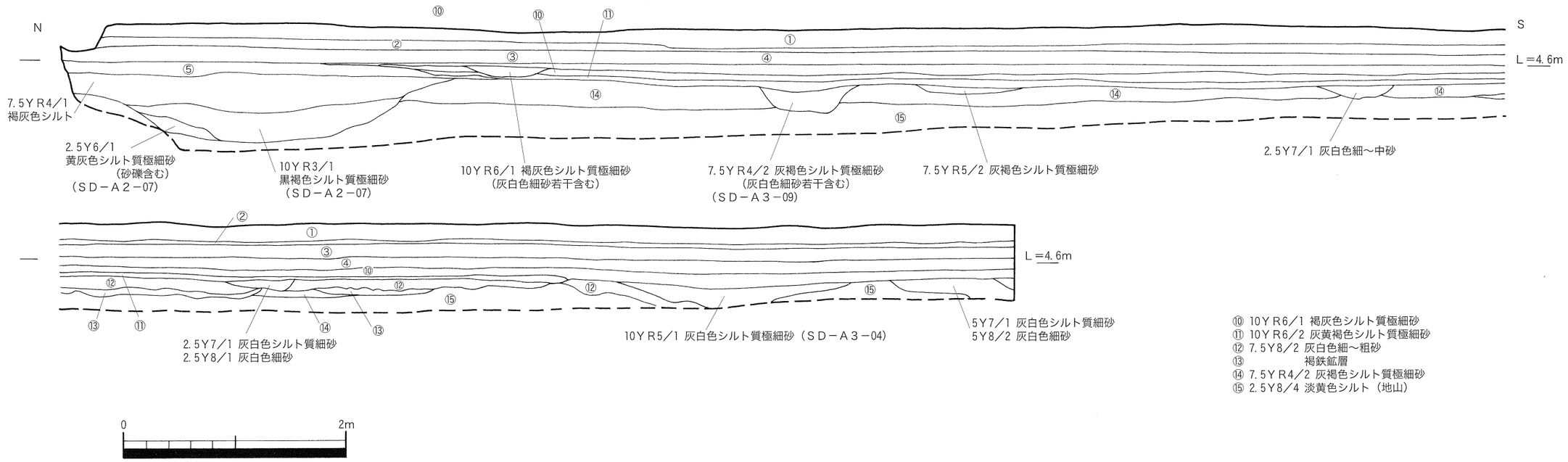
※⑧～⑲層はSR－A－01埋土

第4図　A1区東壁土層図（1/40）



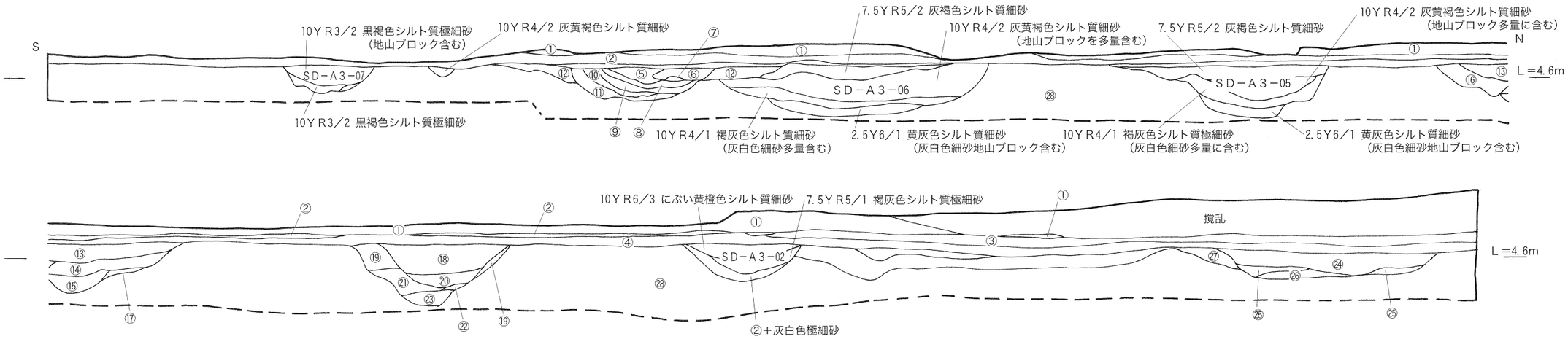
① 現耕作土　　12区
② 床土
③ 2.5Y4／1 灰白色シルト質極細砂
④ 2.5Y6／1 黄灰色シルト質極細砂
⑤ 7.5YR4／1 褐灰色シルト質極細砂
⑥ 2.5Y6／4 にぶい黄色シルト
⑦ 2.5Y6／4 にぶい黄色砂礫
⑧ 5Y7／4 浅黄色砂礫まじりシルト
⑨ 7.5YR6／8 橙色極細砂

第５－１図　Ａ２区東壁土層図（１/40）



⑩ 10YR6／1 褐灰色シルト質極細砂
⑪ 10YR6／2 灰黄褐色シルト質極細砂
⑫ 7.5Y8／2 灰白色細～粗砂
⑬ 褐鉄鉱層
⑭ 7.5YR4／2 灰褐色シルト質極細砂
⑮ 2.5Y8／4 淡黄色シルト（地山）

第５－２図　Ａ３区東壁土層図（１/40）



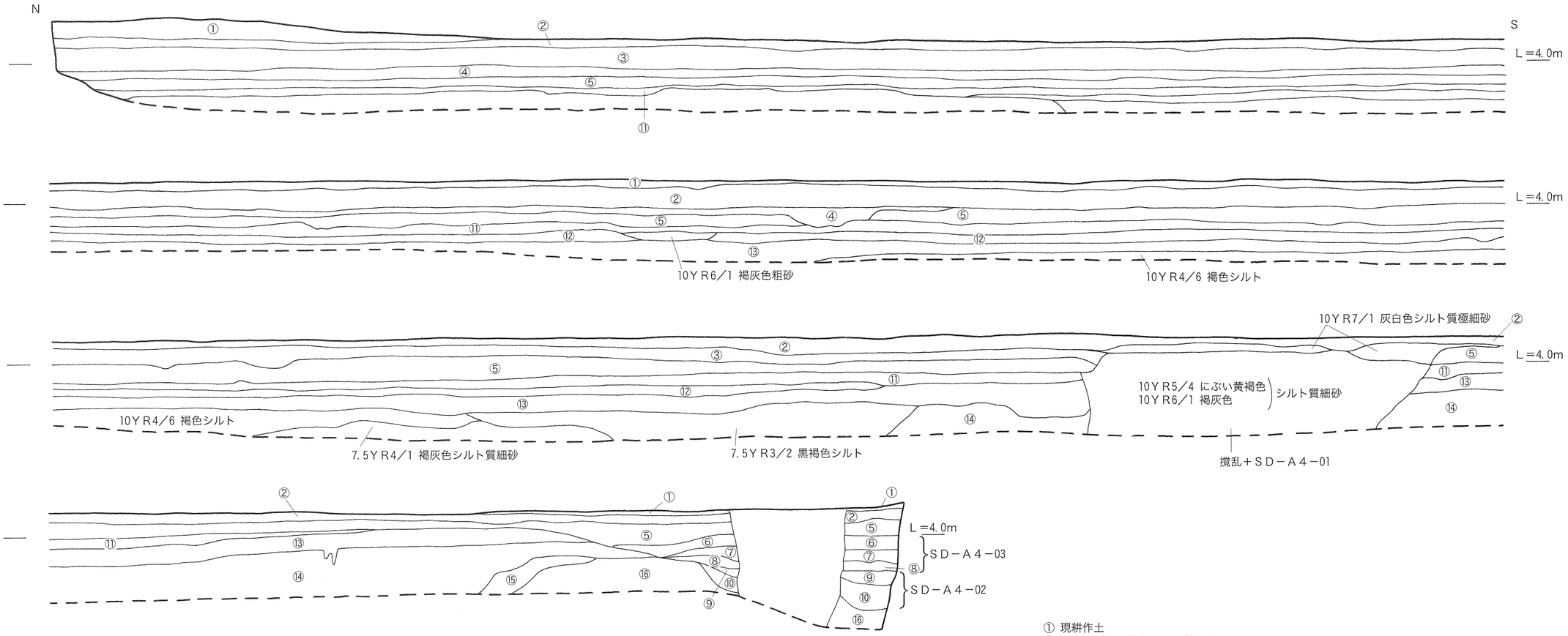
① 7.5Ｙ4／1 灰色シルト質極細砂（現水田）
② 2.5Ｙ4／1 灰白色シルト質極細砂（Ｆｅ含む）
③ 2.5Ｙ4／1 灰白色シルト質極細砂（ｓｏｉｌ－Ｆｅ若干含む）
④ 2.5Ｙ6／1 黄灰色シルト質極細砂（ｓｏｉｌ－Ｆｅ若干含む）
⑤ 10ＹＲ6／1 褐灰色シルト質極細砂（ｓｏｉｌ）
⑥ 2.5Ｙ8／1 灰白色粗砂（Ｆｅ含む）
⑦ 10ＹＲ5／1 褐灰色シルト質極細砂（②を多量に含む）
⑧ ⑤と⑥（下にＦｅ層）
⑨ 2.5Ｙ6／1 黄灰色シルト質極細砂
⑩ 2.5Ｙ8／1 灰白色細砂＋2.5Ｙ7／1 灰白色シルト質極細砂
⑪ 2.5Ｙ5／1 黄灰色シルト質極細砂
⑫ 2.5Ｙ7／2 灰黄色シルト質細砂
} ＳＤ－Ａ３－08

⑬ 10ＹＲ4／4 褐色シルト質細砂（Ｆｅブロック含む）
⑭ 7.5Ｙ8／1 灰白色粗砂（下層にＦｅ多量）
⑮ 10ＹＲ6／1 褐灰色シルト質極細砂
⑯ 10ＹＲ5／2 灰黄褐色シルト質細砂
⑰ 10ＹＲ7／1 灰白色シルト質極細砂
} ＳＤ－Ａ３－04

ＳＤ－Ａ３－03
⑱ 10ＹＲ4／4 褐色シルト質細砂（Ｆｅブロック含む）
⑲ 10ＹＲ3／3 暗褐色シルト質細砂（Ｆｅブロック含む）
⑳ 2.5Ｙ6／1 黄灰色シルト質極細砂（灰白色細砂若干含む）
㉑ 2.5Ｙ7／1 灰白色シルト質極細砂
㉒ 2.5Ｙ7／1 灰白色シルト質極細砂
10ＹＲ5／1 褐灰色シルト質極細砂
㉓ 10ＹＲ6／1 褐灰色シルト質極細砂

ＳＤ－Ａ３－01
㉔ 10ＹＲ6／2 灰黄褐色シルト質細砂
㉕ 10ＹＲ6／1 褐灰色シルト質極細砂
㉖ ㉔と同じ（灰白色細砂含む）
㉗ 10ＹＲ7／2 にぶい黄橙色シルト質細砂
㉘ 2.5Ｙ8／4 淡黄色シルト（地山）

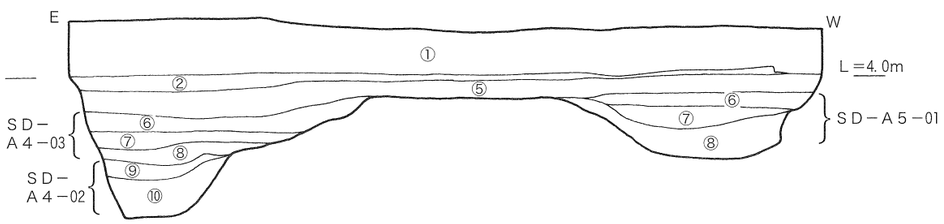
第６図　Ａ３区西壁土層図（１/40）



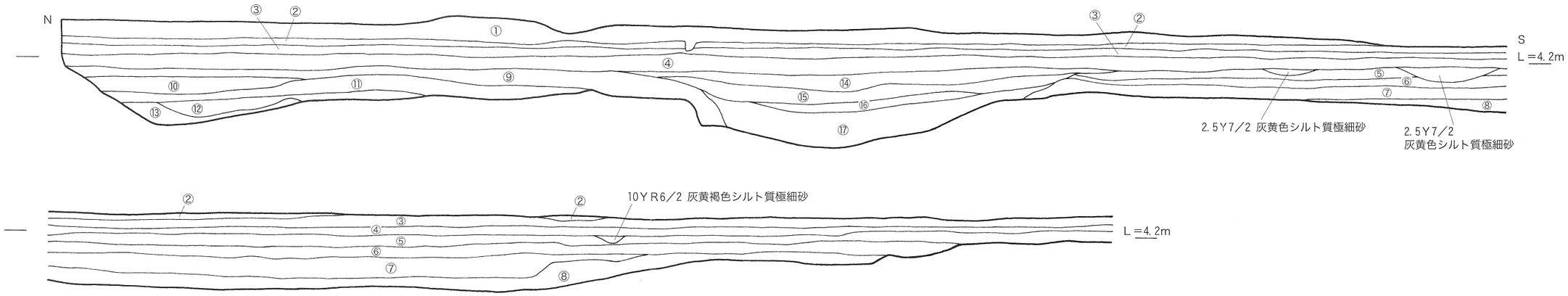
第７－１図　Ａ４区東壁土層図（１/40）

① 現耕作土
② 2.5Y7／2 灰黄色シルト質細砂
③ 5Y6／1 灰黄褐色シルト質極細砂
④ 5Y8／2 灰白色シルト質極細砂
⑤ 10YR5／1 褐灰色シルト質細砂
⑥ 10YR5／2 灰黄褐色シルト質細砂（クサリ礫多量に含む）
⑦ 10YR4／2 灰黄褐色砂質シルト
⑧ 10YR6／1 褐灰色シルト質細砂
⑨ 7.5YR6／1 褐灰色礫混りシルト（クサリ礫多量に含む）
⑩ 7.5YR＋／1 褐灰色シルト
⑪ 10YR3／3 暗褐色シルト（土壌化）
⑫ 10YR6／2 灰黄褐色シルト質極細砂
⑬ 10YR6／6 黄褐色シルト質極細砂
⑭ 10YR8／8 黄橙色シルト
⑮ 2.5Y7／2 灰黄色シルト質極細砂
⑯ 2.5Y7／2 灰黄色シルト質極細砂（クサリ礫多量に含む）

⑥～⑧：SD－A4－03及びSD－A5－01埋土
⑦～⑩：SD－A4－02埋土

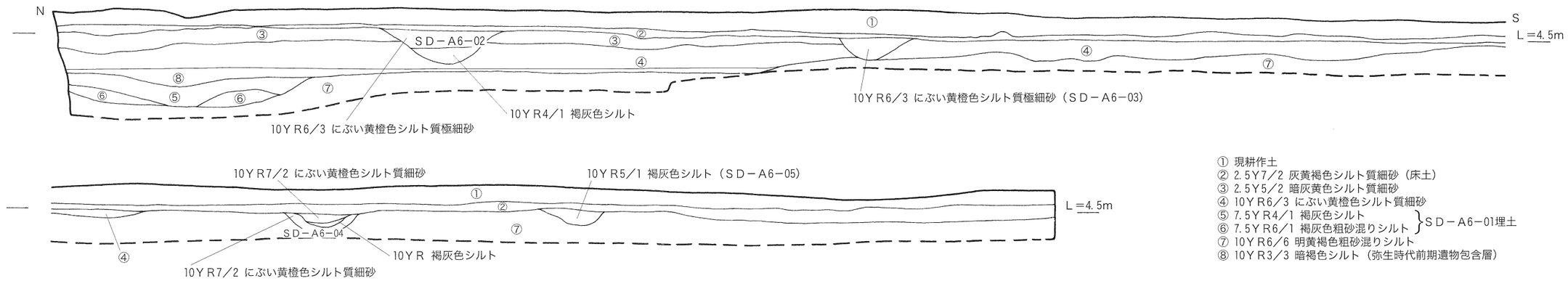


第７－２図　Ａ４区南壁土層図（１/40）



① 現耕作土
② 現耕作土床土
③ 10YR5／2 灰黄褐色シルト質細砂
④ 2.5Y7／3 浅黄色シルト質極細砂
⑤ 10YR5／2 灰黄褐色シルト質細砂
⑥ 10YR3／3 暗褐色シルト質細砂
⑦ 7.5YR4／1 褐灰色シルト
⑧ 7.5YR5／2 灰褐色粗砂
⑨ 7.5YR5／1 褐灰色シルト質細砂
⑩ 10YR5／1 褐灰色シルト質細砂
⑪ 10YR5／2 灰黄褐色シルト質細砂（クサリ礫多量含む）
⑫ 10YR4／2 灰黄褐色砂質シルト
⑬ 10YR6／1 褐灰色シルト質細砂
⑭ 2.5Y6／2 灰黄色シルト質極細砂
⑮ 10YR5／2 灰黄褐色シルト質細砂
⑯ 10YR6／1 褐灰色シルト質極細砂
⑰ N5／ 灰色シルト
（⑭～⑰：SD－A5－01埋土）

第８－１図　Ａ５区東壁土層図（１/40）



① 現耕作土
② 2.5Y7／2 灰黄褐色シルト質細砂（床土）
③ 2.5Y5／2 暗灰黄色シルト質細砂
④ 10YR6／3 にぶい黄橙色シルト質細砂
⑤ 7.5YR4／1 褐灰色シルト
⑥ 7.5YR6／1 褐灰色粗砂混りシルト
（⑤・⑥：SD－A6－01埋土）
⑦ 10YR6／6 明黄褐色粗砂混りシルト
⑧ 10YR3／3 暗褐色シルト（弥生時代前期遺物包含層）

0　2m

第８－２図　Ａ６区東壁土層図（１/40）

縄文時代の遺構・遺物

自然流路

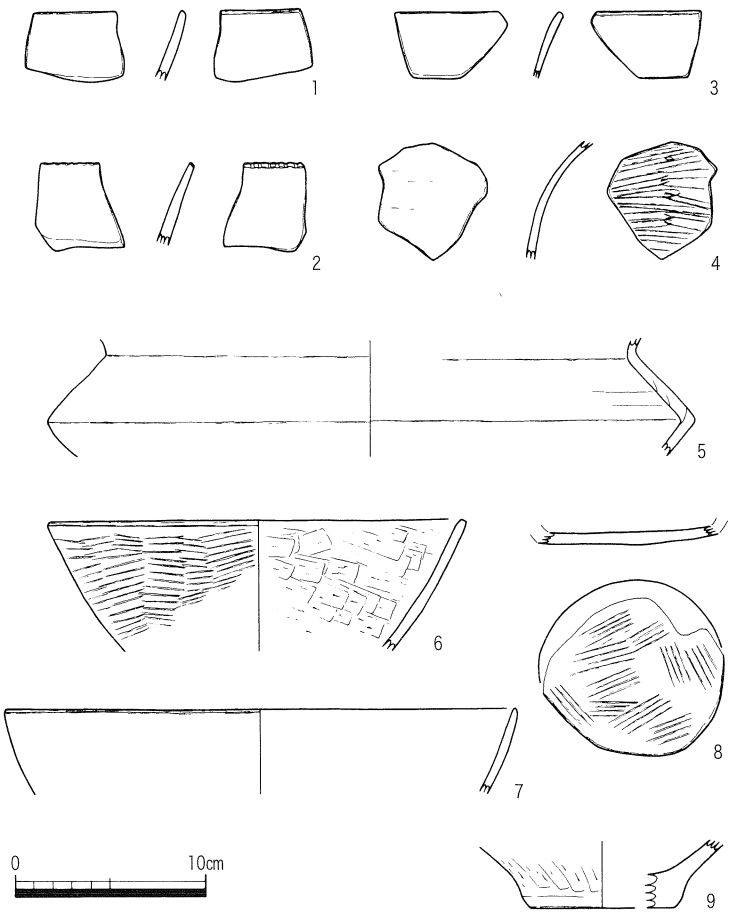
ＳＲ－Ａ－01（第４図土層図参照）

Ａ区の北端部に位置する埋没した自然流路である。完掘には及ばなかったが，Ａ１区及びＡ４区で壁面の堆積状況から確認された。幅は約14～23mに推定され，西の山麓から東の河川に下る自然地形に従った，西～東方向への流路と考えられる。Ａ１区において流路の埋土は複雑な堆積層に分層されたが，側溝での遺物出土状況から⑨，⑩層が弥生時代前期の遺物包含層であり⑪層が縄文晩期の遺物包含層となっている。それより下位の堆積物については，シルト及び砂層がラミナ状に堆積するものであり遺物は見られない。以上の状況から縄文時代晩期以前にはある程度の水流があったものと考えられるが，徐々に埋没し弥生時代前期頃には水流の悪い湿地状になっていたものに推察される。

ＳＲ－Ａ－01出土遺物

環濠集落が形成する以前に存在していた旧河道内の資料群である。出土土器が突帯紋土器出現以前の縄文晩期中葉土器群であることから，本地域に以前から縄文晩期土器製作集団が存在していたことが推察される。

１は椀皿型の浅鉢口縁部片であり，ナデ調整で丁寧に成形している。２～４は屈曲型の深鉢である。２は口縁端部を刻んだ口縁部片であり，３もナデ調整で成形した口縁部片である。４は外面を二枚貝の腹縁部による条痕で仕上げた口頸部片である。５は大形で精製の屈曲型浅鉢の胴部資料であり，口縁部を欠損しているが，逆「く」字に屈曲した胴部を呈している。６・７は椀皿型の浅鉢である。６は外面を貝殻条痕，内面を板ナデ調整に近いケズリ調整で成形している。７はナデ調整で成形した大形品である。８・９は粗製浅鉢の底部片である。貝殻条痕により底を調整しており，内面はナデ調整で成形し，９は成形が粗く歪みが激しい。これらの土器群は縄文晩期中葉の居石遺跡ＳＲ03資料に併行する資料と思われるが，若干古くなる可能性があるといえる。



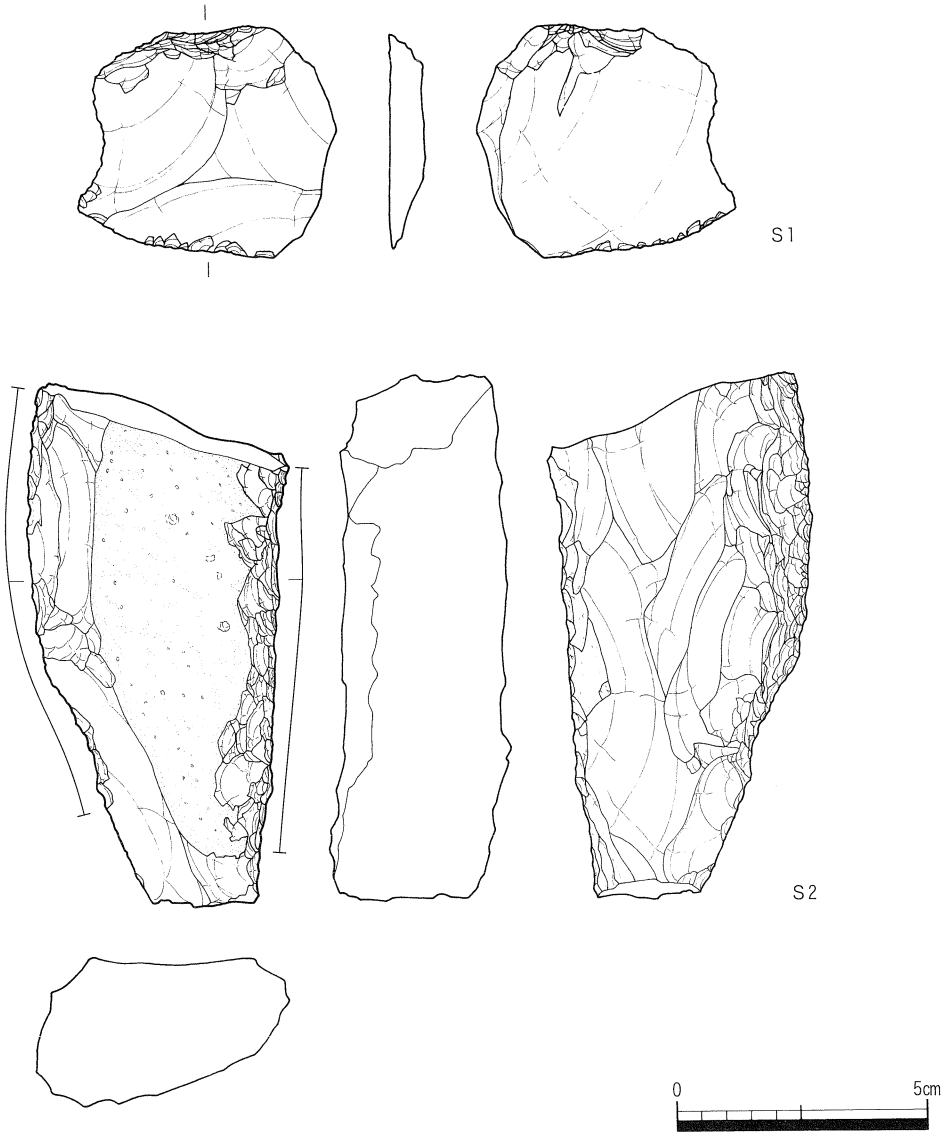
第９図　ＳＲ－Ａ－01出土遺物

ＳＸ－Ａ１－01～03

Ａ１区において検出された性格不明の遺構である。ＳＤ－Ａ１－01の北壁及び底面において確認できた。堆積状況からＳＲ－Ａ－01の南岸部に位置し，掘削は流路の基底と考えられる黄橙色シルトに及ぶもので，埋土は縄文晩期遺物包含層（⑪層）に相当するものに考えられる。断面は逆台形状で，平面は径約0.6～0.8mの円形をなすものでほぼ直線上に並ぶ。ＳＲ－Ａ－01を完掘していないため，性格は明確にならなかった。遺物はＳＸ－Ａ１－01より石器が出土している。

ＳＸ－Ａ１－01出土石器

Ｓ１は使用痕のあるサヌカイト製の剥片で，抉り状となった側縁部及び底縁部に微細な剥離痕が見られる。Ｓ２は片面に自然面を残すもので，両側縁部加工が見られるもの。先端付近の片側に破損と考えられる大きな剥離痕がある。器種としては，先端部及び基部の欠損した打製石斧の可能性が考えられる。



第10図　ＳＸ－Ａ１－01出土石器

弥生時代前期の遺構・遺物

環濠（第15図参照）

Ａ区の全調査区において，弥生時代前期の遺物を含む溝跡が検出された。調査結果から，溝跡は緩やかに弧を描きながら微高地であるＡ２区を囲むように周回し，内側と外側の２重に廻らされたものとなっている。各々調査区により分割され，継続して調査を行っていないため，はじめに各区間に分割して報告をする。

ＳＤ－Ａ１－02（外環濠北部）

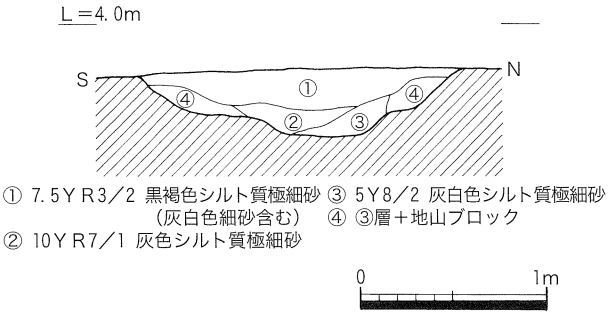
検出レベル：標高４ｍ～3.89ｍ。

深さ：0.4ｍ前後。

検出延長：約17ｍ

平面形状：全体に緩やかな弧を描く。幅は２ｍ前後で直線的な箇所では狭く，屈曲の大きい箇所では2.5ｍ程となる。

断面形状：逆台形状。中位から段が付き，中央部がまた逆台形状に窪む。



第11図　ＳＤ－Ａ１－02断面図

堆積状況：比較的短期間の内に灰白色土が堆積するとともに，地山をブロック状に含む堆積物が流入した後，黒褐色土が緩慢にレンズ状を呈して堆積したものと考えられる。遺物は下層の灰白色土及び地山を含んだ堆積層より出土した。

ＳＤ－Ａ１－03（内環濠北部）

検出レベル：標高3.96ｍ～3.91ｍ。

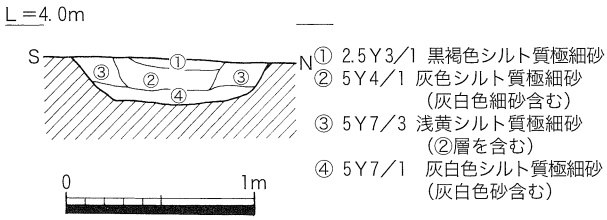
深さ：0.25ｍ前後。

検出延長：約17ｍ（Ａ１とＡ２の調査区を跨ぐ）

Ａ２区での検出レベル：標高4.25～4.21ｍ。

深さ：0.4ｍ前後。

平面形状：全体に緩やかな弧を描く。Ａ１区で幅１ｍ前後で直線的な箇所では狭く，屈曲の大きい箇所では1.3ｍ程となる。Ａ２区では幅２ｍ程となり，外側溝（ＳＤ－Ａ１－02）と同規模の深さ及び幅となる。Ａ１区においてより多く削平を受けたと考えられる。



第12図　ＳＤ－Ａ１－03断面図

断面形状：逆台形状。

堆積状況：ＳＤ－Ａ１－02とほぼ同様の堆積で，灰白色土が比較的短期間の内に堆積した後，地山（浅黄色シルト質極細砂）をブロック状に含む堆積物が見られる。その上層に灰色及び黒褐色土の堆積が認められるが，ＳＤ－Ａ１－02に比べ黒褐色土堆積が少なく，この部分が削平されたと考えられる。遺物は下層の灰白色土及び地山を含んだ堆積層より出土した。

第13図　ＳＤ－Ａ１－03（Ａ２区）遺物出土状況図（１/20）

ＳＤ－Ａ２－06（内環濠南部）

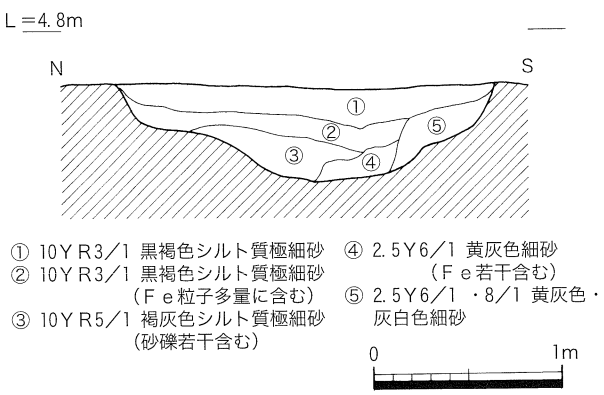
検出レベル：西部では標高4.6m前後，東部では4.5m程。

深さ：西部で0.4m弱，東部で0.6m以上。

検出延長：約15m

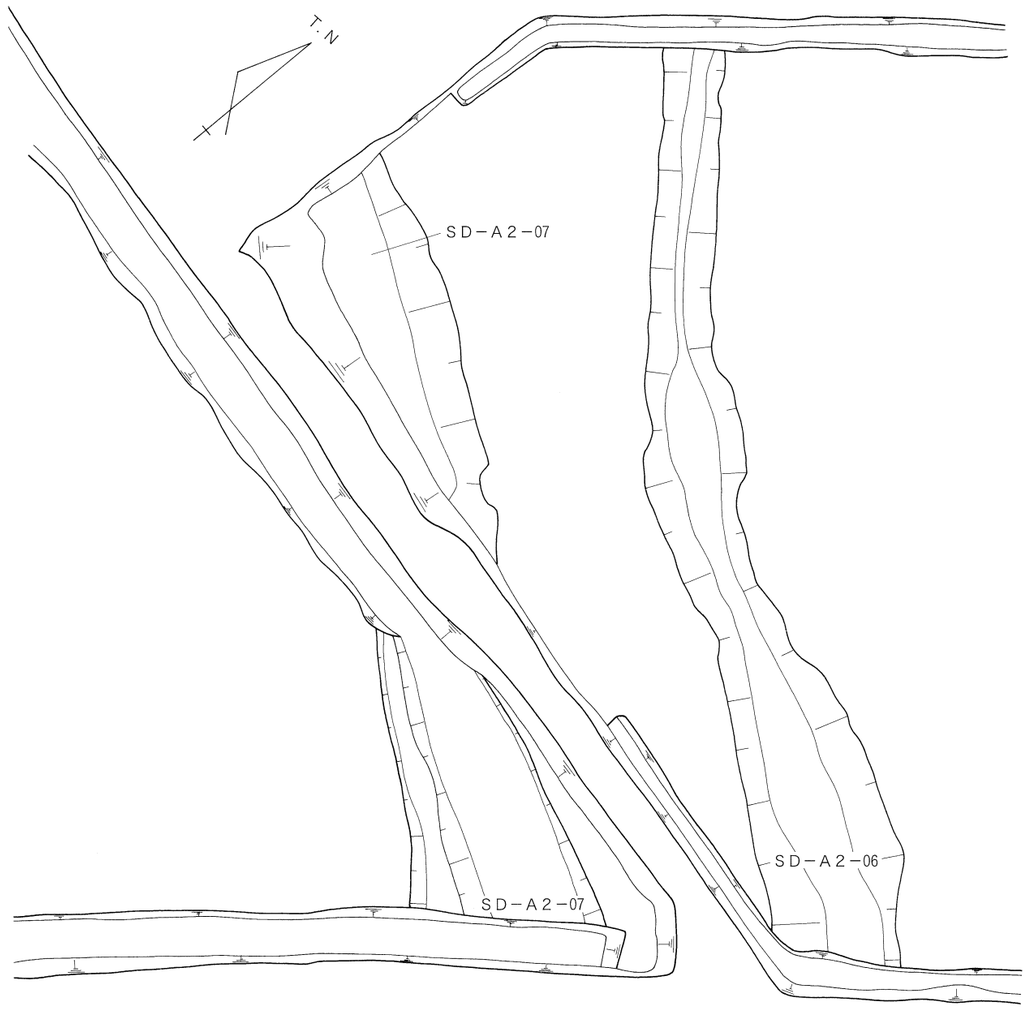
平面形状：全体に緩やかな弧を描く。幅は西部で１m程，東部では２m以上を測る。検出レベル及び溝の深さからも西ほど多くを削平されたと考えられる。

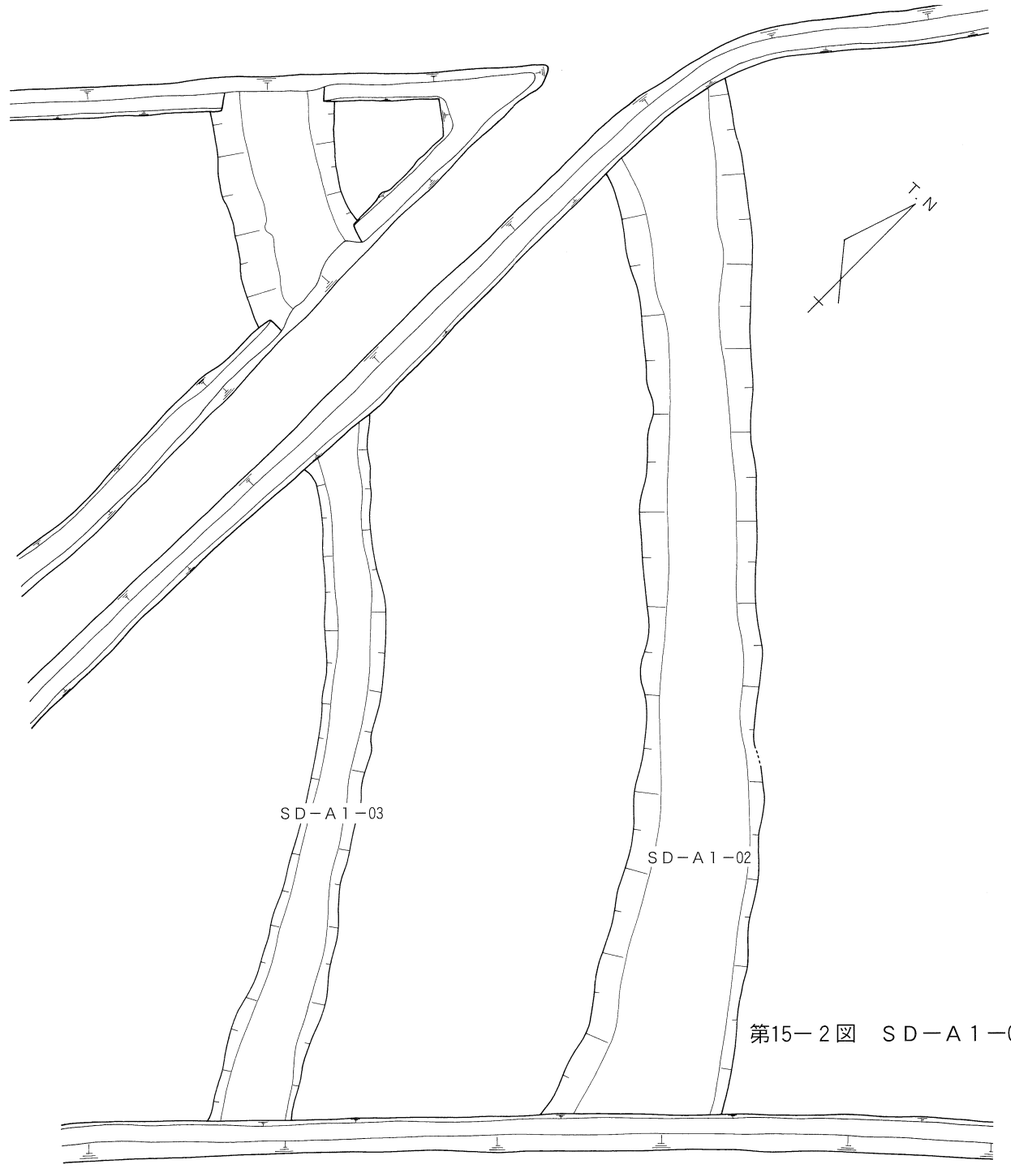
断面形状：逆台形状。中位で段状な箇所がある。



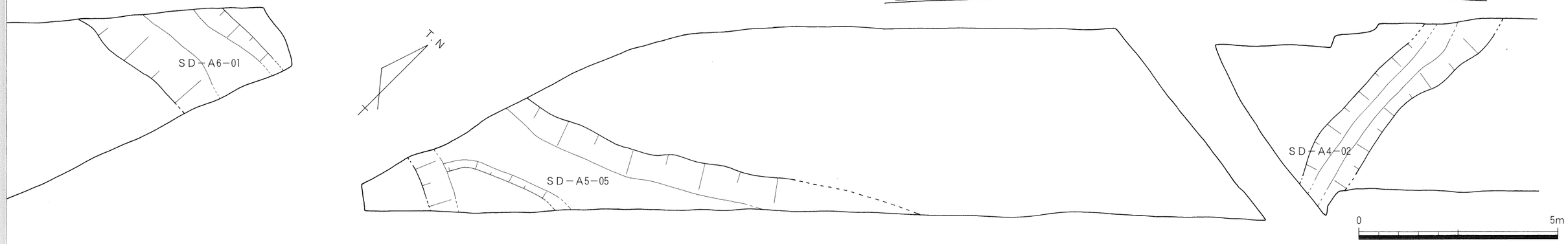
第14図　ＳＤ－Ａ２－06断面図

第15－１図　ＳＤ－Ａ２－06，07平面図（１/100）





第15－２図　ＳＤ－Ａ１－02，03平面図（１/100）



第15－３図　ＳＤ－Ａ４－02，Ａ５－05，06平面図（１/100）

堆積状況：灰白色砂及び黄灰色土が流入，崩落の後，褐灰色及び黒褐色土が堆積する。遺物は下層の灰白色，黄灰色土より出土した。

ＳＤ－Ａ２－07（外環濠南部）

検出レベル：標高4.5～4.4m。

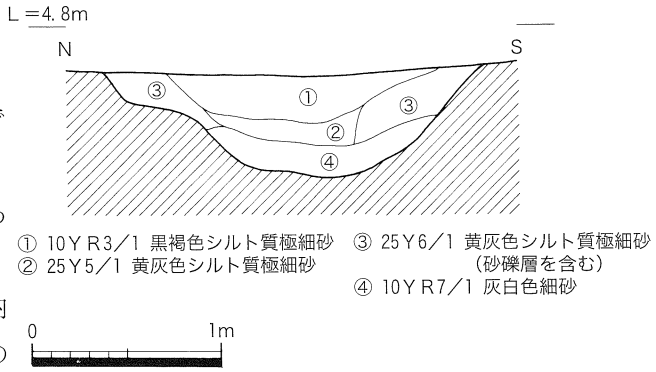
深さ：0.5～0.6m。

検出延長：約13m（Ａ２とＡ３の調査区を跨ぐ）

平面形状：全体に緩やかな弧を描く。幅は東端で2.5m程となる。

断面形状：逆台形状。中位で段状となる箇所がある。

堆積状況：最下層の灰白色土が比較的短期間の内に堆積した後，砂礫を含む堆積物が流入したものと考えられる。その上層に黄灰色及び黒褐色土が堆積している。遺物は最下層の灰白色土より出土した。



第16図　ＳＤ－Ａ２－07断面図

ＳＤ－Ａ６－01（外環濠東部）　第８－２図　土層図参照

検出レベル：標高4.1m前後。

深さ：0.3m前後。

検出延長：約３ｍ

平面形状：弧を描くが，屈曲が大きい。幅は３ｍ前後。

断面形状：逆台形状。

堆積状況：Ａ６区の北半では，暗褐色をした弥生時代前期の遺物包含層が堆積しておりその包含層除去の後，溝跡を検出した。最下層に褐灰色砂混じりシルト層が見られ，その上部に褐灰色土がレンズ状に堆積する。包含層から出土した遺物は溝出土遺物と時期差が見られないことから，環濠に伴った集落廃絶時の遺物が流入し堆積したものと考えられる。

ＳＤ－Ａ５－05（外環濠東部）

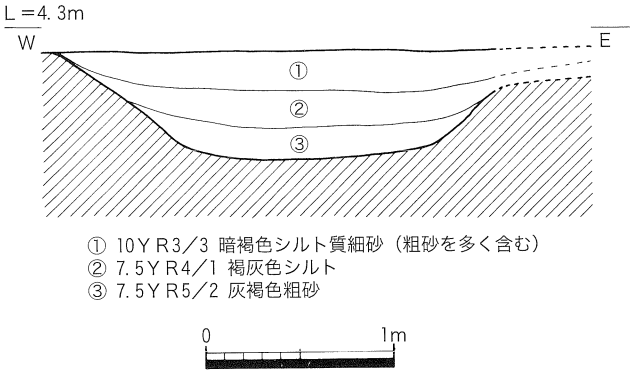
検出レベル：標高4.15m前後。

深さ：0.5m前後。

検出延長：約７ｍ

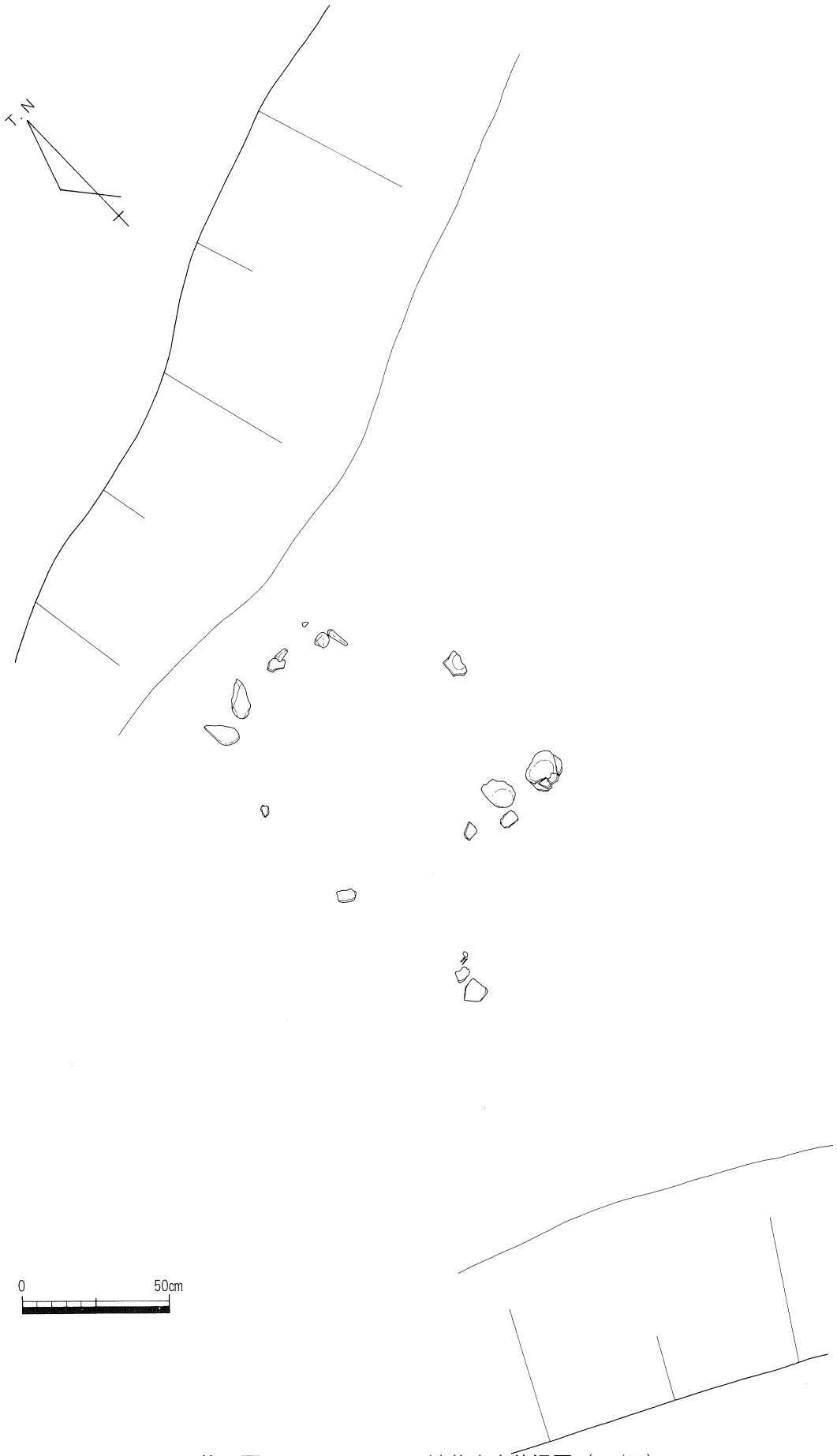
平面形状：西側の上端部は緩やかな弧を描くが，東側は段状となるためか上端部は屈曲が少なく東方向を向き，下端部は西側と同様の緩やかな弧を描く。幅は３ｍ前後。

断面形状：逆台形状。東側では中位で段状になる。



第17図　ＳＤ－Ａ５－05断面図

堆積状況：最下層に灰褐色の砂層が堆積し，その上部に褐灰色及び暗褐色の土がレンズ状に堆積する。遺物は最下層より出土した。



第18図　ＳＤ－Ａ５－05遺物出土状況図（１/20）

ＳＤ－Ａ５－06（内環濠東部）

検出レベル：標高4.15m前後。

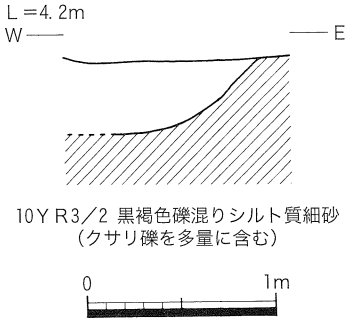
深さ：0.4m前後。

検出延長：約10m

平面形状：西側は調査区外となり未検出であるが，東側の端部は北で大きく屈曲する。

断面形状：東半のみの検出だが，逆台形状を呈するものと推定される。

堆積状況：黒褐色礫混じりシルト質極細砂の単一層である。



第19図　ＳＤ－Ａ５－06断面図

ＳＤ－Ａ４－02（外環濠東部）

検出レベル：標高3.6～3.5m。

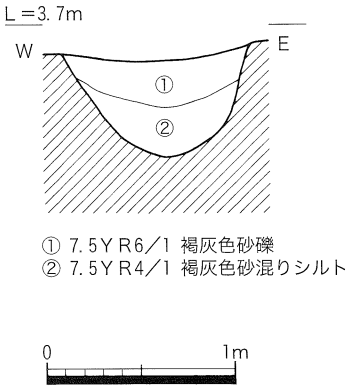
深さ：0.5～0.6m。

検出延長：約５m

平面形状：直線的に南東方向へ延びる。この後，ＳＤ－Ａ５－05へと繋がるために南東部で急激に屈曲するものと想定される。幅は１～1.5m

断面形状：Ｕ字形。

堆積状況：ＳＤ－Ａ４－03に切られる等，上層部はかなり削平を受けているものと考えられる。下層部に褐灰色砂混じりシルト，その上部に砂礫層が堆積する。遺物は下層の上端部に見られた。



第20図　ＳＤ－Ａ４－02断面図

環濠について

以上をまとめると次のとおりである。

立地：現在の地図上で観察される本津川の氾濫原からは約200m程外に位置し，調査結果からも当該期の氾濫は認められない。またA1，Ａ３において西の山麓に発する埋没自然流路が確認されており，南北においては低地若しくは谷状の地形に挟まれた微高地の末端部に溝が掘削されている。

規模：外側の直径約63m，内側に囲まれた面積は約1,900㎡に推定される。

検出レベル：標高4.6m～3.5m。ほぼ自然地形に沿い，南西部から北東部へと低くなる。

深さ：最深部で0.6m

検出延長部の合計：外42m，内42m

平面形状：緩やかに弧を描く（北側），直線的（東側），屈曲の大きい（東側）箇所が見られる。

幅：内，外側とも概ね２m前後で直線的な箇所で狭く，屈曲の大きい箇所で広くなっている。内側と外側溝との間隔は３m前後である。

断面形状：概ね逆台形状で，段状となる箇所が見られる。またＳＤ－Ａ４－02はＵ字形をなす。

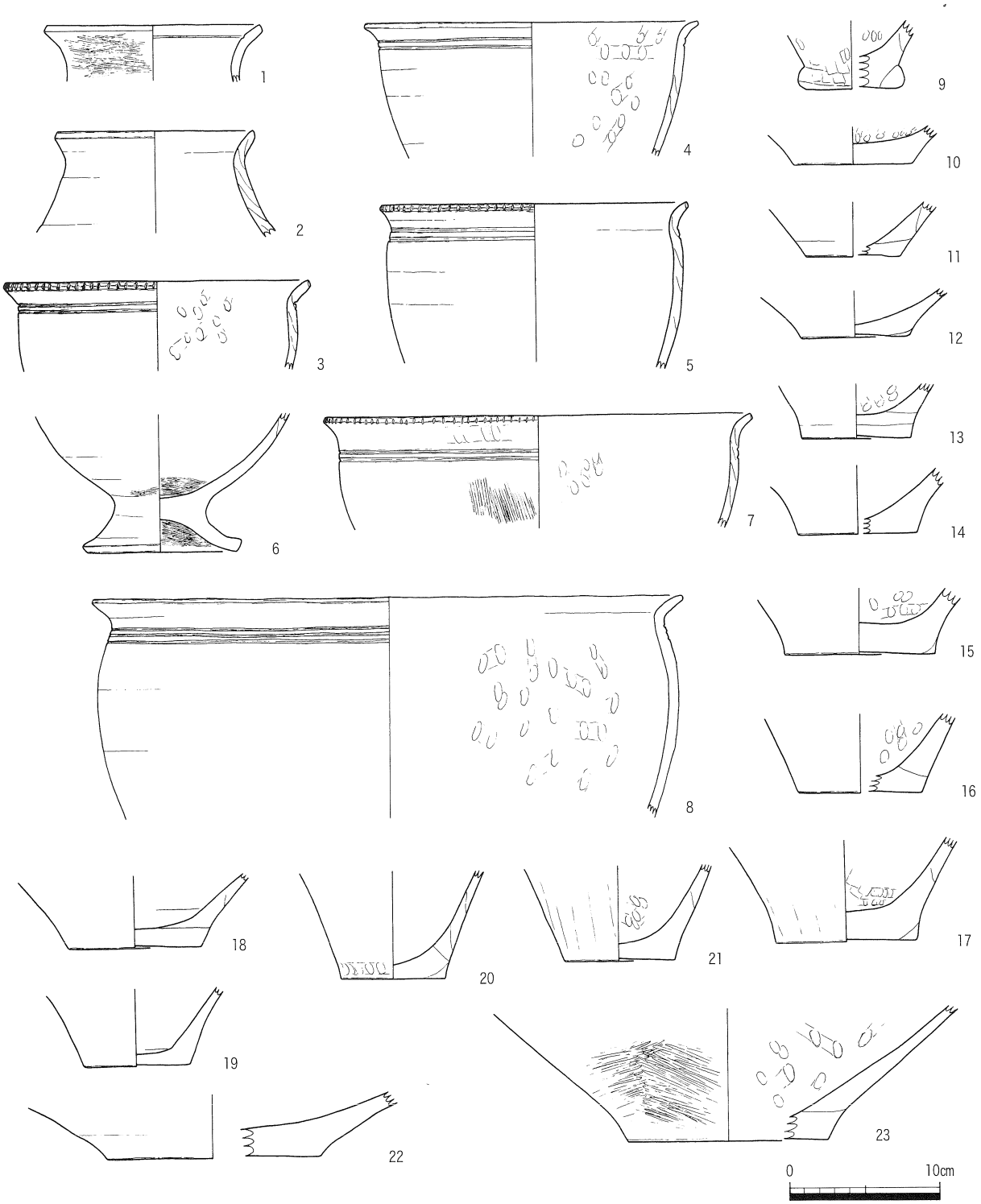
堆積状況：各区間で内側，外側とも埋土の堆積状況が近似しており，同様の埋没過程が考えられる。全体をとおして，比較的短期に堆積したと考えられる砂質の土が最下層に見られ，遺物の大半が出土している。それより上層部は環濠廃絶以降の自然堆積と考えられ，再掘削の痕跡は見られない。

環濠出土遺物

弥生土器

ＳＤ－Ａ１－02出土遺物

北端に位置する外環濠の資料であり，底部片が多く見受けられる。１は壺形土器の緩やかに外反する口縁部片であり頸部の器壁が若干薄いことから，削出突帯を伴っていた可能性が高いと考えられる。また口縁部内面には１条の篦描沈線を施紋していることから，関門地域の綾羅木Ⅱ式を中心とする土器群



第21図　ＳＤ－Ａ１－02出土遺物

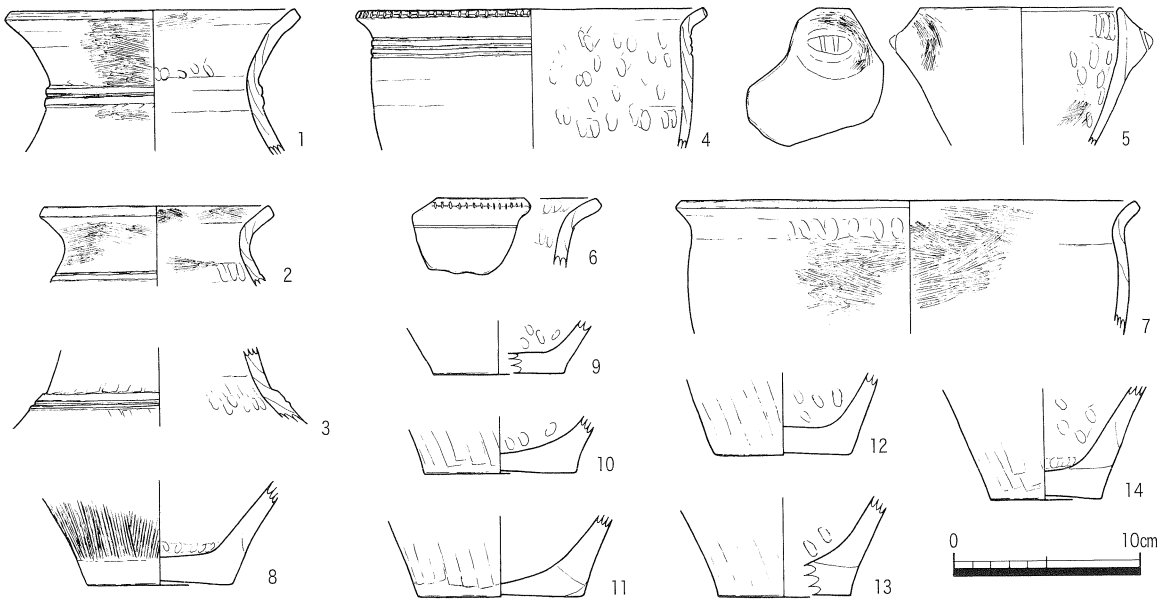
との関係が窺い知ることができ瀬戸内地域や近畿地方にも散見されるが，当地域より以西地域の属性であるといえる。2は前段階から続く無段系の壺形土器であり，内傾した頸胴部から頸部で一旦窄まりそのまま短く弱く外反する口縁部をもったプロポーションを呈している。古い要素を継承している土器と評価することができる。3は如意形口縁甕であり，頸胴部に2条の篦描沈線を持ち合わせているが，上部の沈線が鋭く深く描かれており特徴ある表現といえる。また刻目を口縁下端部に刻んでいる。4は器形が鉢に近い甕形土器であり，緩やかに弱く外反した口縁部には刻目を配してはおらず，頸胴部境に2条の篦描沈線を施紋している。5は頸胴部境にしっかりとした篦描沈線を2条巡らしており，その下位に胴部最大径をもつやや張った胴部から短く緩やかに外反する如意形口縁を呈した甕形土器である。3～5は一貫したナデ調整で成形を実施している。6は一見台付鉢のようなプロポーションを呈した重心の低い高坏形土器であり，厚さの薄い脚柱部から先端が屈曲する脚部と内彎する坏部をもっている。また内・外面をヘラミガキ調整で仕上げているが，特に内面を極めて精緻に磨いているのが看取される。7は如意形口縁をもつやや大形の甕形土器であり，外面を細かいハケ調整で成形しているのが窺える。また頸胴部境には2条の篦描沈線と口縁端部には刻目を施している。8は胴部が強く張った大形甕であり，やや強く折れ曲がった口縁部をもち頸胴部境には3条の篦描沈線を施紋している。丁寧なナデ調整で成形しているのが看取される。9は底縁部に粘土紐を巡らし貼り付け突出させた器種不明底部片である。内・外面を板ナデ調整＋ナデ調整で成形しているが，全体的に成形が粗く歪みが激しい。また器形から甕用蓋の可能性が高いことも指摘しておく。10～18は壺形土器の底部片であり，バリエーション豊かな成形技法が存在していると考えられる。19～21は甕形土器の底部片であり，各々板ナデ調整やナデ調整などで成形している。22・23は大形壺の底部片であり，胴部の張る器形が推測されるような底部からの外方への立ち上がりをみせている。

ＳＤ－Ａ２－07出土遺物

Ａ２区での同溝出土品は１の土器片１点のみで，土器量は少ない。1は緩やかに外反した口縁部を有し，窄まりをみせる頸部には削出突帯＋篦描沈線を装飾した壺形土器であり，口縁部内面にやや強いヨコナデ調整を加え，口縁部先端をさらに外方に向けるよう屈曲したプロポーションを呈している。また面をもった口縁端部には篦描沈線を加えてはいないが，若干の凹みを看取できる。突帯成形には板状工具により削り出し，その際の圧痕が連続して残されているが，最終調整であるヘラミガキ調整で仕上げているにもかかわらず縁取沈線は施していない。

２～14は南端に位置するＡ３区での同溝出土資料であり，ここでも出土量は少量頻度を指し示している。2は口頸部境の内傾面に２＋α条の篦描沈線をヘラミガキ調整前に施しており，「く」字に近い屈曲をみせて短く外反する口縁部をもった壺形土器である。3は頸胴部境に削出突帯＋しっかりとした１条の篦描沈線を施している。板状工具により削り出した突帯は頸胴部の境を明瞭にしており，ＳＤ－Ａ５－05の3と類似した古相を示すプロポーションを呈しているといえ，両者ともに段上位を強く沈み込ませて段部を強調した器形を保持している。4は垂直に立ち上がった胴部から短く外反した口縁部をもつ如意形口縁甕である。全面をナデ調整で成形した後，頸胴部境に半截竹管紋＋篦描沈線を施しており，３条沈線に仕上げている。また口縁端部には刻目をもっている。5は外傾しながら立ち上がる胴部に若干の内彎をみせる口縁部をもった小形の鉢形土器である。口縁部下位に瘤状把手を貼り付けており，推定復元すると対称位置に2箇所存在していたことが推測される。また瘤状把手には縦方向に2箇所の穿孔がみられ，紐穴であった可能性が高い。内面は手捏ね風にナデ調整で成形しているため器面の隆起が目立つが，外面は細かいヘラミガキ調整で丁寧に仕上げている。6は如意形口縁をもつ鉢形土器であり，

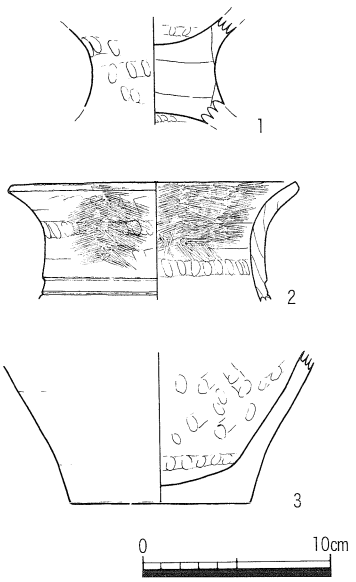
口頸部境には口縁部が屈曲する変換点に細くて弱い篦描沈線を１条施しており，口縁下端部にはやや縦長の細い刻目を配している。７は無紋の鉢形土器であり，成形は粗く口縁部を外反させる際の指頭圧痕が器表面に残っており，全面をヘラミガキ調整を採用しているが精緻に仕上がってはいない。８・９・11・12は壺形土器の底部片で縦方向の板ナデ調整やハケ調整により器壁を立ち上げて成形している。10・13・14は甕形土器の底部片である



第22図　ＳＤ－Ａ２－07出土遺物

ＳＤ－Ａ５－06出土遺物

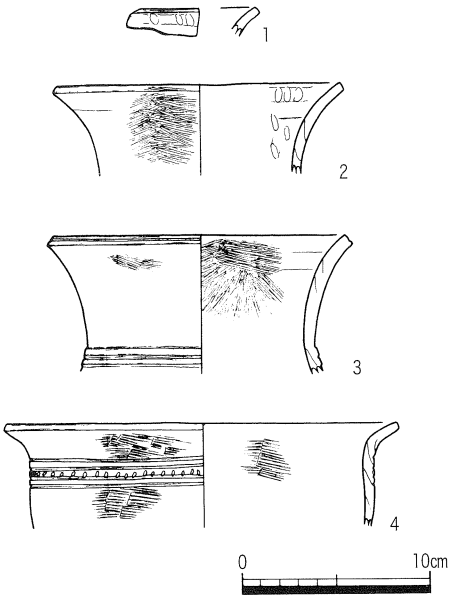
東辺に位置する外環濠ではあるが，出土土器は３点のみとなっている。１は高坏形土器の坏部と脚部が欠損して脚柱部のみの残存となっている。基部成形手法は粘土円盤の上・下部に粘土板を貼り足して脚柱部を成形し，その側面から粘土帯を積み上げて坏部と脚部を作り出していることが窺える。粘土や混和材である砂粒は良質なものを採用しているといえ，また一貫して丁寧なナデ調整で成形している。２は壺形土器である。口頸部境の内傾面に粘土帯接合による段を作出しており，段の下部には１条の篦描沈線を巡らし，やや発達した口縁部は板ナデ調整とナデ調整で成形しながら緩やかな外反を示している。全面をヘラミガキ調整で仕上げているが，段の縁取りを部分的にしか施しておらず，段が途切れ気味になる箇所が幾つか存在している。３は甕形土器の底部片である。



第23図　ＳＤ－Ａ５－06出土遺物

ＳＤ－Ａ６－01出土遺物

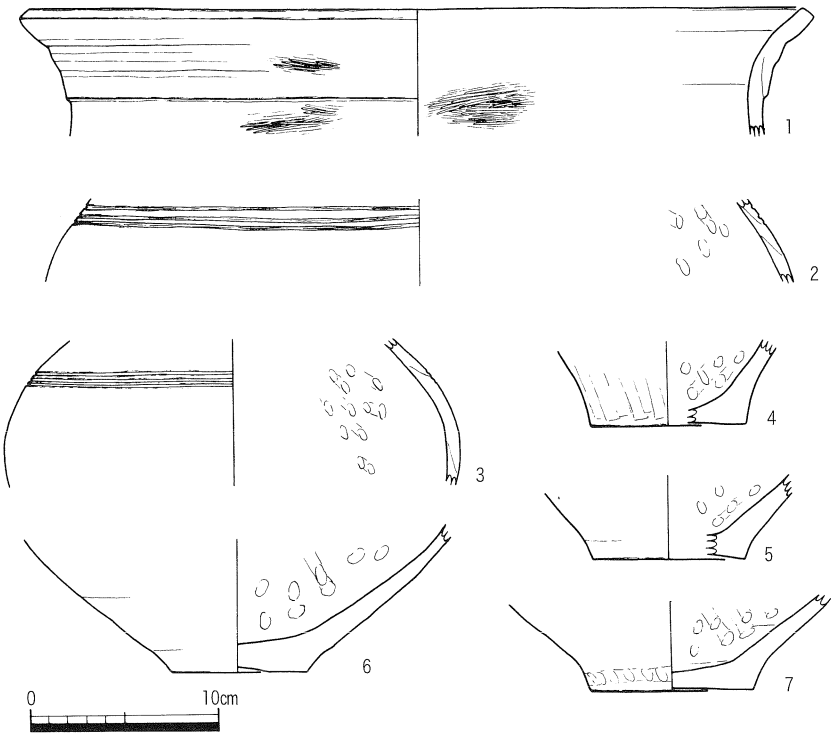
１～３は口縁部及び頸部にかけての壺形土器である。１は２・３と同様の緩やかに外反を示した口縁部形態を呈しており，口縁端部は１～３共に面をもっている。２は立ち上がり気味の頸部から緩やかに外方へ伸びる開口部を作出している。また窄まった頸部には器厚が若干薄いことが確認でき，これは３にみられるような削出突帯を伴っていたことが表出しているといえる。３の内頸面には板状工具による削出突帯を装飾しており，突帯上に篦描沈線を１条描いている。前段階の様相を受け継いでいる垂直気味に立ち上がった頸部から緩やかに口縁部が開いており，面をもった口縁端部には篦描沈線を１条施紋している。仕上げにヘラミガキ調整を施し突帯への縁取沈線をも加えている。同種形態をもつ壺形土器は龍川五条遺跡ＳＤ49最下層資料（森下1998）に確認できる。４は甕形土器であり内・外面とも横方向のハケ調整で成形した後，半截竹管にて４条の沈線を巡らしており，半截竹管紋間には棒状工具で刺突による列点紋を配列している。沈線は篦状工具から半截竹管状工具に持ち替えて描いたもので４条沈線に仕上がっているが，本質的にはＳＤ－Ａ１－03の１にみられるような両沈線紋間刻目の属性と同質的なものと評価できる。また口縁部形態は如意形を呈しているが，口縁端部には刻目を加えてはいない。



第24図　ＳＤ－Ａ６－01出土遺物

ＳＤ－Ａ４－02出土遺物

北東部に位置した外環濠内出土の資料である。１は口頸部境に粘土帯接合による段を表現している大形壺である。段の上部には２段階に分けて強いヨコナデを加えることによって凹線状に仕上がっており，口縁部の外反を強めている。また口縁端部上端を摘み上げるように口縁端部と同時に口縁部内面を強いヨコナデを施しており，口縁端部を幅広の面をもたし丁寧に仕上げている。仕上げにはヘラミガキ調整で全面を精緻に磨いており，縁取沈線も施している。大形品の有段壺



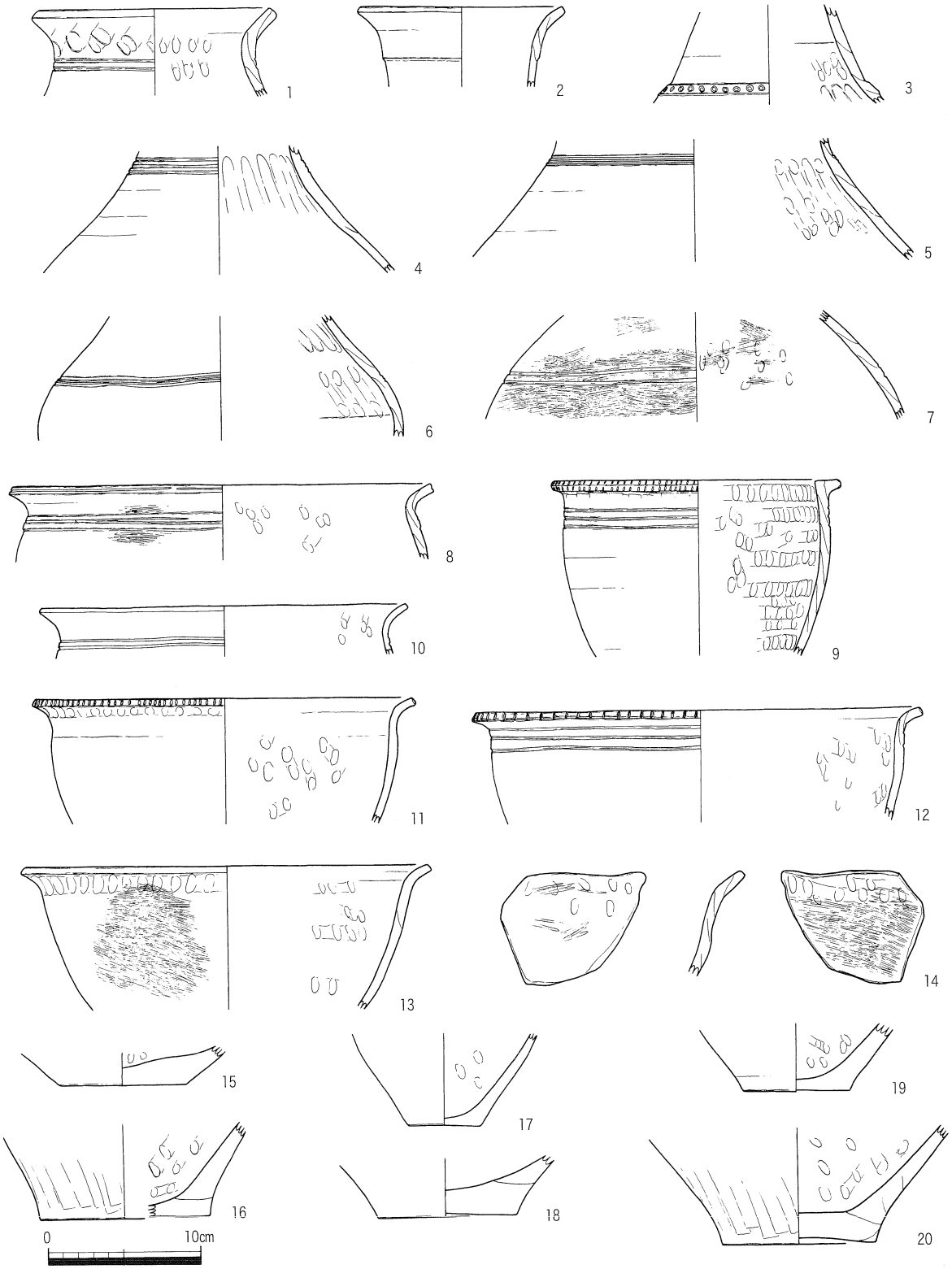
第25図　ＳＤ－Ａ４－02出土遺物

は当段階まで残るが基本的な器種組成に組み込まれておらず，むしろイレギュラーな形態であるといえ古い要素を内包しており，前段階からの属性を継続して保持している。2は大形壺の胴上部片であり，1条の篦描沈線を巡らした下位には半截竹管紋を施紋しており，施紋工具の使い分けか2本同時施紋が実施されている。3は張った胴部をもつ中形壺で2とは対称的に半截竹管紋の下段に篦描沈線を1条施しており，両者とも細くて浅い沈線となっている。また胎土は角閃石細粒を多量に包含した素地粘土を採用している。4は甕形土器の底部片で，5・6・7は壺形土器の底部片である。6はヘラミガキ調整で丁寧に磨かれているのが見受けられる。

ＳＤ－Ａ５－05出土遺物

東側内環濠の土器資料であり比較的土器量が充実している。1は緩やかに外反した口縁部をもつ壺形土器であり，口頸部境に2条の篦描沈線を巡らしている。器表面をやや粗いナデ調整で成形しており口縁部を屈曲する際の指頭圧痕が明瞭に残されている。2は緩やかに外反した口縁部をもち口縁部先端を折り曲げた壺形土器であり，頸部には不明瞭ながら段状の段差が看取でき粘土帯接合により段成形した有段壺の可能性が高い。器表面は磨滅しているため調整手法は窺い知ることができない。3は壺形土器である。頸胴部境において板状工具の削り出しによる削出突帯を成形しており，頸部と胴部を明瞭に区画している。また突帯上には竹管刺突による列点紋を等間隔に配列している。内傾した頸部や張りの強い胴部を有していたと推測されることから古相を示す形態を保持しているといえる。4・5は壺形土器の頸胴部片であり各々3条の篦描沈線を施紋しているが，4はしっかりとした沈線を巡らしているのに対して5は辛うじて確認できるほどの細くて浅い沈線である。両者とも球形の胴部からやや上方に伸びをみせた頸胴部をもつプロポーションである。6・7は壺形土器の胴上部資料である。6はやや張った胴部の上位に半截竹管紋を巡らした後その沈線紋間に細くて浅い篦描沈線を充塡しており，他に類例をみない紋様構成を呈している。7は精緻なヘラミガキ調整前に球形に張った胴部の上位をしっかりとした2条の篦描沈線で装飾しており，沈線内まで磨いている。8は如意形口縁をもつやや大形の甕形土器で頸胴部境には削出突帯を付加しており，突帯上には篦描沈線を1条巡らしているが，第50図（ＳＤ－Ａ２－04出土）の7にみられる削出突帯と同様に篦描沈線の出発線が突帯上部の上方から始まっており，終止線を延長して部分的に2条になるよう配している。さらには口縁端部にも篦描沈線を1条施しているが，断続的に仕上がっている。9はＳＤ－Ａ１－03の3と同一個体の瀬戸内型甕である。沈線紋帯下位に胴部最大径をもつ胴部から上方に伸びやや内彎する口縁部に粘土紐を貼り付けた形態を保持しており，内・外面を丁寧なナデ調整や板ナデ調整で成形している。また口縁端部の上・下端には細かい刻目を各々配列しており突帯紋系土器的な要素を兼ね備えているといえ，系譜関係をアプローチする際の一属性として検討材料となろう。共伴資料や刻目や少条沈線などの土器に表現された古相要素から，現在確認されている瀬戸内型甕において最古段階のものと評価することができる。さらには口縁部の粘土紐貼り付け部位に下地沈線を採用していることから壺形土器の貼付突帯との同質性がより強調された事例と考えられる。10は器壁の薄い如意形口縁甕であり頸胴部境には断面「コ」字の半截竹管紋が施されており，方形の棒状工具による施紋と考えられる。また口縁端部には刻目を施してはいない。11は頸部に強いヨコナデ調整により口縁部の外反を作出した鉢形土器であり，口縁端部には刻目を配しているが頸胴部境には施紋帯を構成していない。12は有刻の如意形口縁をもつ鉢形土器である。頸部には3条の篦描沈線を施紋しているが，最上段の沈線は細くて弱く口頸部境の屈曲部変換点に描いていることから口縁部折り曲げ時に施された可能性が高いと考えられる。13・14は成形の粗い無紋の鉢形土器であるが，両者ともヘラミガキ調整で器表面を仕上げていることから，成形は粗くとも鉢は基本的にヘラミガキ調

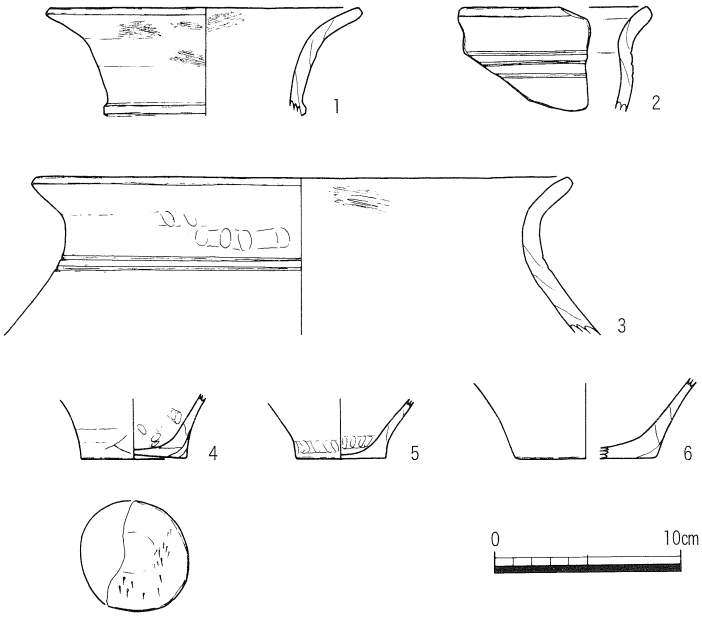
整の採用を多用しているといえる。15～20は壺形土器の底部片である。



第26図　ＳＤ－Ａ５－05出土遺物

ＳＤ－Ａ１－03（Ａ２区）出土遺物

北辺に位置する内環濠の資料群である。1は頸部に下半が欠損した削出突帯＋篦描沈線１条を装飾しており，そこからやや外方に向かって伸び上がりをみせ口縁部先端をさらに強く折り曲げることによって大きく開口する口縁部を作出した壺形土器である。2は如意形口縁をもつ鉢形土器であり，頸胴部境に３条の篦描沈線を施しているが，口縁端部には刻目を配してはいない。全面をナデ調整で丁寧に成形しているのが看取できる。3は頸胴部境の内傾面に篦描沈線を２条施しており，施紋帯から短く上方に伸び上がって緩やかに外反する口縁部をもった大形壺である。4・5は小形品の壺底部片であり，6は中型壺の底部片である。



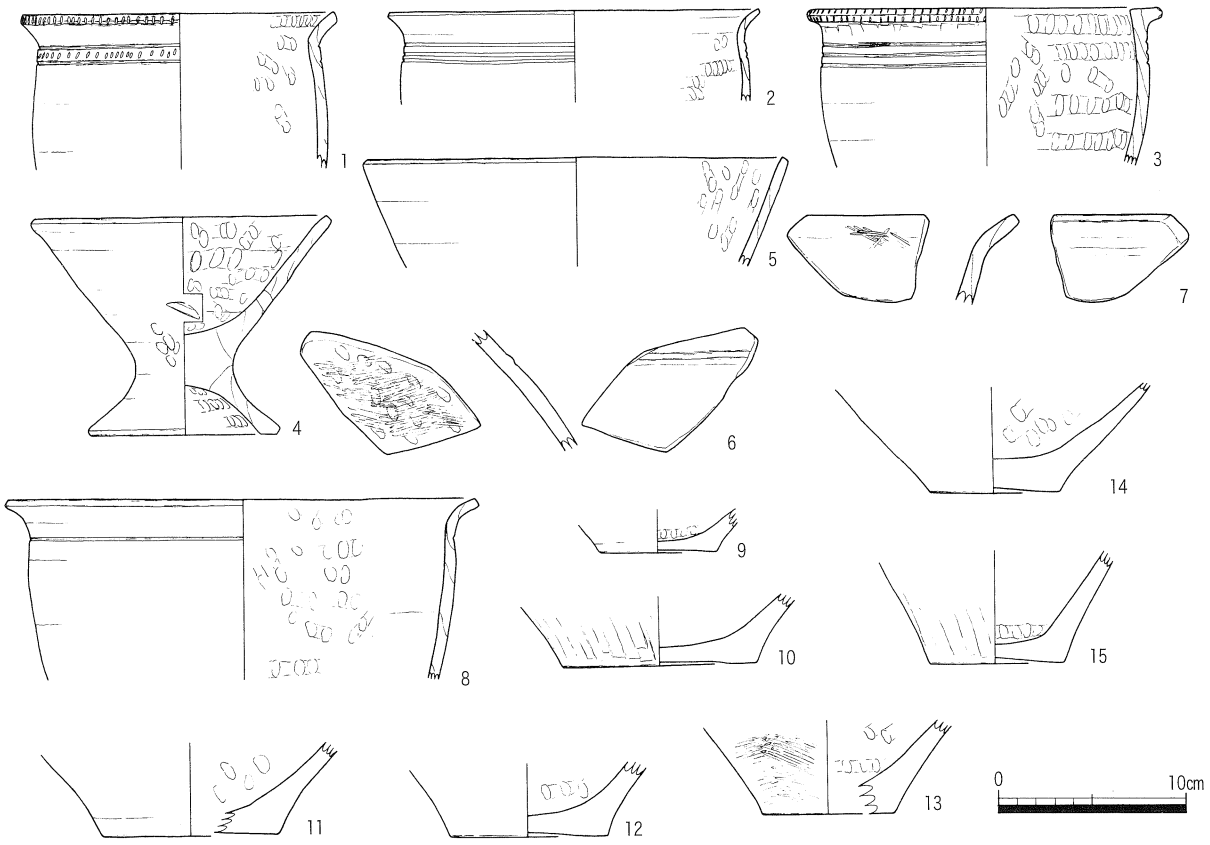
第27図　ＳＤ－Ａ１－03（Ａ２区）出土遺物

全てナデ調整で成形しており，底縁部には粘土紐を貼り足して安定性を補強しているのが確認できる。また4の底には砂粒の移動が見受けられ，意図したケズリ調整を加えたか偶然擦れた際のものかの判断は困難ではあるが，底を丁寧に仕上げていないのが看取される。

ＳＤ－Ａ１－03（Ａ１区）出土遺物

北側に位置する内環濠資料であり，土器量は依然として少量である。1は胴部の張らない如意形口縁甕であり口縁下端部に刻目を施している。さらに頸胴部境には篦描沈線を２条巡らしており，両沈線紋間には板状工具の刺突による列点紋を配列している。この列点紋と口縁下端部にみられる刻目は部分的に木目痕が残存していることから，同工具による施紋であると確認することができ，また施紋時期は極めて近時していたと類推される。2は頸胴部境には右下がりの篦描沈線を３条施紋した器壁の薄い甕形土器であり，先細りの如意形口縁には刻目を施してはいない。3は逆Ｌ字状口縁形態で貼付口縁のいわゆる瀬戸内型甕であり，ＳＤ－Ａ５－05の9と接合はしないが同一個体の資料である。やや内彎する口縁部の上端を平坦に仕上げ口縁端部は蒲鉾形を呈しており，その上・下端には細かい刻目を各々施している。内・外面を丁寧なナデ調整で成形しており，口縁部貼り付け後に板ナデ調整を加えているため頸部外面には板ナデ調整の痕跡が残されている。頸胴部には３条の篦描沈線を施しており，逆時計回りで施紋したのが確認できる。4は完存に近い残存率を誇る高坏形土器である。粘土円盤の側面に粘土帯を外傾接合により積み上げて，一貫してナデ調整による脚部と坏部を作出しており，成形はやや粗く坏部の器表面の歪みが看取される。脚部は短く「ハ」字状に広がり坏部は外方へ直口しながら内彎せずにそのまま口縁部を仕上げている。また本資料には注目される特徴が存在しており，脚柱部上位に土器焼成前による三日月形の穿孔が確認できることである。このような透かしが存在することから食器類としての機能を十分に果たさないと考えられる。しかしながらこの穿孔を穿つことによって何らかの機能的利便性を与えられていたのかも知れないが，評価には注意を要するであろう。5は高坏か鉢の口縁部資料と考えられるが，4と同様のプロポーションを呈していることから前者の可能性が高いといえる。ここ

でも一貫してナデ調整で終止しており，仕上げ調整を採用していないやや大形の高坏形土器と考えられる。6は壺頸胴部片であり，断面台形の突出の低い削出突帯を作出している。突帯上には沈線や特殊紋様などの造作は施してはおらず，ヘラミガキ調整により器面を若干沈み込ませただけの貧弱な突帯である。7は口縁部先端を折り曲げて外反した鉢口縁部片であり，内面をヘラミガキ調整で仕上げてはいるが無紋と考えられる。8は張りをみせない胴部から上方へ立ち上がり，緩やかに外反する口縁部をもった鉢形土器である。口縁端部には刻目を施してはいないが頸胴部境に篦描沈線を1条施紋しており，全体をナデ調整で成形している。9～14は壺形土器の底部片であり，15は甕形土器の底部片である。

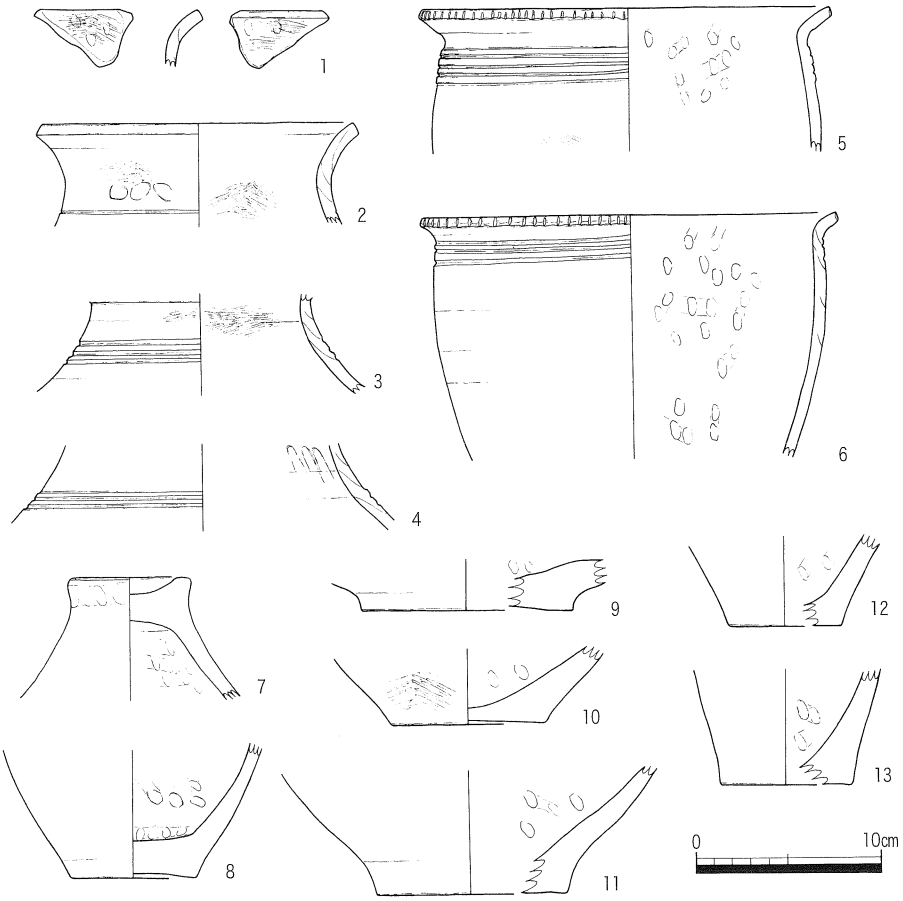


第28図　ＳＤ－Ａ１－03（Ａ１区）出土遺物

ＳＤ－Ａ２－06出土遺物

南側の内環濠からの出土資料であるがここでも土器量は多くはない。1は緩やかな外反をみせる壺口縁部片であるが，成形はやや粗く面をもった口縁端部は歪んだ箇所がみられ，器表面をヘラミガキ調整を部分的に施しているが指頭圧痕が残存している。2は緩やかに屈曲する口縁部をもった壺形土器であり，頸胴部境の内傾面に細く貧弱な篦描沈線を1条施紋しており，丁寧に土器を成形しているのが窺える。本資料は角閃石細粒を多量に含む特徴的な素地粘土を採用しており，これは石清尾山丘陵南端付近を粘土採取地とした「下川津Ｂ類」土器と称される土器群と共通した要素である。粘土採取地が本遺跡から南東約3㎞に位置していることから角閃石細粒を容易に入手することができ，意図的に混和材として採用したものと類推される。しかしながら生駒西麓産土器群や下川津Ｂ類土器のように一般的とはならず生駒西麓産土器群との胎動や影響関係を示す資料と評価することも考えられないこともないが，当然ながら実証は困難であり偶然の産物として現時点では評価したほうが妥当といえよう。同質の胎土を

有する土器は同遺構出土の6，ＳＤ－Ａ４－02の２の計３点となっている。3は壺形土器の頸胴部片であり，内傾する頸胴部境にはやや太い篦描沈線を３条施している。また口頸部境には不明瞭な段差が存在しており，器壁が薄いことやヘラミガキ調整で縁取りも実施していることから削り出しによる段か削出突帯を作出している可能性が高いといえる。4は3と同様に頸胴部境に篦描沈線を３条加えているが，最上位の沈線をヘラミガキ調整で沈み込ませ削り出しの段を作り出している壺形土器である。5は細かいハケ調整で成形しており，如意形口縁の下端に刻目を施している甕形土器である。篦描沈線を５条施した後に上・下位の沈線を沈み込ませ削出突帯＋３条沈線の構成になっているが，上部の削出部位をやや強いヨコナデ調整を加えているため段部を強調し，頸部の凹みがきつく仕上がっている。6は刻目を施した短い如意形口縁をもつ甕形土器で，頸胴部境には篦描沈線を３条施紋している。胎土は角閃石細粒を多量に含んだ素地粘土を採用している。7は甕用の蓋形土器であり，裾部が欠損していることから形態は不明であるが，天井部は上げ底となりしっかりとした摘み部を作り出している。8～11は壺形土器の底部片であり，12・13は甕形土器の底部片である。



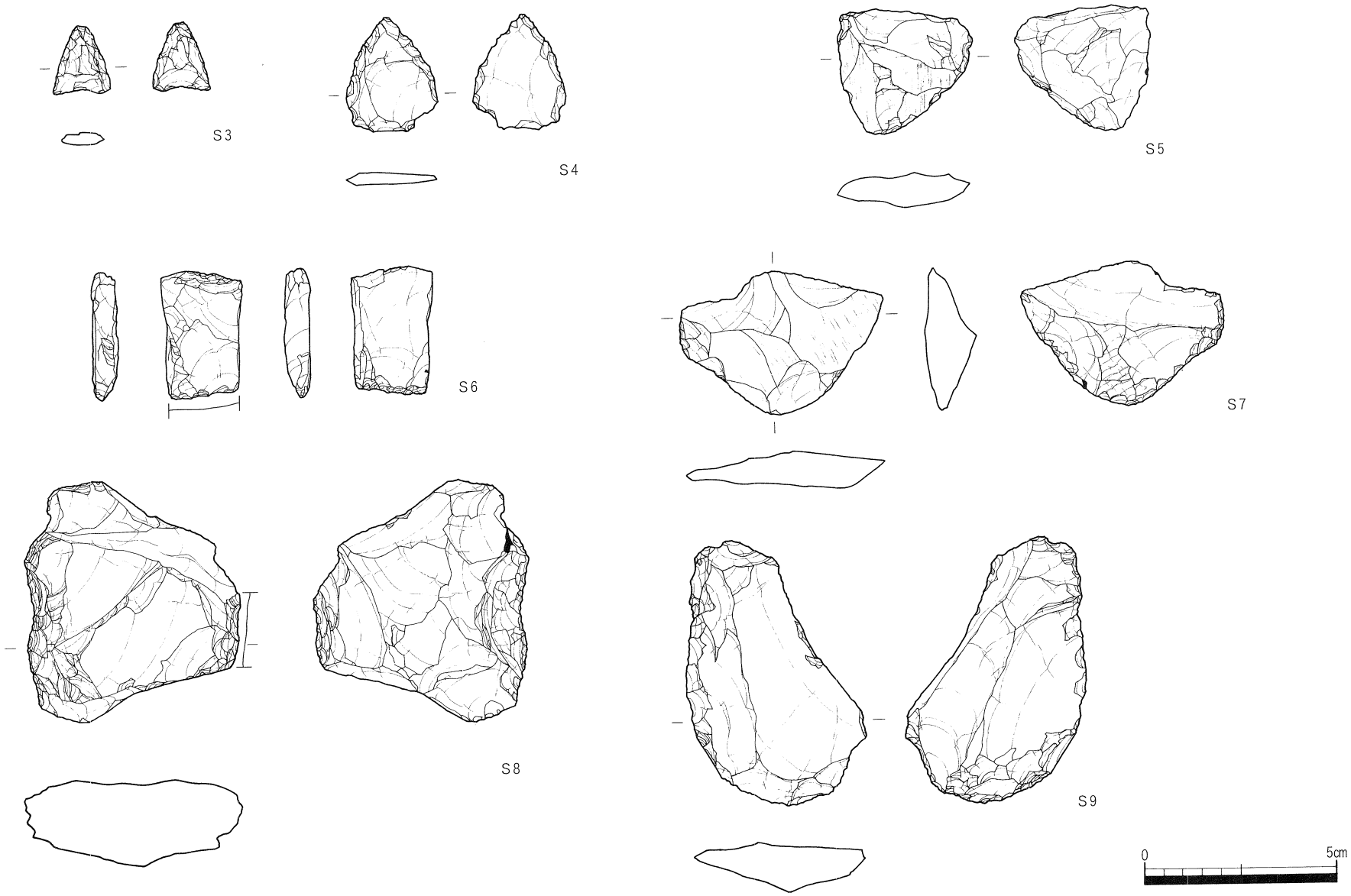
第29図　ＳＤ－Ａ２－06出土遺物

石器

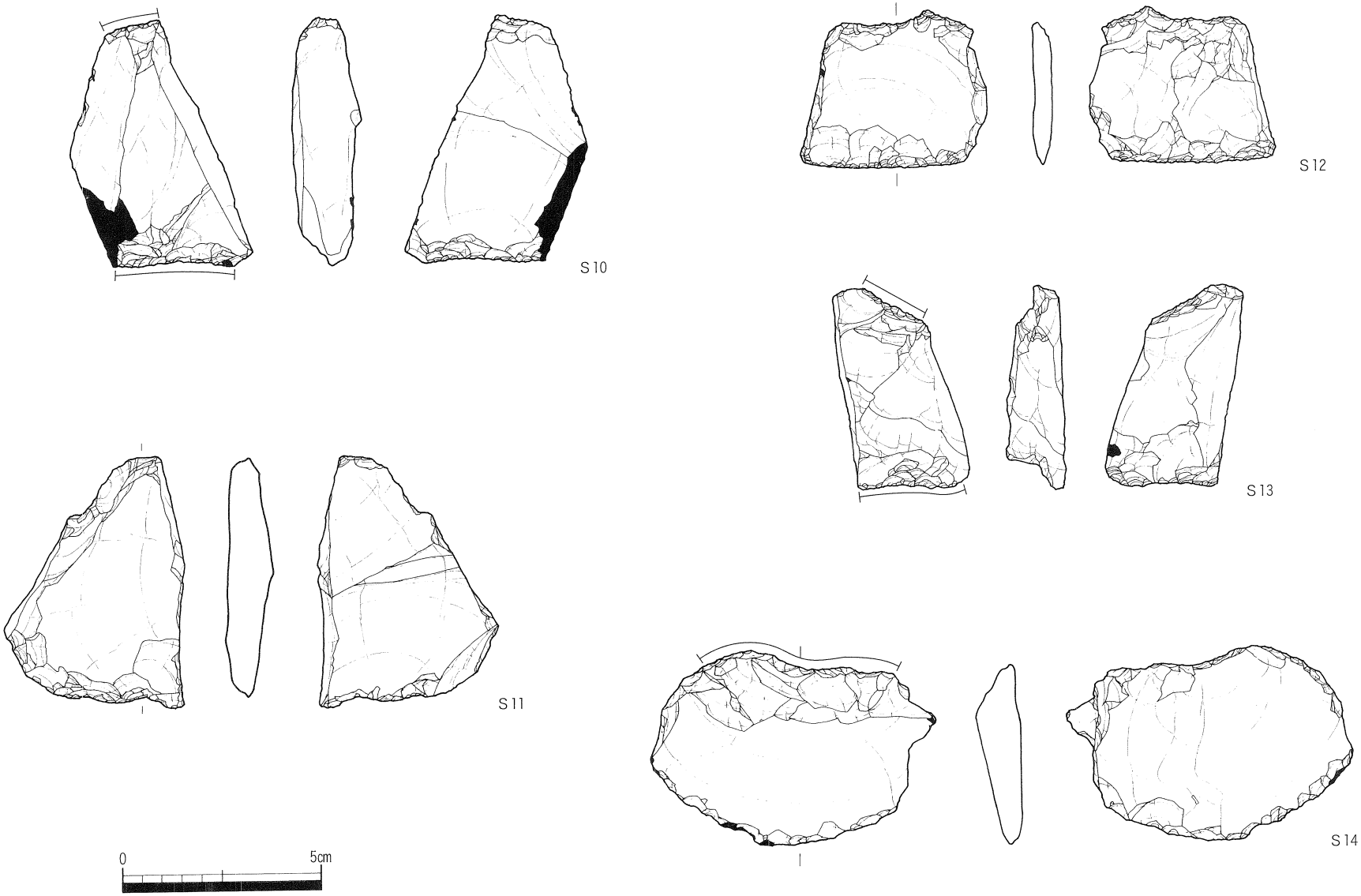
石器については環濠外，内及びＡ６区おいて環濠上部に堆積した弥生前期包含層出土別に掲載した。

外環濠出土石器（Ｓ３～16）

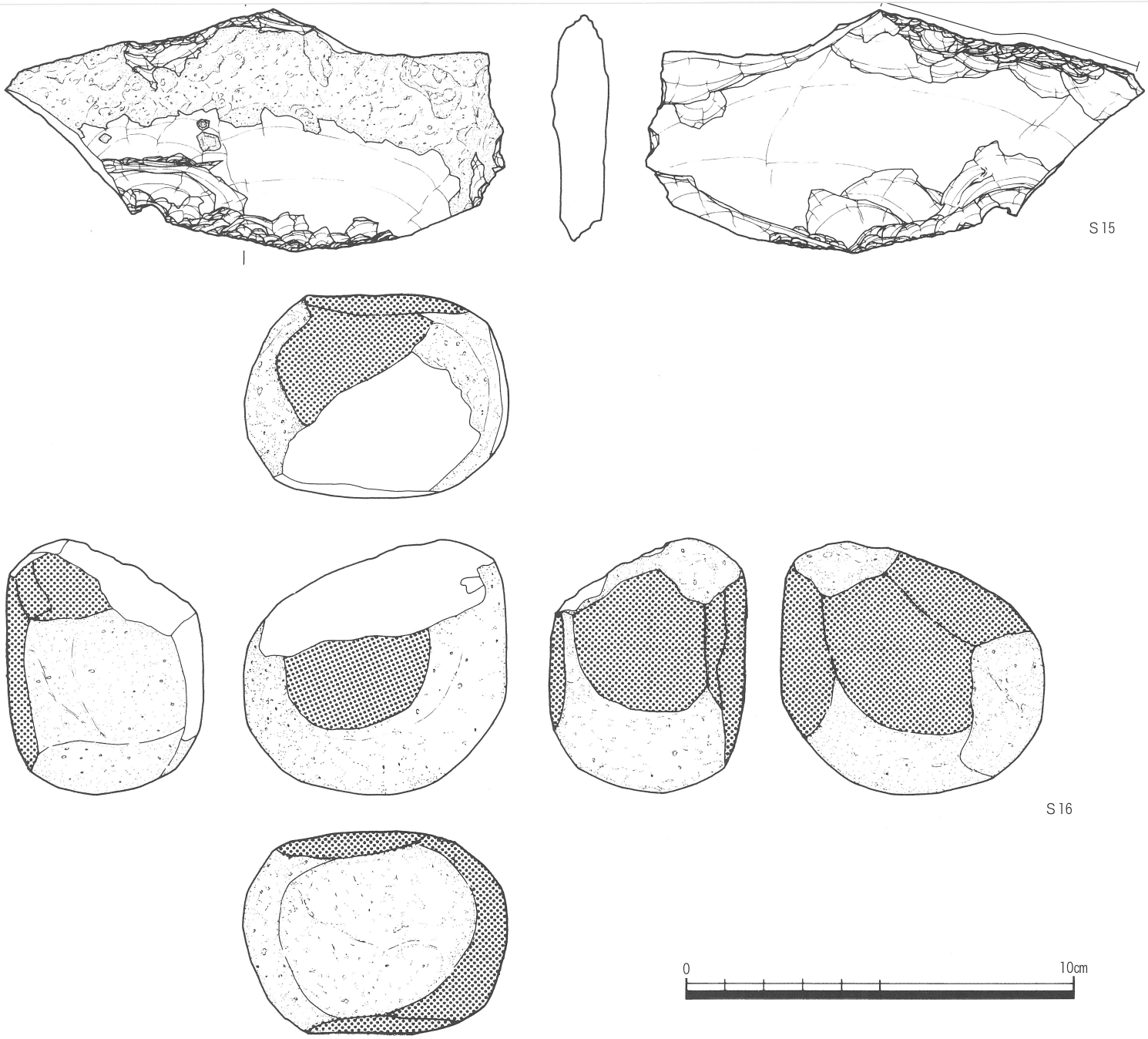
外環濠では土器片と同じくＡ５区（ＳＤ－Ａ５－05）で出土量が多く，環濠の東端部に比較的密集して埋没していたものと考えられる。Ｓ３は凹基式の石鏃。Ｓ４は石鏃の未製品。Ｓ５，７，８，９は打製石斧の欠損したもの。S5，7は摩滅・線状痕が顕著に認められ，先端部付近の破片に考えられる。S6，10，12，13は加工された上下の縁辺部に敲打痕及び階段状の剥離が認められることから楔形石器とした。S11，14，15はスクレイパーとしたが，S14は刃部が弧状，片方の側縁部が抉り状となるもので，



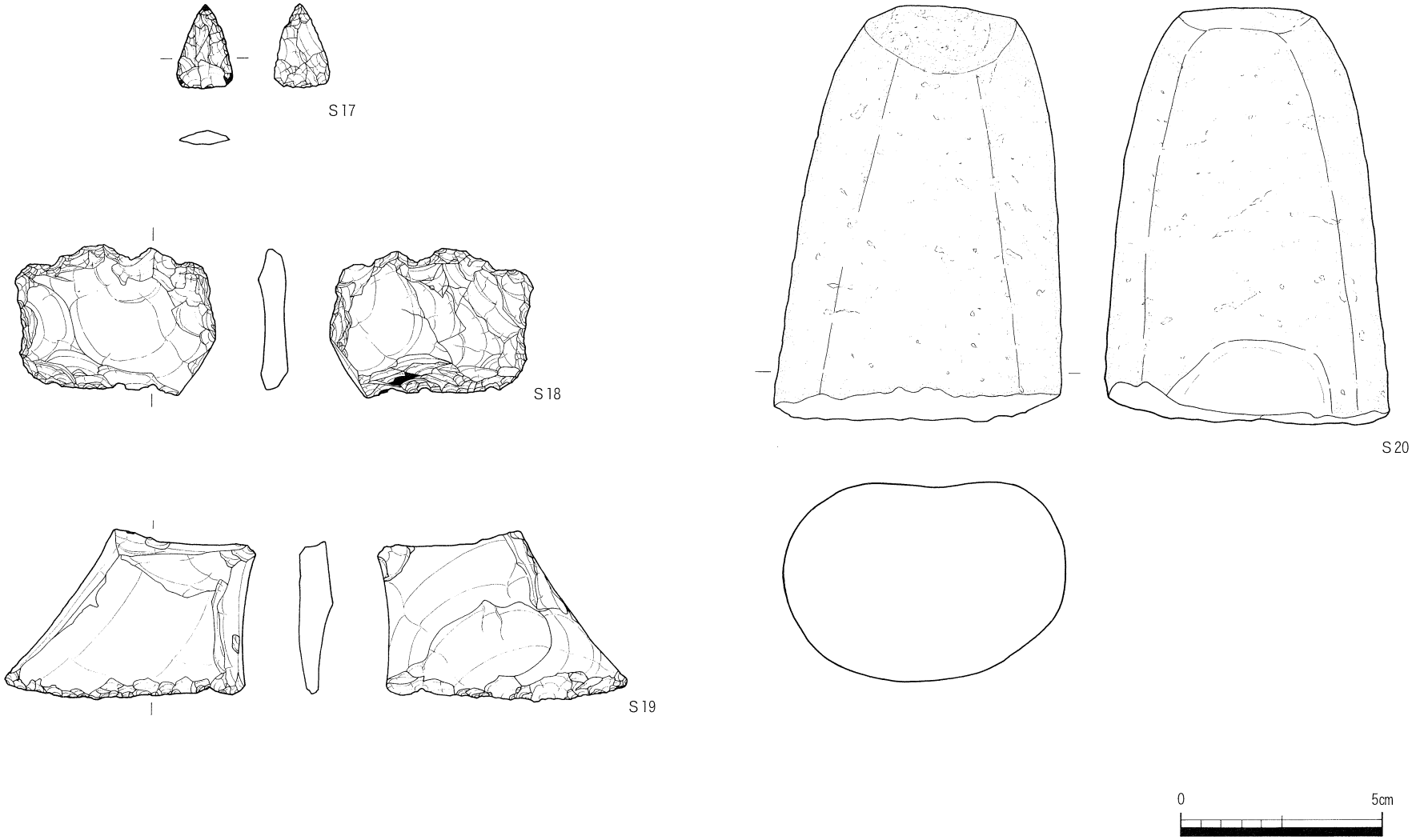
第30図　外環壕出土石器 1



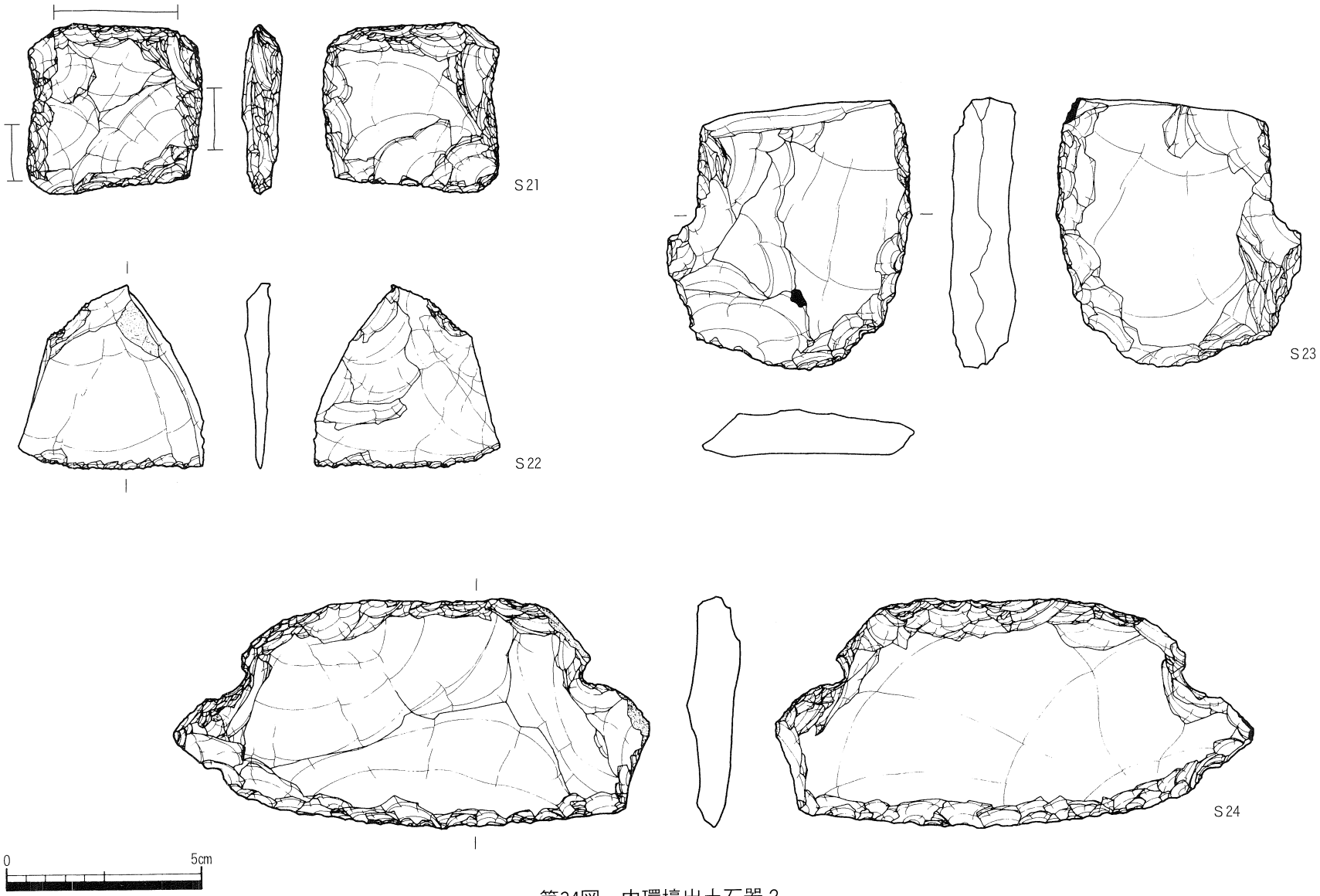
第31図　外環壕出土石器 2



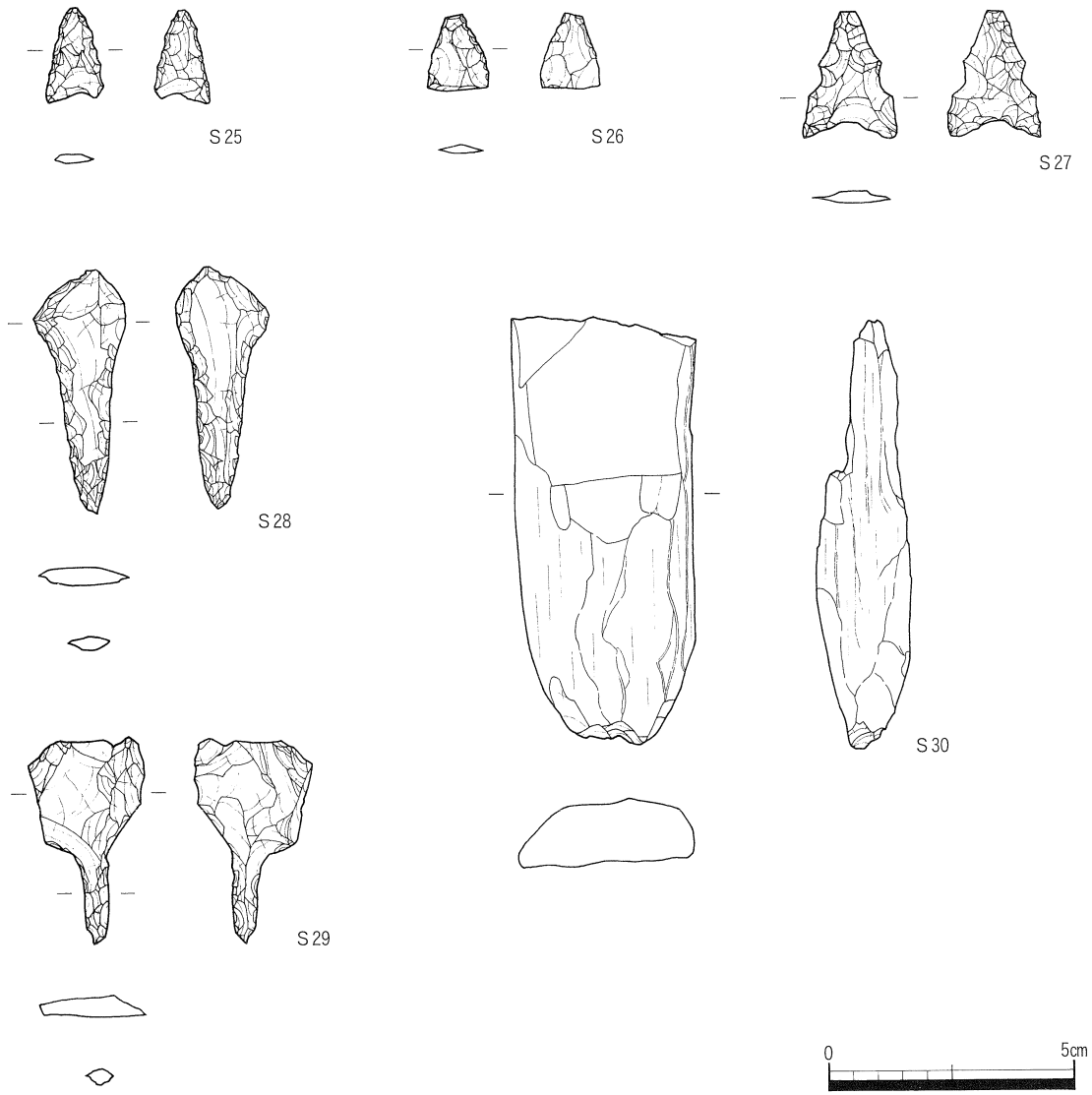
第32図　外環壕出土石器 3



第33図　内環壕出土石器 1



第34図　内環壕出土石器 2



第35図　Ａ６区包含層出土石器

上縁部の加工を背潰しと考えるなら小型の石庖丁に考えられよう。Ｓ15は背面に自然面を残すもので上縁部に敲打痕が見られ，刃部は両端が欠損しているが急角度に取り付けられている。Ｓ16の磨石は側部を除き摩耗が著しい。

内環濠出土石器（Ｓ17～Ｓ24）

内環濠についてはＳＤ－Ａ１－03（Ａ２区）及びＳＤ－Ａ１－06で出土しているが，調査範囲からすれば密集して埋没していたと考えられる。Ｓ17は石鏃。Ｓ18，19，22は下縁部の加工が刃部に相当するものでスクレイパーとした。Ｓ20は大型石斧の基部である。石材は砂岩で，中央部には大きな窪みが見られる。Ｓ21は楔形石器。Ｓ23は打製石斧の基部若しくは先端部と考えられる。Ｓ24は打製の石庖丁で，両側縁に抉りが作り出されたもの。

Ａ６区包含層出土石器（Ｓ25～30）

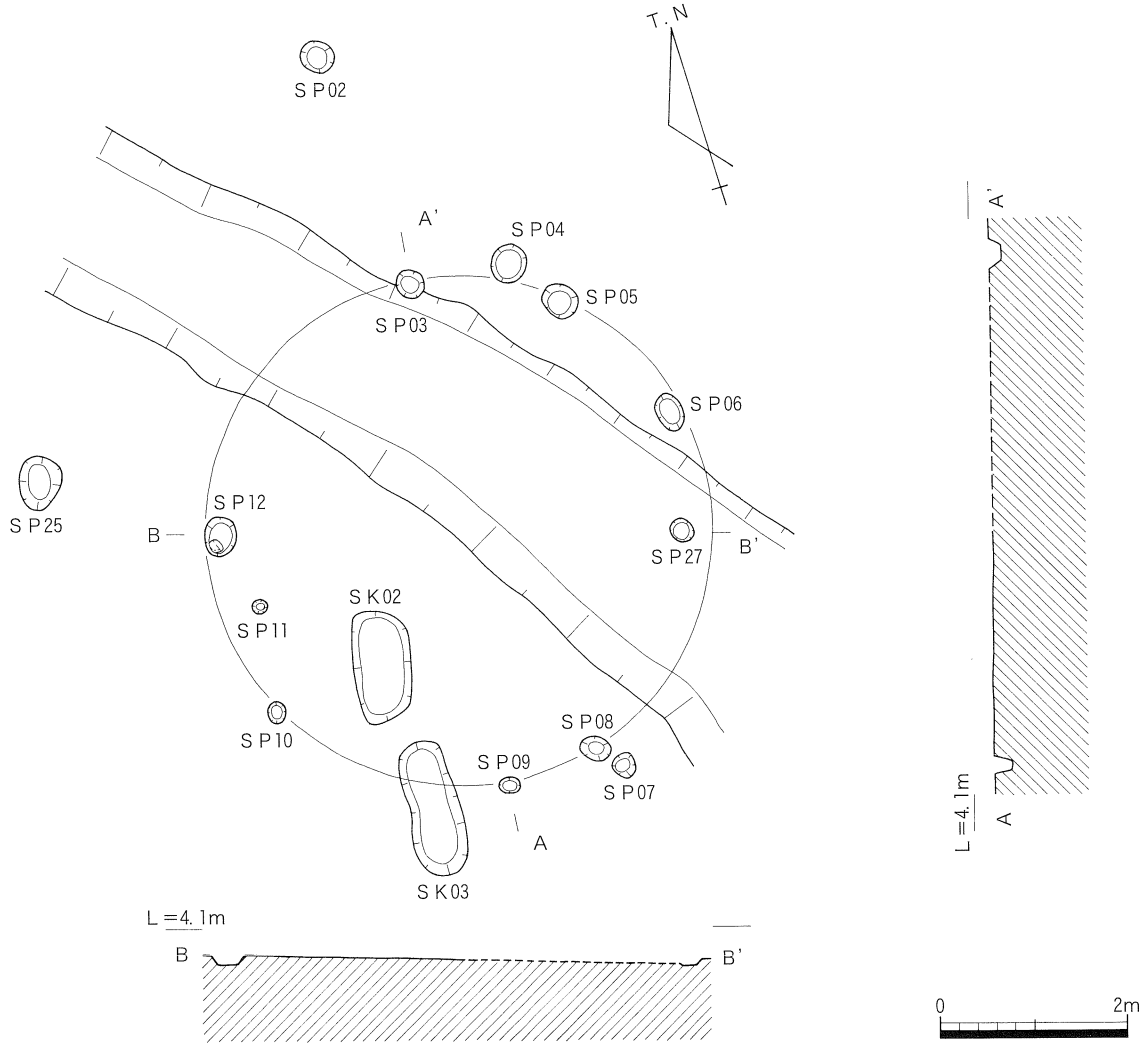
先述の様にＡ６区の環濠上部堆積層より出土したものである。Ｓ25，27は凹基式の石鏃で，Ｓ27の両側縁には抉りが見られる。Ｓ26は片側縁部が未加工の石鏃。Ｓ28，29は石錘で，頭部が欠損している。Ｓ30は結晶片岩のもので，石目に沿い剥がれたもの。柱状をなす石斧の基部若しくは刃部に考えられ，側部には平坦面となる抉り部が見られる。

住居址及び建物跡

以下は，環濠内部及び周辺部で確認されたものである。全体に削平を多く受けたものと考えられ，構造の復原にあたっては不明な点や推定が多く含まれる。また出土した遺物も僅かで時期の特定できるものではないが，当調査地で確認できた遺構，遺物の状況から当時期に所属するものと考える。

ＳＨ－Ａ１－01

Ａ１区の南東部で検出した竪穴住居である。柱穴及び土坑のみで壁面は検出していない。柱穴は円形または楕円形を呈し，長軸方向で16～40㎝を測る。埋土は概ね灰白色土単層だが，底部に褐灰色土が堆積するものもあった。柱穴は直径5.4～5.5mの円周上に８本並び，0.3m程外れたものも含めると11本が認められる。ＳＰ07，08及びＳＰ04，05は近接しているため建替え時のものにも考えられ，片方を除くと柱穴間の距離は１m前後のものと2.5m前後のものに大別できる。また，ＳＰ03とＳＰ12の間に消滅した柱穴を１本想定でき，計10本程度の支柱が考えられる。また，柱穴と同埋土の土坑２基を検出している。ＳＫ03は，竪穴の壁が主柱より１m程度外側に存在していたとすれば，当住居址に伴うものと考えられる。出土遺物はＳＫ02よりサヌカイト片と土器片が出土しているが，時期の特定できるものではな

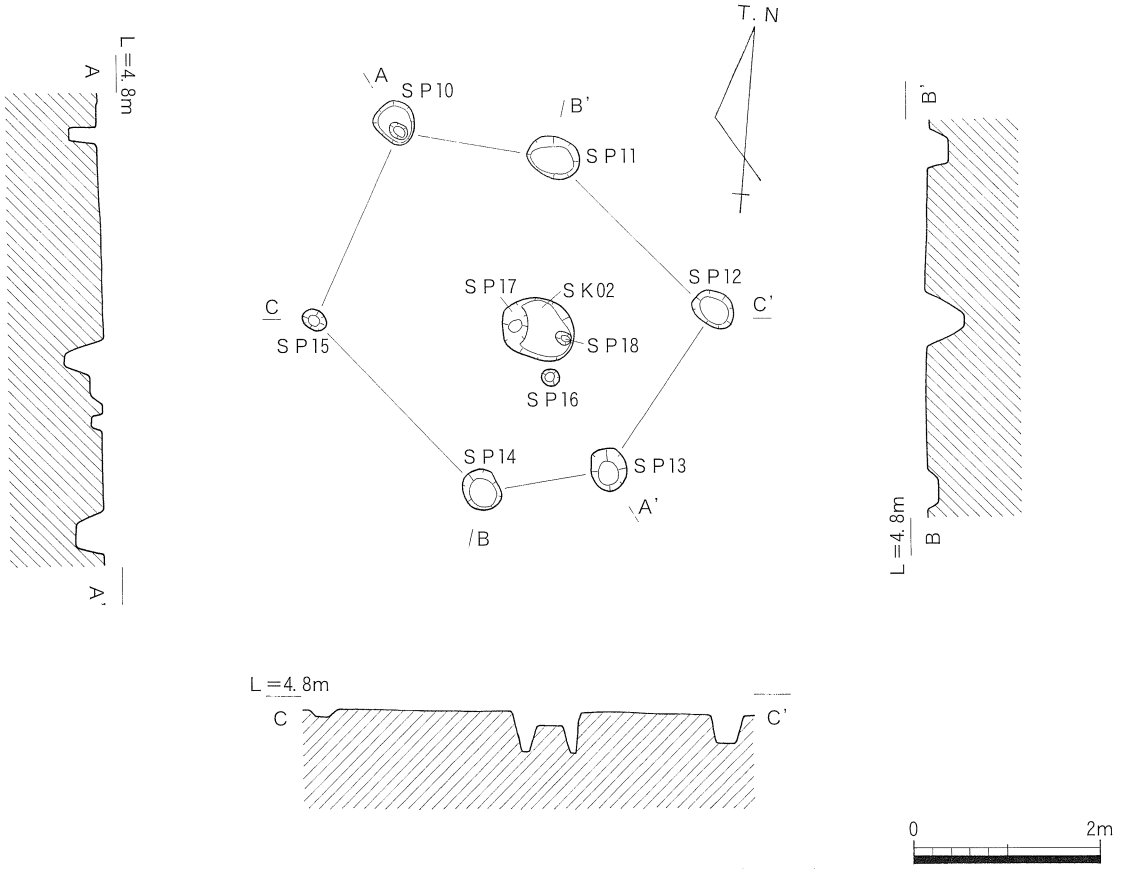


第36図　ＳＨ－Ａ１－01平・断面図（１/80）

い。一応，周辺で確認される遺構，遺物から当該所属のものとしたがＳＤ－Ａ１－02との切り合い関係が不明瞭であり，また環濠集落との関連も不明である。

ＳＨ－Ａ２－01

Ａ２区の北東部で検出した竪穴住居である。竪穴の壁面は検出されず，削平を受けてた可能性が考えられる。柱穴及び土坑の埋土はすべて褐灰色土の単層である。周囲に配置された柱穴は６本で，掘り方が円形または楕円形を呈するもので，長軸方向で25～58cmを測る。柱穴の間隔は，ＳＰ11－12間とＳＰ14－15間で2.3～2.5mに対し，他の４辺は1.4～2.2mと狭くなっていることから，ＳＰ10，13が棟持柱とも考えられる。中央部にあるＳＫ02は，内部に長軸方向でＳＰ17，18が検出され，松菊里型と呼ばれるものに似た構造をする。あるいはＳＫ02に近接するＳＰ16が，Ａ－Ａ'ラインでＳＰ10－17－16－13と直線上に並ぶことからＳＰ17とともに中央の支柱であるとも考えられる。遺物はＳＰ13から出土した須恵器底部１点のみだが，混入品と考える。

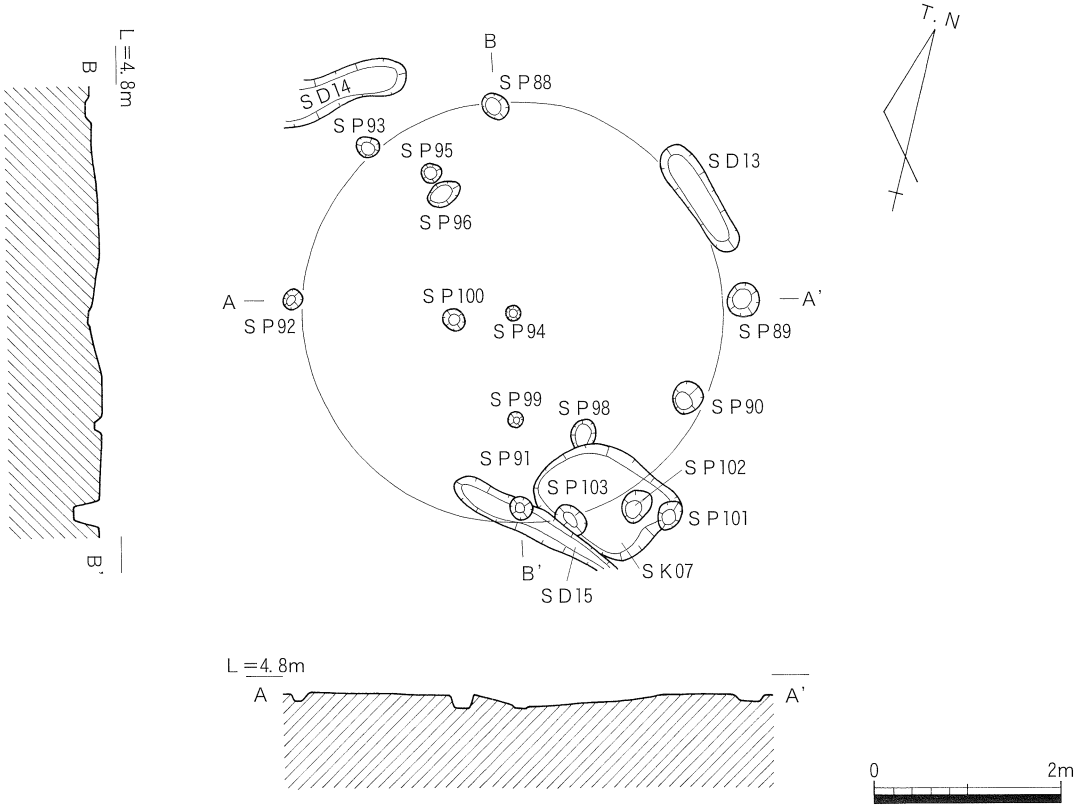


第37図　ＳＨ－Ａ２－01平・断面図（１/80）

ＳＨ－Ａ２－02

Ａ２区の中央部で検出した竪穴住居である。竪穴の壁面は検出されず，削平を受けているものと考えられる。柱穴は円形または楕円形を呈するもので，長軸方向で17～36cmを測る。柱穴の埋土は，すべて褐灰色シルト質極細砂である。この内，直径4.5m前後の円周上には，6本の柱穴が並ぶ。柱穴間の配置からすれば，ＳＰ88－89及びＳＰ91－92の間に各１個の柱穴があったものと考えられ，計８本の支柱が想定できる。中央部のＳＰ94，99，100はＡ－Ａ'，Ｂ－Ｂ'のライン上に並ぶ。また周囲１ｍ程に壁穴と同じ埋土のＳＤ13，14及びＳＫ07が位置しており，壁溝等としてこの住居址に伴うものと推定される。

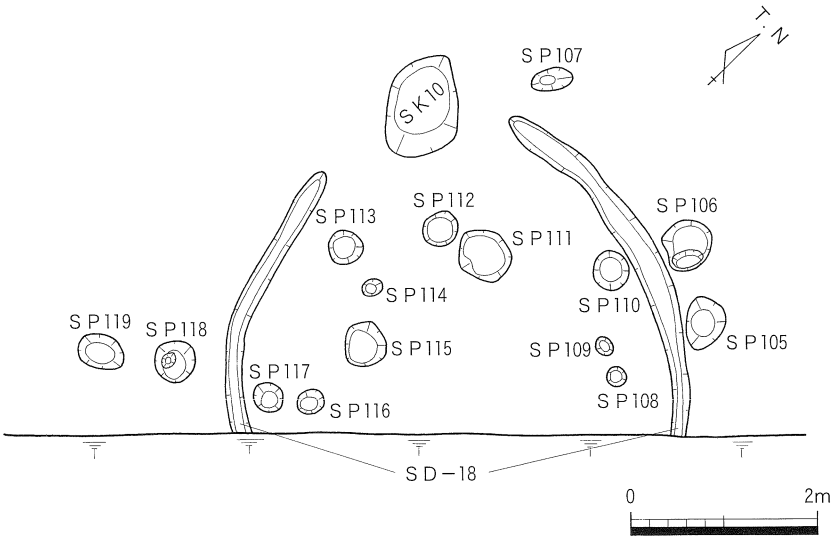
遺物はＳＰ90，ＳＫ07で弥生時代前期と見られる土器細片が数点出土したのみである。



第38図　ＳＨ－Ａ２－02平・断面図（１/80）

ＳＨ－Ａ２－03

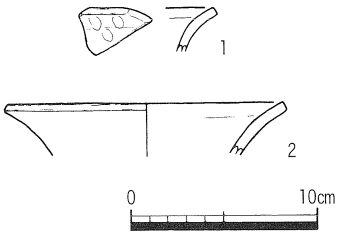
Ａ２区の西部で検出した竪穴住居である。ＳＤ18は，径約4.5m程の円または楕円形状をしており，壁溝と考えられる。断面はＵ字形で，埋土は褐灰色シルト質極細砂の単層である。概ね深さ５cmほどが残存しているが，西部において２m程の区間が途切れ，ＳＫ10が掘削されている。ＳＫ10は長径１m，短径0.7m，深さ24cmを測り，褐灰色シルト質極細砂が堆積するもので弥生時代前期と見られる土器片及びサヌカイト片が数点出土している。周溝の内部及び周囲において柱穴を検出したが，ＳＰ113，118等には中世の遺物が含まれ，また埋土がＳＤ18とは異なるものがあるため，建物の構造を推定できない。



第39図　ＳＨ－Ａ２－03平面図（１/80）

ＳＤ－Ａ２－18出土遺物

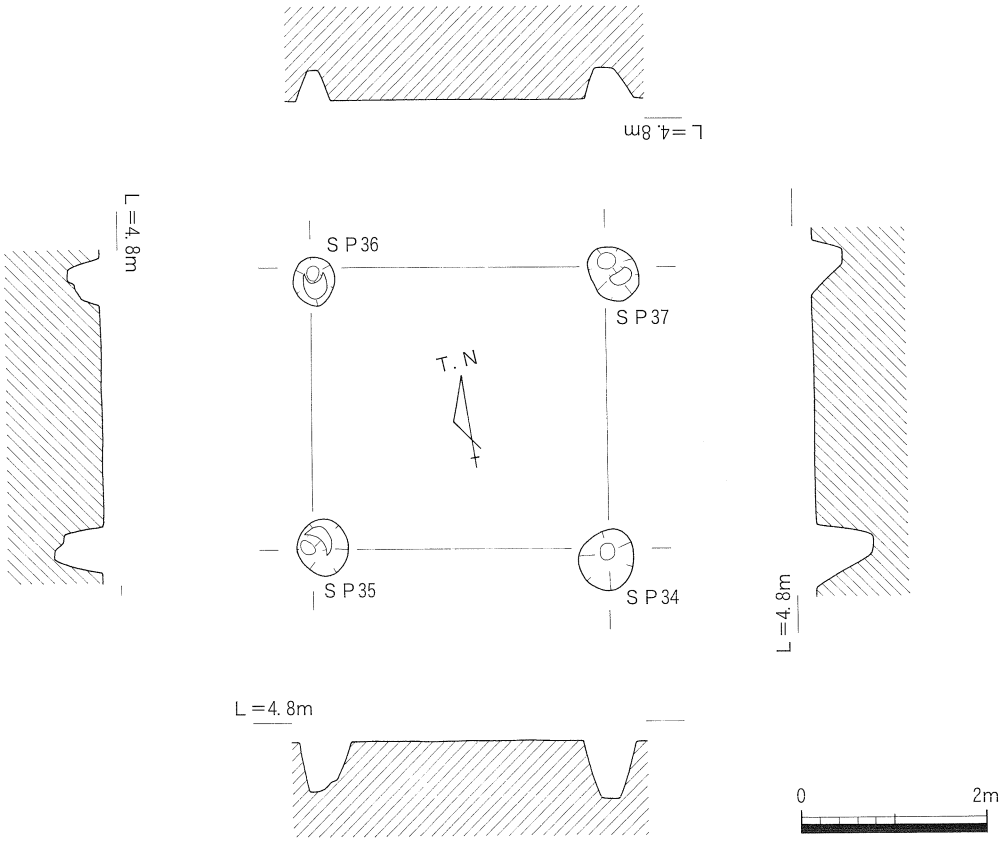
竪穴住居に伴う壁溝と考えられる弧状に巡る溝内から出土した土器片である。１は甕形土器であり，器壁が薄く口縁部を折り曲げて如意形を作出する際の指頭圧痕が残されており，比較的成形が粗いのが看取される。また口縁部先端は先細り気味ではあるが刻目を加えてはいない。２は緩やかな外反を呈している壺口縁部片である。口縁部内・外面にヨコナデ調整を加え先端部が外方に屈曲しているが，全面的に粗い作りで丸い口縁端部は丁寧なヨコナデ調整を施していないためか歪みをみせている。



第40図　ＳＤ－Ａ２－18出土遺物

ＳＢ－Ａ２－01

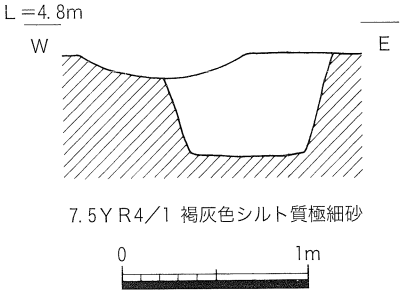
Ａ２区の中央部で検出した掘立柱建物である。柱穴間の距離が南北３ｍ，東西3.1ｍとほぼ正方形をなす。１×１間となり床面積は少ないが，柱穴は掘り方で長径0.6ｍ，深さ38～64㎝とＡ２区で他の柱穴と比べ規模が大きく，高層の建造物が推定される。遺物は，ＳＰ37で土器片等が数点出土しているが，時期特定の特定できるものはない。所属の時期は，ほぼ条里方向に合致するため古代～中世の所産にも考えられるが，環濠内部においてほぼ中心地点に位置することまた柱穴に堆積する埋土の特徴から，環濠集落に伴なうものとした。



第41図　ＳＢ－Ａ２－01平・断面図（1/80）

ＳＫ－Ａ２－03

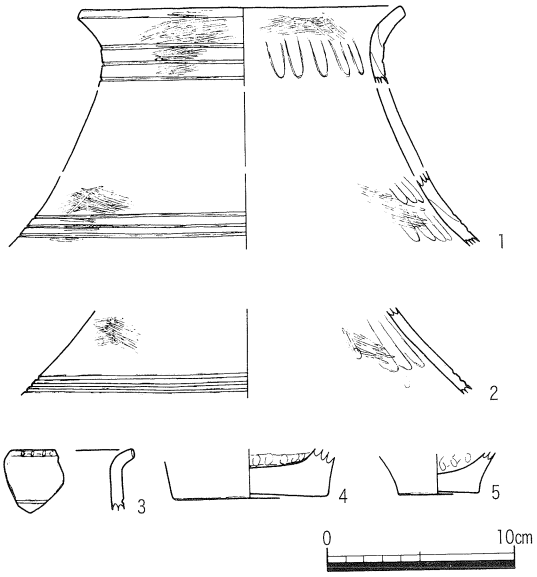
Ａ２区中央部で検出した土坑である。平面形状は楕円形で長軸方向に約1.44m，短軸方向に約0.9mを測る。深さは約0.51mである。断面は逆台形をし，埋土は褐灰色（7.5YR 4／1）シルト質極細砂の単層である。切り合い関係でＳＤ－Ａ１－01に先行する。遺物は弥生土器が比較的まとまって出土している。



第42図　ＳＫ－Ａ２－03断面図

ＳＫ－Ａ２－03出土遺物

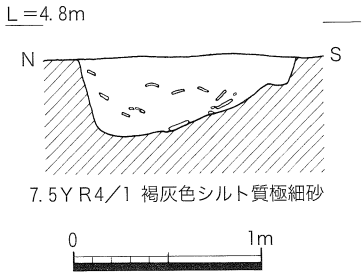
比較的土器量が多くみられるＳＫ－Ａ２－05に近接した土坑であるが，土器量は少量である。1は張った胴部から頸胴部境が不明瞭となった部位に３条の篦描沈線を施紋しており，この施紋帯を変換点に内傾しながら上方に伸びる頸部はあまり窄まりをみせず，緩やかに外方へ折れ曲がった口縁部を持ち合わせている。口頸部境には頸胴部境と同様の幅太でしっかりとした篦描沈線を内傾面への施紋ではなく，口縁部を含めた沈線間隔の広い施紋帯を構成している。また篦描沈線の施紋はヘラミガキ調整後に実施されている。2は胴部の張りが強い壺形土器であり頸胴部境にはヘラミガキ調整後の篦描沈線が３条みられるが，観察すると半截竹管紋＋篦描沈線の可能性が高いといえる。しかし沈線紋帯下位が剥落していることから考えると，半截竹管紋＋半截竹管紋も十分に想定される。器壁の薄い壺形土器ではあるが，精緻な成形や仕上げ調整を実施していることが分かる。3は屈曲点をかなり上方に位置するよう口縁部先端を折り曲げた刻目のある如意形口縁甕である。また頸胴部には断面Ｖ字のしっかりとした篦描沈線を１＋α条施している。4は甕底部片であり，5は小形の壺底部片である。



第43図　ＳＫ－Ａ２－03出土遺物

ＳＫ－Ａ２－05

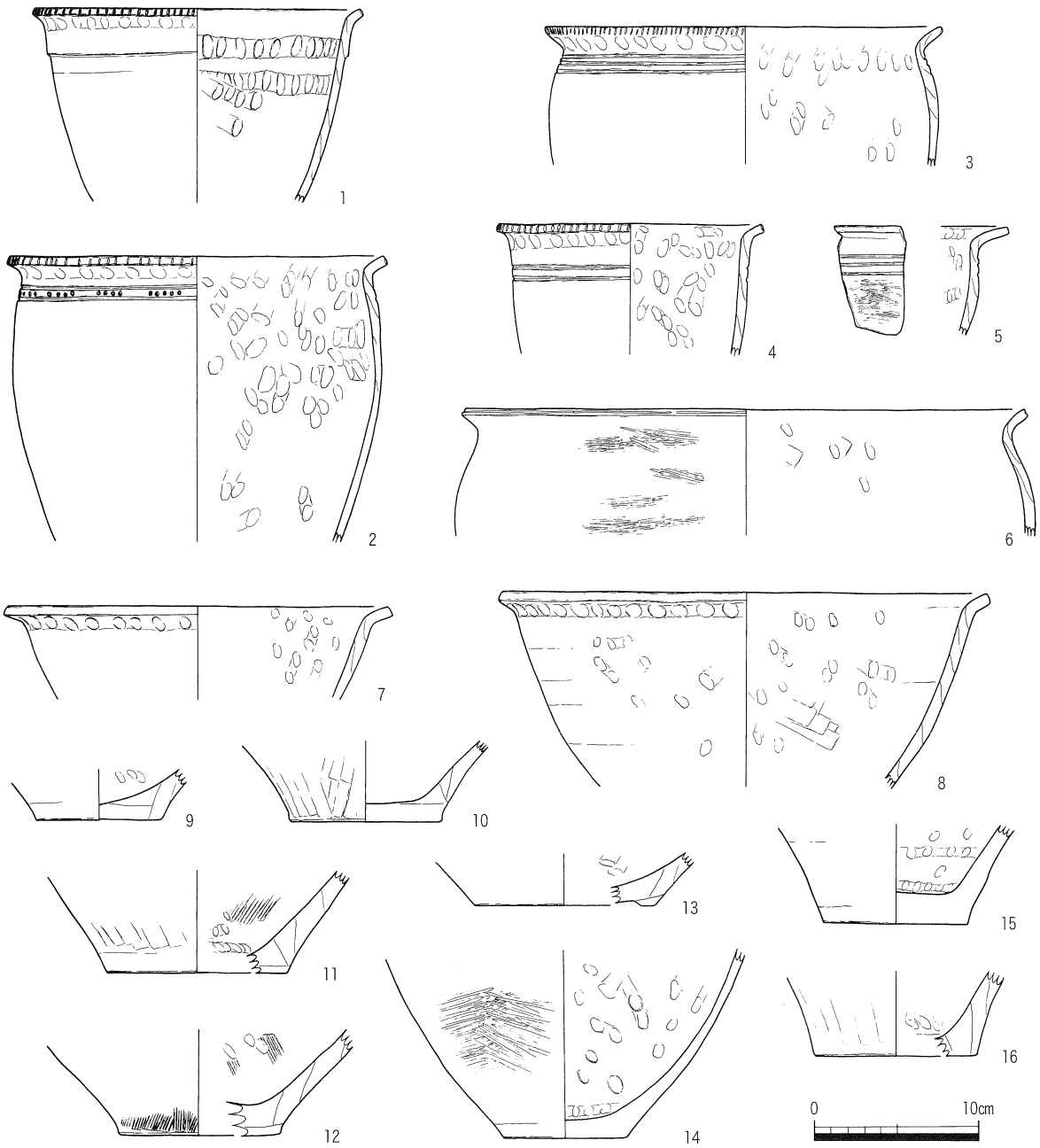
Ａ２区中央部で検出した土坑である。後出のＳＤ－Ａ２－02により分断され，検出された。平面形状は楕円形で長軸方向に約2.25m，短軸方向に約1.16mを測る。深さは約0.49mである。断面は逆台形をし，埋土は褐灰色（7.5YR 4／1）シルト質極細砂の単層である。遺物は弥生土器及び石器がまとまって出土している。いずれも破損した破片が埋土に混じって出土しており，これらを破棄した土坑に考えられる。



第44図　ＳＫ－Ａ２－05断面図

ＳＫ－Ａ２－05出土遺物

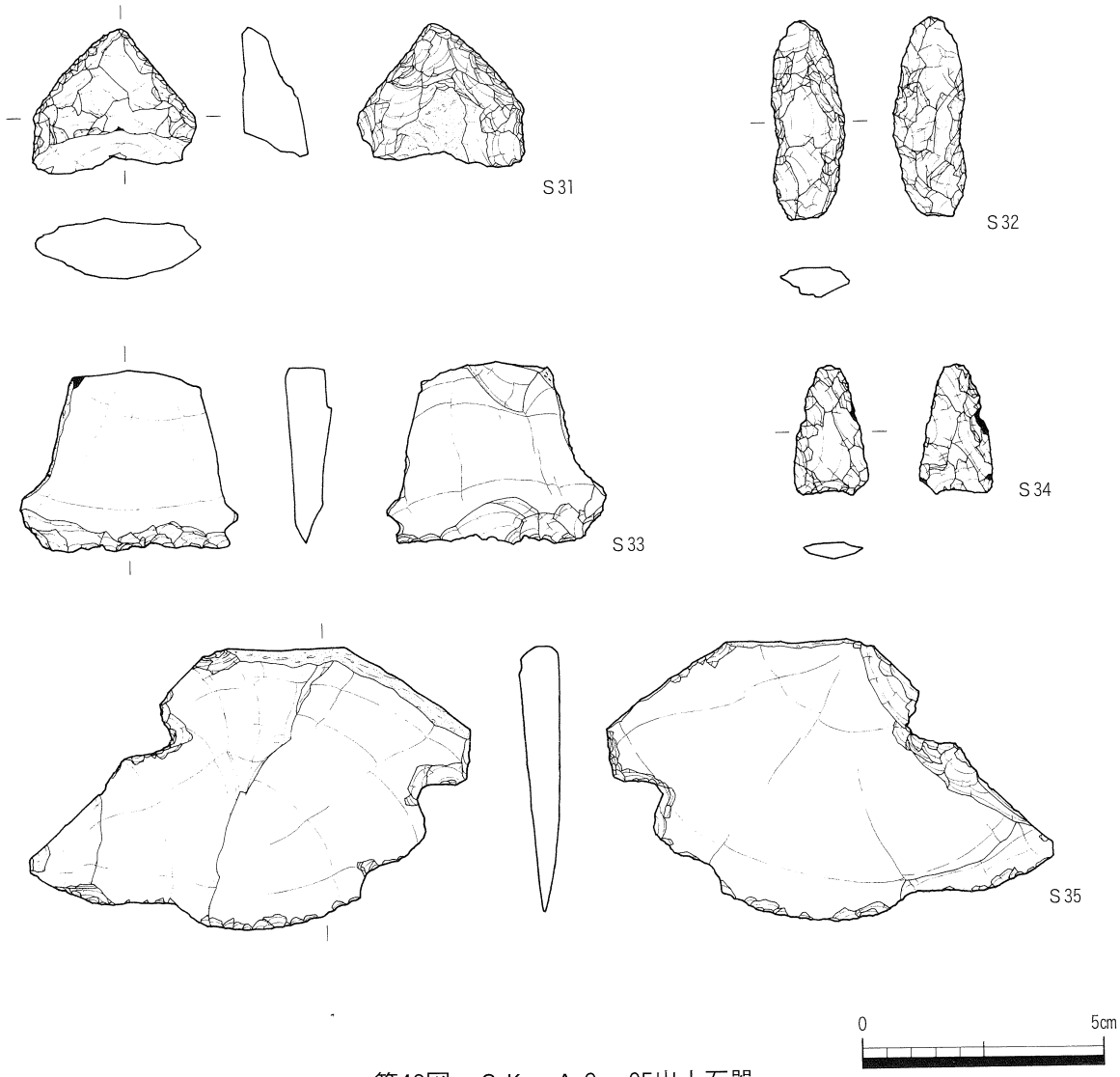
環濠内居住域中央部に位置する中世条里溝で切られているやや大形の同一土坑資料であり，比較的土器量が豊富で良好な土器群といえる。1は甕形土器であり，胴下部から口縁部にむけて外方へ開いた胴



第45図　ＳＫ－Ａ２－05出土遺物

部最大径をもたない形態を保持している。頸胴部境には粘土帯接合による段部を成形しており，その際の成形技法として内面には強いヨコナデ状の指頭圧痕が残されており，粘土帯接着を強固に行ったのが窺える。また段下部をヨコナデ調整で仕上げている。如意形口縁には端部全面に板状工具があたるようしっかりとした刻目を配しており，器表面を丁寧なナデ調整で成形及び仕上げを実施している。2はやや胴部が張り短く屈曲した如意形口縁をもつ甕形土器である。全面を丁寧なナデ調整で成形しており，内面には指頭圧痕が残存している。頸胴部境に２条の篦描沈線を巡らし，沈線紋間には竹管刺突による列点紋を４～５個を１セットとして各々間隔を空けて等間隔に配列している。また口縁端部には刻目を配している。3はやや胴張りの胴部から頸部で窄まりをみせ，緩やかに外反して口縁部先端を尖らせた如意形口縁甕である。口縁下端部に細くて縦長の刻目を施しており，頸胴部境には一度に巡らしたような精緻な３条の篦描沈線を施紋している。4はやや小形の甕形土器であり，ナデ調整によって比較的丁

寧に成形しているが口縁部が若干歪んでいる。また板状工具で口縁端部を刻んでおり，頸胴部境には2条のしっかりとした篦描沈線を巡らしている。5は口縁部が強い屈曲をみせる鉢形土器であり，口縁端部は無刻であるが頸胴部境には3条の篦描沈線を巡らしている。また細かいヘラミガキ調整で外面を精緻に仕上げている。6は大形の鉢形土器であり口縁端部には篦描沈線を1条施してはいるが，部分的に途切れた箇所が存在しており継ぎ足しながら施紋しているのも看取できる。外面をヘラミガキ調整で仕上げているにもかかわらず頸胴部境には篦描沈線などの施紋帯を採用していない。7はナデ調整で成形した鉢形土器であり，刻目や篦描沈線をみせないことから成形も粗く仕上がっている。8は7と同様にハケ調整やナデ調整で成形しており，調整痕を器表面において随所に留めている。やはりここでも無紋に仕上がっているため，成形の粗い製品は無紋に仕上げるよう取り計られていると考えられる。9～14は壺形土器の底部片であり内・外面を板ナデ調整やハケ調整で立ち上げながら成形しているものや，ヘラミガキ調整で仕上げているものも存在する。また粘土円盤の上面に積み上げているものや側面から接合しているものの二者があり，さらには底に粘土円盤を貼り足して安定性を向上させたものや粘土紐を高台状に巡らしてやや上げ底に仕上げているものも確認できる。底部成形技法にはバリエーションが存在していると考えられる。15・16は甕形土器の底部片であり，ナデ調整で成形している。



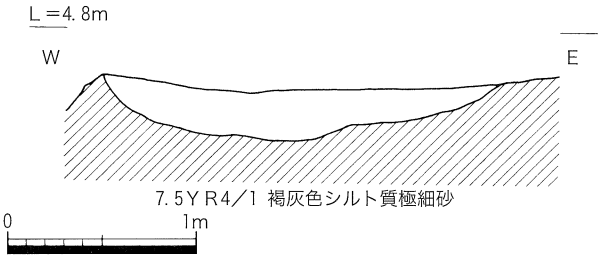
第46図　ＳＫ－Ａ２－05出土石器

ＳＫ－Ａ２－05出土石器

Ｓ31は石槍の先端部。先端部に見られる加工は潰れており基部は欠損しているが，側部はほぼ平行をなすものに考えられる。Ｓ32は尖基式の石鏃。基部に摩滅痕が見られまた基端部は薄く作り出されているが，先端部は欠損しているためか，綿密な加工は見られない。Ｓ33はスクレイパーで，片方の側縁は自然面である。Ｓ34は凹基式の石鏃。Ｓ35はやや歪な両側縁に抉りを持つ石庖丁で，上縁部は自然面，刃部は弧状になるもの。刃部には使用痕と考えられる微細な剥離が，腹面には縞状の光沢が見られる。背面側には抉りの取り付け時と考えられる刃部を歪にした剥離痕が残っている。

ＳＫ－Ａ２－08

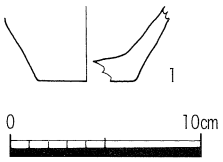
Ａ２区南部で検出した土坑である。平面形状は楕円形で長軸方向に約2.26m，短軸方向に約0.92mを測る。深さは約0.49mである。断面は船底形をし，埋土は褐灰色（7.5YR 4／1）シルト質極細砂の単層である。遺物には弥生土器，サヌカイト片が見られた。



第47図　ＳＫ－Ａ２－08断面図

ＳＫ－Ａ２－08出土遺物

竪穴住居（ＳＨ－Ａ２－03）に隣接する土坑内資料であるが，１の平底を呈している甕底部片である土器片１点のみの出土となっている。



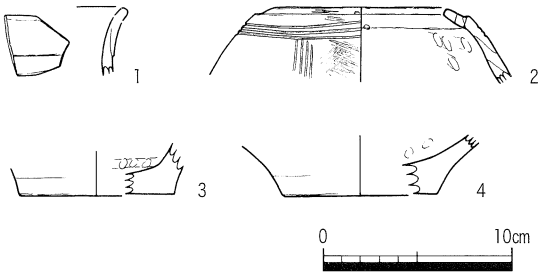
第48図　ＳＫ－Ａ２－08出土遺物

ＳＰ－Ａ２－07

Ａ２区北端部で検出された。ピットとしたが，平面形状及び大きさからすれば土坑と考えられる。未検出部分があるが，平面形状は楕円形で長軸方向に約0.8m，短軸方向に約0.63mを測る。深さは約0.27mである。埋土は褐灰色（7.5YR 4／1）シルト質極細砂の単層である。遺物には弥生土器，サヌカイト片が見られた。

ＳＰ－Ａ２－07出土遺物

環濠内部の居住空間に存在するピット内出土の資料であり土器小片のみの確認ではあるが，興味深い資料が含まれている。１は壺口縁部片で粘土帯接合時に生じた段を区画紋様として採用している。段の上部をヨコナデ調整により口縁部を仕上げているが，段部が突出するような強いヨコナデ調整ではなく口縁部を外反させる程度であり，段差を強調せずに低く貧弱に仕上がっている。２は無頸壺であり胴部が強く張る形態と考えられ，壺形土器を成形する際の粘土帯積み上げを中断し，停止に換えることで誕生した分割成形による産物と解せる。また外傾接合で積み上げていた擬口縁に粘土紐を内傾接合で貼り足すことによって段を作り出しており，さらにはヘラミガキ調整で段部を沈み込ませて強調している。無頸壺は紐穴を伴うのが一般的であり本資料も例外ではなく，段部に穿孔しているのが確認できる。こうした穿孔事例を考えると，区画紋様としての段は本資料の場合に



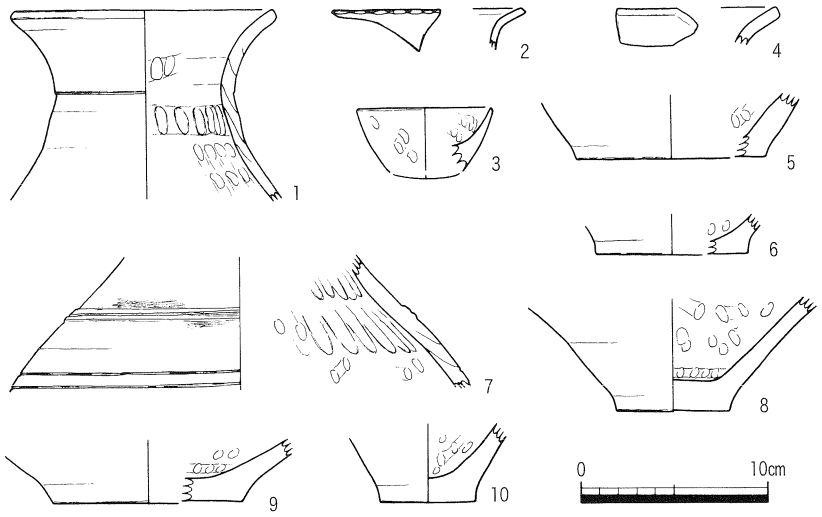
第49図　ＳＰ－Ａ２－07出土遺物

は蓋形土器の蓋受けとしての機能的役割に転化していると考えられる。また稚拙な篦描沈線を３条加えた下段には縦方向に４条ほどの細くて浅い痕跡的に残存する篦描沈線を描いている。３・４は壺形土器の底部片である。

Ａ区遺構出土遺物

以下はＡ区で検出された遺構より出土したもので，混入品として考えられるものを一括した。

１は口縁部から頸胴部にかけての壺形土器である。頸胴部から緩やかに内傾しながら段下位で僅かに立ち上がり，段を作出している窄まった頸部を変換点に外反しながら伸びる口縁部をもった器形を呈している。頸部の一番の窄まりをみせる部位には板状工具で削り出しによる段を表現しているが，削り出しが弱く狭い領域にしか施されていないため不明瞭で貧弱な段に仕上がっている。内・外面とも器面が荒れてはいるが丁寧なナデ調整によって成形した製品であると看取できる。本資料はＡ１～Ａ３区の環濠からの出土品としての記録しか残されておらず，詳細な出土地点は不明のため内環濠か外環濠かは現時点では定かではない。しかしながら環濠内出土資料として十分に検討材料に成りうるであろう。２・３・７～10は中世条里溝への混入資料である。ＳＤ－Ａ３－02出土の２は緩やかな外反を示す器厚の薄い甕口縁部片であり，口縁端部にはやや幅広の刻目を施している。刻目は篦状工具により押しあてるのではなく削り取った可能性が強い。３はＳＤ－Ａ３－05の混入資料である手捏ねで成形したミニチュアの鉢であり，比較的精緻に成形しているため器面の歪みや凹凸は少ない。４～６はＳＤ－Ａ６－02の出土品であり，この土器片３点がＳＤ－Ａ６－01への混入品として看取できる。４は口縁部が短く，やや外反の強い形態をもつ壺口縁部片である。口縁端部を明瞭な面を持たせずにやや丸く仕上げ，その内面にはヨコナデ調整を加えることにより屈曲点を作り出し，そのため口縁部先端は更に折れ曲がった器形を呈している。５・６は壺底部片であり，両者とも平底の形態をもつ。７～10はＳＤ－Ａ２－04への混入品である。７は壺頸胴部片であり，ヘラミガキ調整前の削出突帯を作出しており突帯上には１条の篦描沈線を施紋している。篦描沈線の完結部位を観察すると出発線が突帯上の下方から始まっており，上方にはスペースが残る。その結果このスペースを埋めるよう篦描沈線を充填しており，部分的に２条になるよう配している。終止線はまた１条になるよう既に描いている篦描沈線にぶつけるよう施紋していることが推測される。削出突帯＋篦描沈線を装飾した後，沈線内までヘラミガキ調整で磨いており，突帯上位には縁取沈線を施しているが下位には採用していない。また胴部最大径上方に突帯上の沈線よりも細く弱い沈線を沈線間がやや広くなるよう２条施紋しており，また部分的に段部が確認できるため突帯として意識されたものと想定できる。８・10は壺底部片，９は甕底部片であり，ここでも平底を呈している。



第50図　Ａ区出土遺物

石器

S36～S46

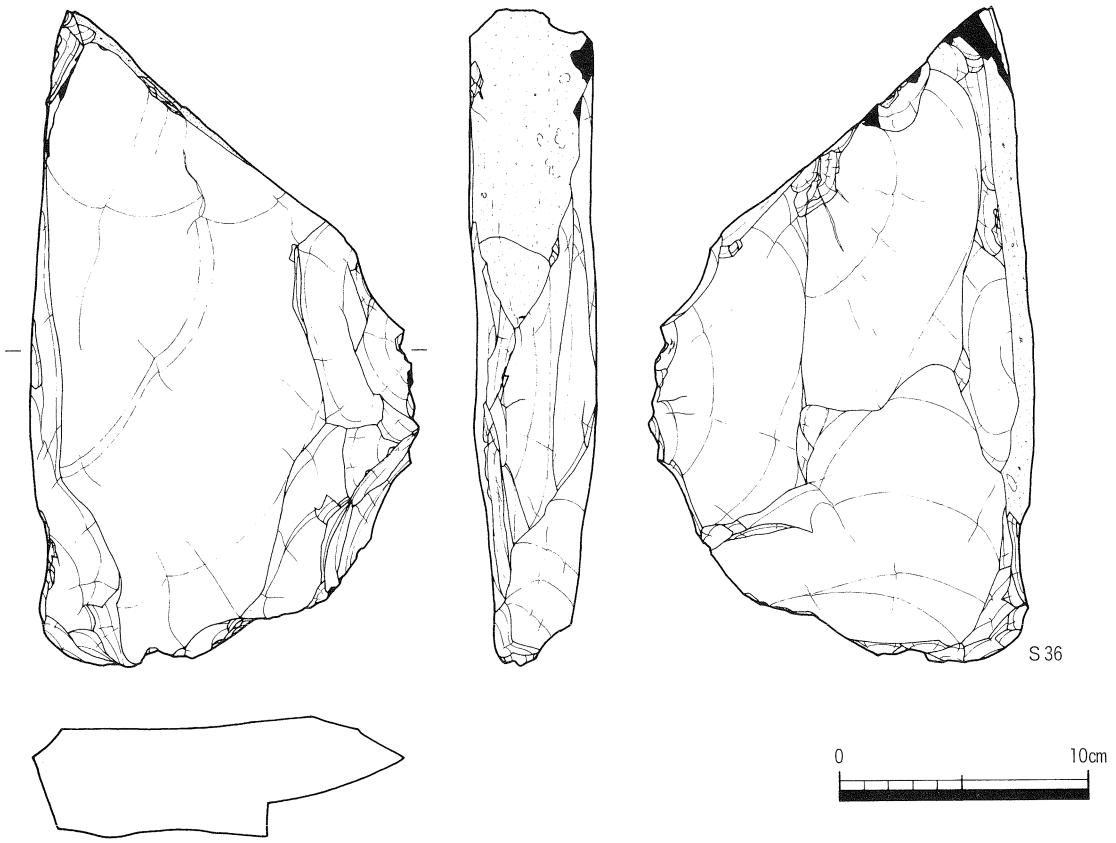
A２区で検出された遺構より出土した石器である。遺物は弥生時代前期に所属するものと考えられるがS42等土師質土器に混じり出土したものあり，中世の遺構に混入したものもあると考えられる。（A２区遺構一覧表参照）S37～43は未製品を含む石鏃である。S44は楔形石器。S45は半切しているが，側縁部に抉りが作出されていることから打製の石庖丁に考えられる。S46も打製石庖丁。S36は大型の板状剥片である。サヌカイト製の素材石で２側面は自然面となり，背，腹面に石の目にほぼ沿った大きな剥離痕が見られる。

A２区遺構上面精査中出土石器

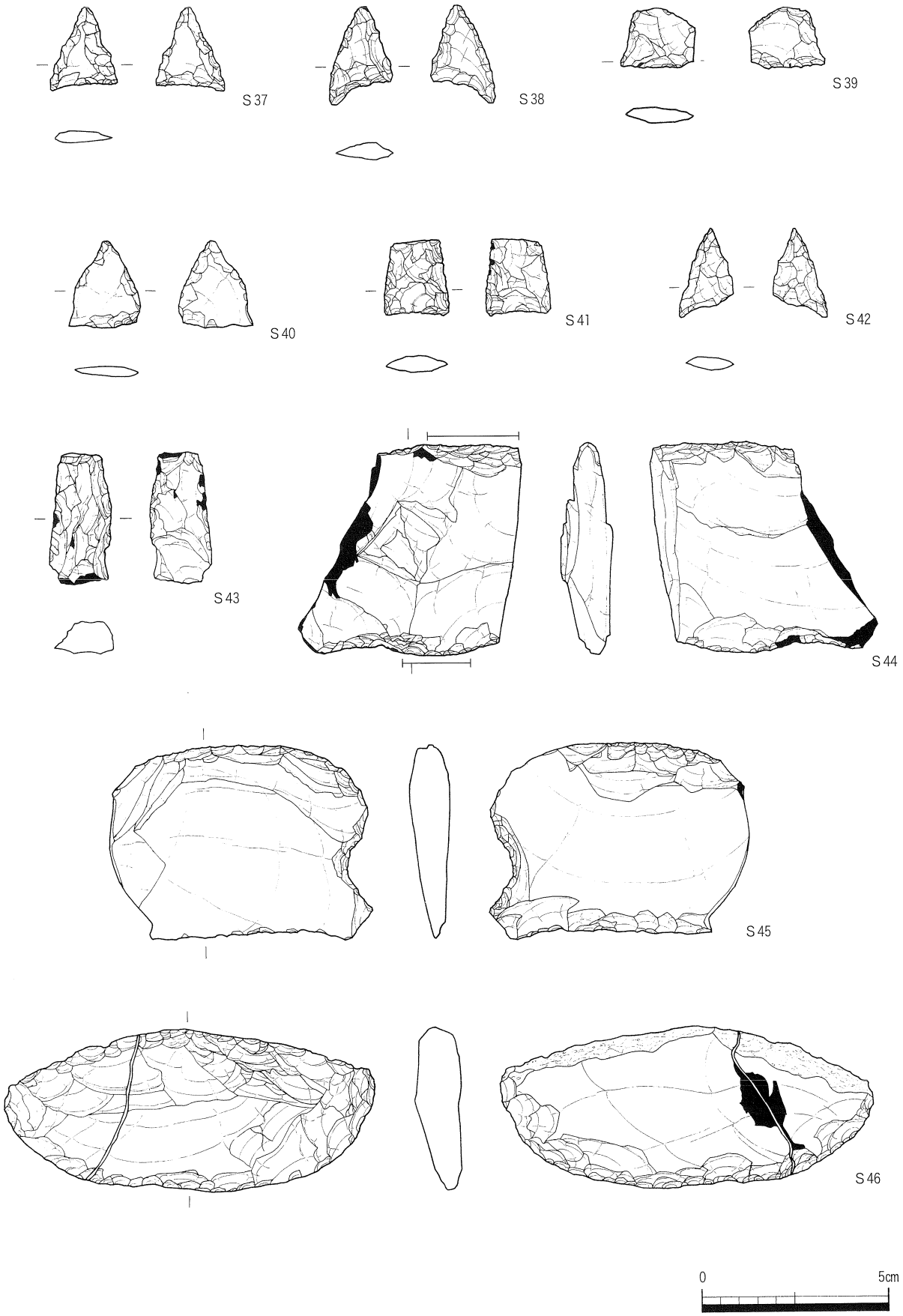
S47～59

環濠内にあたるA２区の遺構面精査中に出土した石器で，当該期に所属するものと考えられる。

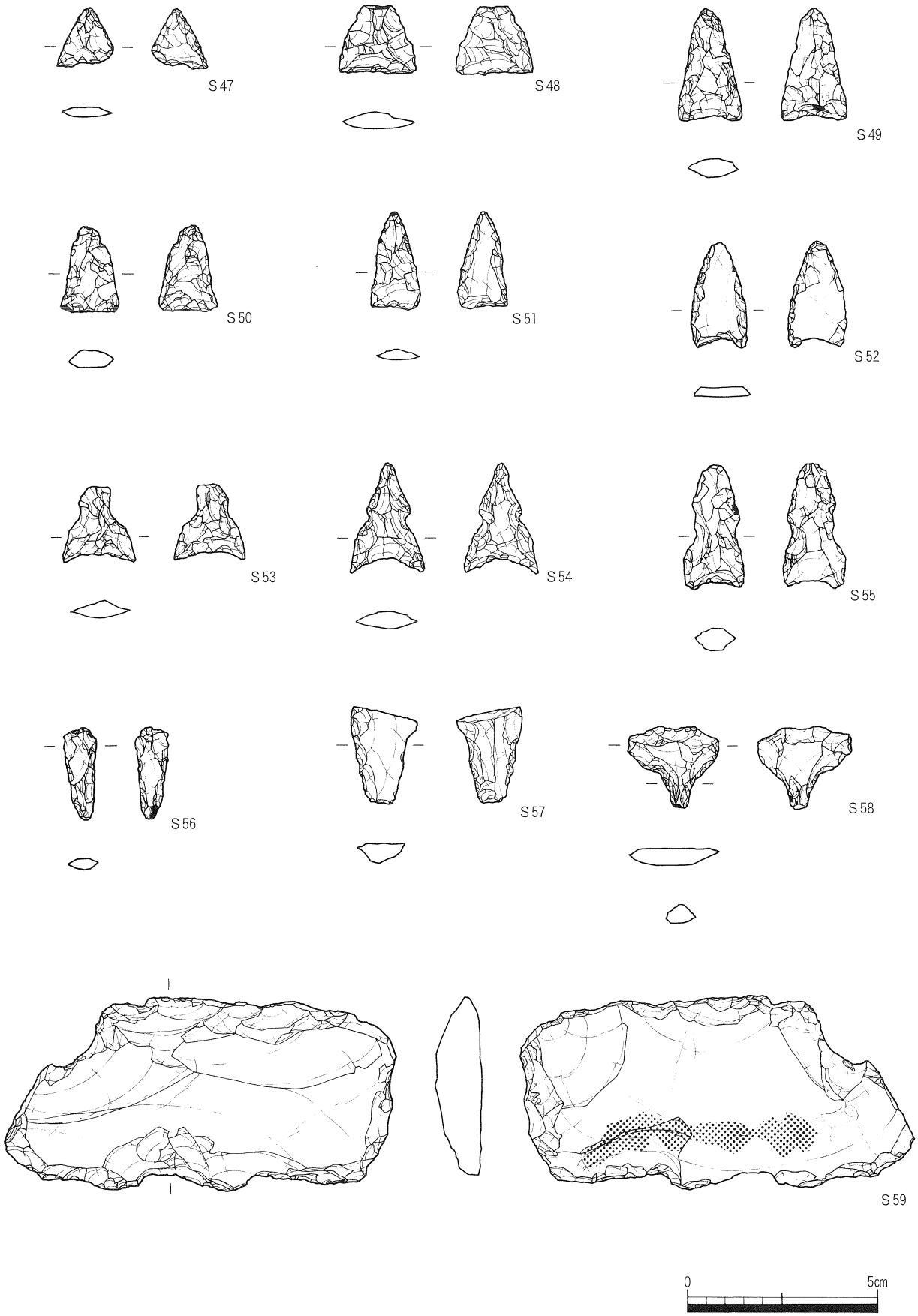
S47～55は石鏃である。S53，54，55は側縁に抉りが取り付けられる。S56，57は石錘あるいは石鏃の欠損品。S58は石錘である。S59は片方の側縁部に抉り部のある打製の石庖丁で，腹面側の底縁付近には光沢・摩滅痕が見られる。



第51図　A２区出土石器　1



第52図　Ａ２区出土石器　2



第53図　Ａ２区遺構上面精査中出土石器

古代～中世の遺構・遺物

水田跡　（第55図）

Ａ１区の北端で確認された水田跡である。先述の様にＡ区北端には旧河道が存在し，その埋没した低地に黒褐色の土壌化層（10YR ３/２黒褐色シルト質極細砂）が見られた。畦畔は，上層に堆積する灰色土（５ YR ６/１灰色シルト質極細砂）との境で土壌化層が凸状になった箇所を平面において検出した。検出面の標高は，3.68～3.82ｍで北東へ向かって下る地形となっている。

水田の区画はほぼ条里方向になされているが，北端及び南端にある東西方向の畦畔は地形の影響のためかやや方向が異なっている。完全に一区画分を検出した箇所はないが，畦畔を延長し推定するなら一区画の面積はおよそ70㎡前後となる。

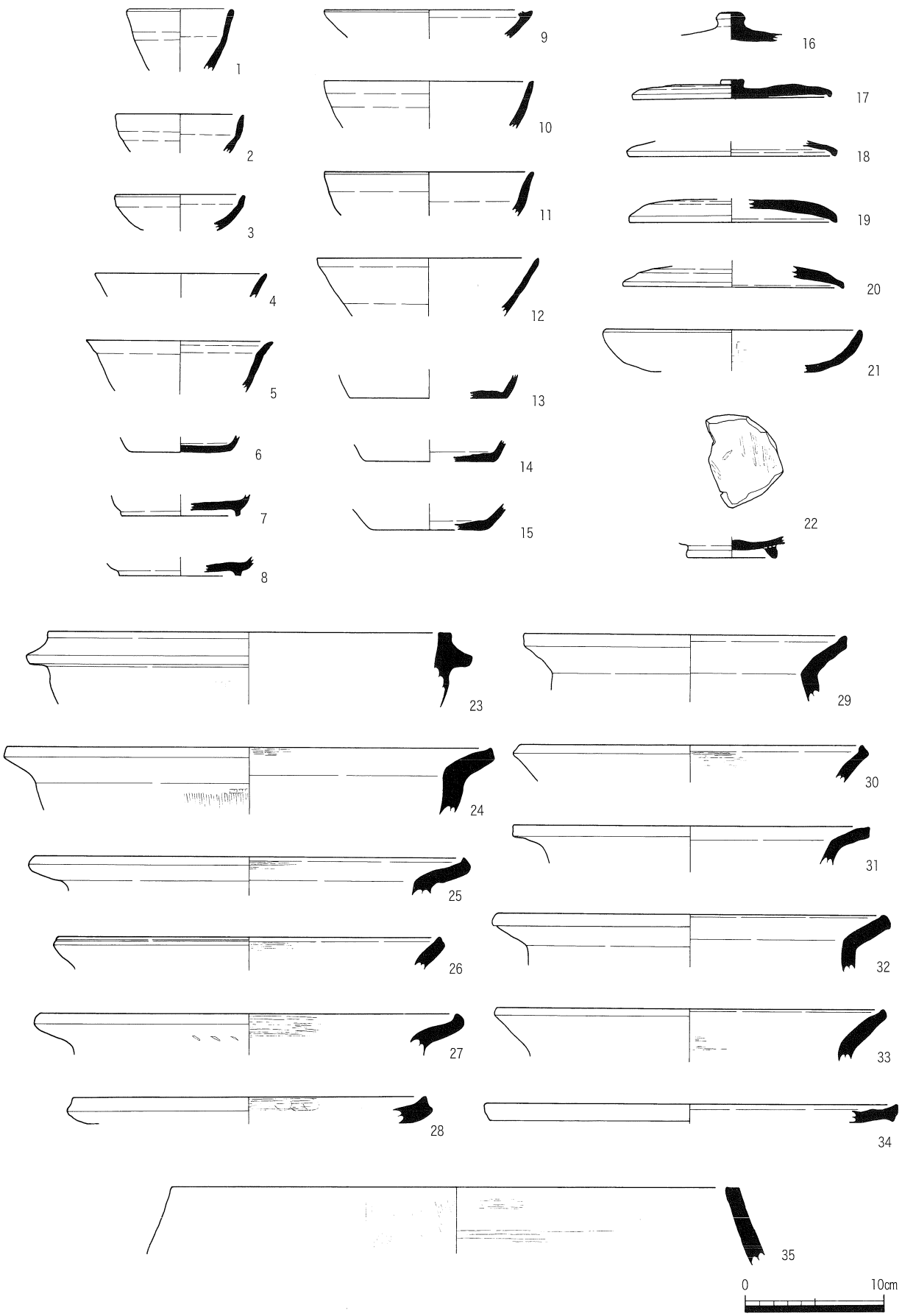
灌漑は，標高3.9ｍ前後の北西において検出した条里方向の溝跡（ＳＤ－Ａ１－04）がほぼ同時期に埋没していることから用水路として使用されたと考えられる。畦畔部分において水口となるような箇所は確認しておらず，部分的な検出のため区画間での配水施設の有無は不明である。

またＡ４区では断面及び平面において畦畔を検出していないが，東壁の土層堆積状況から埋没旧河道上にＡ１区土壌化層とほぼ同時期に考えられる土壌化層（10YR ３/３　暗褐色シルト）が標高3.8ｍ前後に見られ，また柱穴跡等居住地と考えられるような遺構が全く確認されていないことからすれば，Ａ１区と同様に水田が広がっていた可能性が考えられる。

Ａ１区水田土壌化層直上部出土遺物

出土遺物の器種別では鍋，釜等の大型土師質土器が多く，また７世紀代からの須恵器片，土師器片も含まれている。北部に位置する香西南西打遺跡の水田土壌化層から出土した遺物と状況が似ており，黒色土器椀等の特徴からすれば12世紀前半に埋没したものと考えられる。

１は須恵器平瓶の口縁部。２～５及び９～12は須恵器坏口縁部。５は高坏であるかもしれない。6，7，8，14，15は須恵器坏の底部。13は土師質土器坏の底部。16は須恵器坏蓋のツマミ部。17～20は須恵器蓋。いずれも口径14～15㎝を計り，扁平な形態のもので９世紀前後の年代が考えられる。21は土師器の坏か皿。胎土はにぶい黄橙色，浅黄色を呈し，粗い砂粒を含んでおり大型の煮沸具と同様のものである。22は黒色土器椀である。高台の高さ１㎝，高台の径6.4㎝を測り佐藤編年での椀ＡⅡ-４に当たり，Ⅰ－３期（12世紀第１四半期～第２四半期）に所属する（佐藤2000）。23は土師器羽釜の口縁部。24～33は土師器甕，土師質土器鍋の口縁部。胎土は粗い砂粒を含み，にぶい黄橙，浅黄色を呈する。口縁部内面と体部外面に見られる刷毛目は粗いものが多い。また口径が大きく頸部の外反の少ないものは，底の浅い洗面器状を呈する土師質土器鍋に考えられる。34は須恵器壷の口縁部である。口縁端部の特徴から佐藤編年で壷Ｃ－２に相当し，Ⅰ－３期（12世紀第１四半期～第２四半期）の年代が考えられる。35は胎土及び調整が先述の大型煮沸具と同様であるが，器形が口縁部から体部へと開くことから移動式の竈と考える。



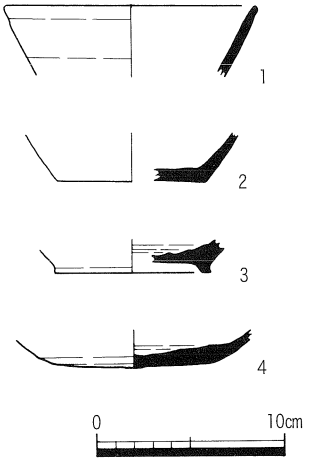
第54図　Ａ１区水田土壌化層直上部出土遺物

第55図　Ａ１区水田跡（１/100）

Ａ４区土壌層出土遺物

Ａ４区の土壌化層（10YR ３／３　暗褐色シルト）においても，須恵器片，土師質土器片が少量出土している。Ａ１区の水田跡に遺物が多く含まれており，この時期においても南接するＡ２区の微高地上が居住地域であったことが伺える。図化した須恵器は古代に所属するものだが，同じく出土した土師質土器鍋等からＡ１区と同時期の堆積物と考えられる。

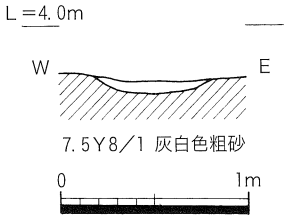
１～４は須恵器の口縁部及び底部。１，２の内面には火襷痕が見られる。



第56図　Ａ４区土壌化層出土遺物

ＳＤ－Ａ１－04

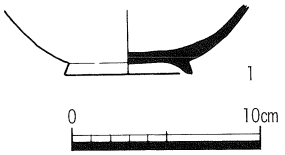
Ａ１区の北西隅において検出された溝跡である。検出レベルは標高3.82m，底面のレベルは標高3.72～3.84mで北方向へ下る。幅0.4～0.8mを測り，検出延長は約7.5mでＡ１区中央部では削平されたものと考えられる。方位Ｎ－８°－Ｅを示し，条里方向に合致するものである。断面は船底状を呈し，埋土は灰白色粗砂（7.5YR ８／１）の単層である。伴出した遺物はないが，遺構面検出時において上部の堆積層から黒色土器椀が出土しており，12世紀前半までには埋没していたものと考えられる。



第57図　ＳＤ－Ａ１－04断面図

ＳＤ－Ａ１－04出土遺物

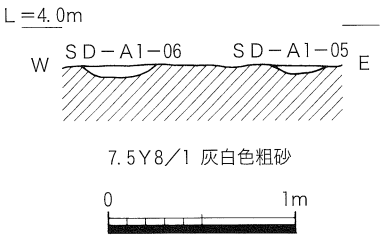
１は黒色土器椀の底部である。底径6.8cm，高台高0.7cmを測り，佐藤編年の椀ＡⅡ－４に該当することから12世紀前半の年代が考えられる。



第58図　ＳＤ－Ａ１－04検出時出土遺物

ＳＤ－Ａ１－05

Ａ１区の北西隅において検出された溝跡である。検出レベルは標高3.87m，底面のレベルは標高3.83～3.91mで北方向へ下る。幅0.4～0.6mを測り，検出延長は約6.5mである。ＳＤ－Ａ１－04と同様にＡ１区中央部では削平されたものと考えられる。方位Ｎ－７°－Ｅを示し，条里方向に合致するものである。断面は船底状を呈し，埋土は，灰白色（7.5YR ８／１）粗砂の単層である。遺物は出土していないが，ＳＤ－Ａ１－04と同じ埋没時期が考えられる。



第59図　ＳＤ－Ａ１－05，06断面図

ＳＤ－Ａ１－06

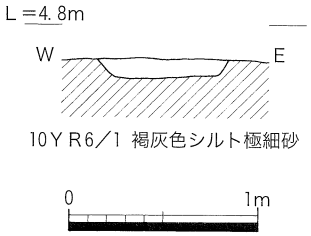
Ａ１区の北西隅において検出された溝跡である。検出レベルは標高3.93m，底面のレベルは標高3.84～3.97mで北方向へ下る。幅約0.5mを測り，検出延長は約４mである。ＳＤ－Ａ１－04，5と同様にＡ１区中央では削平されたもの。方位Ｎ－７°－Ｅを示し，条里方向に合致するものである。断面は船底状を呈し，埋土は灰白色（7.5YR ８／１）粗砂の単層である。遺物は出土していないが，ＳＤ－Ａ１－04と同じ埋没時期が考えられる。

ＳＤ－Ａ１－07

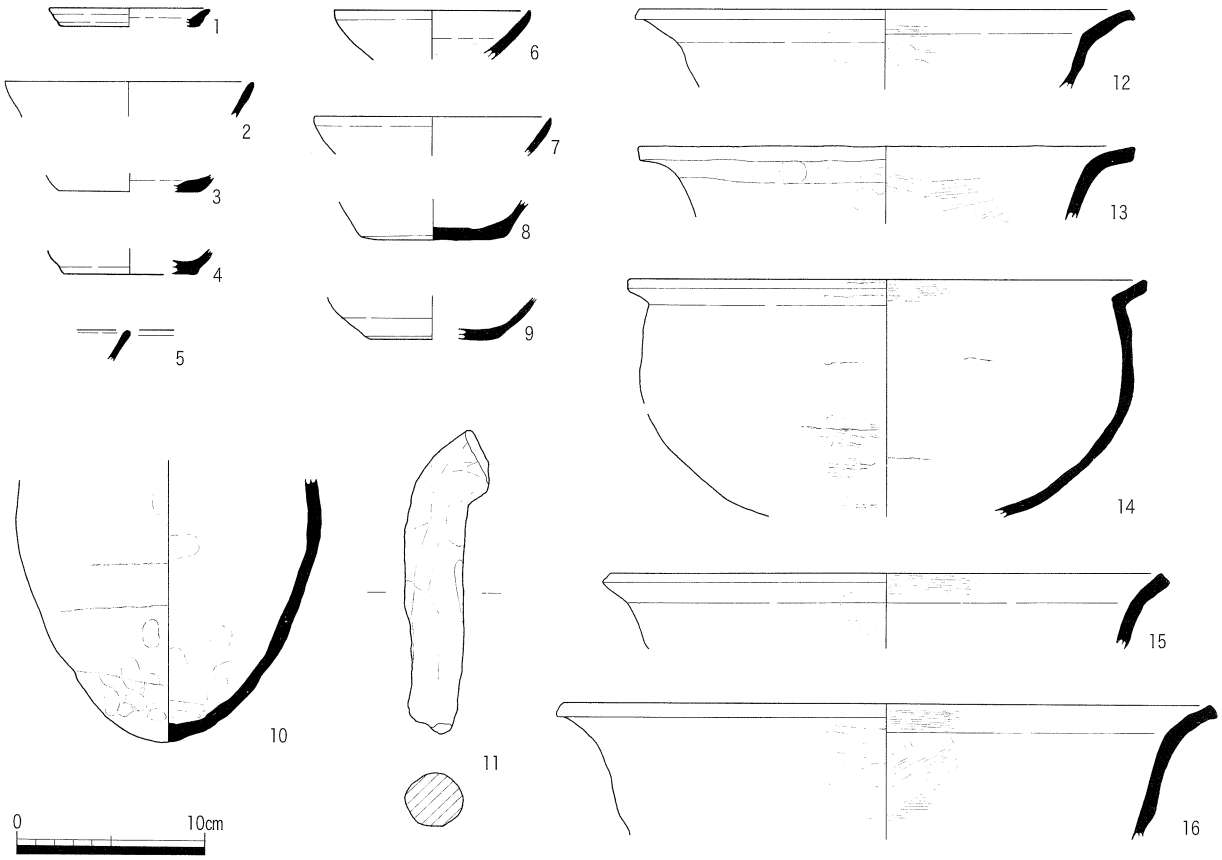
Ａ１区の南東隅において検出された溝跡である。検出レベルは標高4.00m，底面のレベルは3.94～3.97mで北方向へ下る。幅約0.2mを測り，検出延長は2.6mとかなりの削平が考えられる。平面形状では，やや蛇行ぎみであるが，本来は条里方向に合致するものと考えられる。埋土はが灰白色粗砂（7.5YR 8／1）の単層であることから，Ａ１区北西部の溝（ＳＤ－Ａ１－04～06）に相当するものと思われる。

ＳＤ－Ａ２－01

Ａ２区の西半からＡ３区の東半にかけて，検出された溝跡である。検出レベルは標高4.4～4.6m，底面のレベルは標高4.23～4.52mで南東方向へ下る。Ａ２区の中央部まではＮ－11－Ｅ°の方位を示し条里方向に合致するが，Ａ３区にかけて向きを変えＳＤ－Ａ２－04に合流する。途中，ＳＤ－Ａ２－02，03を壊し切り合い関係で後出する。またＡ２区の中央部において，ほぼ直角に折れる支流部があり調査区外においてＳＤ－Ａ２－04に合流すると思われる。幅約0.9m前後，断面は船底状をなす。埋土は褐灰色（10YR 6／1）シルト質極細砂の単層である。遺物には混入品の弥生土器，須恵器も見られるが，土師質土器から13世紀の所属時期が考えられる。



第60図　ＳＤ－Ａ２－01断面図



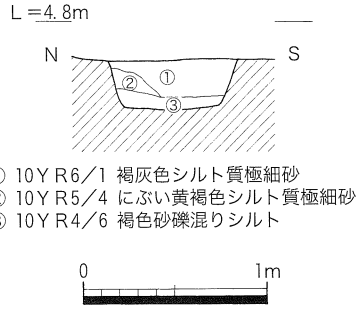
第61図　ＳＤ－Ａ２－01出土遺物

ＳＤ－Ａ２－01出土遺物

１は土師質土器皿である。外反する短い口縁部をもつもので口径から佐藤編年のⅢＢⅢ－２形式に該当し，12世紀末～13世紀初頭のもの。２は須恵器坏の口縁部である。直線的に体部が開くもので，10世紀前後の年代が考えられる。3，4，8，9は土師質土器坏の底部。５は須恵器の底部。6，7は土師質土器坏の口縁部。10は蛸壺の胴体部である。11は土師質土器の脚部。12～16は土師質土器鍋である。14は体部が張り出すもので，外面には叩き目が見られる。その他の鍋は，薄手の作りで口頸部が緩やかに外反するものである。外面には指頭圧痕が，内面には刷毛目が見られる。

ＳＤ－Ａ２－04

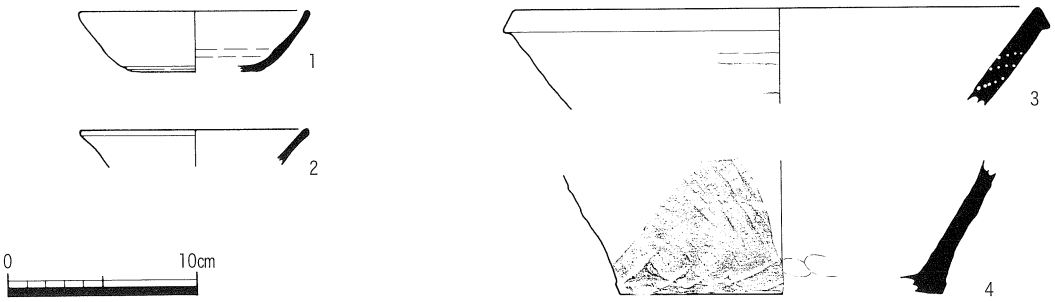
Ａ２区の西半からＡ３区の東半にかけて，検出された溝跡である。検出レベルは標高4.4～4.62m，底面のレベルは標高4.21～4.35mで南東方向へ下る。ＳＤ－Ａ２－02と同様にＡ２区の中央部まではＮ－11－Ｅ°の方位を示し条里方向に合致するが，上述のようにＳＤ－Ａ２－02に合流するものである。幅約0.9mを測り，断面は逆台形状である。埋土は概ね上層部に褐灰色（10YR ６／１）シルト質極細砂が堆積し，下層部には褐色（10YR ４／６）砂礫混じりシルトが見られた。所属時期はＳＤ－Ａ２－02と同じ13世紀の年代に考えられる。



第62図　ＳＤ－Ａ２－04断面図

ＳＤ－Ａ２－04出土遺物

1，2は土師質土器坏である。口径12cmを測り，器形から佐藤編年の坏ＤⅡ－５に該当し13世紀のものと考えられる。３は瓦質焼成の鉢で，体部から口縁部にかけてが直線的なもの。口縁端部の特徴から佐藤編年の鉢Ｅ－３に該当し，13世紀の年代が考えられる。４は甕の底部。瓦質のもので，体部外面に格子状の叩き目が見られる。



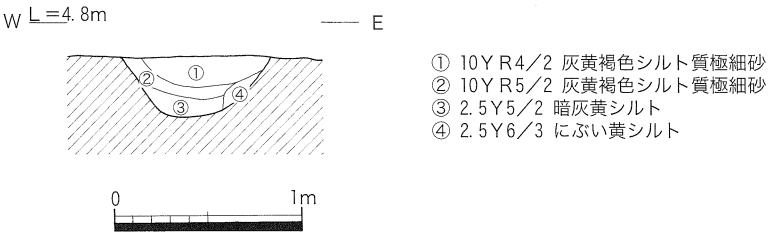
第63図　ＳＤ－Ａ２－04出土遺物

ＳＤ－Ａ２－02

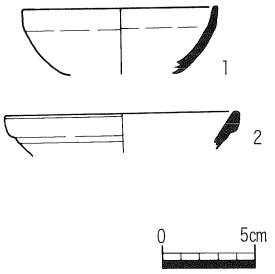
Ａ２区の西半から南端部にかけて検出された溝跡である。検出レベルは標高4.47～4.66m，底面のレベルは4.26～4.48mで南東方向へ下る。Ｎ－11－Ｅ°の方位を示し条里方向に合致するものである。幅約0.8mを測り，断面はＵ字形である。埋土は概ね上層部に灰黄褐色（10YR ４／２～５／２）シルト質極細砂が堆積し，下層部には暗灰黄色～にぶい黄色（2.5YR ５／２～６／３）シルトが見られた。混入した弥生時代前期の遺物を除くと，出土品は僅かであった。所属時期は，12世紀代に考えられる。

ＳＤ－Ａ２－02出土遺物

1は須恵器坏あるいは蓋である。2は白磁碗の口縁部である。玉縁が大きいもので，森田・横田編年のⅣ類に相当し11世紀後半～12世紀初頭のものである。



第64図　ＳＤ－Ａ２－02断面図



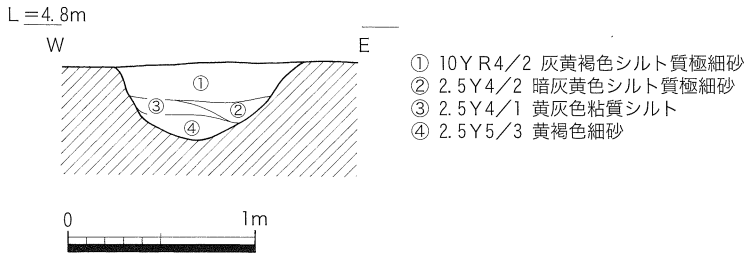
第65図　ＳＤ－Ａ２－02出土遺物

ＳＤ－Ａ２－03

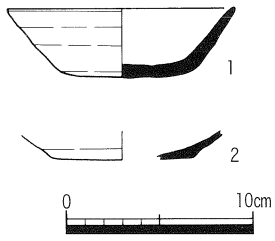
Ａ２区の西半から，Ａ３区北東隅にかけて検出された溝跡である。検出レベルは標高4.45～4.42m，底面のレベルは標高4.18～4.37mで北西方向へ下る。N－10－E°の方位を示し条里方向に合致するものである。幅約1.2mを測り，断面はU字形である。出土遺物は僅かであるが，13世紀代のものが出土している。

ＳＤ－Ａ２－03出土遺物

1は土師質土器坏である。体部は直線的に延びるもので，底部は回転ヘラ切りがされる。口径から佐藤編年の坏ＤⅡ－５に該当し，13世紀代のものである。2は土師質土器坏の底部。



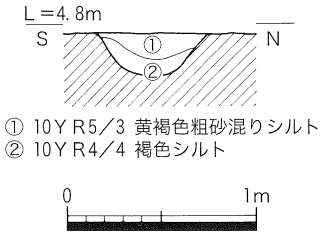
第66図　ＳＤ－Ａ２－03断面図



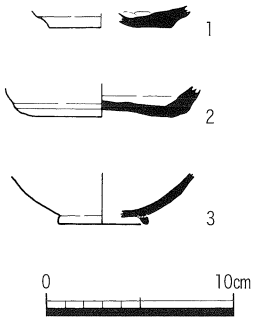
第67図　ＳＤ－Ａ２－03出土遺物

ＳＤ－Ａ２－05

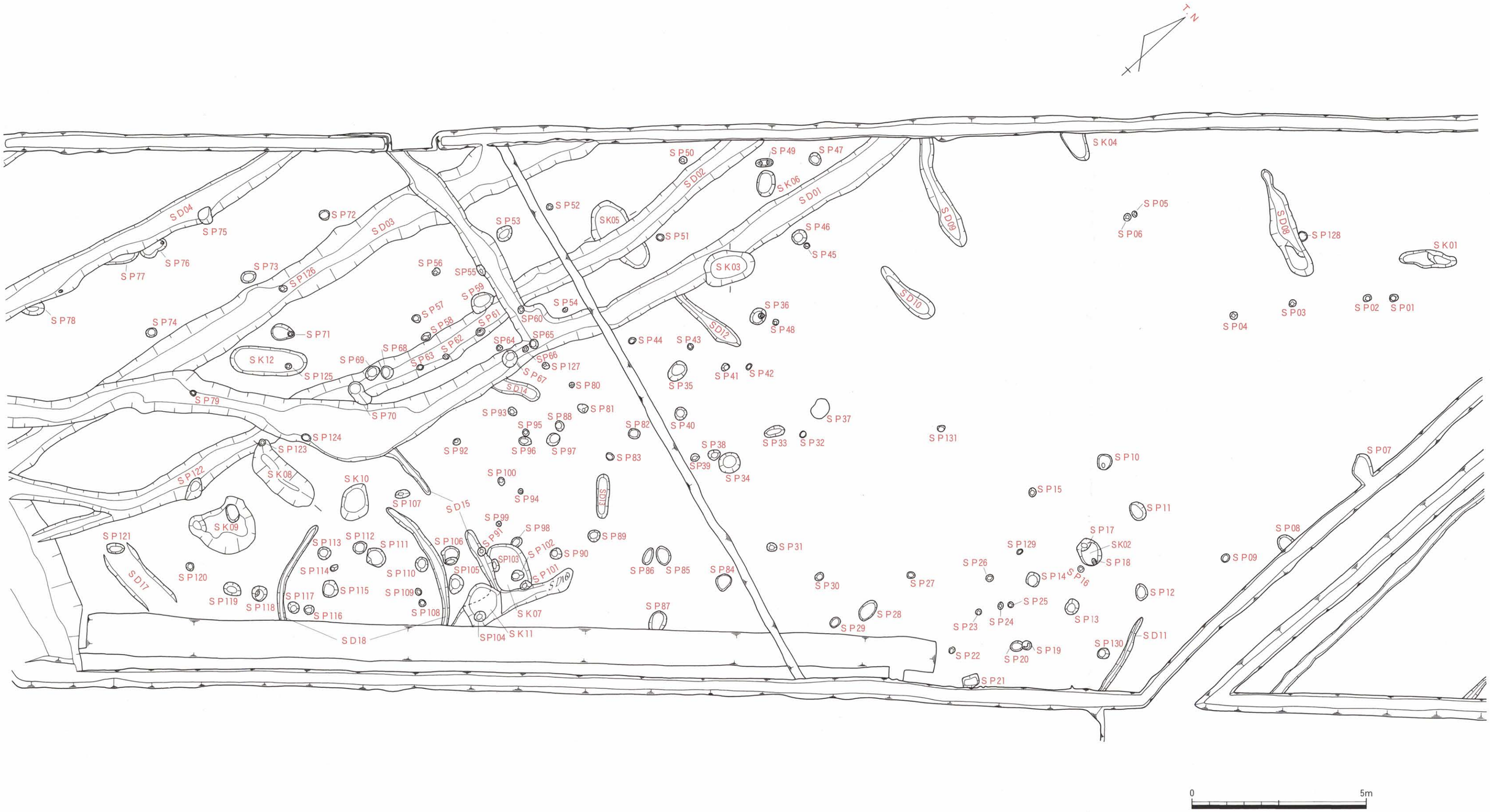
Ａ２区の西半から，Ａ３区北端部にかけて検出された溝跡である。検出レベルは標高4.44～4.62m，底面のレベルは4.37～4.5mで南東方向へ下る。Ａ２区ではN－11－E°の方位を示し条里方向に合致するものであるが，Ａ３区においてＳＤ－Ａ２－01及び04と同様，東よりに屈曲する。幅約0.6mを測り，断面はU字形を呈する。埋土は上層部に黄褐色（10YR ５／３）粗砂混じりシルト，下層部に褐色（10YR ４／４）シルトが堆積する。所属時期は，出土遺物より13世紀代と考えられる。



第68図　ＳＤ－Ａ２－05断面図



第69図　ＳＤ－Ａ２－05出土遺物



第70図　Ａ２区遺構配置図（１/100）

ＳＤ－Ａ２－05出土遺物

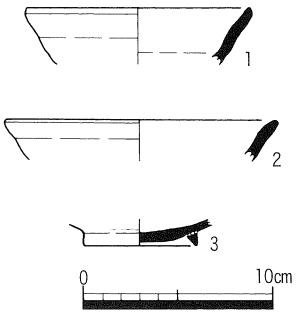
１～３は土師質土器坏，椀の底部である。３は外面のヘラ磨きが認められないこと，高台の大きさから13世紀代のものに考えられる。

ＳＤ－Ａ２－15，16（第70図参照）

Ａ２区の中央部において検出された溝跡である。南北方向のＳＤ－Ａ２－16よりＳＤ－Ａ２－15が西方向に分岐するもの。各溝の示す方位は，ほぼ条里方向に合致する。ＳＫ－Ａ２－07，11に切り合い関係で後出する。遺物はＳＤ－Ａ２－16より出土している。

ＳＤ－Ａ２－16出土遺物

1，2は土師質土器坏の口縁部である。３は黒色土器椀の底部。高台部の大きさから佐藤編年の椀ＡⅡ－3，4形式に該当し，11世紀後半～12世紀前半と考えられる。



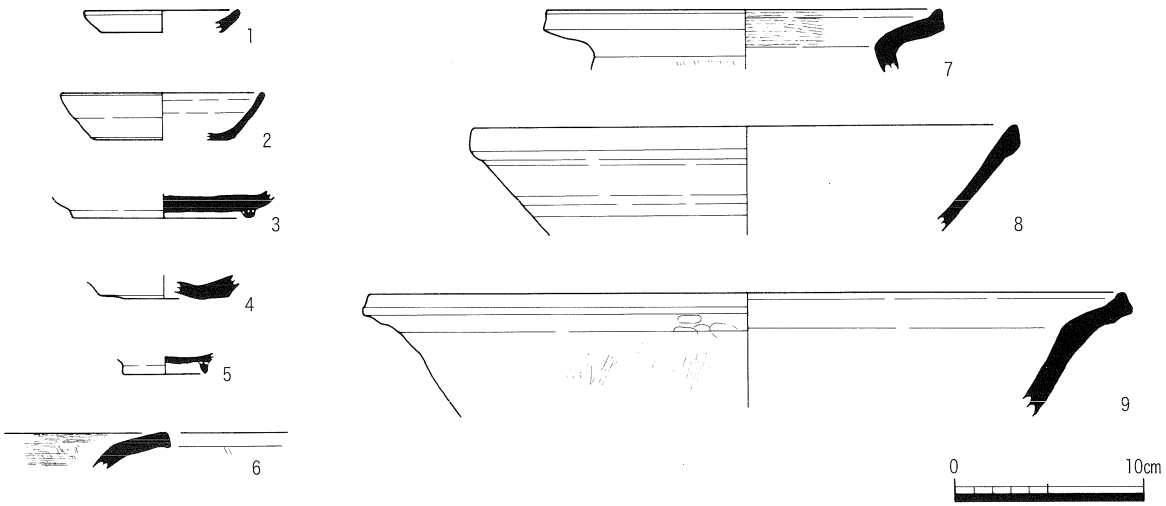
第71図　ＳＤ－Ａ２－16出土遺物

Ａ２区ピット群等

弥生時代前期環濠の内側となるＡ２区においては弥生時代前期～中世に至る柱穴，土坑，，溝状遺構を検出したが多くは建物跡に復原できない等，その性格を明確にするのが困難であり，これらから出土した遺物を一括して報告するものである。（第70図，Ａ２区遺構一覧表参照）

出土遺物

１はＳＰ065より出土した土師質土器皿で，12世紀後半～13世紀前半のもの。２はＳＰ063より出土した土師質土器坏である。13世紀のものである。３はＳＰ013より出土した須恵器坏の底部。４は土師器坏の底部，ＳＰ113より出土した。５はＳＰ065より出土した土師質土器椀の底部。高台部の矮小化から13世紀の年代が考えられる。６はＳＰ067より出土した土師質土器鍋の口縁部。器壁が薄いもので，内面に刷毛目が施される。７はＳＰ021より出土した土師器甕の口縁部。８はＳＰ097より出土した須恵器捏鉢。東播系のもので，口縁部の特徴から森田編年の第Ⅱ期２段階（12世紀末～13世紀初頭）に該当する。９は土師質土器鍋の口縁部。ＳＰ073より出土した。



第72図　Ａ２区ピット群等出土遺物

Ａ２区　遺構一覧表

遺構番号	平面形状	長さ(cm)	幅(cm)	深さ(cm)	埋土	出土遺物	備考
SP001	円形	26	20	7	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		
SP002	円形	24	20	5	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂	楔形石器（第52図）	
SP003	円形	20	20	6	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		
SP004	円形	23	20	12	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		
SP005	円形	18	16	12	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		
SP006	円形	22	19	12	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂	土器細片	
SP007	不定形	(80)	63	27	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂	弥生土器片（第49図）等	
SP008	円形	46	(39)	13	10YR4/2灰黄褐色シルト質極細砂		
SP009	円形	24	22	11	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		
SP010	円形	46	42	23	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		ＳＨ01柱穴
SP011	楕円形	58	46	22	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		ＳＨ01柱穴
SP012	楕円形	48	37	31	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		ＳＨ01柱穴
SP013	楕円形	47	40	31	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂	須恵器坏底部（第72図）	ＳＨ01柱穴
SP014	楕円形	45	38	13	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		ＳＨ01柱穴
SP015	円形	25	22	5	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		ＳＨ01柱穴
SP016	円形	20	17	13	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		ＳＨ01柱穴
SP017	楕円形	38	28	28	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		ＳＨ01柱穴
SP018	楕円形	18	14	29	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		ＳＨ01柱穴
SP019	円形	28	26	14	10YR4/2灰黄褐色シルト質極細砂		
SP020	楕円形	(32)	28	15	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		ＳＤ18に切られる
SP021	隅丸方形	48	(38)	30	10YR4/2灰黄褐色シルト質極細砂	土師器甕（第72図）等	
SP022	円形	22	16	2	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		
SP023	円形	18	18	3	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		
SP024	楕円形	21	15	4	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		
SP025	円形	17	17	16	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		
SP026	円形	22	18	5	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		
SP027	円形	22	18	17	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		
SP028	楕円形	66	40	5	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		
SP029	楕円形	32	26	5	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		
SP030	円形	26	22	17	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		
SP031	円形	28	24	22	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		
SP032	円形	20	18	5	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		
SP033	楕円形	62	28	7	10YR6/1褐灰色シルト質極細砂	土器細片，サヌカイト片	
SP034	円形	62	60	64	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		ＳＢ01柱穴
SP035	楕円形	64	46	57	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		ＳＢ01柱穴
SP036	楕円形	54	44	39	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		ＳＢ01柱穴
SP037	楕円形	62	46	38	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂	弥生土器等細片	ＳＢ01柱穴
SP038	円形	34	30	12	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		
SP039	円形	26	24	13	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		
SP040	円形	38	36	8	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		
SP041	楕円形	24	18	15	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		
SP042	楕円形	20	16	5	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		
SP043	円形	20	18	6	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		
SP044	楕円形	24	18	7	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂	石鏃（第52図）	
SP045	円形	18	15	18	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		
SP046	円形	44	42	16	10YR6/1褐灰色シルト質極細砂		

SP047	楕円形	47	34	9	10YR6/1褐灰色シルト質極細砂	土師質土器片	
SP048	円形	20	18	9	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		
SP049	楕円形	50	22	6	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂	土器細片	2箇所，柱痕か
SP050	円形	24	24	19	10YR6/1褐灰色シルト質極細砂		
SP051	円形	22	22	9	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		
SP052	円形	20	16	6	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		
SP053	楕円形	52	42	13	10YR6/1褐灰色シルト質極細砂		
SP054	円形	14	14	10	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		
SP055	楕円形	34	20	8	10YR4/2灰黄褐色シルト質極細砂		
SP056	不定形	24	18	18	10YR6/1褐灰色シルト質極細砂	土師質土器片	
SP057	円形	28	24	2	10YR6/1褐灰色シルト質極細砂	土師質土器片	
SP058	楕円形	30	20	10	10YR6/1褐灰色シルト質極細砂		
SP059	楕円形	72	52	55	10YR6/1褐灰色シルト質極細砂	土師質土器片	
SP060	円形	18	18	13	7.5YR4/1褐灰色シルト		
SP061	楕円形	28	20	10	10YR4/2灰黄褐色シルト		
SP062	円形	18	18	18	10YR4/2灰黄褐色シルト		
SP063	円形	20	18	17	10YR4/2灰黄褐色シルト	土師質土器坏（第72図）	
SP064	円形	18	18	14	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		
SP065	円形	28	25	40	10YR6/1褐灰色シルト	土師質土器皿，椀（第72図）等	
SP066	楕円形	20	14	8	10YR6/1褐灰色シルト		
SP067	楕円形	48	40	35	7.5YR4/1褐灰色シルト	土師質土器，石鏃等（第72，52図）	
SP068	楕円形	40	32	24	7.5YR4/1褐灰色シルト	弥生土器，土師質土器片	
SP069	楕円形	46	34	37	7.5YR4/1褐灰色シルト	弥生土器片	
SP070	楕円形	80	44	82	10YR6/1褐灰色シルト質極細砂		
SP071	楕円形	70	50	39	10YR4/2灰黄褐色シルト質極細砂		
SP072	円形	32	30	9	10YR4/2灰黄褐色シルト質極細砂	弥生土器，土師質土器片	
SP073	楕円形	46	32	16	10YR4/2灰黄褐色シルト質極細砂	土師質土器鍋（第72図）等	
SP074	楕円形	32	24	11	10YR4/2灰黄褐色シルト質極細砂		
SP075	不定形	48	43	40	10YR6/1褐灰色シルト質極細砂		
SP076	不定形	34	82	13	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		
SP077	不定形	106	(26)	3	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		
SP078	楕円形	(56)	(32)	8	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		
SP079	楕円形	20	16	3	7.5YR4/1褐灰色シルト		
SP080	円形	16	15	10	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		
SP081	楕円形	30	24	22	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		
SP082	円形	33	30	13	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		
SP083	楕円形	26	22	26	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂	弥生土器片	
SP084	楕円形	50	40	3	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		
SP085	楕円形	54	42	24	10YR6/1褐灰色シルト質極細砂	土師質土器片	
SP086	楕円形	50	28	10	10YR6/1褐灰色シルト質極細砂		
SP087	楕円形	(55)	50	13	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂	サヌカイト片，土器細片	
SP088	円形	30	30	5	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		SH03柱穴
SP089	円形	36	36	7	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		SH03柱穴
SP090	円形	35	30	29	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂	土器細片	SH03柱穴
SP091	円形	25	24	27	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		SH03柱穴
SP092	楕円形	23	17	8	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		SH03柱穴
SP093	楕円形	26	22	8	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		SH03柱穴
SP094	円形	17	16	2	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		SH03柱穴
SP095	円形	22	20	26	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		

SP096	楕円形	38	24	29	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂	サヌカイト片，土器細片	
SP097	楕円形	42	35	19	10YR6/1褐灰色シルト質極細砂	須恵器鉢（第72図）	
SP098	楕円形	(28)	28	6	7.5YR4/1褐灰色シルト		ＳＫ07に切られる
SP099	円形	16	14	9	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		
SP100	円形	24	24	14	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		
SP101	楕円形	36	26	48	7.5YR4/1褐灰色シルト		
SP102	楕円形	36	30	16	7.5YR4/1褐灰色シルト		
SP103	楕円形	38	(24)	30	7.5YR4/1褐灰色シルト		ＳＤ18に切られる
SP104	楕円形	32	26	7	7.5YR4/1褐灰色シルト		
SP105	楕円形	54	40	36	10YR4/2灰黄褐色シルト質極細砂		
SP106	円形	54	52	36	10YR4/2灰黄褐色シルト質極細砂		
SP107	楕円形	44	22	18	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		
SP108	円形	20	20	11	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		
SP109	円形	20	18	3	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		
SP110	円形	40	40	19	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		
SP111	円形	55	52	15	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂	サヌカイト片（第51図）	
SP112	円形	40	36	10	10YR6/1褐灰色シルト質極細砂		
SP113	円形	37	34	42	10YR6/1褐灰色シルト質極細砂	土師質土器坏（第72図）等	
SP114	楕円形	24	16	3	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		
SP115	円形	50	47	26	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		
SP116	円形	30	26	26	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		
SP117	円形	36	32	25	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		
SP118	円形	44	44	38	10YR6/1褐灰色シルト質極細砂	土師質土器片	
SP119	楕円形	50	38	16	10YR6/1褐灰色シルト質極細砂		
SP120	円形	24	24	11	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		
SP121	楕円形	50	30	45	10YR6/1褐灰色シルト質極細砂		
SP122	楕円形	74	34	60	10YR4/2灰黄褐色シルト質極細砂		
SP123	円形	20	16	8	10YR4/2灰黄褐色シルト質極細砂		
SP124	楕円形	28	20	11	7.5YR4/1褐灰色シルト		
SP125	円形	20	18	8	10YR6/1褐灰色シルト質極細砂		
SP126	楕円形	22	18	4	7.5YR4/1褐灰色シルト		
SP127	円形	20	18	16	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		
SP128	円形	28	(23)	5	7.5YR4/1褐灰色シルト		ＳＤ10に切られる
SP129	楕円形	20	16	5	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		
SP130	円形	34	31	14	10YR4/2灰黄褐色シルト質極細砂	土師質土器片	
SP131	楕円形	24	18	3	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		
SK01	楕円形	168	56	19	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂	石鏃（第52図）	
SK02	楕円形	78	64	14	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		ＳＨ01中央部土坑
SK03	楕円形	144	90	51	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂	弥生土器，石鏃（第43，52図）	ＳＤ01に切られる
SK04	楕円形	(90)	(60)	16	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂	土器細片，サヌカイト片	
SK05	楕円形	225	116	49	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂	弥生土器，石器（第45，46図）	ＳＤ05に切られる
SK06	楕円形	76	55	7	10YR6/1褐灰色シルト質極細砂		
SK07	隅丸方形	(134)	(105)	15	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂	弥生土器片	底部でピット検出
SK08	楕円形	226	92	49	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂	弥生土器，石鏃（第48，52図）	
SK09	不定形	162	142	29	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂	石鏃，石包丁（第52図）	
SK10	楕円形	95	74	24	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂	土器細片，サヌカイト片	
SK11	不定形	116	114	24	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂	土器細片	底部でピット検出
SK12	楕円形	222	80	31	10YR6/1褐灰色シルト質極細砂		底部でピット検出
SD01	項（ＳＤ－Ａ２－01）参照						

SD02	項（ＳＤ－Ａ２－02）参照						
SD03	項（ＳＤ－Ａ２－03）参照						
SD04	項（ＳＤ－Ａ２－04）参照						
SD05	項（ＳＤ－Ａ２－05）参照						
SD06	項（ＳＤ－Ａ２－06）参照						
SD07	項（ＳＤ－Ａ２－07）参照						
SD08	直線状	330	78	31	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂	弥生土器片，サヌカイト片	
SD09	蛇行	(330)	52	25	10YR4/2灰黄褐色シルト質極細砂	弥生土器，土師質土器片等	
SD10	直線状	200	38	17	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		
SD11	蛇行	(240)	18	7	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		
SD12	直線状	228	55	10	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		
SD13	直線状	130	40	8	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		ＳＨ02の壁溝か
SD14	弧状	130	40	5	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂		ＳＨ02の壁溝か
SD15	直線状	(500)	30	5	10YR4/2灰黄褐色シルト質極細砂		条里方向に合致
SD16	直線状	(350)	65	13	10YR4/2灰黄褐色シルト質極細砂	土師質土器，石鏃（第52，71図）	条里方向に合致
SD17	直線状	210	88	8	10YR4/2灰黄褐色シルト質極細砂	土器細片	条里方向に合致
SD18	弧状	(340)	30	5	7.5YR4/1褐灰色シルト質極細砂	弥生土器（第40図）	ＳＨ03壁溝

＊未検出部分があるものについては，測定値を（　）書きにした。

Ａ３区溝跡

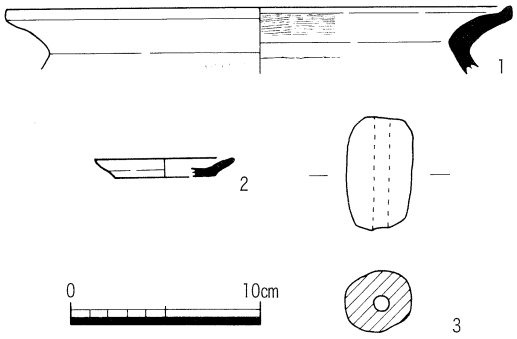
以下はＡ３区において検出された溝跡である。完掘後の状況から調査区の北端部を除いて大半が低地部となっており，本来は南東方向に下る谷状の地形をした自然流路であったと窺える。検出された溝跡は自然流路が埋没した後に掘削されたと考えられる。各溝とも互いに交差する箇所が多く，切り合い関係を明確にできない箇所もあるが，概ね地形に沿い南東方向に掘削されたものが先行し，条里方向を示すものが後出すると考えられる。また中央部には窪地状となる箇所があり，底となる砂層の上面にかなりの鉄分の沈着が認められたことから，長期にわたり池状となっていたことが窺える。溝跡との関係からすれば灌漑用の溜池が想定されるが，関等の施設は確認されていない。各溝より出土した遺物は僅かで，また自然流路及び各溝間で混在していると考えられる。所属時期は出土遺物及び周辺部の遺構から推察すれば，概ね地形に沿ったものが10～12世紀代に，条里方向のものが13世紀を中心に考えられる。

ＳＤ－Ａ３－01（第６図土層図参照）

Ａ３区の中央部を南北方向に横断する溝跡である。検出レベルは標高4.5～4.6m，底面のレベルは標高4.40～4.59mを測る。検出幅は２～2.5mであり，検出延長は約16mである。方位Ｎ－６°－Ｅを示し，ほぼ条里方向に合致する。断面は船底形を呈し，埋土は４層に分割された。

ＳＤ－Ａ３－01出土遺物

１は土師器甕口縁部。10世紀頃の年代が考えられる。２は土師質土器皿である。器形及び口径から佐藤編年の皿ＢⅢ－３に該当し12世紀後半～13世紀代のものである。３は管状の土錘である。



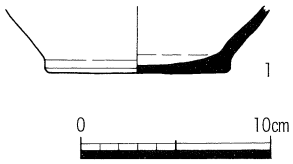
第73図　ＳＤ－Ａ３－01出土遺物

ＳＤ－Ａ３－02（第６図土層図参照）

Ａ３区の北西部で検出された溝跡である。検出レベルは標高4.55～4.36m，底面のレベルは標高4.40～4.55mを測る。検出幅は１ｍ前後であり，検出延長は約８ｍである。方位Ｅ－40°－Ｓの方位を示す。途中，ＳＤ－Ａ３－01に切られ，中央部の窪地に至る。断面はＵ字形を呈し，埋土は３層に分割された。

ＳＤ－Ａ３－02出土遺物

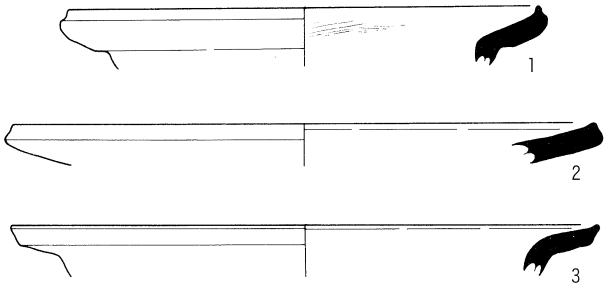
１は土師器坏の底部である。平底のもので，10世紀頃の年代が考えられる。



第74図　ＳＤ－Ａ３－02出土遺物

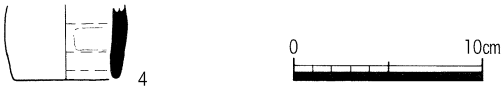
ＳＤ－Ａ３－03（第６図土層図参照）

Ａ３区の西～中央部で検出された溝跡である。検出レベルは標高4.25～4.64m，底面のレベルは標高4.07～4.15ｍを測る。検出幅は1.5m前後であり，検出延長は約12mである。方位Ｅ－45°－Ｓを示す。中央部の窪地に至り途切れる。断面は逆台形状で段が見られる。



ＳＤ－Ａ３－03出土遺物

1，2は土師器甕の口縁部である。３は土師質土器鍋の口縁部。４は蛸壺である。



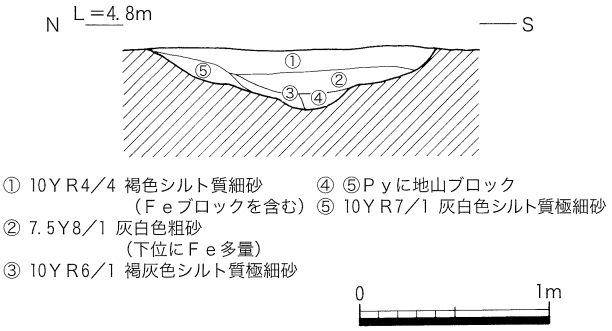
第75図　ＳＤ－Ａ３－03出土遺物

ＳＤ－Ａ３－04

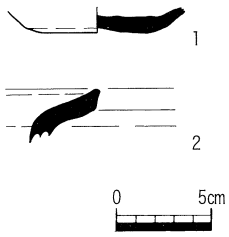
Ａ３区の西部で検出された溝跡である。検出レベルは標高4.57～4.66m，底面のレベルは標高4.33～4.36ｍを測る。検出幅は1.5m前後であり，検出延長は約15mである。方位Ｅ－45°－Ｓを示す。断面は逆台形状で段が見られる。

ＳＤ－Ａ３－04出土遺物

１は土師質土器坏の底部。２は土師質土器鍋の口縁部である。



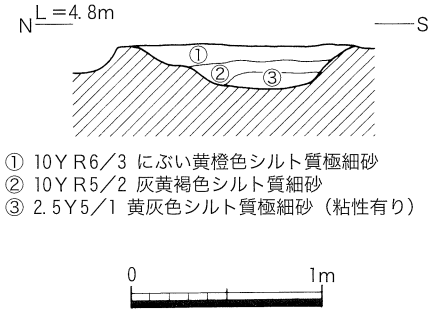
第76図　ＳＤ－Ａ３－04出土遺物



第77図　ＳＤ－Ａ３－04
出土遺物

ＳＤ－Ａ３－05

Ａ３区の西部で検出された溝跡である。検出レベルは標高4.70m前後，底面のレベルは標高4.3～4.66mを測る。方位はＥ－12°－Ｎを示すが，他の溝跡とは逆方向の西方向へ底面が急激に下る。検出幅は1.2m前後であり，検出延長は約３ｍである。断面は逆台形状で段が見られる。



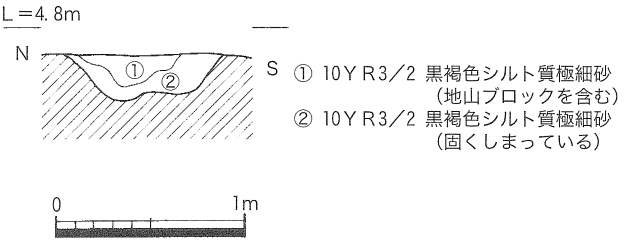
第78図　ＳＤ－Ａ３－05断面図

ＳＤ－Ａ３－06（第６図土層図参照）

Ａ３区の東西方向に横断する溝跡である。検出レベルは標高4.54～4.70m，底面のレベルは標高4.26～4.30mを測る。検出幅は２ｍ前後であり，検出延長は約18mである。方位Ｅ－12°－Ｓを示し，条里方向に合致する。位置関係から東に位置するＳＤ－Ａ６－04に繋がるものと考えられる。断面はＵ字形をなし，埋土は２層に分割される。

ＳＤ－Ａ３－07

Ａ３区の東西方向に横断する溝跡である。検出レベルは標高4.61～4.69m，底面のレベルは標高4.39～4.45mを測る。検出幅は最大1.5mであるが，２条に分流する箇所がある。検出延長は約16mである。方位Ｅ－12°－Ｓを示し，条里方向に合致する。位置関係から東に位置するＳＤ－Ａ６－05に繋がるものと考えられる。断面はＵ字形をなし，埋土は２層に分割される。



第79図　ＳＤ－Ａ３－07断面図

ＳＤ－Ａ３－08（第６図土層図参照）

Ａ３区の南西隅で検出された溝跡である。検出レベルは標高4.65m前後，底面のレベルは標高約4.47mを測る。検出幅は約2.8mで，検出延長は約６ｍである。方位Ｎ－25°－Ｅを示し，自然流路の南端部に掘削される。断面はＵ字形をなし，切り合い関係でＳＤ－Ａ３－07，08に先行する。

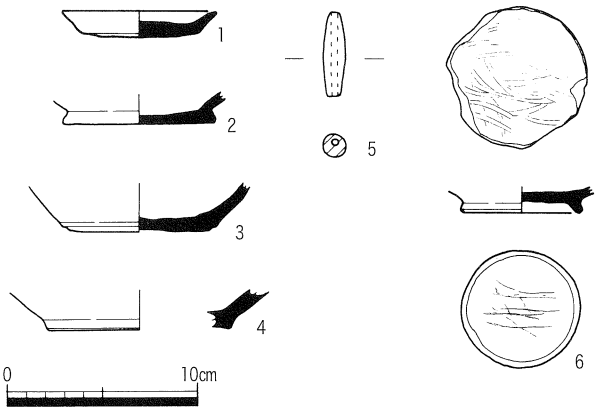
ＳＤ－Ａ３－09（第５－２図土層図参照）

Ａ３区の北部で東西方向に検出された溝跡である。検出レベルは標高4.41～4.48m，底面のレベルは標高4.30m前後を測る。検出幅は0.4～0.5mで，検出延長は約７ｍである。方位Ｅ－15°－Ｓを示し，条里方向に合致する。西端で南方向にほぼ直角に折れ曲がり，窪地方向に延びる。また位置関係から東に位置するＳＤ－Ａ６－03に繋がるものと考えられる。

Ａ１～３区遺構面精査中出土遺物

以下はＡ１～３区において遺構面を精査中に出土した遺物である。

１は土師質土器皿である。２～４は土師器及び土師質土器坏の底部。５は管状の土錘。６は黒色土器椀の底部で，底の外面に線刻が見られる。



第80図　Ａ１～３区遺構面精査中出土遺物

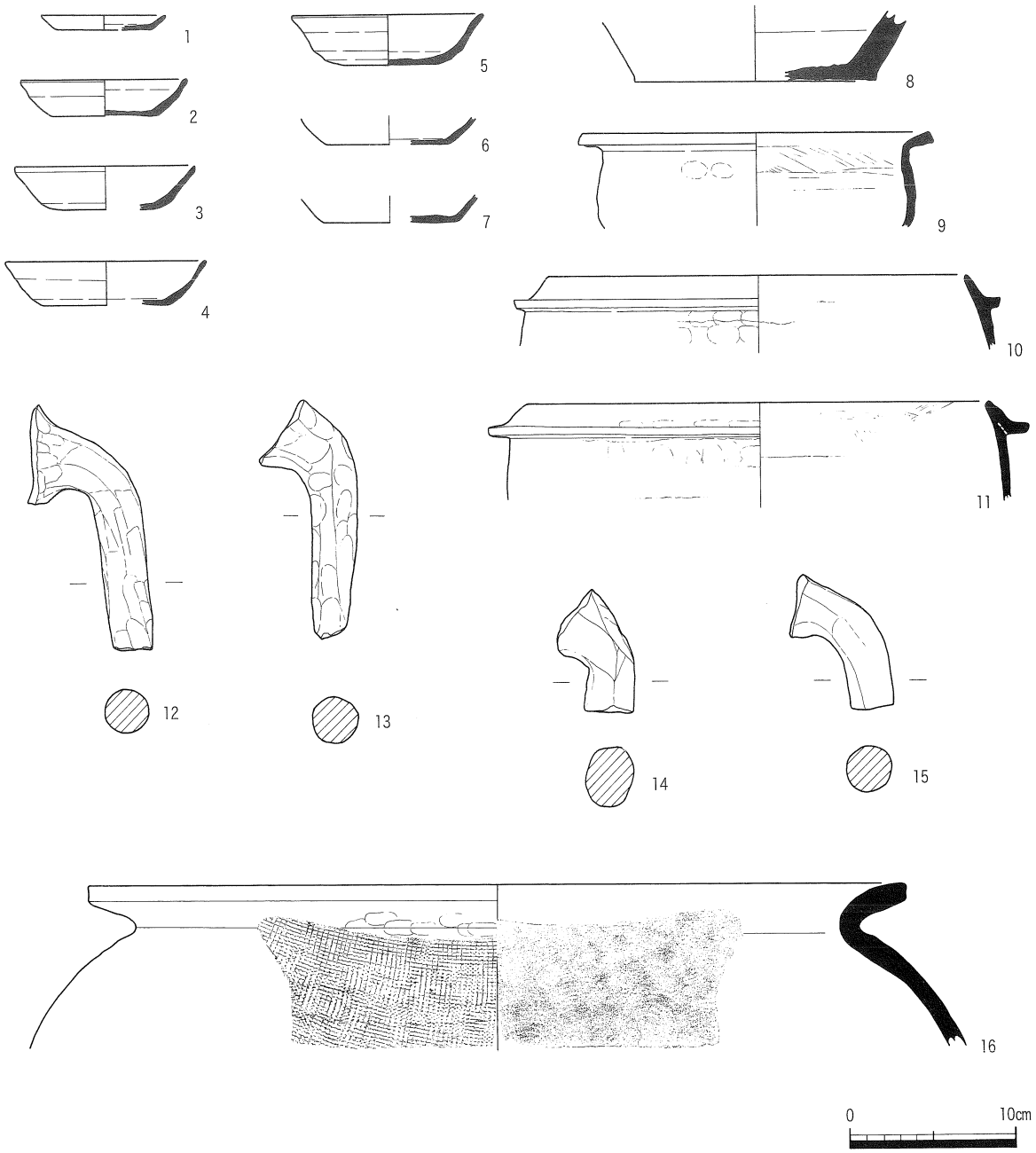
Ａ４～６区溝跡

ＳＤ－Ａ５－01

Ａ５区の北半からＡ４区の南西隅にかけて検出された溝跡である。検出レベルは標高4.1m前後，底面のレベルは標高3.45m前後を測る。検出幅は最大2.2m を測る。方位Ｎ－12°－Ｅを示す。断面はＵ字形をなし，埋土は４層に分割された。遺物は土師質土器，須恵器，亀山焼等，13世紀後半のものが中心に出土している他，人骨２体が確認された。

ＳＤ－Ａ５－01出土遺物

１は土師質土器皿である。外反する短い口縁部のもので，口径からすれば佐藤編年の皿ＢⅢ－3，4形式に該当する。２～５は土師質土器坏。形態及び口径から佐藤編年の坏ＤⅡ－５～７形式に該当する。6，7は土師器坏の底部。８は須恵器壷の底部。９は土師質土器の甕。器壁の薄い小型のもので，頚部内



第81図　ＳＤ－Ａ５－01出土遺物

面に斜め方向の刷毛目が残される。10～15は土師質土器足釜の口縁部及び脚部。16は須恵質の甕口縁部である。体部外面に細かな格子状の叩きが，その内面には同心円状の当て具痕が見られることから亀山産と考えられる。頚部から口縁部にかけての器壁が厚く，また外反の度合いが大きいことから13世紀末に比定される。

人骨（第82図，第４章分析結果参照）

Ａ５区北東隅においてＳＤ－Ａ５－01検出時に出土した。溝埋土の最上層で出土していることから，ほぼ溝が埋没した後に埋葬されたと考えられる。出土した人骨は２体分で，両体とも頭位を北に向けた屈葬の状態で検出された。また一方には墓石と考えられる柱状の石が胸部に乗った状態で出土している。当初，人骨の保存状態は良く歯並びまで揃った状況であったが，調査途中において，調査区横の用水路が決壊し，浸水したため出土時の状態を保つことができなかった。所属の年代であるが，ＳＤ－Ａ５－01が13世紀末以降に埋没すること，また上部の堆積層が後述するように15世紀中葉以降となることから14～15世紀の年代と考えられる。

また地元の人の話から，出土した地点は以前田んぼの中に集石が見られた所であることが分かった。鬼無・檀紙地区には塚の伝承がある集石が現在でも点在しており，本遺跡の調査結果から中世に所属する塚群であったことが推察される。

ＳＤ－Ａ４－03（第７－２図土層図参照）

Ａ５区の北東隅からＡ４区の南西隅にかけて検出された溝跡である。検出レベルは標高3.9～4.0m，底面のレベルは標高3.45～3.60mを測る。北側の上端部を検出できなかったが，Ａ４区東壁の堆積状況から幅約３ｍに推定される。方位Ｎ－２°－Ｅを示し，北部においてＳＤ－Ａ５－01から分岐するものと思われる。断面はＵ字形をなし，埋土は４層に分割された。堆積状況がＳＤ－Ａ５－01と同様であることから13世紀後半の所属時期が考えられる。

ＳＤ－Ａ５－02（第８－１図土層図参照）

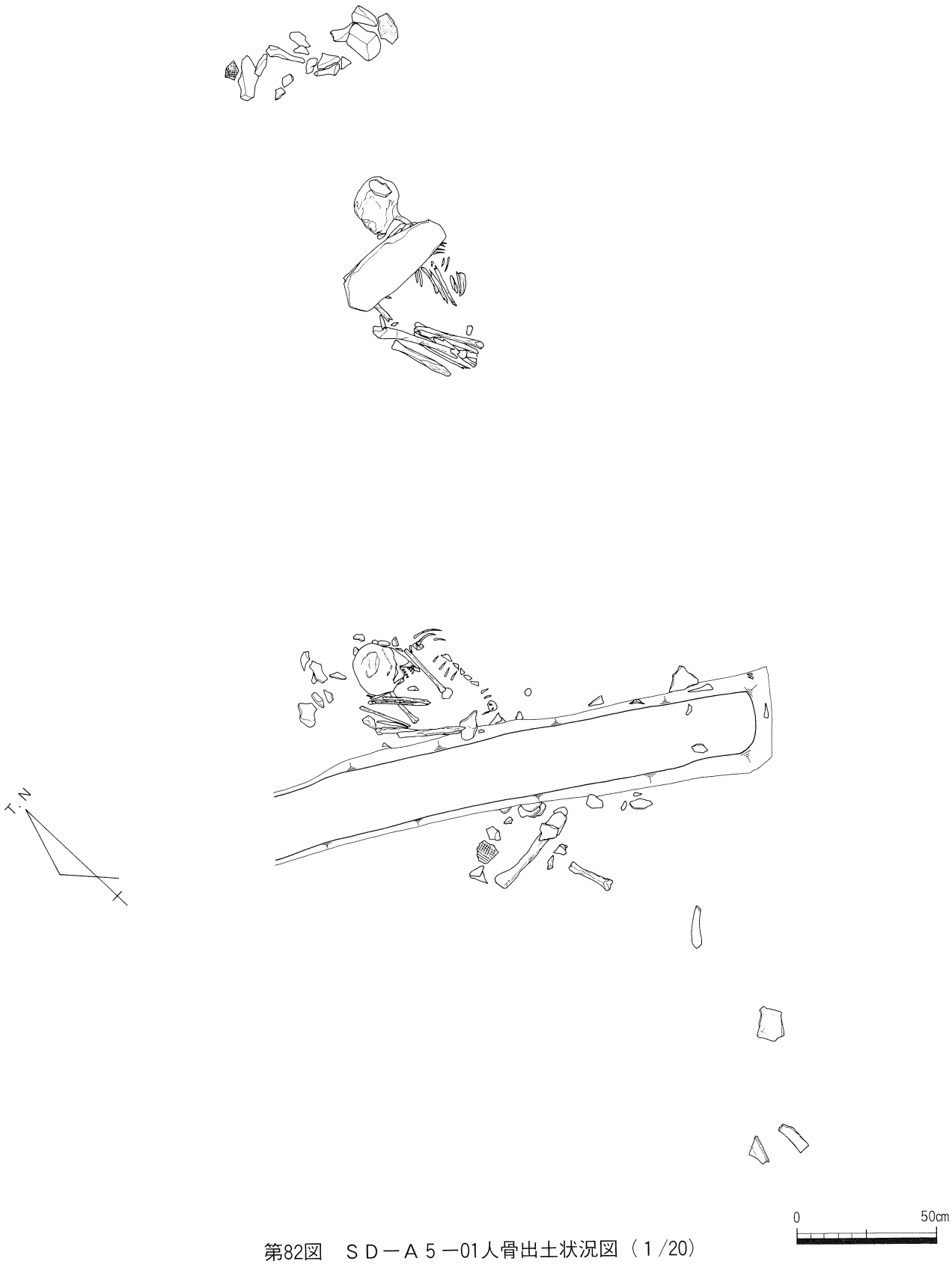
Ａ５区の中央部において検出された溝跡である。検出レベルは標高4.14～4.2m，底面のレベルは標高4.1mを測る。検出幅は0.6m前後で，検出延長は約6.5mである。方位Ｎ－７°－Ｅを示し，条里方向にほぼ合致する。断面は船底形をなし，埋土は灰黄色（2.5Y ７/２）シルト質極細砂の単層である。所属時期は堆積関係，埋土の特色から14～15世紀代に考えられる。

ＳＤ－Ａ５－03（第８－１図土層図参照）

Ａ５区の中央部においてＳＤ－Ａ５－02と並走して検出された溝跡である。検出レベルは標高4.15m前後，底面のレベルは標高4.03～4.1mを測る。検出幅は0.5m前後で，検出延長は約6.5mである。方位Ｎ－７°－Ｅを示し，条里方向にほぼ合致する。断面は船底形をなし，埋土は灰黄色（2.5Y ７/２）シルト質極細砂の単層である。所属時期は堆積関係，埋土の特色から14～15世紀代に考えられる。

ＳＤ－Ａ５－04（第８－１図土層図参照）

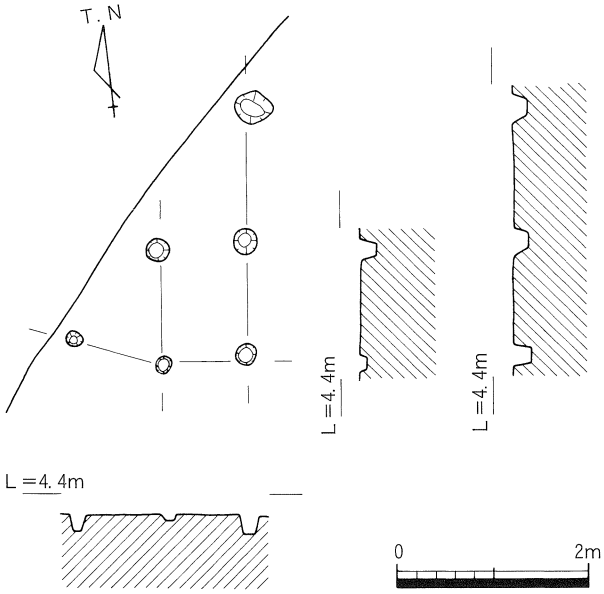
Ａ５区の南部において検出された溝跡である。検出レベルは標高4.2m前後，底面のレベルは標高4.11～4.15mを測る。検出幅は0.4m前後で，検出延長は約６ｍである。方位Ｎ－７°－Ｅを示し，条里方向にほぼ合致する。断面はＵ字形をなし，埋土は灰黄色（2.5Y ７/２）シルト質極細砂の単層である。所属時期は堆積関係，埋土の特色から14～15世紀代に考えられる。



第82図　ＳＤ－Ａ５－01人骨出土状況図（１/20）

ＳＢ－Ａ５－01

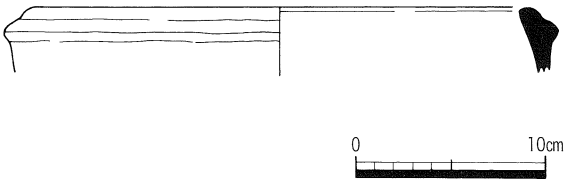
Ａ５区の南西部において検出された掘立柱建物跡である。北及び西面は調査区外となり南東部隅の２×２間分のみが確認できた。柱穴間の距離は南北方向で，1.2～1.5mを測り南端がやや狭くなる。東西方向では0.9m，1.0mを測り，西端の柱穴がずれた配置となる。伴出した遺物はないが切り合い関係でＳＤ－Ａ５－04に後出し，後述する遺構上面の堆積物と柱穴の埋土がほぼ同質と考えられることから15世紀中葉～16世紀前半の所属時期が考えられる。



第83図　ＳＢ－Ａ５－01平・断面図（１/80）

Ａ５区遺構面上部堆積層出土遺物

遺構面に至る人力掘削中に出土した土師質土器足釜の口縁部である。鍔と口縁部の境が不明瞭なもので，佐藤編年（佐藤1995）の足釜Ｃ類に該当し15世紀中葉～16世紀前半のものである。



第84図　Ａ５区遺構面上部堆積層出土遺物

ＳＤ－Ａ６－02（第８－２図土層図参照）

Ａ６区の北部において検出された溝跡である。検出レベルは標高4.4m前後，底面のレベルは標高約4.24mを測る。検出幅は1.7m前後で，検出延長は約５mである。方位Ｅ－21°－Ｓを示す。断面はＵ字形をなし，埋土は上層部においてにぶい黄橙色（10YR ６/３）シルト質極細砂が，下層部に褐灰色（10YR ４/１）シルトが堆積する。混入品と考えられる弥生時代前期の遺物が見られたが，その他の遺物は出土しなかった。所属時期は埋土の特色から古代後半～中世前半と考えられる。

ＳＤ－Ａ６－03（第８－２図土層図参照）

Ａ６区の中央部において検出された溝跡である。検出レベルは標高4.43m前後，底面のレベルは標高約4.29～4.40mを測る。検出幅は１m前後で，検出延長は約５mである。方位Ｅ－10°－Ｓを示し，条里方向に合致する。断面はＵ字形をなし，にぶい黄橙色（10YR ６/３）シルト質極細砂の単層である。所属時期は周辺の遺構及び埋土の特色から中世前半と考えられる。

ＳＤ－Ａ６－04（第８－２図土層図参照）

Ａ６区の南部において検出された溝跡である。検出レベルは標高4.45m前後，底面のレベルは標高約4.3mを測る。検出幅は1.5m前後で，検出延長は約7.5mである。方位Ｅ－12°－Ｓを示し，条里方向に合致する。断面はＵ字形をなし，埋土は３分割される。所属時期は周辺の遺構及び埋土の特色から中世前半と考えられる。

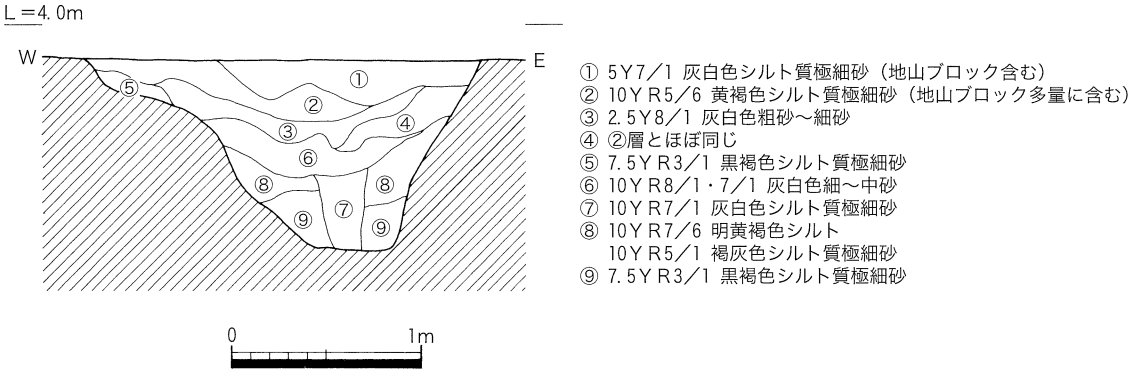
ＳＤ－Ａ６－05（第８－２図土層図参照）

Ａ６区の南部においてＳＤ－Ａ６－04と並走して検出された溝跡である。検出レベルは標高4.45m前後，底面のレベルは標高約4.35mを測る。検出幅は１m前後で，検出延長は約８mである。方位Ｅ－12°－Ｓを示し，条里方向に合致する。断面は逆台形状をなし，埋土は褐灰色（10YR ４/１）シルトの単層である。所属時期は周辺の遺構及び埋土の特色から中世前半と考えられる。

近世以降及び時期不明の遺構・遺物

ＳＤ－Ａ１－01（ＳＤ－Ａ４－01）

Ａ１区北部及びＡ４区南部において検出した溝跡である。Ａ１区における検出レベルは標高3.79～3.87m，底面レベル標高2.72～3.00m，Ａ４区における検出レベルは標高3.6前後m，底面レベル標高2.65m前後を測る。方位は約Ｎ－15°－Ｗを示し，旧河道域の地形に沿って南東へ下る。幅前後２ｍ，深さ１ｍ以上を測り，断面はＶ形若しくは逆台形状で中位に段が付く。埋土は下位では短期間に埋め戻した痕跡が窺え，また上位では中世水田耕作時の撹乱層が見られた。出土した遺物は僅かで，弥生時代前期の土器細片と撹乱層より混入したと考えられる鍋等の土師質土器片の数点である。調査時の状況では環濠と同時期か後出し，中世水田跡よりは先行するものに考えられたが，層位関係は明確でない。溝跡の規模及びＳＨ－Ａ１－01との関係から更に外側の環濠が想定される。またA3, D区において平断面の類似した溝跡が旧河道に沿って検出されていることからすれば，古代の水路とも考えられる。



第85図　ＳＤ－Ａ１－01断面図

ＳＤ－Ａ１－08（第４図土層図面参照）

Ａ１区の南東隅において検出された溝跡である。底部に拳大の石が配されており，暗渠排水溝と考える。現有のコンクリート壁に沿うもので，現耕作土直下から掘削されていることから近代の所産と考えられる。

Ａ１区ピット群等

Ａ１区の環濠周辺部において，ピット及び土坑を検出した。いずれも削平をかなり受けており，平面上で建物跡等としては復原できない。出土遺物は土器細片の数点で所属の時期も明確ではない。

第２節　Ｂ調査区

概要

現況と調査区の分割（第90図参照）

Ｂ区は当遺跡の北部に位置し，条里呼称では香川郡10条18里21坪内に位置する。地図上で示される当地区周辺部は現地表面の標高およそ5.5m，現況は一部宅地を除き条里型に区画された水田等の耕作地として利用されている。

Ｂ区は現有道路，線路，コンクリート畦畔等により５分割される。調査時においては調査範囲を東西に分断するＪＲ予讃本線を境に東側を４－①及び②，西側を８～10区として調査を行ったが，本報告にあたりＢ１～Ｂ５区に再編した。

調査期間

Ｂ５区は一部Ａ区と調査を平行しながら平成９年８月11日～10月８日迄，Ｂ１～Ｂ３区は一部Ｃ区と調査を平行しながら平成９年11月11日～平成10年３月10日迄で行った。また宅地であったＢ４区については，Ｆ区と調査を平行して行い，平成10年５月28日～６月12日迄で行った。

調査の工程

調査は平成８年度に行った試掘により得られたデータを基に，概ね遺構面の上面までを重機により掘削しその後遺構の検出及び掘削を人力により行った。遺構等の測量はＢ4，5区については本体工事の測量図等を基準に，調査員及び補助員が測量を行った。またＢ１～Ｂ３区については航空測量を行った。

主な遺構（第90図参照）

Ｂ区の東端及び北西部ではＳＲ－Ｂ－01，2が確認されているが，これらの自然流路に挟まれた微高地上で遺構が検出されている。流路は共に中世までには埋没しており，Ａ３区より下るＳＲ－Ｂ－01内では中世溝跡（ＳＤ－Ｂ５－01～04）が検出されている。

弥生時代前期では，Ｂ１区北半を中心とし土坑が比較的密集して検出されている。Ａ区で確認された環濠集落との関連，性格が不明であるが，出土遺物から同時期の所属が考えられる。

古代・中世では10世紀代のピット，土坑がＢ２区の北西部においてまとまって検出された他，12～13世紀頃の掘立柱建物（ＳＢ－Ｂ５－01）が確認されたことから，Ｂ区の中央部がある期間においては居住地であったことが推察される。またＢ１区南東部，Ｂ５区北半においては条里方向に区画された小規模な溝跡が検出されている。

近世・近代ではＳＢ－Ｂ３－01やその廃絶に伴う遺物が出土したＳＫ－Ｂ３－01等が検出されている。出土遺物から18世紀後半～19世紀初頭の屋敷跡がＢ３区一画全体をほぼ占めていたと考えられる。

堆積状況（第91～94図参照）

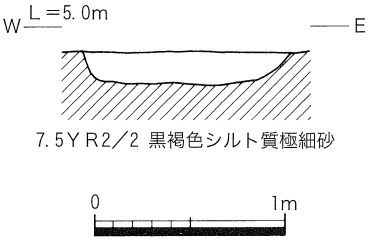
Ｂ１～２区の間は北，南の自然流路部分を除き微高地となっており，現耕作土以下，中～近世の遺物を包含した堆積層が薄く水平に堆積した後，黄色粘土層の直上部で弥生時代前期～近世の遺構を検出している。Ｂ３区では最下層部に褐灰色砂質シルト層が観察され，ＳＲ－Ｂ－02に繋がる埋没した自然流路が想定される。Ｂ４Ｂ５区間の北部ではＳＲ－Ｂ－01の影響か不安定な砂質土層の上面，また南部では微高地となり礫層及びシルト～シルト質極細砂層の上面が遺構検出面となっている。

弥生時代の遺構・遺物

土坑

ＳＫ－Ｂ１－04

Ｂ１区北部で検出した土坑である。平面形状は不定形で長軸方向に約1.3m，短軸方向に約0.9mを測る。深さは約0.25mである。断面は船底形をし，埋土は黒褐色（7.5YR ２/２）シルト質極細砂の単層である。所属時期は埋土の特色から弥生時代前期と考えられる。



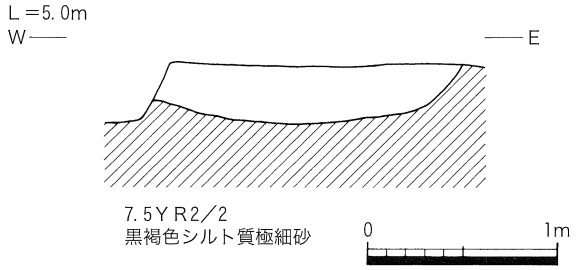
第86図　ＳＫ－Ｂ１－04断面図

ＳＫ－Ｂ１－05

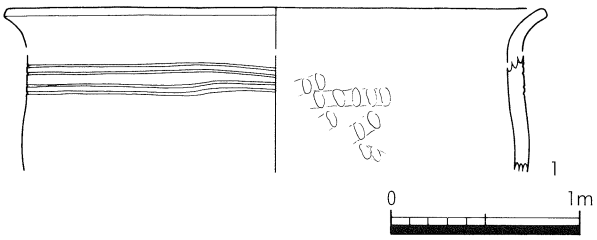
Ｂ１区西端で検出した土坑である。平面形状は不定形で長軸方向に約２m，短軸方向に約1.1mを測る。深さは約0.4mである。断面は逆台形をし，埋土は黒褐色シルト質極細砂（7.5YR ２/２）の単層である。所属時期は出土遺物及び埋土の特色から弥生時代前期と考えられる。

ＳＫ－Ｂ１－05出土遺物

１は環濠集落から南方へ距離をおく土坑内資料である。口縁部を欠損したやや大形の甕形土器であり，頸胴部境には半截竹管紋を２条施しており４条沈線に仕上がっている。さらには施紋帯下位を変換点に胴部がやや張る器形を有しており，口径を凌駕するほどの胴張りではないが器形から大形鉢としての可能性も示唆される。このことは器壁が厚く，内面をヘラミガキ調整によって仕上げていることからも窺い知ることができる。



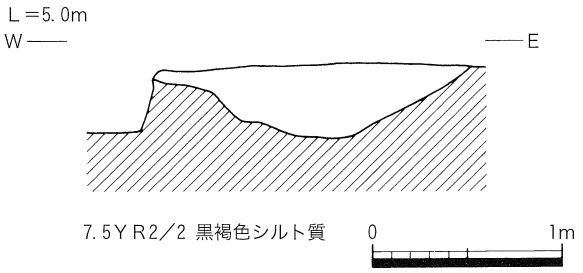
第87図　ＳＫ－Ｂ１－05断面図



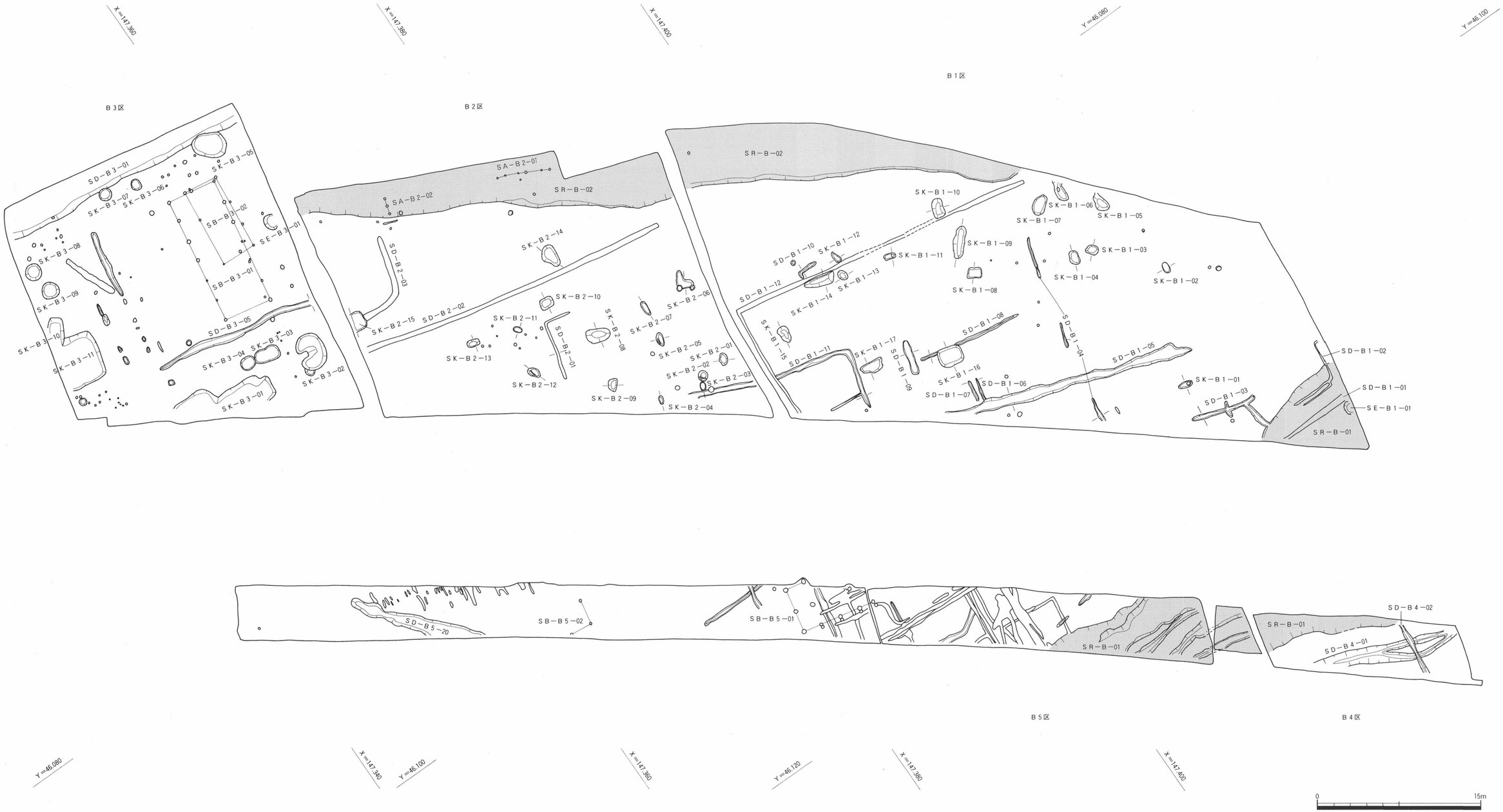
第88図　ＳＫ－Ｂ１－05出土遺物

ＳＫ－Ｂ１－06

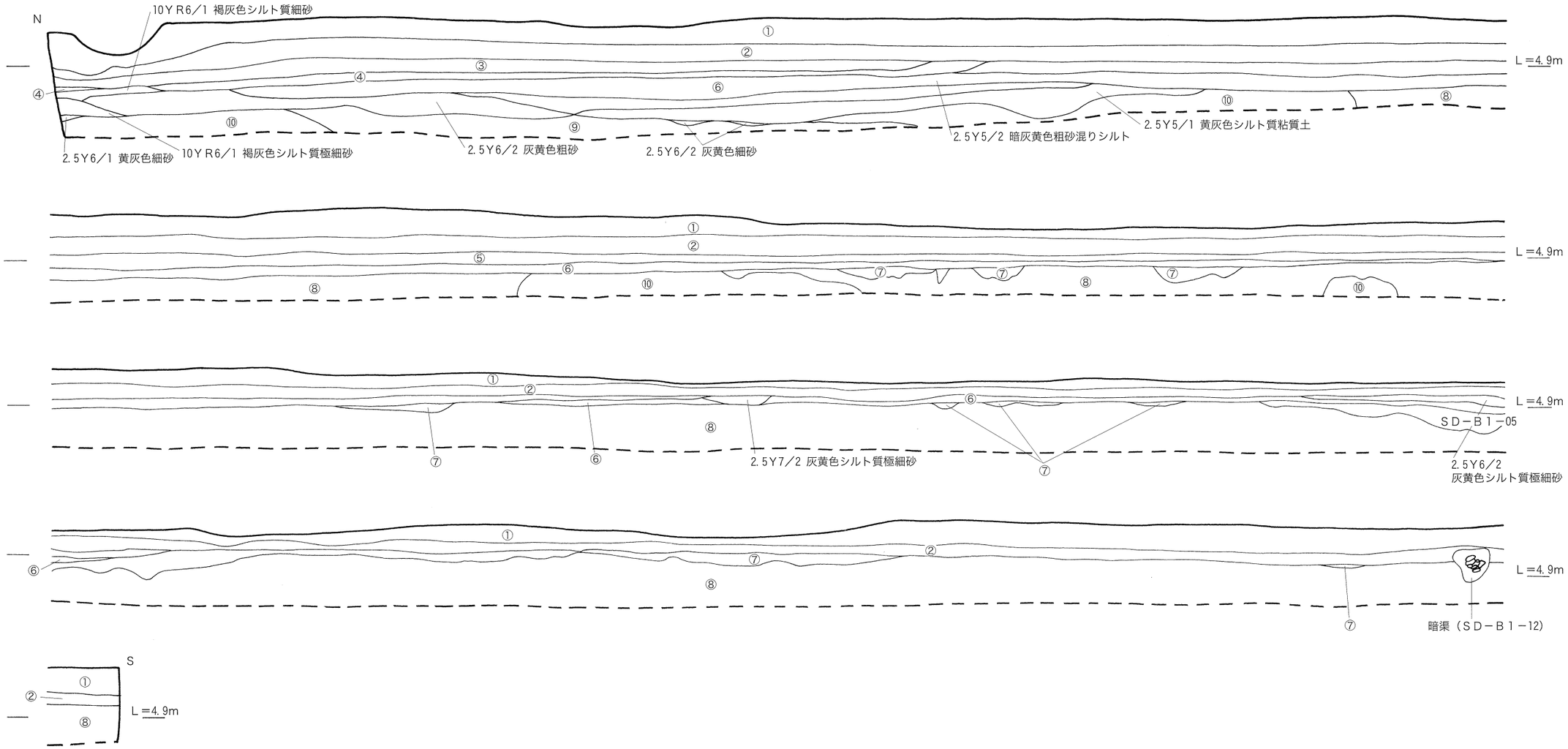
Ｂ１区西端で検出した土坑である。平面形状は不定形で長軸方向に約２m，短軸方向に約0.9mを測るが，一部未検出部分がある。深さは約0.3mである。断面は船底形をし，埋土は黒褐色（7.5YR ２/２）シルト質極細砂の単層である。所属時期は埋土の特色から弥生時代前期と考えられる。



第89図　ＳＫ－Ｂ１－06断面図



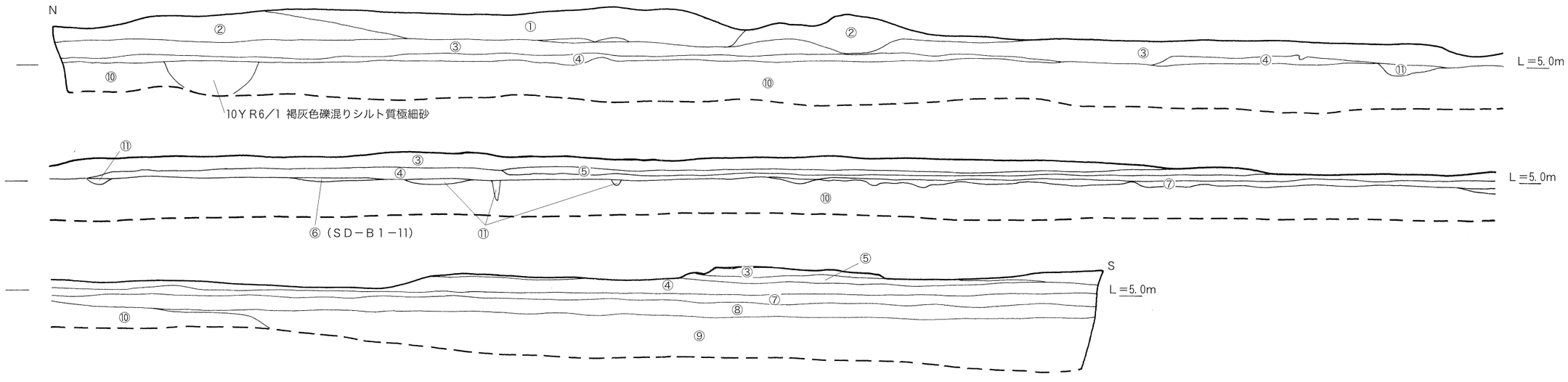
第90図　B区遺構配置図（1/300）



① 現耕作土
② 10YR6／2 灰黄橙色砂礫混り極細砂
③ 5YR6／6 橙色シルト質極細砂
④ 10YR7／1 灰白色細砂
⑤ 2.5Y6／2 灰黄色粗砂混りシルト質極細砂
⑥ 10YR6／1 褐灰色シルト質極細砂
⑦ 7.5YR4／2 灰褐色シルト質極細砂
⑧ 2.5YR6／6 明黄褐色シルト質粘質土（ベース）
⑨ 2.5YR6／6 明黄褐色砂礫混りシルト質粘質土
⑩ 2.5YR6／6 明黄褐色砂礫

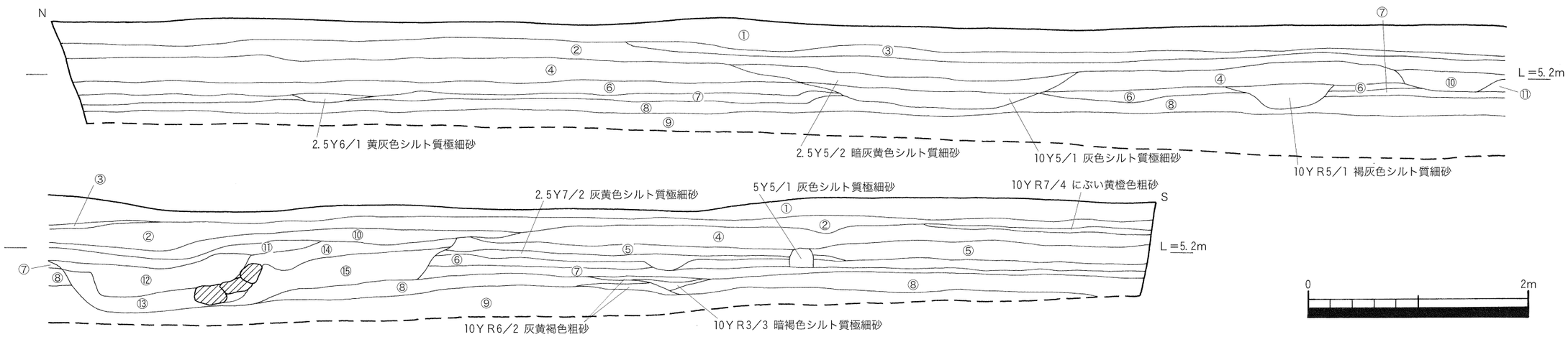
0　2m

第91図　B1区東壁土層図（1/40）



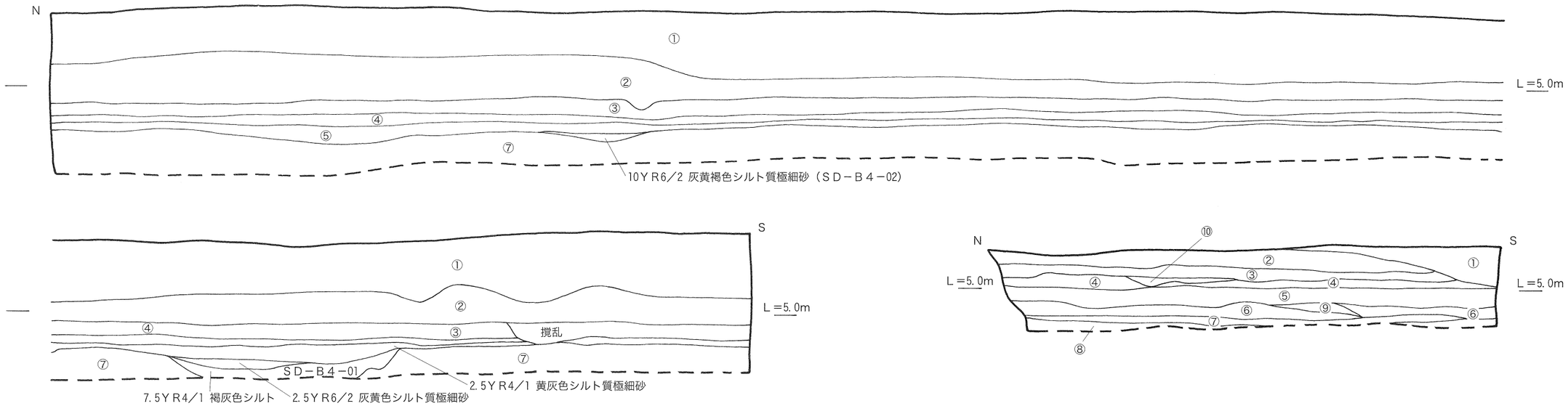
① 花崗土
② 現耕作土
③ 2.5Ｙ5／2 暗灰黄色礫混りシルト質極細砂
④ 7.5Ｙ6／2 灰オリーブ色シルト質極細砂
⑤ 2.5Ｙ6／2 灰黄色粗砂混りシルト質極細砂
⑥ 10ＹＲ6／1 褐灰色シルト質極細砂
⑦ 10ＹＲ5／1 褐灰色シルト質極細砂
⑧ 7.5ＹＲ5／6 2.5Ｙ5／1 明褐色・黄灰色シルト質極細砂
⑨ 7.5ＹＲ5／1 褐灰色砂質シルト
⑩ 2.5Ｙ7／6 浅黄色粘質シルト（ベース）
⑪ 7.5ＹＲ6／1 褐灰色粗砂混りシルト質極細砂

第92－１図　Ｂ２区東壁土層図（１/40）



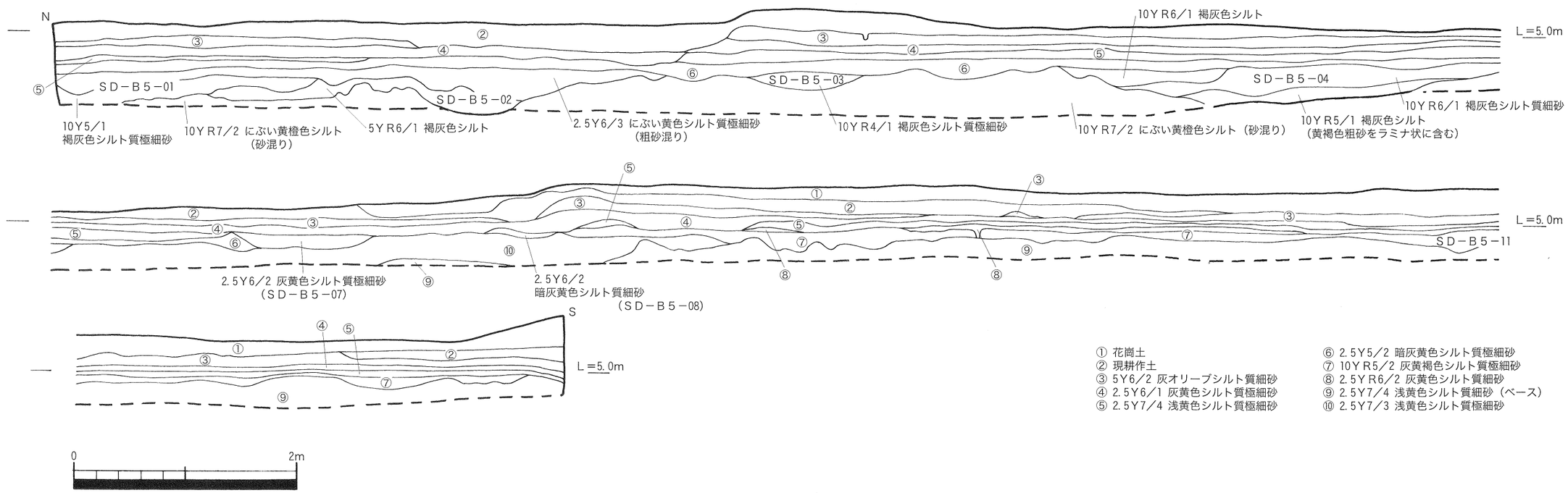
① 現耕作土
② 2.5Ｙ5／2 暗灰黄色礫混りシルト質極細砂
③ 10ＹＲ7／6　明黄褐色砂礫
④ 2.5Ｙ6／2 灰黄色礫混りシルト質極細砂
⑤ 5Ｙ6／2 灰オリーブ色シルト質極細砂
⑥ 10ＹＲ8／6 黄橙色シルト
⑦ 7.5ＹＲ5／3 にぶい褐色シルト
⑧ 10ＹＲ6／6 明黄褐色シルト質極細砂
⑨ 10ＹＲ5／1 褐灰色砂質シルト
⑩ 2.5Ｙ5／1 黄灰色シルト質極細砂
⑪ 5Ｙ8／4 淡黄色粗砂～砂礫
⑫ 10ＹＲ3／1 黒褐色砂混
⑬ Ｎ5／　灰色シルト
⑭ 2.5Ｙ7／3 浅黄色砂礫
⑮ 5Ｙ6／1 灰色砂礫
（⑪～⑮：ＳＫ－Ｂ３－01埋土）

第92－２図　Ｂ３区東壁土層図（１/40）



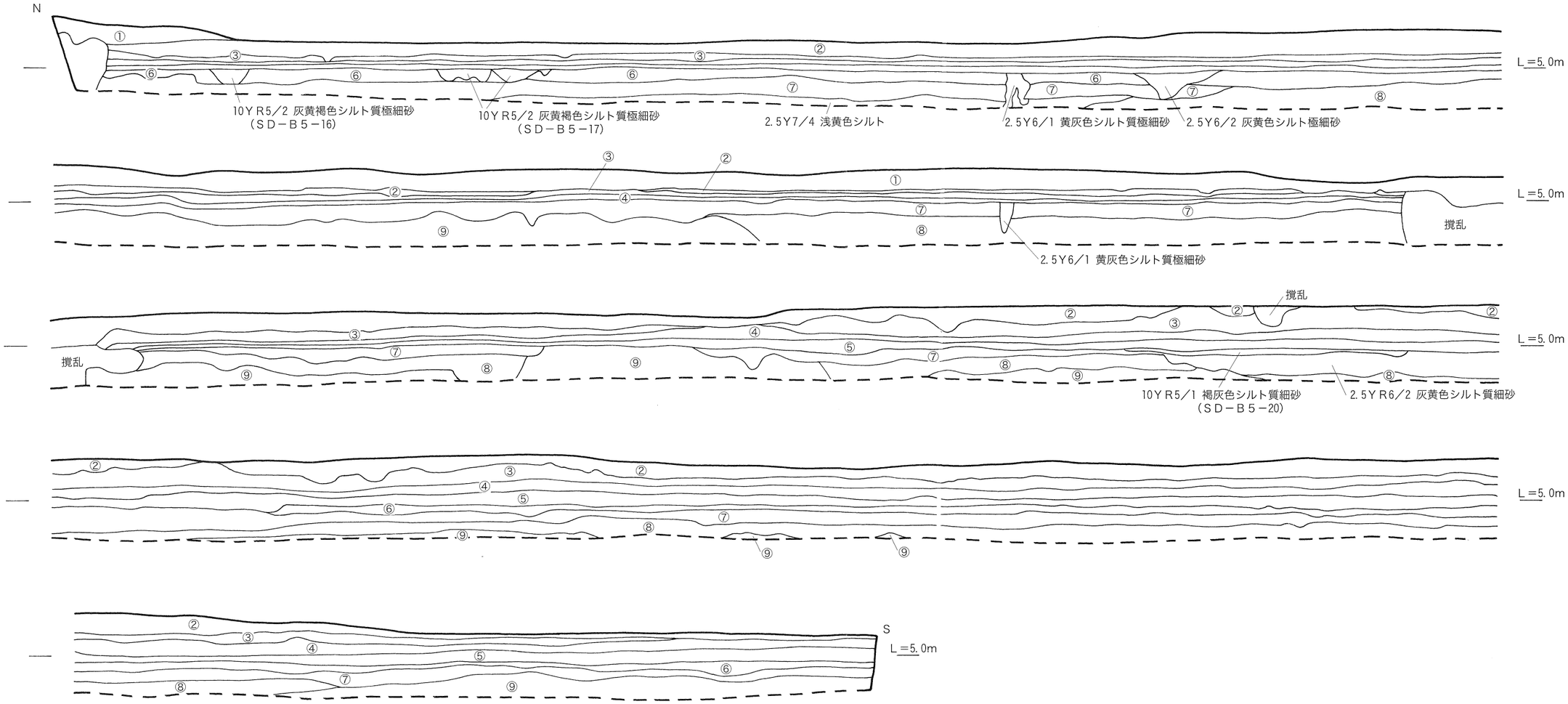
① 花崗土
② 現耕作土
③ 2.5Y6／2 灰黄色シルト質極細砂（床土）
④ 2.5Y6／4 にぶい黄色シルト質極細砂
⑤ 2.5Y6／1 黄灰色シルト
⑥ 10YR6／1 褐灰色砂混りシルト
⑦ 2.5Y7／2 灰黄色砂
⑧ 10YR6／6 明黄褐色砂質シルト（ベース）
⑨ 10YR7／1 灰白色砂
⑩ 2.5Y7／1 灰白色シルト質極細砂

第93－1図　B4区東壁土層図（1/40）

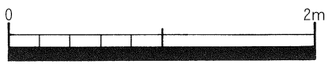


① 花崗土
② 現耕作土
③ 5Y6／2 灰オリーブシルト質細砂
④ 2.5Y6／1 灰黄色シルト質極細砂
⑤ 2.5Y7／4 浅黄色シルト質極細砂
⑥ 2.5Y5／2 暗灰黄色シルト質極細砂
⑦ 10YR5／2 灰黄褐色シルト質極細砂
⑧ 2.5YR6／2 灰黄色シルト質細砂
⑨ 2.5Y7／4 浅黄色シルト質細砂（ベース）
⑩ 2.5Y7／3 浅黄色シルト質極細砂

第93－2図　B5区北半東壁土層図（1/40）



① 花崗土
② 現耕作土
③ 5Y6／2 灰オリーブ色シルト質細砂
④ 2.5Y6／1 灰黄色シルト質極細砂
⑤ 2.5Y7／4 浅黄色シルト質極細砂
⑥ 10YR3／2 黒褐色シルト
⑦ 2.5Y6／3 にぶい黄褐色シルト質極細砂
⑧ 2.5Y7／4 浅黄色シルト
⑨ 2.5Y7／2 灰黄色砂礫



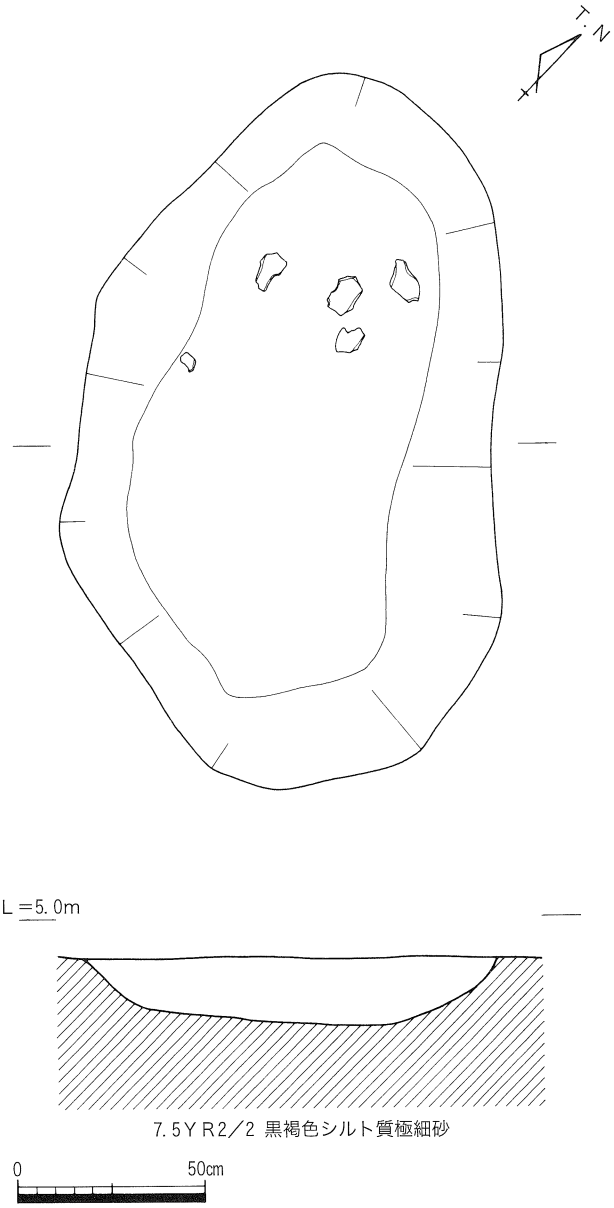
第94図　B５区南半東壁土層図（1/40）

ＳＫ－Ｂ１－07

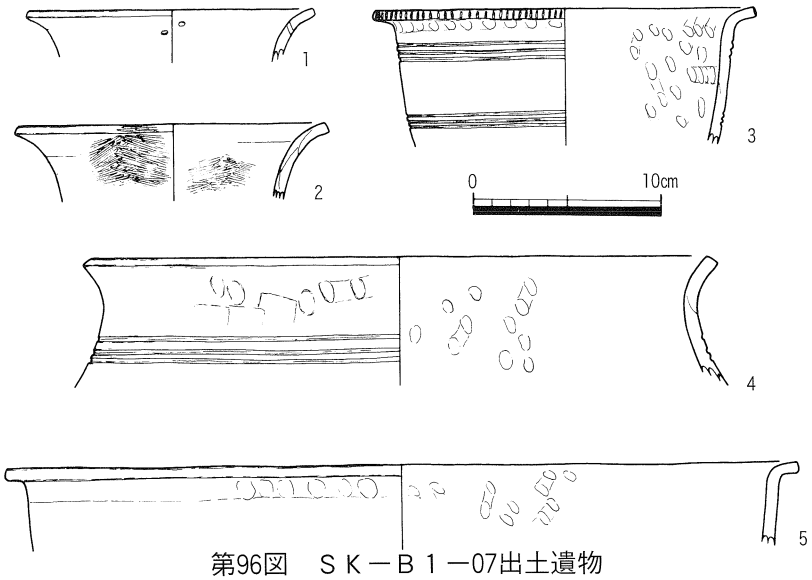
Ｂ１区西端で検出した土坑である。平面形状は不定形で長軸方向に約1.9m，短軸方向に約1.2mを測る。深さは約0.2mである。断面は船底形をし，埋土は黒褐色（7.5YR 2／2）シルト質極細砂の単層である。所属時期は出土遺物及び埋土の特色から弥生時代前期と考えられる。

ＳＫ－Ｂ１－07出土遺物

環濠集落から南方に位置する土坑資料であり，環濠資料と併存していた段階の資料群ではあるが，後段階に続く新しい要素を包含した資料を散見できる。１は緩やかに外反を示す口縁部をもった壺形土器であり，口縁部先端を折り曲げた屈曲部位に紐穴を穿孔している。小片資料のため紐穴は１箇所だけの確認ができるのみとなっている。ＳＰ－Ａ２－07の２にもみられるような紐穴を伴う土器とセットとなる蓋形土器は本遺跡出土土器中には確認することができなかったが，その存在は示唆される。２は１と同様の口縁部先端を屈曲させたプロポーションを呈する壺形土器であり，内・外面を横方向のヘラミガキ調整を口縁端部まで精緻に施している。また口縁部成形を一部内傾接合で粘土の積み上げを行っているのが観察できる。３はナデ調整で成形した甕形土器であり，如意形口縁にはしっかりとした刻目を配している。頸胴部と胴部中央には各々近接した篦描沈線を３条巡らしており，このような沈線紋帯を構成していると沈線紋帯間には山形紋か複線山形紋の充塡を基調とするが，本資料にとっては特殊紋様を採用せずに欠落した姿で終止している。こうした山形紋の欠落現象からこの紋様構成が一般化されていない段階と考えられる。４は外面板ナデ調整，内面ナデ調整で成形した大形壺で，口縁部を折り曲げる際の指頭圧痕が外面に残されており，頸胴部境の内傾面には



第95図　ＳＫ－Ｂ１－07平断面図

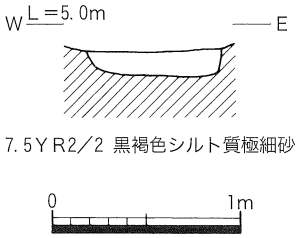


第96図　ＳＫ－Ｂ１－07出土遺物

やや幅広のしっかりとした篦描沈線を３条施紋している。５はナデ調整で成形した大形鉢であるが，口縁部形態が如意形というよりもむしろ逆Ｌ字状に近い屈曲度を示し，後出する属性である逆Ｌ字状口縁形態に類似する様相を持ち合わせている。鉢形土器は逆Ｌ字状口縁形態を甕形土器よりも若干早い段階から採用していると類推されるが，その傾向は示唆されるものの現時点では断定されるものではない。しかし３にみられる紋様構成と併せて新出する要素を随所に確認することができる。

ＳＫ－Ｂ１－08

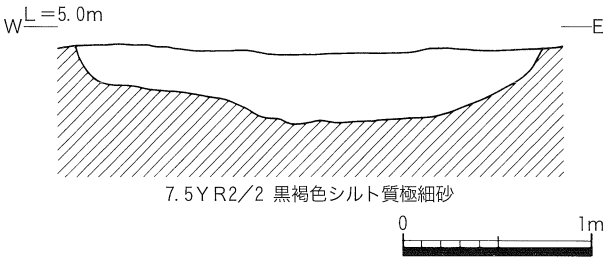
Ｂ１区中央部で検出した土坑である。平面形状は不定形で長軸方向に約1.3m，短軸方向に約0.9mを測る。深さは約0.15mである。断面は船底形をし，埋土は黒褐色（7.5YR ２/２）シルト質極細砂の単層である。所属時期は埋土の特色から弥生時代前期と考えられる。



第97図　ＳＫ－Ｂ１－08断面図

ＳＫ－Ｂ１－09

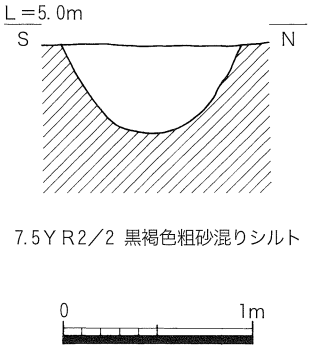
Ｂ１区中央部で検出した土坑である。平面形状は不定形で長軸方向に約３m，短軸方向に約1.1mを測る。深さは約0.4mである。断面は船底形をし，埋土は黒褐色（7.5YR ２/２）シルト質極細砂の単層である。所属時期は埋土の特色から弥生時代前期と考えられる。



第98図　ＳＫ－Ｂ１－09断面図

ＳＫ－Ｂ１－10

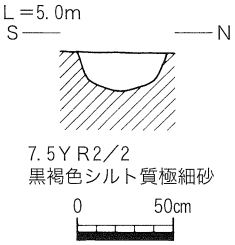
Ｂ１区西部で検出した土坑である。平面形状は不定形で長軸方向に約1.8m，短軸方向に約１mを測る。深さは約0.5mである。断面はＵ字形をし，埋土は黒褐色（7.5YR ２/２）粗砂混じりシルトの単層である。所属時期は埋土の特色から弥生時代前期と考えられる。



第99図　ＳＫ－Ｂ１－10断面図

ＳＫ－Ｂ１－12

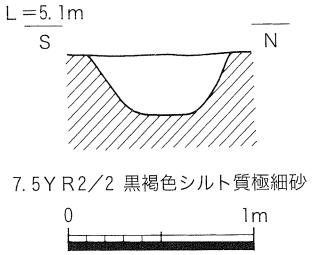
Ｂ１区南部で検出した土坑である。平面形状は不定形で長軸方向に約1.1m，短軸方向に約0.5mを測る。深さは約0.2mである。断面はＵ字形をし，埋土は黒褐色（7.5YR ２/２）シルト質極細砂の単層である。所属時期は埋土の特色から弥生時代前期と考えられる。



第100図　ＳＫ－Ｂ１－12断面図

ＳＫ－Ｂ１－13

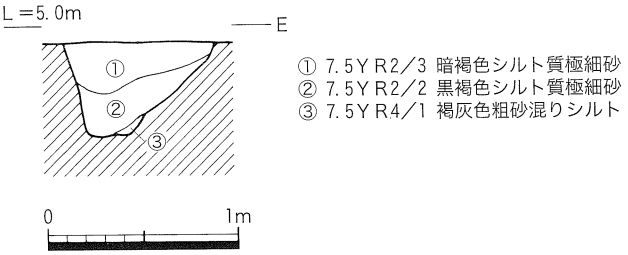
Ｂ１区南部で検出した土坑である。平面形状は不定形で長軸方向に約１m，短軸方向に約0.8mを測る。深さは約0.3mである。断面はＵ字形をし，埋土は黒褐色（7.5YR ２/２）シルト質極細砂の単層である。所属時期は埋土の特色から弥生時代前期と考えられる。



第101図　ＳＫ－Ｂ１－13断面図

ＳＫ－Ｂ１－14

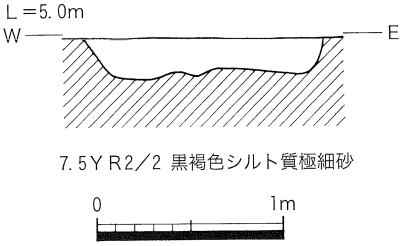
Ｂ１区南部で検出した土坑である。平面形状は不定形で長軸方向に約2.9m，短軸方向に約0.9mを測る。深さは約0.5mである。断面は逆台形をし，埋土は上層に暗褐色（7.5YR ３/３）シルト質極細砂，下層に黒褐色（7.5YR ２/２）シルト質極細砂等が堆積する。所属時期は埋土の特色から弥生時代前期と考えられる。



第102図　ＳＫ－Ｂ１－14断面図

ＳＫ－Ｂ１－15

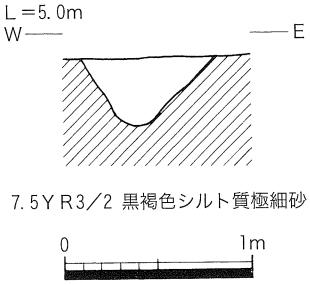
Ｂ１区南部で検出した土坑である。平面形状は不定形で長軸方向に約1.7m，短軸方向に約0.8mを測る。深さは約0.1mである。断面は逆台形をし，埋土は黒褐色（7.5YR ２/２）シルト質極細砂の単層である。所属時期は埋土の特色から弥生時代前期と考えられる。



第103図　ＳＫ－Ｂ１－15断面図

ＳＫ－Ｂ１－17

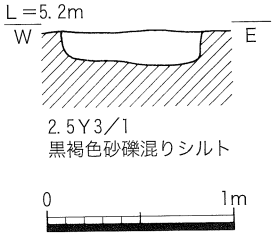
Ｂ１区東部で検出した土坑である。平面形状は不定形で長軸方向に約2.2m，短軸方向に約１mを測る。深さは約0.35mである。断面はＶ字形をし，埋土は黒褐色（7.5YR ３/２）シルト質極細砂の単層である。所属時期は埋土の特色から弥生時代前期と考えられる。



第104図　ＳＫ－Ｂ１－17断面図

ＳＫ－Ｂ２－06

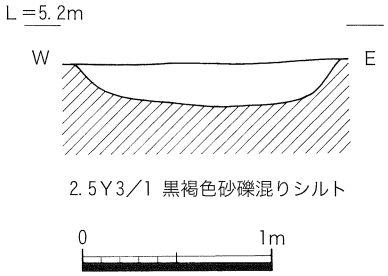
Ｂ２区北端部で検出した土坑である。平面形状は不定形で長軸方向に約1.8m，短軸方向に約1.5mを測る。深さは約0.2mである。断面は逆台形をし，埋土は黒褐色（2.5Y ３/１）砂礫混じりシルト堆積する。所属時期は，埋土の特色及び周囲の遺構から弥生時代前期と考えられる。



第105図　ＳＫ－Ｂ２－06断面図

ＳＫ－Ｂ２－07

Ｂ２区北部で検出した土坑である。平面形状は不定形で長軸方向に約1.5m，短軸方向に約0.5mを測る。深さは約0.2mである。断面は船底形をし，埋土は黒褐色（2.5Y ３／１）砂礫混じりシルト堆積する。所属時期は，埋土の特色及び周囲の遺構から弥生時代前期と考えられる。



第106図　ＳＫ－Ｂ２－07断面図

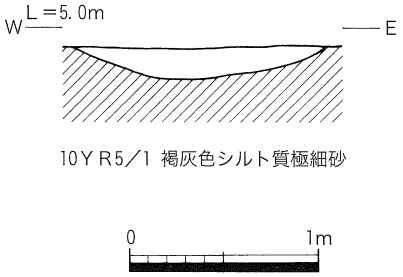
溝状遺構

ＳＤ－Ｂ５－20

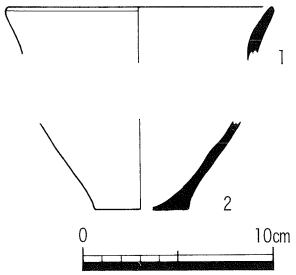
Ｂ５区の南部で検出された溝状の遺構である。検出レベルは標高4.9m前後で，底面のレベルは標高4.72～4.81mで緩やかに北東へ下る。平面の形状はほぼ直線状であるが，南西端で途切れる。断面は船底状であり，埋土は褐灰色（10YR ５／１）シルト質細砂の単層である。出土遺物から弥生時代後期～古墳時代にかけて埋没したと考えられる。

ＳＤ－Ｂ５－20出土遺物

１は土師器甕の口縁部片である。２は弥生土器甕の底部片である。



第107図　ＳＤ－Ｂ５－20断面図



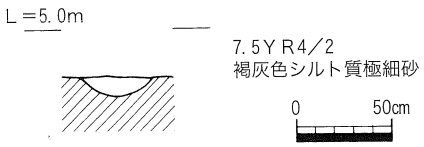
第108図　ＳＤ－Ｂ５－20
出土遺物

古代～中世の遺構・遺物

Ｂ１区溝跡

ＳＤ－Ｂ１－03

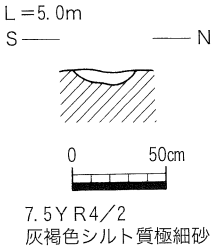
Ｂ１区北東隅において検出された溝跡である。検出レベルは標高4.69～4.76m，底面のレベルは標高4.55～4.68mを測る。方位は南北方向でＮ－17°－Ｅを示し，東西方向に直交する箇所とＳＲ－Ｂ１－01に下る流路が見られる。検出幅0.5m前後で，断面はＵ字形をなす。埋土は灰褐色（7.5YR 4／2）シルト質極細砂の単層である。遺物は出土していない。所属時期は埋土の特色と周辺の遺構・遺物からすれば古代末～中世前半と考えられる。



第109図　ＳＤ－Ｂ１－03断面図

ＳＤ－Ｂ１－04

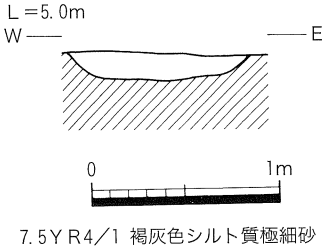
Ｂ１区中央部において，断続し検出された東西方向の溝跡である。検出レベルは標高4.85～4.89m，底面のレベルは標高4.75～4.85mを測る。方位はＥ－13°－Ｓ前後を示す。検出幅0.5m前後で，断面はＵ字形をなす。埋土は灰褐色（7.5YR 4／2）シルト質極細砂の単層である。遺物は出土していない。所属時期は埋土の特色と周辺の遺構・遺物からすれば古代末～中世前半と考えられる。



第110図　ＳＤ－Ｂ１－04断面図

ＳＤ－Ｂ１－05

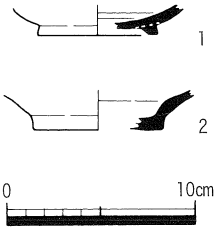
Ｂ１区東半部において検出された南北方向の溝跡である。検出レベルは標高4.83～4.92m，底面のレベルは標高4.75～4.85mを測る。方位はＮ－17°－Ｅを示す。検出幅約0.5～1.6mで，断面は逆台形をなす。埋土は褐灰色（7.5YR 4／1）シルト質極細砂の単層である。遺物は土師質土器片に混じり出土した10世紀代の２点を図化した。10世紀頃に開削され，中世前半に埋没したものと考えられる。



第111図　ＳＤ－Ｂ１－05断面図

ＳＤ－Ｂ１－05出土遺物

１は緑柚陶器椀の底部。貼付け高台で，畳付と高台裏を除き施釉されている。また見込みには凹線による圏線が２条巡らされる。２は土師器坏の底部である。



第112図　ＳＤ－Ｂ１－05出土遺物

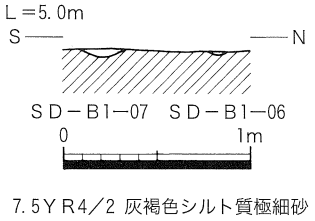
ＳＤ－Ｂ１－06

Ｂ１区東半部において検出された東西方向の溝跡である。検出できなかった部分があるが，ＳＤ－Ｂ１－05～ＳＤ－Ｂ１－08間を直交するものと考えられる。検出レベルは標高4.93m前後，底面のレベルは標高4.90m前後を測る。方位はＥ－13°－Ｓを示す。検出幅約0.1mで，断面は船底形をなす。埋土は灰褐色（7.5YR 4／2）シルト質極細砂の単層である。所属時期は埋土の特色と周辺の遺構・遺物からす

れば古代末～中世前半と考えられる。

ＳＤ－Ｂ１－07

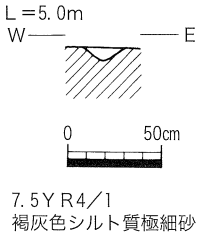
Ｂ１区東半部において検出されたＳＤ－Ｂ１－06と並走する溝跡である。ＳＤ－Ｂ１－06と同様に，ＳＤ－Ｂ１－05～ＳＤ－Ｂ１－08間を直交するものに考えられる。検出レベルは標高4.93m前後，底面のレベルは標高4.90m前後を測る。方位はＥ－13°－Ｓを示す。検出幅約0.2mで，断面は船底形をなす。埋土は灰褐色（7.5YR 4／2）シルト質極細砂の単層である。所属時期は埋土の特色と周辺の遺構・遺物からすれば古代末～中世前半と考えられる。



第113図　ＳＤ－Ｂ１－06，07断面図

ＳＤ－Ｂ１－08

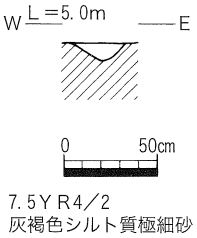
Ｂ１区中央部において検出された南北方向の溝跡である。検出レベルは標高4.93m前後，底面のレベルは標高4.86m前後を測る。方位はＮ－12°－Ｅを示す。検出幅約0.2mで，断面はＵ字形をなす。埋土は褐灰色（7.5YR 4／1）シルト質極細砂の単層である。所属時期は埋土の特色と周辺の遺構・遺物からすれば古代末～中世前半と考えられる。



第114図　ＳＤ－Ｂ１－08断面図

ＳＤ－Ｂ１－10

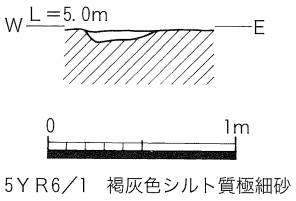
Ｂ１区南部において検出された溝跡である。平面がＬ字形をなし，南北及び東西方向の溝が交差する箇所に考えられるが，延長部は未検出である。検出レベルは標高4.93m前後，底面のレベルは標高4.73～4.84mを測る。検出幅約0.2～0.4mで，断面はＵ字形をなす。埋土は灰褐色（7.5YR 4／2）シルト質極細砂の単層である。所属時期は埋土の特色と周辺の遺構・遺物からすれば古代末～中世前半と考えられる。



第115図　ＳＤ－Ｂ１－10断面図

ＳＤ－Ｂ１－11

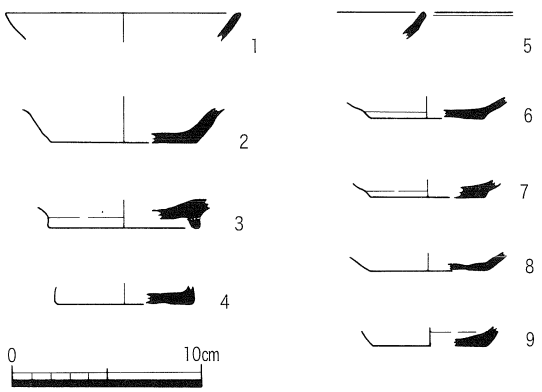
Ｂ１区南東部～Ｂ２区北東隅において検出されたＬ字形の溝跡である。検出レベルは標高4.91～5.03m，底面のレベルは標高4.84～4.96mを測る。方位は南北方向ではＮ－15°－Ｅを示し，東西方向へほぼ直角に折れる。またＳＤ－Ｂ１－08のほぼ延長上に南北方向に分岐した溝が見られる。検出幅約0.2～0.4mで，断面は船底形をなす。埋土は褐灰色（7.5YR 6／1）シルト質極細砂の単層である。遺物は10～12世紀頃の坏，椀が出土している。



第116図　ＳＤ－Ｂ１－11断面図

ＳＤ－Ｂ１－11出土遺物

１は須恵器坏の口縁部である。2，6，7は土師器坏の底部。このうち6，7は平底高台をもつもの。３は黒色土器椀の底部である。４は土師器椀の底部。平高台で回転ヘラ切りがされる。５は土師器坏口縁部である。

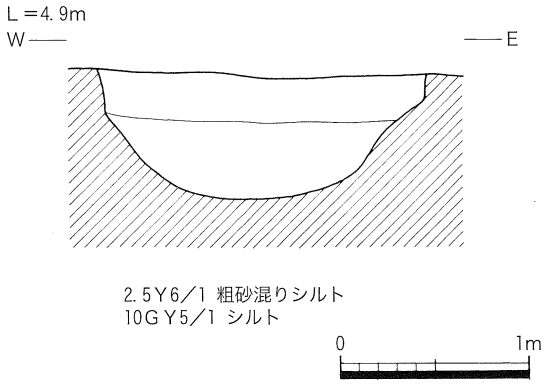


第117図　ＳＤ－Ｂ１－11出土遺物

Ｂ１区土坑，井戸跡

ＳＥ－Ｂ１－01

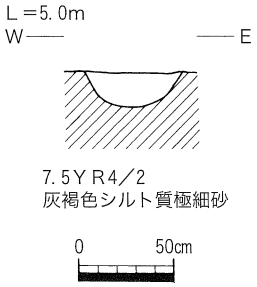
Ｂ１区北東隅で検出された井戸である。直径約1.7mの円形をなすものと考えられるが，半分は調査区外となり未検出である。検出レベルは標高約4.7～4.8mで，深さは約0.6mである。埋没した自然流路上に掘削され，また底面の掘削が砂礫層を超えて見られることから素掘りの井戸と考える。埋土は２層に分割される。時期の特定できる出土遺物はなく，堆積関係から中・近世の所産と考えられる。



第118図　ＳＥ－Ｂ１－01断面図

ＳＫ－Ｂ１－01

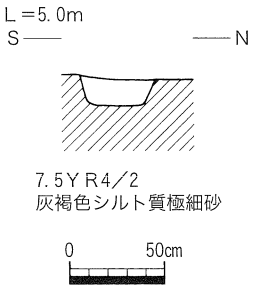
Ｂ１区北部で検出した土坑である。平面形状は楕円形で長軸方向に約1.4m，短軸方向に約0.6mを測る。深さは約0.15～0.2mで北端の底面が窪む。断面はＵ字形をし，埋土は灰褐色（7.5YR ４／２）シルト質極細砂の単層である。所属時期は埋土の特色から古代末～中世前半と考えられる。



第119図　ＳＫ－Ｂ１－01断面図

ＳＫ－Ｂ１－02

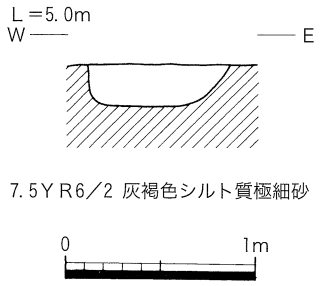
Ｂ１区北部で検出した土坑である。平面形状は隅丸方形で長軸方向に約1.1m，短軸方向に約0.7mを測る。深さは約0.25mである。断面は逆台形をし，埋土は灰褐色（7.5YR ４／２）シルト質極細砂の単層である。所属時期は埋土の特色から古代末～中世前半と考えられる。



第120図　ＳＫ－Ｂ１－02断面図

ＳＫ－Ｂ１－03

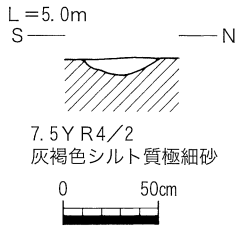
Ｂ１区北部で検出した土坑である。平面形状は隅丸方形で長軸方向に約1.2m，短軸方向に約0.9mを測る。深さは約0.25mである。断面は船底形をし，埋土は灰褐色（7.5YR 6／2）シルト質極細砂の単層である。所属時期は埋土の特色から古代末～中世前半と考えられる。



第121図　ＳＫ－Ｂ１－03断面図

ＳＫ－Ｂ１－11

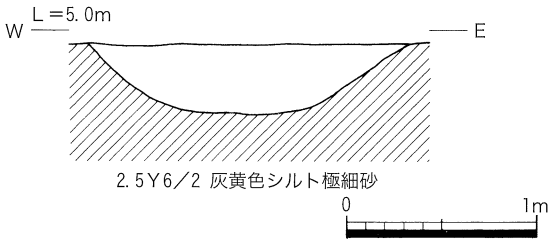
Ｂ１区南部で検出した土坑である。平面形状は楕円形で長軸方向に約1.1m，短軸方向に約0.4mを測る。深さは約0.15mである。断面は船底形をし，埋土は灰褐色（7.5YR 4／2）シルト質極細砂の単層である。所属時期は埋土の特色から古代末～中世前半と考えられる。



第122図　ＳＫ－Ｂ１－11断面図

ＳＫ－Ｂ１－16

Ｂ１区東部で検出した土坑である。平面形状は隅丸方形で長軸方向に約3.3m，短軸方向に約1.8mを測る。深さは約0.4mである。断面は船底形をし，埋土は灰黄色（2.5Y 6／2）シルト質極細砂の単層である。所属時期は埋土の特色から中世後半～近世と考えられる。

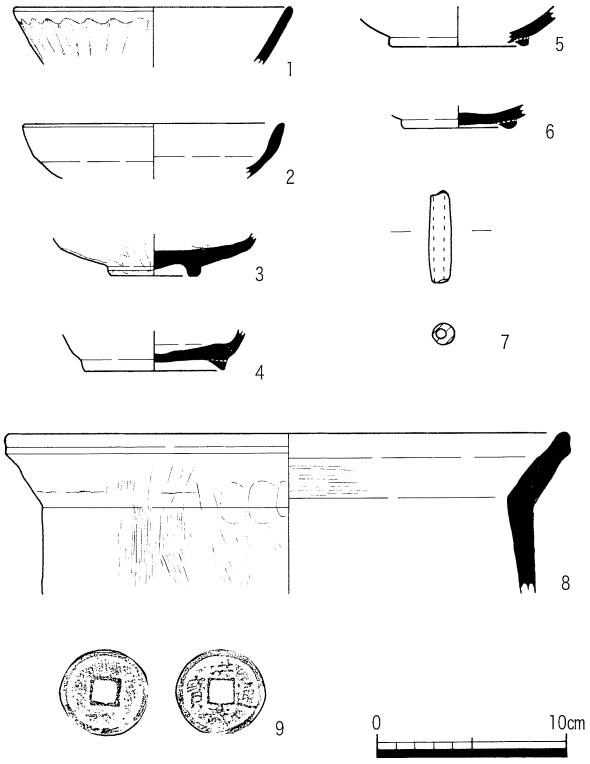


第123図　ＳＫ－Ｂ１－16断面図

Ｂ１区包含層出土遺物

Ｂ１区で遺構検出面までの掘削中に出土した遺物である。

１は青磁碗の口縁部。蓮弁文は簡略化されており，線刻により弁の先端を連続し描き，境界線を任意に分割するもの。16世紀前半のものである。２は須恵器坏の口縁部である。３は唐津灰釉皿の底部。16世紀末～17世紀初頭と考えられる。4，5，6は土師質土器碗の底部。６は焼成不良の須恵質土器にも考えられる。７は管状の土錘。８は土師器甕である。９は銅銭，洪武通宝である。明洪武元年（1368年）の鋳造。



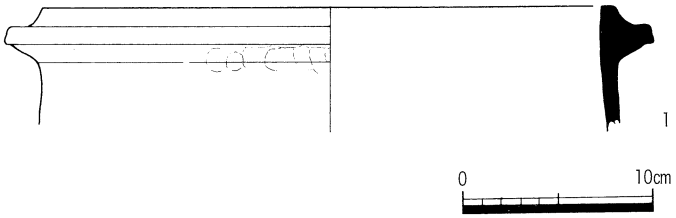
第124図　Ｂ１区包含層出土遺物

Ｂ２区ピット及び土坑群

Ｂ２区北東部において，ピット及び土坑がまとまって検出された。建物跡等に復原できなかったが，10世紀代の日用品が出土しており居住地もしくはその近接地と考えられる。柱穴は深さ10cm未満の浅いものが多く，埋土は褐灰色あるいは灰白色シルト質極細砂の単層である。以下，土坑については各々報告する。

Ｂ２区ピット出土遺物

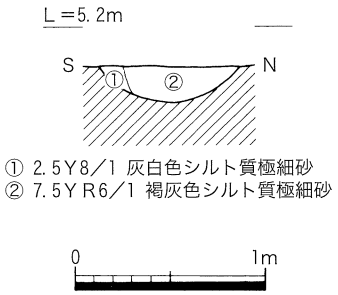
１は土師器羽釜である。北端中央部の柱穴より出土した。



第125図　Ｂ２区ピット出土遺物

ＳＫ－Ｂ２－01

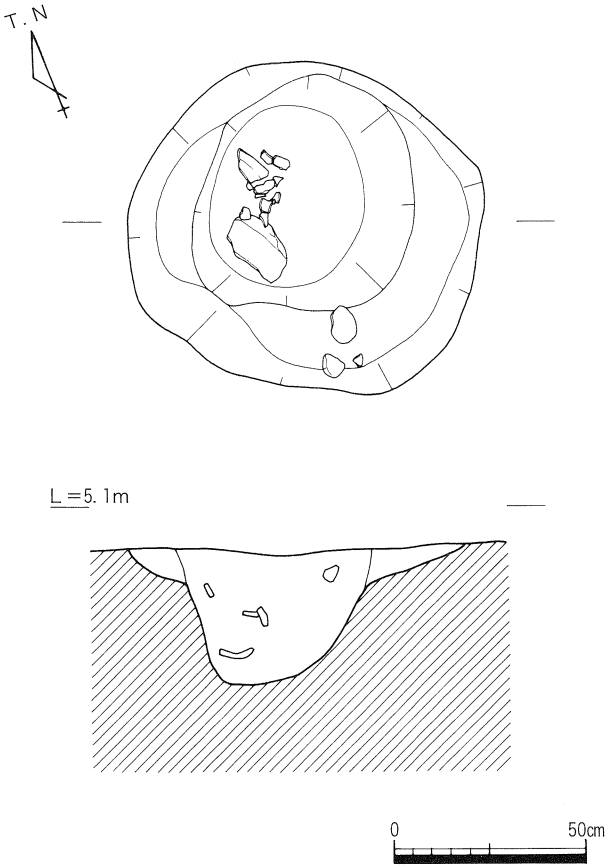
Ｂ２区北東部で検出した土坑である。平面形状は不定形で長軸方向に約1.1m，短軸方向に約0.9mを測る。深さは約0.2mである。断面は船底形をし，埋土は褐灰色（7.5YR 6／1）シルト質極細砂及び灰白色（2.5Y 8／1）シルト質極細砂が堆積する。所属時期は埋土の特色から古代末～中世前半と考えられる。



第126図　ＳＫ－Ｂ２－01断面図

ＳＫ－Ｂ２－02

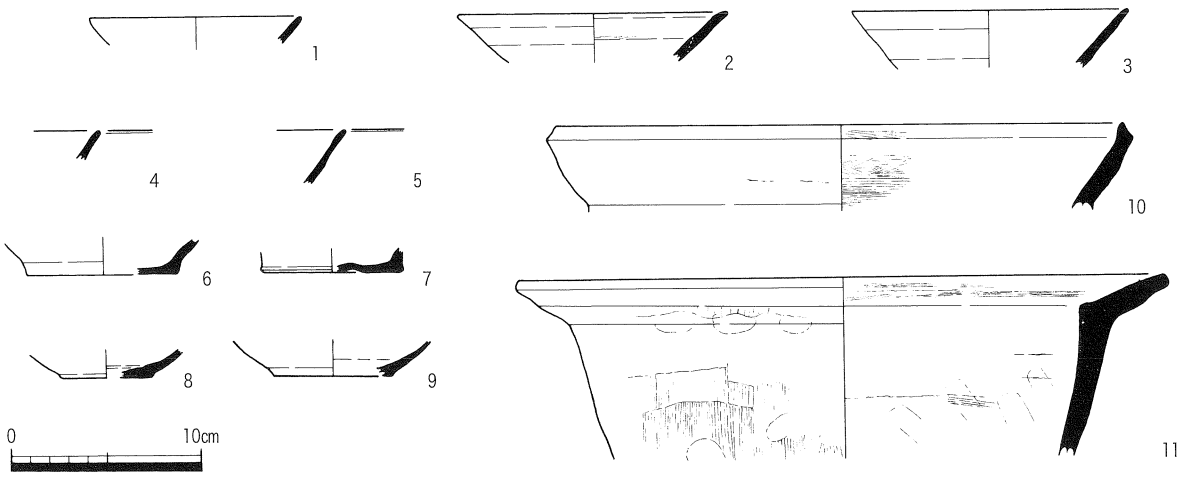
Ｂ２区北東部で検出した土坑である。平面形状はほぼ円形で長軸方向に約1.9m，短軸方向に約1.8mを測る。深さは約0.35mであり，中央部が1.2mの円形状に窪む。浅い縁辺部に埋め戻しの痕が見られ，遺物が炭，焼土粒の混じった灰黄褐色（10YR 4／2）シルト質極細砂より出土している。出土した土器片は10世紀代のものである。



第127図　ＳＫ－Ｂ２－01平・断面図

ＳＫ－Ｂ２－02出土遺物

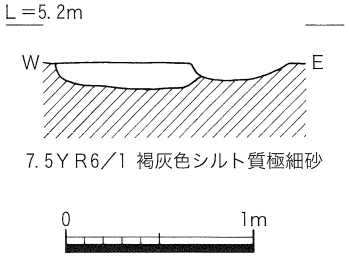
１～５は土師器坏の口縁部で直線的に体部が開くもの。６～９は土師器坏の底部である。７は平底の高台をもち，その他も底部はやや段状となる。10，11は土師器甕である。胎土はきめ細かく，刷毛目調整も丁寧にされている。



第128図　ＳＫ－Ｂ２－02出土遺物

ＳＫ－Ｂ２－03

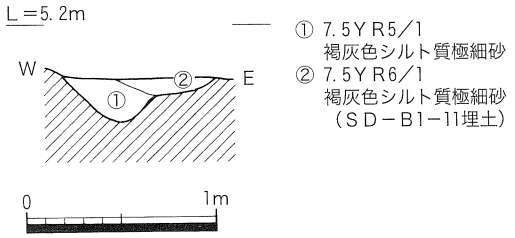
Ｂ２区北東部で検出した土坑である。平面形状は楕円形で長軸方向に約0.8m，短軸方向に約0.5mを測る。深さは約0.15mである。断面は船底形をし，埋土は褐灰色（7.5YR 6／1）シルト質極細砂の単層である。ＳＤ－Ｂ１－11に切り合いで先行する。所属時期は，埋土の特色及び周囲の遺構との関係から10世紀代と考えられる。



第129図　ＳＫ－Ｂ２－03断面図

ＳＫ－Ｂ２－04

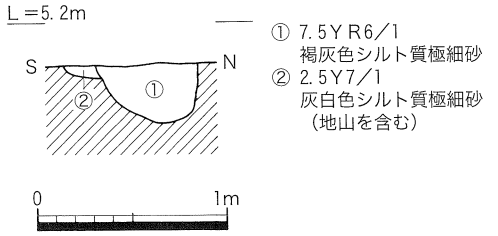
Ｂ２区東端部で検出した土坑である。平面形状は楕円形で長軸方向に約0.8m，短軸方向に約0.3mを測る。深さは約0.2mである。断面はＵ字形をし，埋土は褐灰色（7.5YR 5／1）シルト質極細砂の単層である。所属時期は，埋土の特色及び周囲の遺構との関係から10世紀代と考えられる。



第130図　ＳＫ－Ｂ２－04断面図

ＳＫ－Ｂ２－05

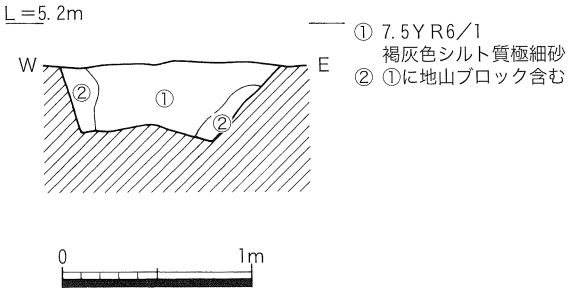
Ｂ２区北部で検出した土坑である。平面形状は楕円形で長軸方向に約1.2m，短軸方向に約0.6mを測る。深さは約0.2mである。断面はＵ字形で，西側の縁辺に段が見られる。埋土は褐灰色（7.5YR 6／1）シルト質極細砂及び，灰白色（2.5Y 7／1）シルト質極細砂が堆積する。所属時期は，埋土の特色及び周囲の遺構との関係から10世紀代と考えられる。



第131図　ＳＫ－Ｂ２－05断面図

ＳＫ－Ｂ２－08

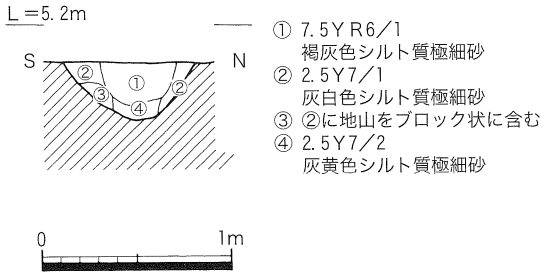
Ｂ２区東部で検出した土坑である。平面形状は楕円形で長軸方向に約2.2m，短軸方向に約1.3mを測る。深さは約0.4mである。断面は逆台形をし，埋土は褐灰色（7.5YR 6／1）シルト質極細砂等の自然堆積物である。所属時期は，埋土の特色及び周囲の遺構との関係から10世紀代と考えられる。



第132図　ＳＫ－Ｂ２－08断面図

ＳＫ－Ｂ２－09

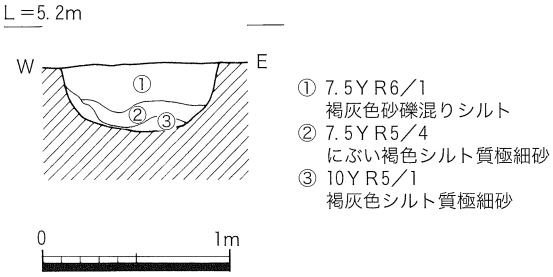
Ｂ２区東部で検出した土坑である。平面形状は不定形で長軸方向に約1.2m，短軸方向に約0.8mを測る。深さは約0.3mである。断面はＵ字形で，埋土は褐灰色（7.5YR 6／1）シルト質極細砂等の４層に分割される。所属時期は，埋土の特色及び周囲の遺構との関係から10世紀代と考えられる。



第133図　ＳＫ－Ｂ２－09断面図

ＳＫ－Ｂ２－10

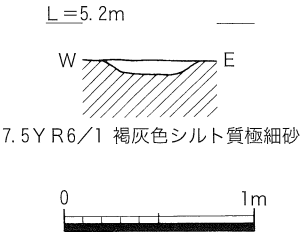
Ｂ２区中央部で検出した土坑である。平面形状は隅丸方形で長軸方向に約1.2m，短軸方向に約１mを測る。深さは約0.35mである。断面は逆台形で，埋土は自然埋没したと考えられる褐灰色（7.5YR ６／１）砂礫混じりシルト質極細砂等，３層が堆積する。所属時期は，埋土の特色及び周囲の遺構との関係から10世紀代と考えられる。



第134図　ＳＫ－Ｂ２－10断面図

ＳＫ－Ｂ２－11

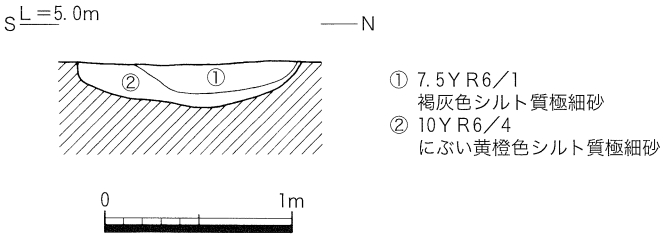
Ｂ２区中央部で検出した土坑である。平面形状は楕円形で長軸方向に約0.9m，短軸方向に約0.6mを測る。深さは約0.1mである。断面は逆台形で，埋土は褐灰色（7.5YR ６／１）シルト質極細砂の単層である。所属時期は，埋土の特色及び周囲の遺構との関係から10世紀代と考えられる。



第135図　ＳＫ－Ｂ２－11断面図

ＳＫ－Ｂ２－12

Ｂ２区東部で検出した土坑である。平面形状は楕円形で長軸方向に約1.4m，短軸方向に約0.9mを測る。深さは約0.25mである。断面は船底形で，埋土は褐灰色（7.5YR ６／１）シルト質極細砂等の自然堆積物である。所属時期は，埋土の特色及び周囲の遺構との関係から10世紀代と考えられる。



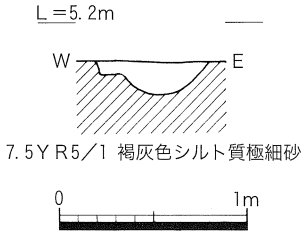
第136図　ＳＫ－Ｂ２－12断面図

ＳＫ－Ｂ２－13

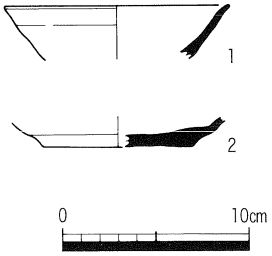
Ｂ２区南部で検出した土坑である。平面形状は楕円形で長軸方向に約1.2m，短軸方向に約0.7mを測る。深さは約0.2mである。断面はＵ字形で，西側の縁辺に段が見られる。埋土は褐灰色シルト質極細砂（7.5YR ５／１）の単層で，10世紀代の土師器が出土している。

ＳＫ－Ｂ２－13出土遺物

１は土師器坏の口縁部。直線的に開き体部で，口縁部は外反する。２は土師器坏の底部で，ヘラ切りがされる。



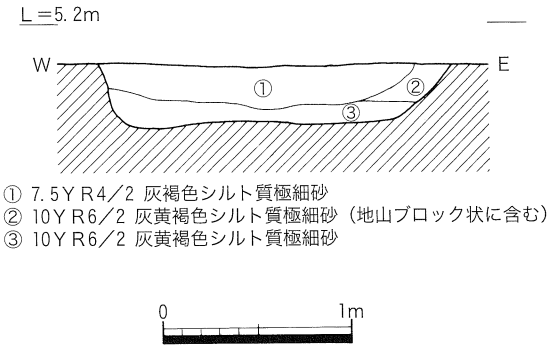
第137図　ＳＫ－Ｂ２－13断面図



第138図　ＳＫ－Ｂ２－13出土遺物

ＳＫ－Ｂ２－14

Ｂ２区中央部で検出した土坑である。平面形状は不定形で長軸方向に約２ｍ，短軸方向に約1.4ｍを測る。深さは約0.45ｍである。断面は逆台形で，埋土は灰褐色（7.5YR ４／２）シルト質極細砂等の３層に分割される。所属時期は，埋土の特色及び周囲の遺構との関係から古代末～中世前半と考えられる。

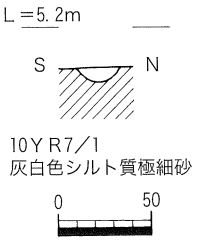


第139図　ＳＫ－Ｂ２－14断面図

Ｂ２区溝跡

ＳＤ－Ｂ２－01

Ｂ２区東半において検出された溝跡である。検出レベルは標高5.0ｍ前後，底面のレベルは標高4.95ｍ前後を測る。方位はＥ－14°－Ｓを示すが，西端において北方向へ直角に折れ曲がりＬ字形となる。検出幅約0.25ｍで，断面はＵ字形をなす。埋土は灰白色（10YR ７／１）シルト質極細砂の単層である。所属時期は埋土の特色と周辺の遺構・遺物からすれば古代末～中世前半と考えられる

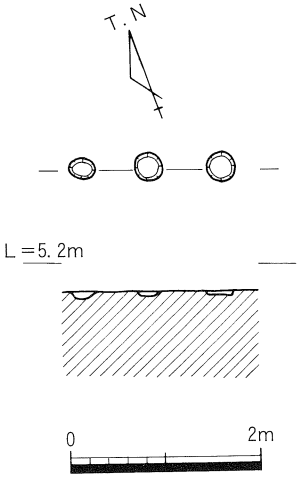


第140図　ＳＤ－Ｂ２－01断面図

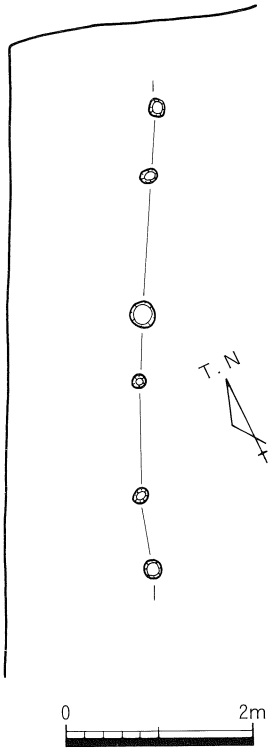
Ｂ２区柵列状遺構

ＳＡ－Ｂ２－01，ＳＡ－Ｂ２－02

Ｂ２区西端部で検出した柵列状の遺構である。埋没した自然流路上で，柱穴が南北方向と東西方向に並ぶものだが，南北方向のものは北面が調査区外となり未検出である。柱穴間の距離は，0.7～0.8ｍと1.2～1.4ｍのものがある。柱穴の深さは浅く，3cm前後である。埋土は褐灰色（7.5YR ５／１）シルト質極細砂の単層で，10世紀代の所属時期が考えられる。



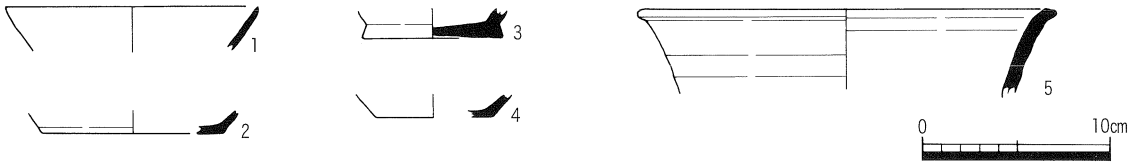
第141図　ＳＡ－Ｂ２－02
平・断面図



第142図　ＳＡ－Ｂ２－01
平・断面図

Ｂ３区褐灰色砂質シルト層出土遺物

Ｂ３区の第２遺構面精査中に出土した10世紀代の遺物である。1，2は須恵器坏の口縁部及び底部である。3，4は土師器坏の底部。３は平高台をもつもの。５は須恵器甕の口縁部である。

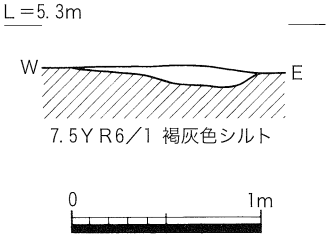


第143図　Ｂ３区褐灰色砂質シルト層出土遺物

Ｂ３区溝跡

ＳＤ－Ｂ３－05

Ｂ３区第２遺構面において検出された溝跡である。検出レベルは標高5.01～5.07m，底面のレベルは標高4.96～5.01mを測る。方位はやや蛇行ぎみだが，Ｎ－13°－Ｅ前後を示す。検出幅約0.4～0.8mで，断面は船底形である。埋土は褐灰色（7.5YR ６／１）シルトの単層である。上記の包含層出土遺物から10世紀代の埋没時期が考えられる。

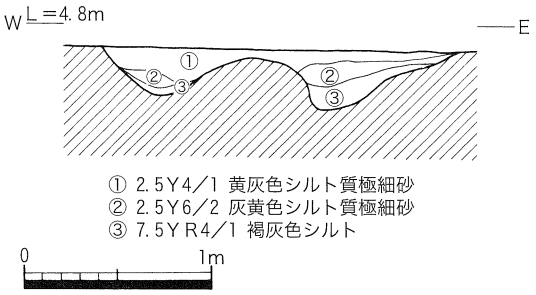


第144図　ＳＤ－Ｂ３－05断面図

Ｂ４区溝跡

ＳＤ－Ｂ４－01

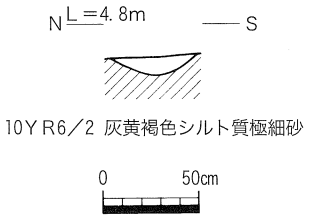
Ｂ４区の東半で検出した溝跡である。検出レベルは標高4.53～470m，底面のレベルは標高4.25～4.60mを測る。幅は合流部分で約1.5m，検出延長は約11mである。溝は一旦，分岐してまた合流するもので，合流する南部において幅と深さを増す。平面の形状と検出した位置関係からすればＳＤ－Ａ２－01，04に繋がるものと考えられる。断面は分岐箇所でＵ字形をなし，合流箇所においては中位に段の付いた逆台形状となる。埋土は３層に分割できる。時期の特定できる出土遺物はないが，Ａ２区からの繋がりから13世紀代と考えられる。



第145図　ＳＤ－Ｂ４－01断面図

ＳＤ－Ｂ４－02（第　図土層図）

Ｂ４区北半で検出した東西方向の溝跡である。検出レベルは標高4.62～4.73m，底面のレベルは標高4.54～4.65mで，東方向に下る。幅は0.5m前後，検出延長は約５mである。Ｅ－９°－Ｓの方位を示し，ほぼ条里方向をなす。断面は船底形で，埋土は灰黄褐色（10YR ６／２）シルト質極細砂の単層である。切り合い関係でＳＤ－Ｂ４－01より後出するが，時期の特定できる出土遺物はない。埋土の特色及び周囲の遺構から，中世の所産と考えられる。



第146図　ＳＤ－Ｂ４－02断面図

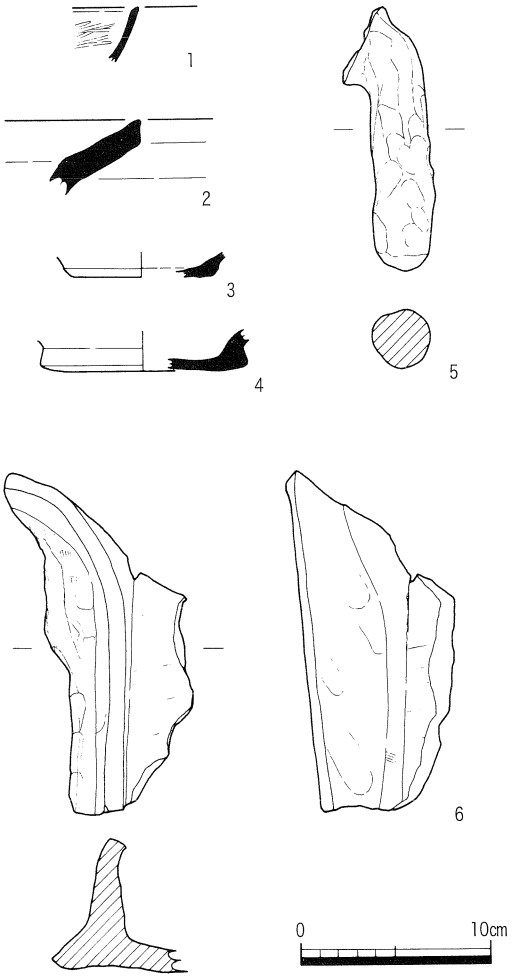
B５区建物跡

ＳＢ－Ｂ５－01

Ｂ５区中央部で検出された掘立柱建物である。西面は調査区外となり東西方向の柱穴数が確定せず，建物全体の規模は不明である。南北方向に４間(7.15m)，東西方向は２間（4.2m）分である。柱穴間の距離は東西方向で平均2.07m，南北方向で平均1.775mである。主軸方位はＮ－12°－Ｅを示し，条里方向にほぼ合致する。東面には建替え以前の柱穴が４つ並ぶ。ＳＰ10には根石と考えられる石が敷かれており，あるいはＳＰ９－10間にも同様の柱穴があったのかもしれない。また近接するＳＤ－Ｂ５－04から中世瓦が出土しており，瓦葺であった可能性も推察される。所属時期は柱穴より出土した遺物，及び周辺の遺構との関係から12～13世紀を中心に考えられる。

ＳＢ－Ｂ５－01出土遺物

1，2は黒色土器椀Ａ類，土師質土器鍋の口縁部である。3，4は土師質土器皿，土師器坏の底部。
5は土師質土器の脚部である。6は竈の焚口部。



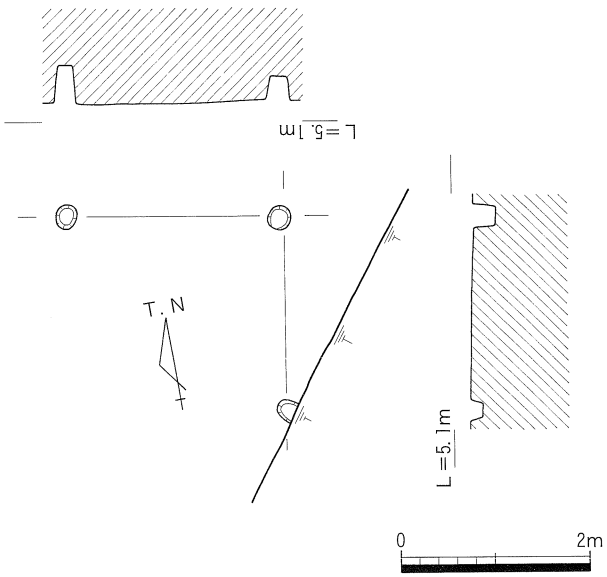
第147図　ＳＢ－Ｂ５－01出土遺物

ＳＢ－Ｂ５－02

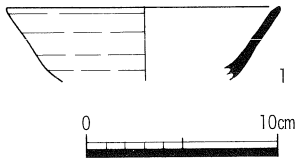
Ｂ５区南半で検出された掘立柱建物である。西面の柱穴が未検出であり，また調査範囲の制約のため建物全様は不明である。柱穴間の距離は東西方向で2.3m，南北方向で２mである。主軸方位はＮ－９°－Ｅを示し，条里方向にほぼ合致する。柱穴より遺物が出土しており，所属時期は12世紀後半以降と考えられる。

ＳＢ－Ｂ５－02出土遺物

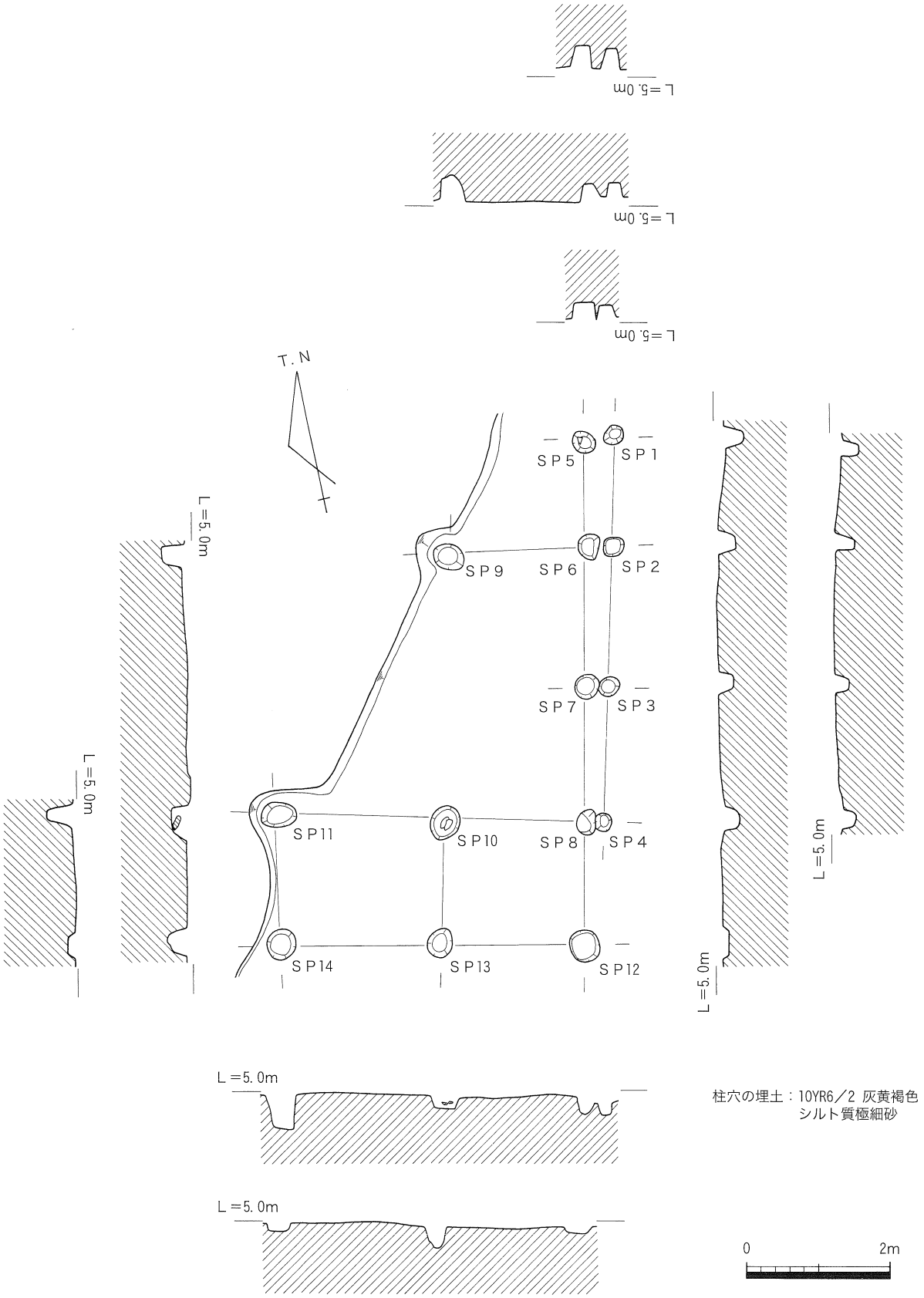
１は土師質土器坏である。佐藤編年の坏ＤⅡ－２に該当し，12世紀後半のものである。



第148図　ＳＢ－Ｂ５－02平・断面図（１/80）



第149図　ＳＢ－Ｂ５－02出土遺物



第150図　ＳＢ－Ｂ５－01平・断面図（１/80）

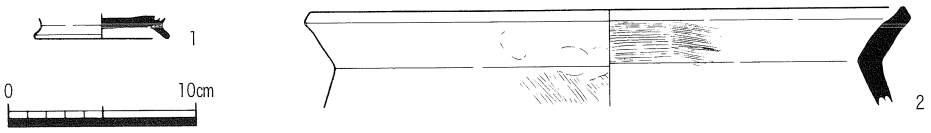
自然流路

ＳＲ－Ｂ－01

Ｂ区の北東部において検出された自然流路である。地形に沿いＡ－３区より下るもので，南側の上端部は現在の地割にもその影響が見られる。流路上には溝跡が掘削されており，古代～中世にかけての主要な用水路として利用されたと考えられる。遺物はＢ４区において土師器片，サヌカイト片等が出土している。

出土遺物

１は黒色土器椀の底部。２は土師器甕の口縁部である。

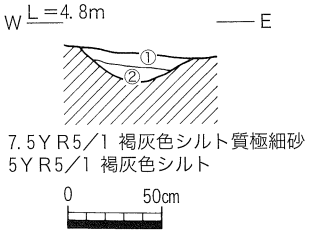


第151図　ＳＲ－Ｂ－01出土遺物

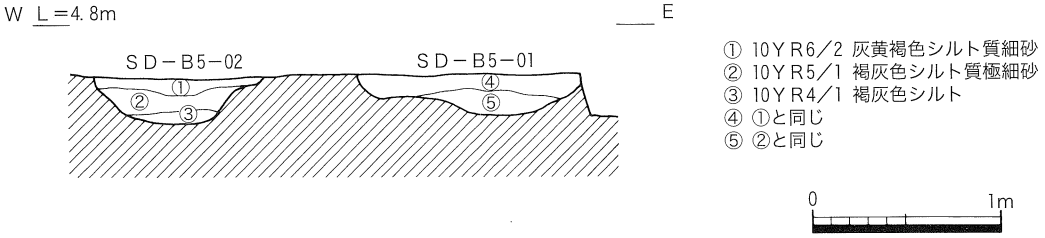
ＳＲ－Ｂ－01内溝跡

ＳＤ－Ｂ５－01～04

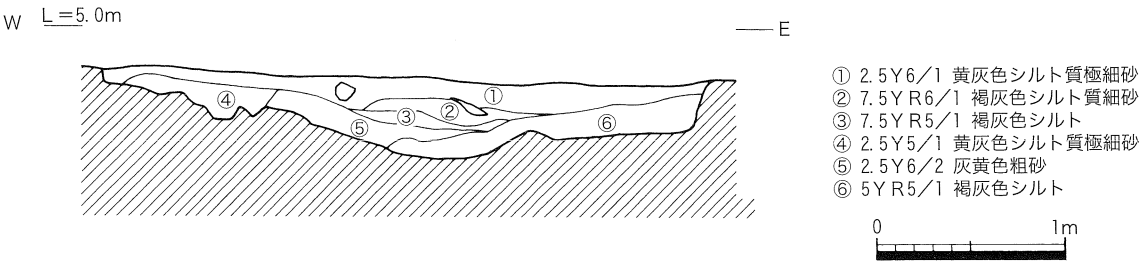
ＳＲ－Ｂ－01内で検出された溝跡である。Ｂ５区において４本に分岐して検出されたもので，この内ＳＤ－Ｂ５－04が最大の規模をもち，検出幅約３ｍ，深さ0.6ｍを測る。堆積状況から，ほぼ同時期に機能していたものと考えられ，ＳＤ－Ｂ５－04が最後に埋没したことが窺える。遺物は古代～中世前半のものがＳＤ－Ｂ５－04より出土している。自然流路と判別が困難であるが，長期間にわたり使用されたものと推察される。



第152図　ＳＤ－Ｂ５－03断面図



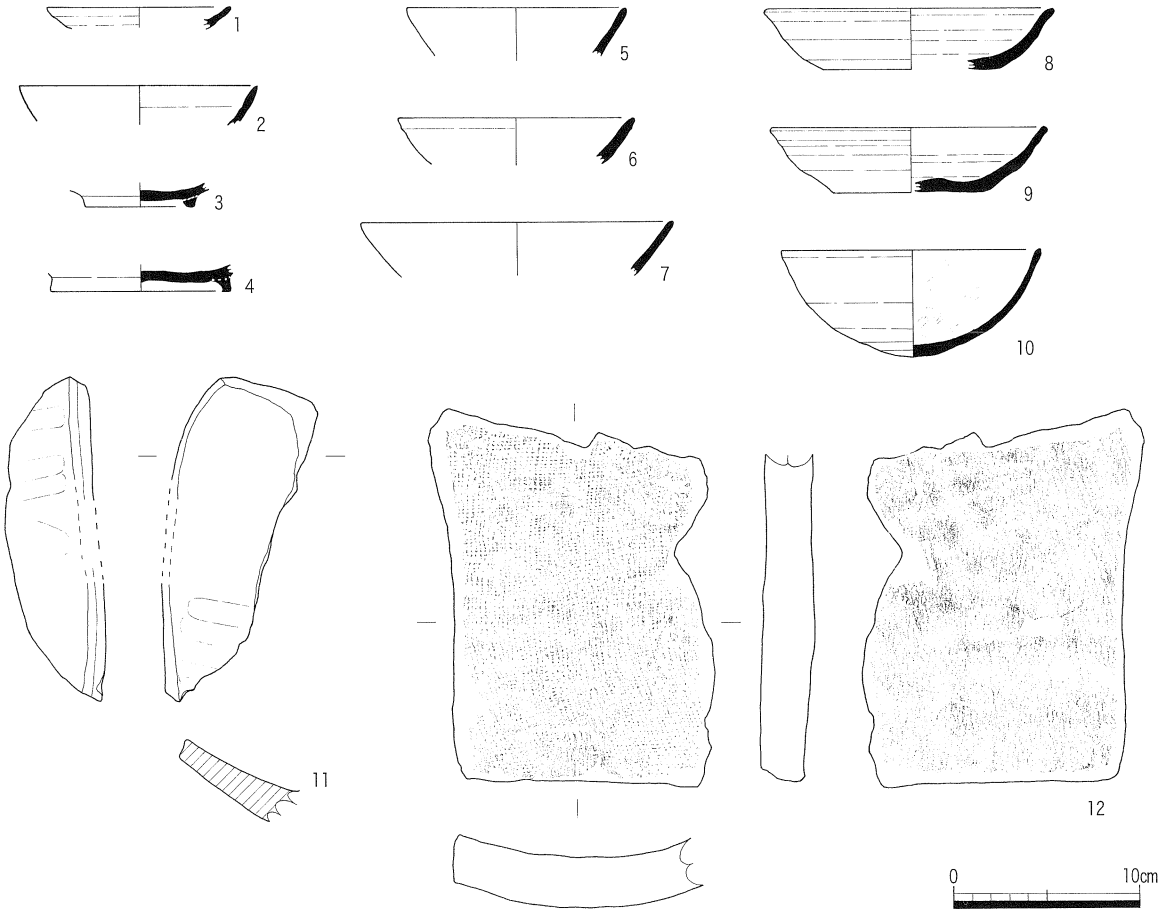
第153図　ＳＤ－Ｂ５－01，02断面図



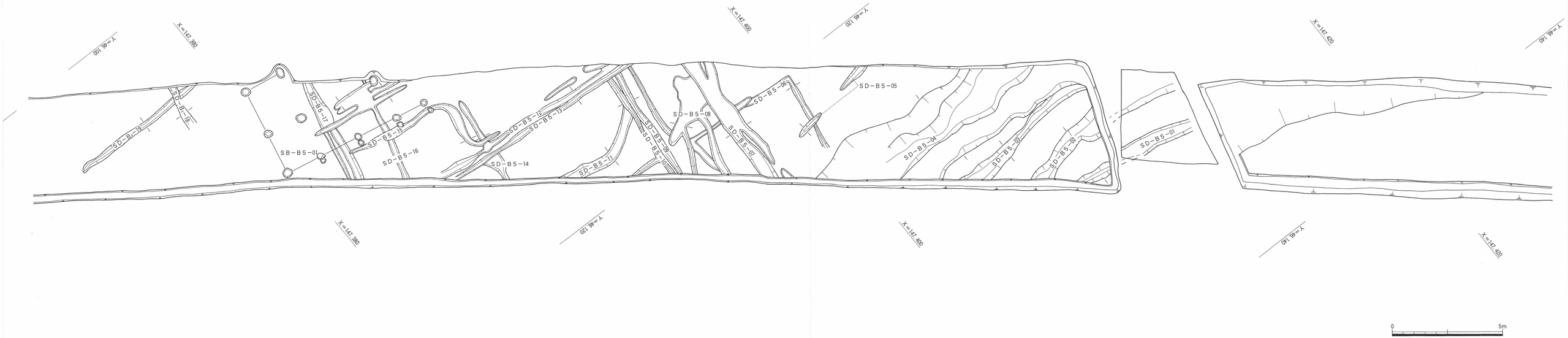
第154図　ＳＤ－Ｂ５－04断面図

ＳＤ－Ｂ５－04出土遺物

１は土師質土器皿の口縁部。２及び５～９は土師質土器坏である。口径の小さいものは，佐藤編年の坏ＤⅡ－４，５に該当し13世紀の年代が，口径の大きい８，９は坏ＤⅡ－１，２に該当し12世紀前半に考えられる。３，４は須恵器椀，坏の底部。椀は12世紀代，坏は８世紀代のものと考えられる。10は黒色土器椀と考えられるが，高台が貼付けられていない。11は竈の焚口部。12は土師質の平瓦である。凸面に縄叩き痕が，凹面に布目痕が見られる。以上から平安時代後期～鎌倉時代初頭の年代が考えられる。



第155図　ＳＤ－Ｂ５－04出土遺物



第156図　B4，B５区遺構配置図（1/100）

Ｂ５区溝跡　（第156図参照）

以下は，Ｂ５区の中央部において検出した溝跡である。小規模な区画溝が多いが，鋤痕状となるもの，ＳＤ－Ｂ５－04へと繋がり用水・排水を担ったと考えられるものも見られる。遺物が見られるものは少ないが，埋土及び切り合い関係からすればほぼ３時期にわたる溝跡群と考えられる。

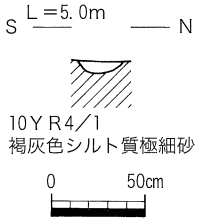
ＳＤ－Ｂ５－05

途切れる箇所があり部分的に検出された溝状の遺構である。方位は，ほぼ条里方向となるＮ－10°－Ｅを示す。検出レベルは，標高4.81～4.86m，底面のレベルは標高4.74～4.82mである。幅約0.35mを測り，断面はＵ字形である。埋土は灰黄色（2.5Y 6／1）シルト質極細砂の単層である。埋土の特色より12世紀～13世紀前半の所属時期が考えられる。

第157図　ＳＤ－Ｂ５－05断面図

ＳＤ－Ｂ５－06

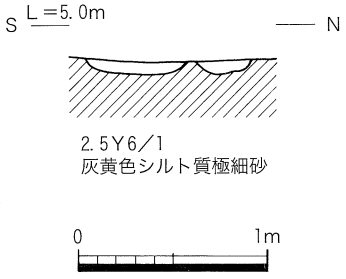
北半において平面Ｌ字形となり，南半でＴ字形に区画された溝跡。南北方向でＮ－10°－Ｅを示し，ほぼ条里方向をなす。検出レベルは，標高4.80～4.85m，底面のレベルは標高4.77m前後である。幅約0.3mを測り，断面はＵ字形である。埋土は褐灰色（10YR 4／1）シルト質極細砂の単層で，溝群の中で切り合い関係において最も先行するものである。南接して検出されたＳＤ－Ｂ５－09，10と同じく，その方向及び埋土の特徴からＳＤ－Ｂ１－11に繋がるものに想定される。出土遺物はないが，10～12世紀の所属時期が考えられる。



第158図　ＳＤ－Ｂ５－06断面図

ＳＤ－Ｂ５－07

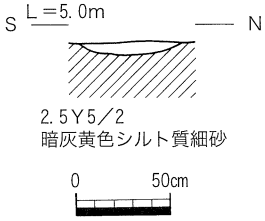
東西方向，Ｅ－15°－Ｓを示す溝跡である。検出レベルは，標高4.71～4.80m，底面のレベルは標高4.84m前後である。幅約0.9mを測るが，分岐した箇所が見られる。断面は船底形をする。埋土は灰黄色（2.5Y 6／1）シルト質極細砂の単層である。埋土の特色より12世紀～13世紀前半の所属時期が考えられる。



第159図　ＳＤ－Ｂ５－07断面図

ＳＤ－Ｂ５－08

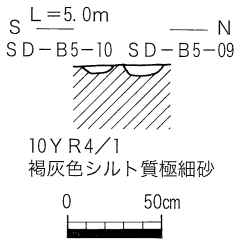
東西方向の溝跡が合流し，溜り状となるものである。検出レベルは，標高4.82～4.90m，底面のレベルは標高4.75～4.85mである。幅約0.9mを測るが，分岐した箇所が見られる。断面は船底形をし，埋土は暗灰黄色（2.5Y 5／2）シルト質細砂の単層である。切り合い関係においてＳＤ－Ｂ５－07に先行し，ＳＤ－Ｂ５－06より後出するものである。



第160図　ＳＤ－Ｂ５－08断面図

ＳＤ－Ｂ５－09

Ｅ－７°－Ｓの方位を示す東西方向の溝跡である。検出レベルは，標高4.82m前後，底面のレベルは標高4.75～4.78mである。幅は約0.35mを測る。断面は船底形をし，埋土は褐灰色（10YR 4／1）シルト質極細砂の単層である。



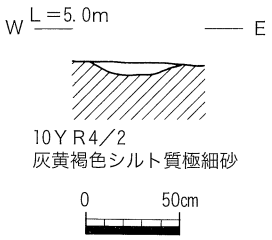
第161図　ＳＤ－Ｂ５－09，10断面図

ＳＤ－Ｂ５－10

Ｔ字形に検出された溝跡である。東西方向にＳＤ－Ｂ５－09と並走し，ＳＤ－Ｂ５－06の延長上で南北方向に掘削される。検出レベルは，標高4.81m前後，底面のレベルは標高4.75～4.79mである。幅は約0.3mを測る。断面は船底形をし，埋土は褐灰色（10YR 4／1）シルト質極細砂の単層である。

ＳＤ－Ｂ５－11

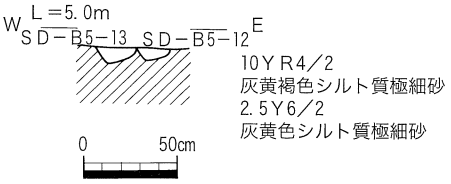
南方向から緩い弧を描き北西方向へ延びる溝跡である。検出レベルは標高4.82m前後，底面のレベルは標高4.74～4.76mである。幅は約0.5mを測る。切り合い関係ではＳＤ－Ｂ５－09，10より後出するものと考えられるが，以北においては検出できなかった。断面は船底形をし，埋土は灰黄褐色（10YR 4／2）シルト質極細砂の単層である。埋土の特色より12世紀後半の所属時期が考えられる。



第162図　ＳＤ－Ｂ５－11断面図

ＳＤ－Ｂ５－12

Ｎ－４°－Ｅの方位を示す南北方向の溝跡である。検出レベルは標高4.90m前後，底面のレベルは標高4.84m前後を測る。幅は約0.3mである。断面はＵ字形をし，埋土は灰黄色（2.5Y 6／2）シルト質極細砂の単層である。埋土の特色より12世紀～13世紀前半の所属時期が考えられる。



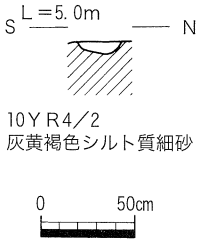
第163図　ＳＤ－Ｂ５－12，13断面図

ＳＤ－Ｂ５－13

Ｎ－５°－Ｅの方位を示す南北方向の溝跡である。検出レベルは標高4.90m前後，底面のレベルは標高4.83m前後を測る。幅は約0.3mである。断面はＵ字形をし，埋土は灰黄褐色（10YR 4／2）シルト質極細砂の単層である。埋土の特色より12世紀後半の所属時期が考えられるが，切り合いでは，ＳＤ－Ｂ５－12に先行している。

ＳＤ－Ｂ５－14

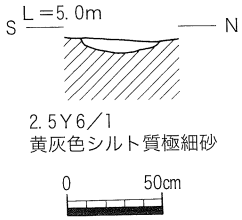
ＳＤ－Ｂ５－13にほぼ直交する東西方向の溝跡である。検出レベルは標高4.88m前後，底面のレベルは標高4.82～4.88m前後を測る。幅は約0.25mであるが，交差箇所においては0.6mを測る。断面は船底形をし，埋土は灰黄褐色（10YR 4／2）シルト質極細砂の単層である。切り合いでＳＤ－Ｂ５－12，15に先行する。埋土の特色より12世紀後半の所属時期が考えられる。



第164図　ＳＤ－Ｂ５－14断面図

ＳＤ－Ｂ５－15

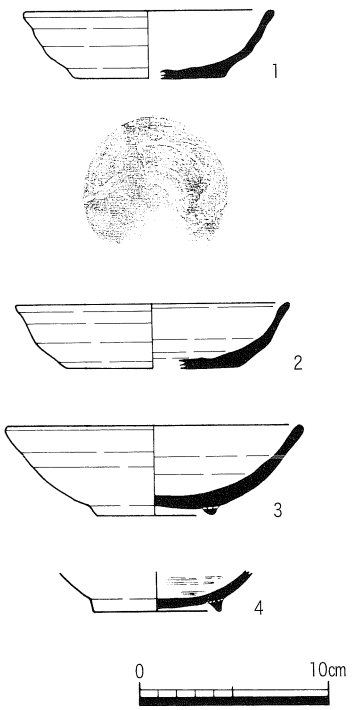
ＳＢ－Ｂ５－01東面に沿い検出された溝状の遺構である。Ｎ－10°－Ｅを示す南北方向のものだが，ＳＢ－Ｂ５－01の北縁付近でクランク状となりその後，北へ延びる。断面は船底形であり，埋土は黄灰色（2.5Y 6／1）シルト質極細砂の単層である。ＳＢ－Ｂ５－01と切り合い関係は不明瞭だが，遺物はほぼ同時期の土師質土器，黒色土器等が出土している。



第165図　ＳＤ－Ｂ５－15断面図

ＳＤ－Ｂ５－15出土遺物

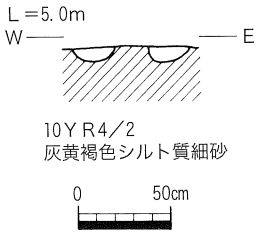
1，2は土師質土器坏である。佐藤編年の坏ＤⅡ－2，3に該当し，12世紀後半～13世紀初頭のものと考えられる。3，4は黒色土器椀である。3は器形からすれば12世紀後半～13世紀前半に考えられる。4は佐藤編年の椀ＡⅡ－4に該当すると考えられ12世紀前半のものである。



第166図　ＳＤ－Ｂ５－15出土遺物

ＳＤ－Ｂ５－16

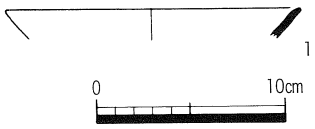
東西方向（Ｅ－13°－Ｓ）とそれにほぼ直交する南北方向（Ｎ－7°－Ｅ）の溝状遺構である。南北方向には２～３本の溝となり並走するが，その延長部は未検出である。検出レベルは標高4.95m前後，底面のレベルは標高4.88m前後を測る。幅は約0.3mである。断面はＵ字形をし，埋土は灰黄褐色（10YR 4／2）シルト質細砂の単層である。切り合いでＳＢ－Ｂ５－01の柱穴に先行する。



第167図　ＳＤ－Ｂ５－16断面図

ＳＤ－Ｂ５－16出土遺物

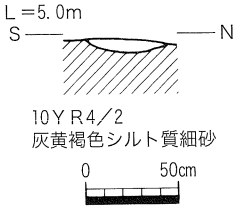
1は土師質土器坏の口縁部である。口径，器形からすれば佐藤編年の坏ＤⅡ－2に該当し12世紀後半のものである。



第168図　ＳＤ－Ｂ５－16出土遺物

ＳＤ－Ｂ５－17

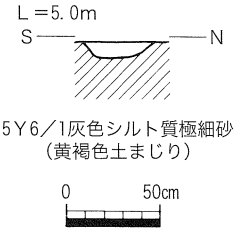
東西方向，Ｅ－13°－Ｓを示す溝跡である。検出レベルは標高4.88～4.98m前後，底面のレベルは標高4.90m前後を測る。２本に分岐するのが見られるが，幅は最大で約0.7mである。断面はを船底形をし，埋土は灰黄褐色（10YR 4／2）シルト質細砂の単層である。切り合い関係ではＳＤ－Ｂ５－15に先行するが，ＳＤ－Ｂ５－16間では不明瞭である。12世紀後半の所属時期が考えられる。



第169図　ＳＤ－Ｂ５－17断面図

ＳＤ－Ｂ５－18

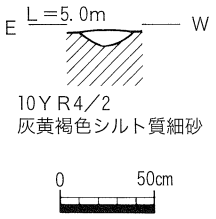
やや蛇行ぎみだが，東西方向（Ｅ－11°－Ｓ）を示す溝状の遺構である。検出レベルは標高4..90m前後，底面のレベルは標高4.90m前後を測る。幅は約0.4m。断面は船底形をし，埋土は灰色（５Ｙ６／１）シルト質細砂の単層である。



第170図　ＳＤ－Ｂ５－18断面図

ＳＤ－Ｂ５－19

南北方向，Ｎ－15°－Ｅを示すを示す溝跡である。検出レベルは標高4..83～4.99m，底面のレベルは標高4.84～4.95mを測る。幅は約0.3m。断面はＵ字形をし，埋土は灰黄褐色（10YR ４／２）シルト質極細砂の単層である。切り合いでＳＤ－Ｂ５－18に先行する。埋土の特色より12世紀後半の所属時期が考えられる。



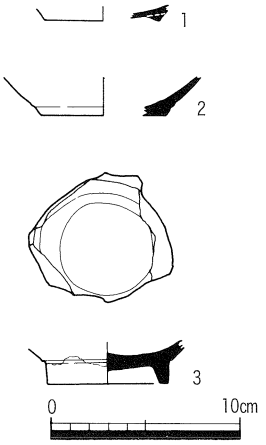
第171図　ＳＤ－Ｂ５－19断面図

Ｂ５区南半鋤溝群

Ｂ５区南半には黒褐色（10YR ３／２）シルトの土壌化層が認められ，その上面において溝状遺構を検出した。平面の形状はほぼ条里方向を示し，断続して東西に延びる。深さ３㎝程で，埋土は褐灰色（10YR ６／１）シルト質細砂である。所属時期は出土遺物から12世紀代に考えられる。

Ｂ５区南半鋤溝群出土遺物

１は瓦器椀の底部。底径及び断面三角形の高台より，森島編年で楠葉型のⅡ期が考えられ12世紀代のものである。２は須恵器坏の底部である。３は白磁碗の底部。見込み部の柚を輪状に掻き取ったもので，森田編年のⅧ類に該当し12世紀代に考えられる。



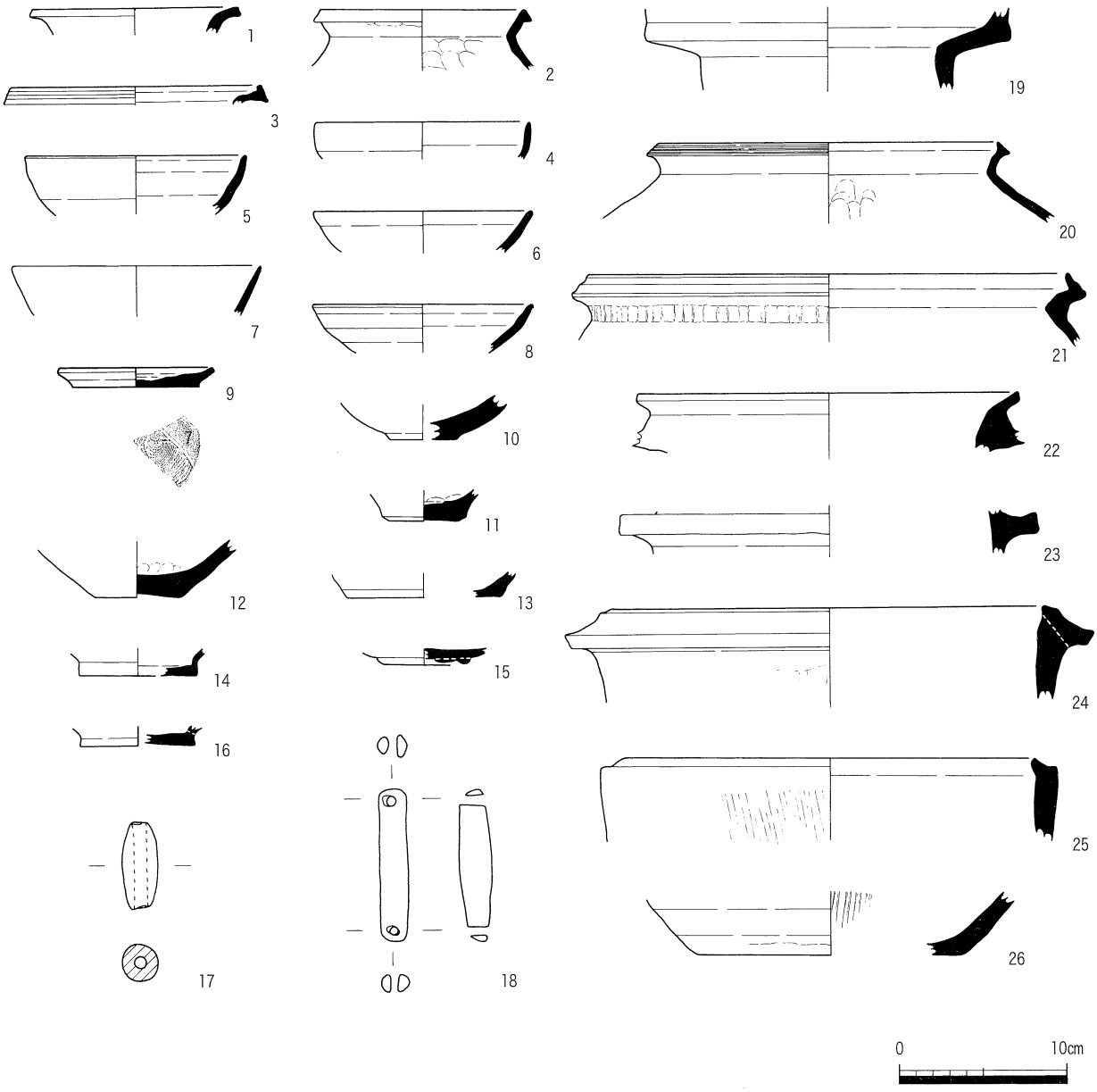
第172図　Ｂ５区南半鋤溝群出土遺物

近世以降及びその他の遺構・遺物

自然流路

ＳＲ－Ｂ－02

Ｂ1，2区において北端部に沿って検出された自然流路である。南岸部のみが検出されており，遺物が見られた黒褐色（7.5YR 3／2）シルト，灰黄褐色（10YR 4／2）砂混じりシルトの堆積後，深さ約0.2ｍで砂層となる。またＢ3，Ｃ1，2区においてもＳＲ－Ｂ－02に繋がると考えられる流路の堆積があり，この後は南東方向に曲行していたものと推察される。出土遺物には混入品と見られる土師質土器片等もあるが，弥生土器及び須恵器片が中心に出土しており，古代にはほぼ埋没したものと考えられる。



第173図　ＳＲ－Ｂ－02出土遺物

ＳＲ－Ｂ－02出土遺物

1，2，3，19，20，21は中期後葉～後期の弥生土器壺及び甕の口縁部である。3，20，21は口縁端部を肥厚させ２～３条の凹線文が，21の頚部には押圧の突帯文が施されている。10～12は弥生土器壺及び甕の底部。４と５は７世紀後半，7は９世紀前半の須恵器坏口縁部。6，8，9は土師質の坏，皿である。9は13世紀のもので，底部は糸切りがなされている。13，14，16は土師器，土師質土器坏の底部である。15は須恵器椀の底部。13世紀のものと考えられる。17，18は土錘で管状と棒状のもの。22，23，24は土師器羽釜の口縁部。頚部が外反するものと直立するものがある。25は土師質土器の口縁部。把手付鍋で16世紀のもの。26は土師質土器擂鉢の底部である。

ＳＤ－Ｂ１－01

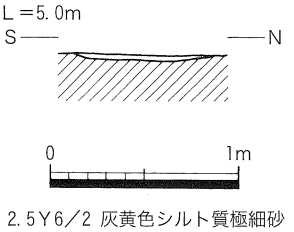
Ｂ１区北東隅において検出された溝状の遺構である。現耕作土及び近世の堆積物直下より掘削される。幅約0.6m，深さ約0.15mを測るが，南方向で幅，深さを減じる。埋土は灰白色（10YR ７/１）細砂の単層である。遺物は出土していない。所属時期は堆積関係より近世の所産と考えられる。

ＳＤ－Ｂ１－02

Ｂ１区北東隅において検出された溝状の遺構である。平面形状はＬ字形もしくはクランク状となり，２本に分岐する箇所がある。幅0.2m，深さは0.05mと浅い。堆積状況及び埋土はＳＤ－Ｂ１－01と同様で，近世の所産と考えられる。

ＳＤ－Ｂ１－09

Ｂ１区南部において検出された東西方向の溝跡である。検出レベルは標高4.91m前後，底面のレベルは標高4.88m前後で残存度が悪い。方位はＥ－12°－Ｓを示し，検出幅約0.6mである。埋土は灰黄色（2.5YR ６/２）シルト質極細砂の単層である。所属時期は埋土の特色と周辺の遺構・遺物からすれば近世と考えられる。



第174図　ＳＤ－Ｂ１－09断面図

ＳＤ－Ｂ１－12

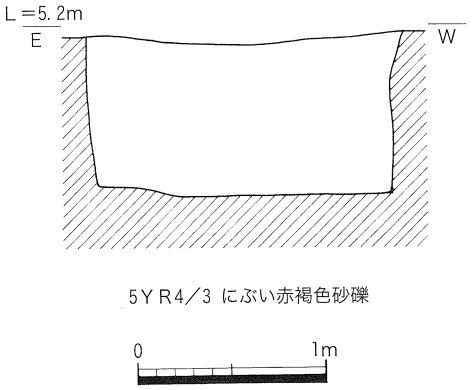
Ｂ１区において検出された暗渠排水の溝跡である。掘削溝の内部に石組がされたものである。平面ではＬ字形をし，東西及び南北方向とも現有コンクリート壁等の土地区画に合致する。現耕作土直下から掘削されていることから近代の所産と考えられる。

ＳＤ－Ｂ２－02

Ｂ２区において検出された暗渠排水の溝跡である。溝の内部に石組がされたもので，方位Ｎ－13°－Ｅを示し現有の土地区画に合致する。他の暗渠排水溝跡と同様に現耕作土直下から掘削されていることから，近代の所産と考えられる。

ＳＫ－Ｂ２－15

Ｂ２区南端部で検出された土坑である。南半は調査区外となり未検出の箇所がある。ほぼ現耕作土直下から掘削される。深さ0.8mを測り断面は方形状である。埋土はにぶい赤褐色砂礫の単層で鉄分の沈着が認められる。ＳＤ－Ｂ２－03に繋がっており，南接する居住区からの排水を行ったものと考えられる。



第175図　ＳＤ－Ｂ２－15断面図

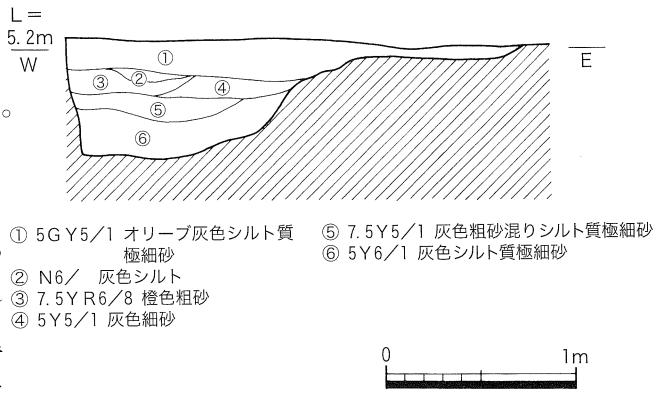
ＳＤ－Ｂ２－03

Ｂ２区において検出された暗渠排水の溝跡である。ＳＫ－Ｂ２－15より北方向に伸び，途中西方向へ屈曲し，平面Ｌ字形となる。他の暗渠排水溝跡と同様に溝の内部に石組がされたもので，近代の所産と考えられる。

坪界溝跡

ＳＤ－Ｂ３－01

Ｂ３西端で検出された南北方向の溝跡である。香川郡10条18里20・21坪界にあたる現有道路に沿って検出されたもの。検出レベルは5.07～5.16mで，底面レベルは4.80～4.84mで北方向に下る。方位はＮ－10°－Ｅを示す。検出延長は22m，検出幅は最大2.5mを測るが，西側の上端部が調査区外となり未検出である。断面は東側上端部及び底面からすれば，逆台形状をなすと思われる。埋土の堆積状況から近世～近代にかけて埋没が認められ，現有の道路側溝に付替えられたものと推察される。なおＢ３区の南端及びＣ１区の北端が，香川郡10条18里16・21坪界にあたる東西方向の現有道路に接するが溝跡等の条里遺構は検出されなかった。



第176図　ＳＤ－Ｂ３－01断面図

屋敷跡　（第179図参照）

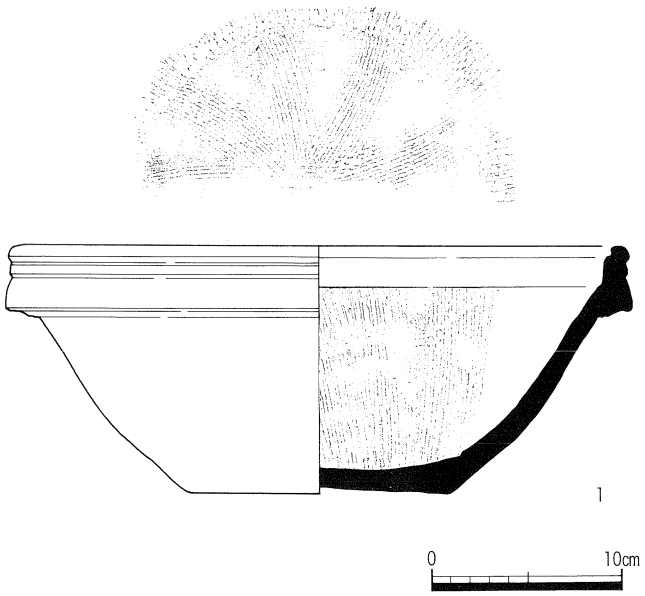
以下は，Ｂ３区の第１遺構面において確認された近世～近代の屋敷跡である。敷地の範囲は東西では西のＳＤ－Ｂ３－01から東のＳＤ－Ｂ３－06間であったと考えられる。また南北の境は不明瞭であるが，北を現有の境界となるコンクリート壁か或はＳＤ－Ｂ２－03が東西に折れるライン上に，南を現有の道路或は道路状遺構としたＳＤ－Ｂ３－02，3に推察される。付随して確認された遺構は，先述のＳＫ－Ｂ２－15，ＳＤ－Ｂ２－03の他建物跡，井戸，溝状遺構，土坑等がある。遺物は幕末～明治期を中心に出土している。

道路状遺構（ＳＤ－Ｂ３－02～４）

Ｂ３区南部において側溝と考えられる東西方向の溝跡ＳＤ－Ｂ３－02，03が平行して検出されており，溝跡間の距離からすれば幅約２ｍの道路状遺構に復原される。方位はＥ－10°－Ｓを示し，推定坪界線上となる現道より約８ｍ北に位置する。断面において凸面は確認できなかった。また溝跡は残存状態が悪く断続的に検出されており，居住地南面の境とするには，やや脆弱に思える。ＳＤ－Ｂ３－04は，集石がなされておりＳＤ－Ｂ３－01方向に排水する暗渠と考えられる。

ＳＤ－Ｂ３－04出土遺物

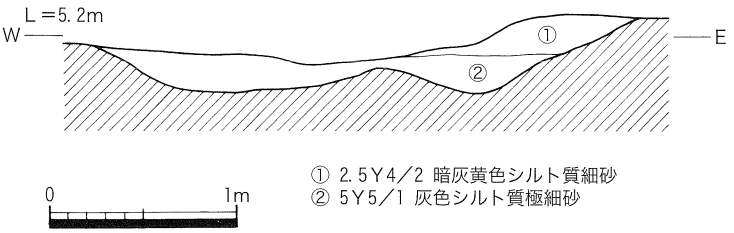
１は明石産の擂鉢で18世紀後半～19世紀初頭のものである。



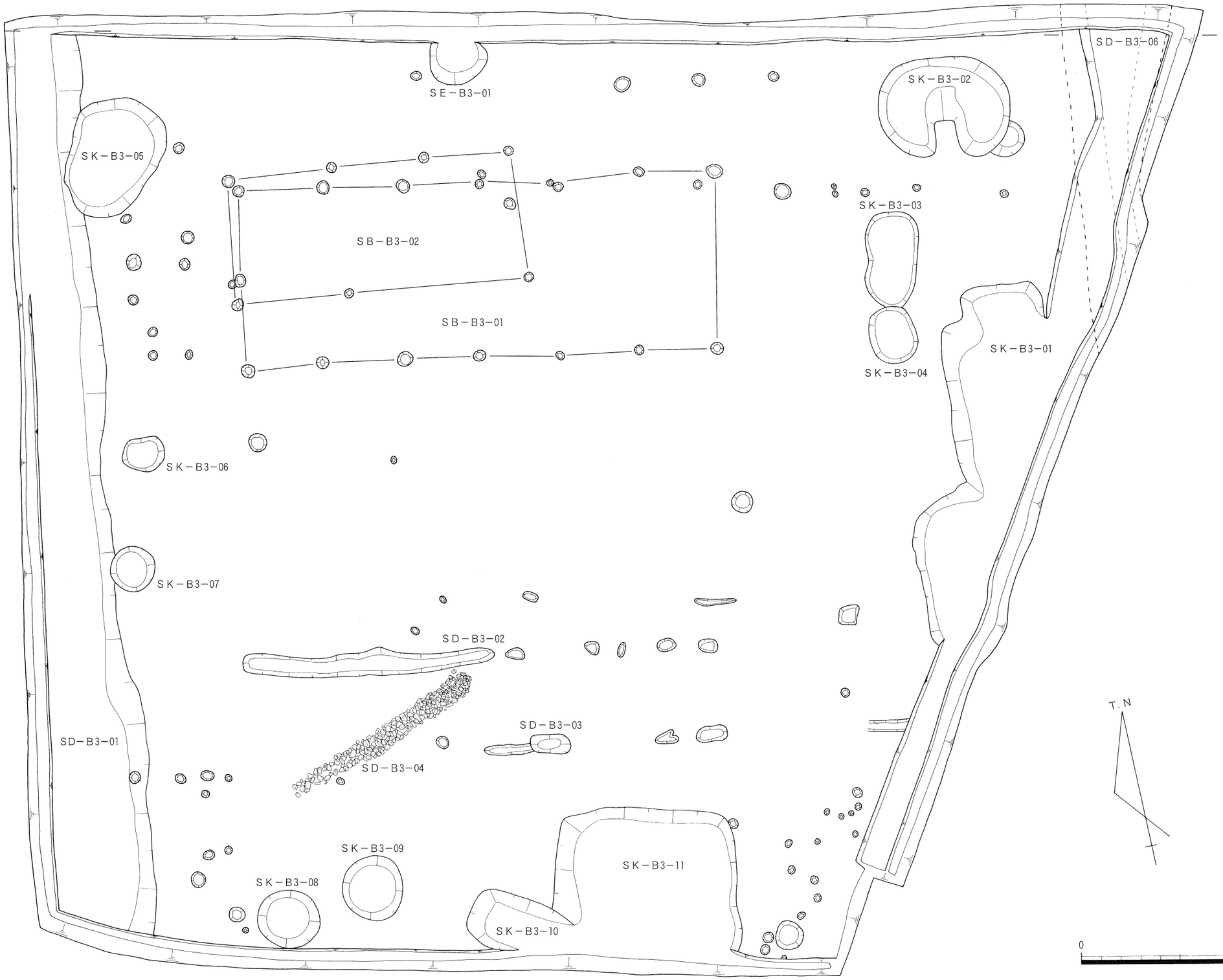
第177図　ＳＤ－Ｂ３－04出土遺物

ＳＤ－Ｂ３－06

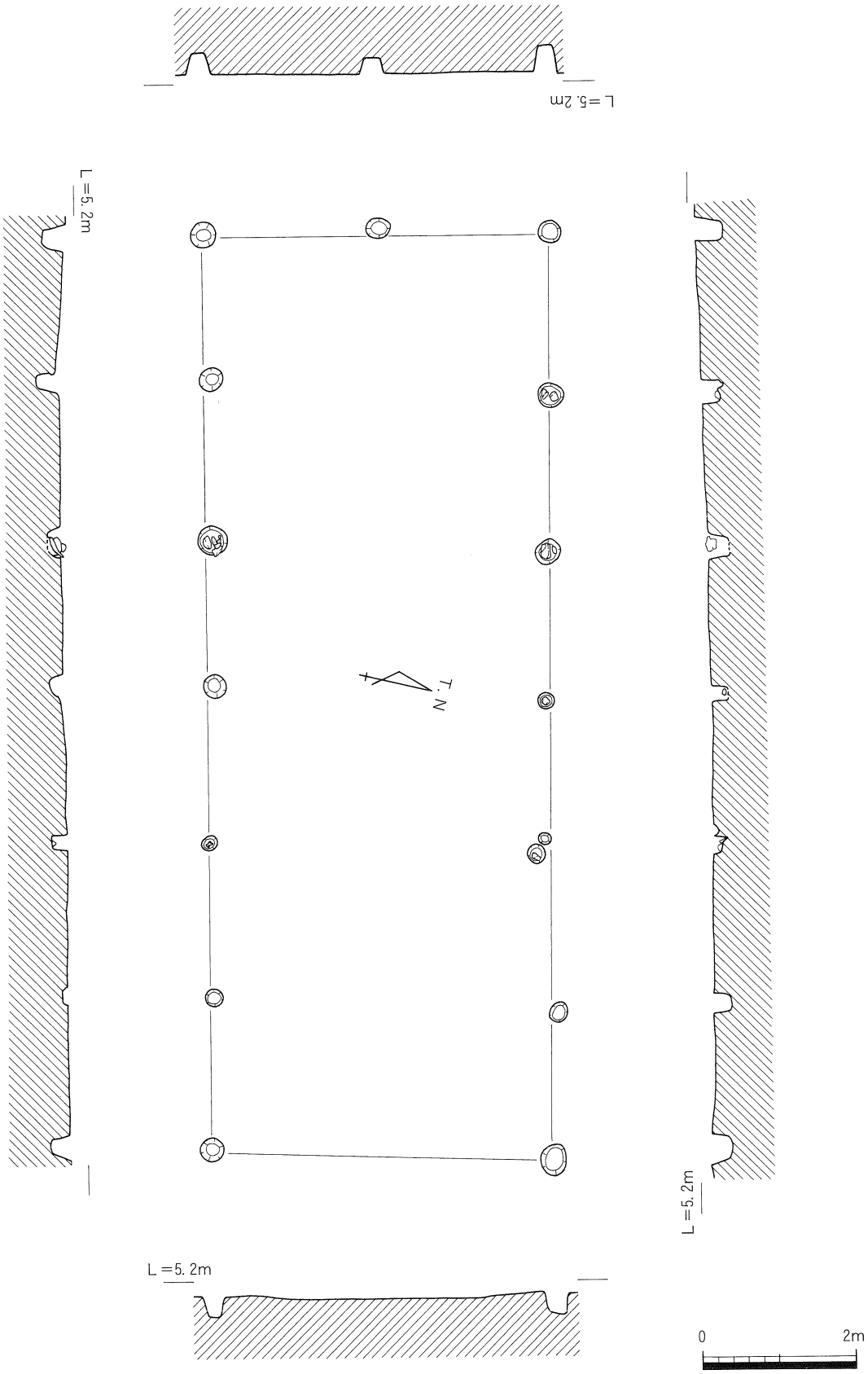
Ｂ３区北東隅で確認された溝跡である。平面において検出していないが，調査区の北壁及び東壁の土層堆積状況より南北方向の溝を確認した。条里区画に合致するものと考えられ，幅約２ｍに推定される。断面は東壁で逆台形をなし，北壁において中央部が凸状となることから，北方向に向かって２列に分割して並走したものと推察される。堆積状況から近世～近代の所産で，当地区が現有の耕作地となった際に廃絶したと考えられる。



第178図　ＳＤ－Ｂ３－06断面図



第179図　B 3 区第 1 遺構面遺構配置図（1 /100）



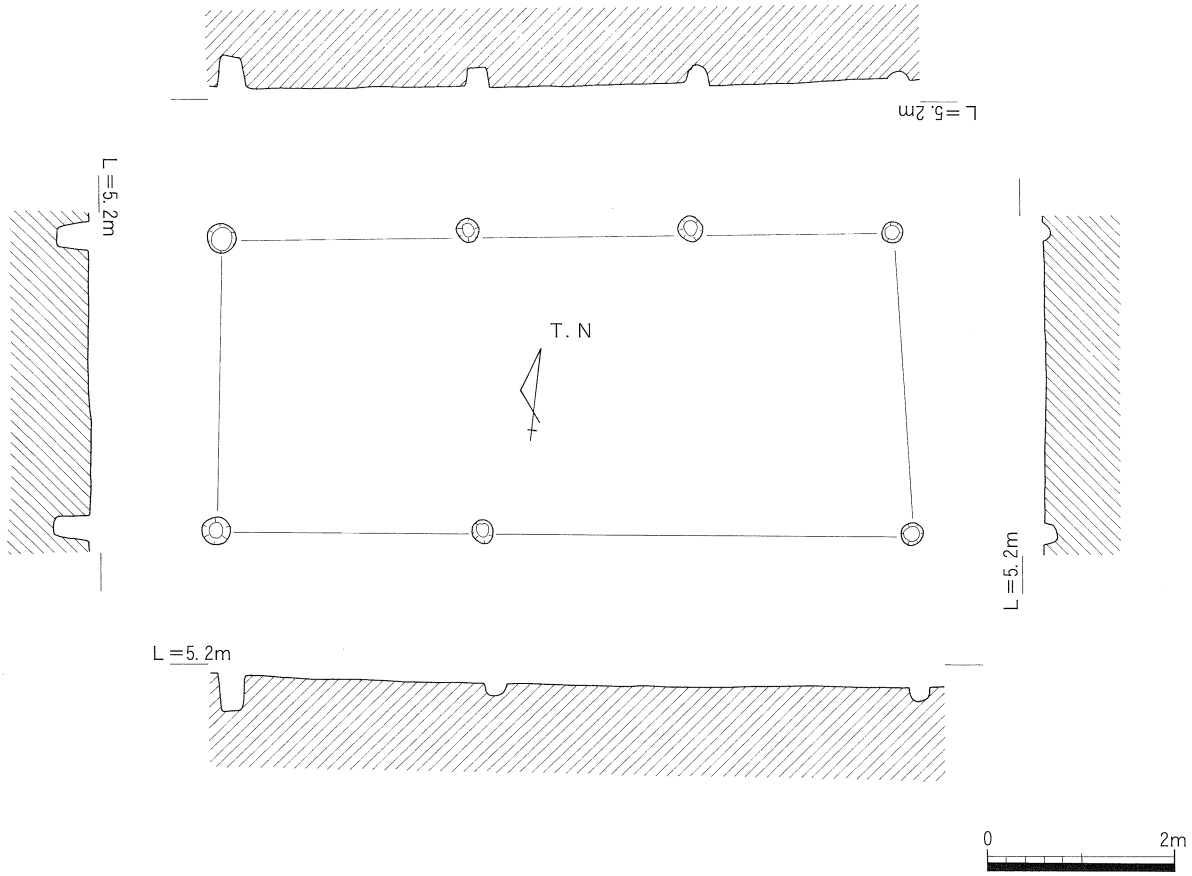
第180図　ＳＢ－Ｂ３－01平・断面図（１/80）

ＳＢ－Ｂ３－01

Ｂ３区北半で検出された掘立柱建物跡である。２×６間（梁間4.5m，桁行12m，床面積54m²）で，主軸方位はＮ－10°－Ｅを示す。柱穴はほぼ直線上に並び，柱穴間の距離が桁方向で1.85～2.1m，西面で柱穴が１個欠落するが，梁間では2.25mとなる。柱穴はすべて円形だが，深さは一定ではなく根石の見られるものが浅い。

ＳＢ－Ｂ３－02

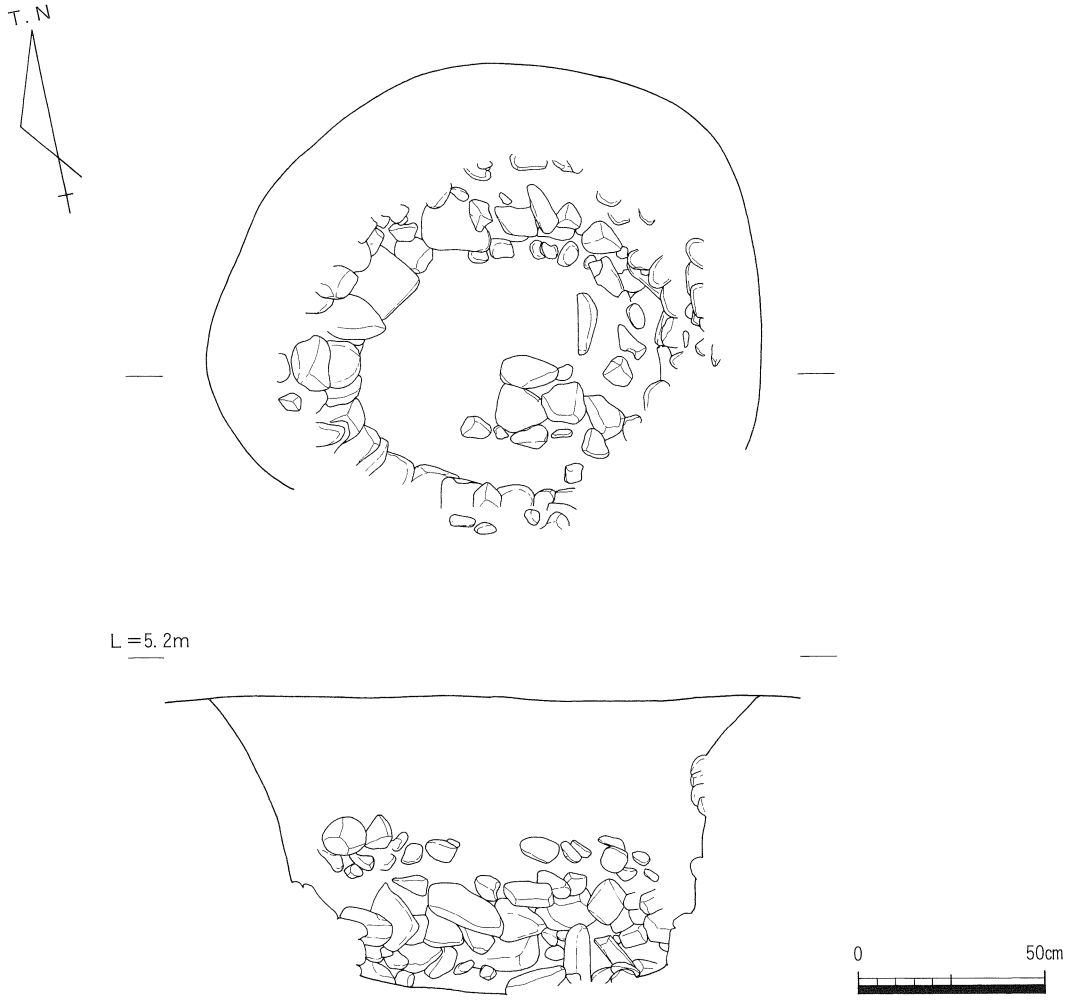
Ｂ３区北半で検出された掘立柱建物跡である。１×３間（梁間約3.1～3.2m，桁行約7.2～7.4m，床面積約23m²）で，主軸方位はＮ－７°－Ｅを示す。平面の形状は南側の桁行が北側より２m長く，台形状を呈する。柱穴はすべて円形だが，西列のものが大きくまた深くなっている。埋土の特色からすれば近世以降の所産に考えられるが，ＳＢ－Ｂ３－01との前後関係は明確ではない。



第181図　ＳＢ－Ｂ３－02平・断面図（１/80）

ＳＥ－Ｂ３－01

Ｂ３区北端部で検出された井戸である。掘り方の形状は，平面が径1.45mのほぼ円形で，断面が長方形で上部がやや開くものである。確認できた深さは約0.9mである。石積みがされたものだが底面に崩落した石が多くみられ，遺存状況は良くなかった。残存する石積みの状況からすれば，井側の平面形状は隅丸方形状をなすものと推察され，また断面において少なくとも垂直となる箇所については石が積まれていたものと考えられる。堆積状況等から，住居と同時期に廃絶したと考えられる。



第182図　ＳＥ－Ｂ３－01平・断面図（1/20）

ＳＫ－Ｂ３－01

Ｂ３区東端部で検出された土坑である。平面形状は長方形状のものが２つ重なる形となり，主軸方向が条里地割に合致するものである。東面が未検出であるが，ＳＤ－Ｂ３－06と平行に接していた位置関係と推察される。断面は逆台形状で，掘削は柱穴及び土坑等と同じほぼ旧耕作土直下からなされている。埋土の堆積状況は下層部に瓦等の遺物を大量に含んだ砂泥層が見られ，上部に砂礫が傾れ込んだ状態で堆積している。以上の状況からすれば居住地内で池等の施設が想定され，廃絶時に建材及び日用品を破棄し埋め戻したと考えられる。

ＳＫ－Ｂ３－01出土遺物

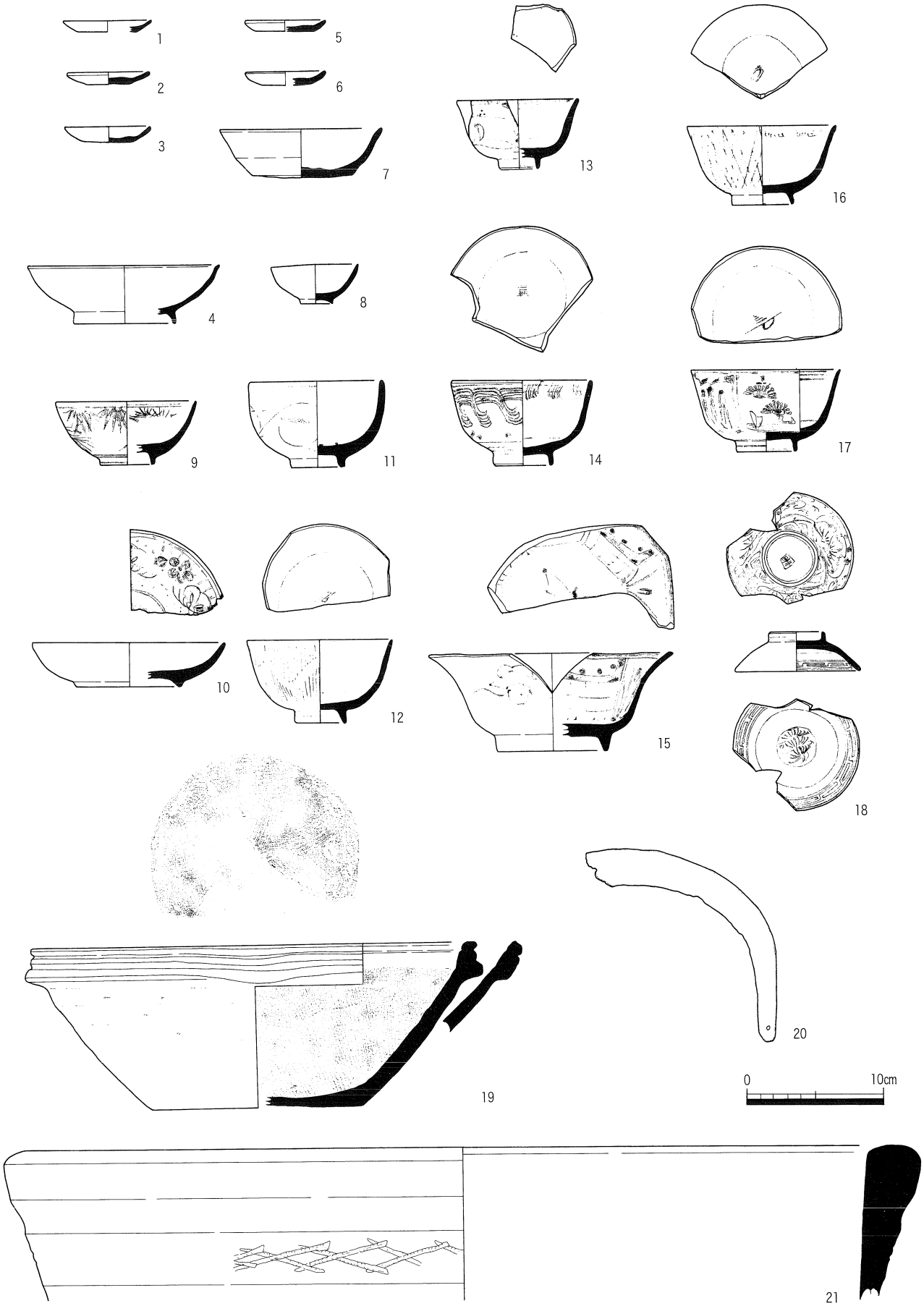
出土遺物には，土師質及び瓦質土器片，陶磁器片，木製品，金属製品，瓦がある。

１～７は土師質土器である。1，2，3，5，6は小皿で底部は回転糸切りがされる。4，7は坏及び椀で器形からは12～13世紀に比定され，混入した可能性も考えられる。

8，11は陶器盃及び碗である。

9，10，12～18は肥前系磁器・碗（9，12，13，14，16，17,）・皿（10）・鉢（15）・蓋（18）である。碗，皿はコンニャク印判や見込み五弁花の見られない装飾や器形からすれば，18世紀末～19世紀代のも

第183図　ＳＫ－Ｂ３－01遺物出土状況図（１/20）



第184図　ＳＫ－Ｂ３－01出土遺物１

のと考えられる。10の皿には口紅装飾がされる。15の鉢は口縁部を外反させる角鉢で，蛇の目凹形の高台をもつもので，大橋編年のⅤ期（1820年代）に該当する。18の蓋は口縁部内面の雷文や高台内銘款から1780～1860年代のものに考えられる。

19は擂鉢。明石産で18世紀後半～19世紀初頭のものと考えられる。

20は鉄製の鎌。先端部が欠損し，柄の取り付け部が穿孔されている。

21は土師質の甕。口縁下部の文様は，斜格子状に押圧されたもの。

22～29は焙烙。土師質のもの（24，26）と瓦質のもの（22，23，25，27～29）がある。器形からは佐藤編年のｂ～ｃ形式に該当すると考えられ，18世紀後半～19世紀前半の年代が想定される。（佐藤1994）

30は鳥型の土製品で，合わせ型により成形される。31は焙烙鍋の把手部。32は竈である。２箇所の焚口があり，各々円筒形の燃焼部をもつ。また内面に粗い刷毛目調整がなされている。薬王寺遺跡（高松市檀紙町）に類例が見られるものである。

瓦

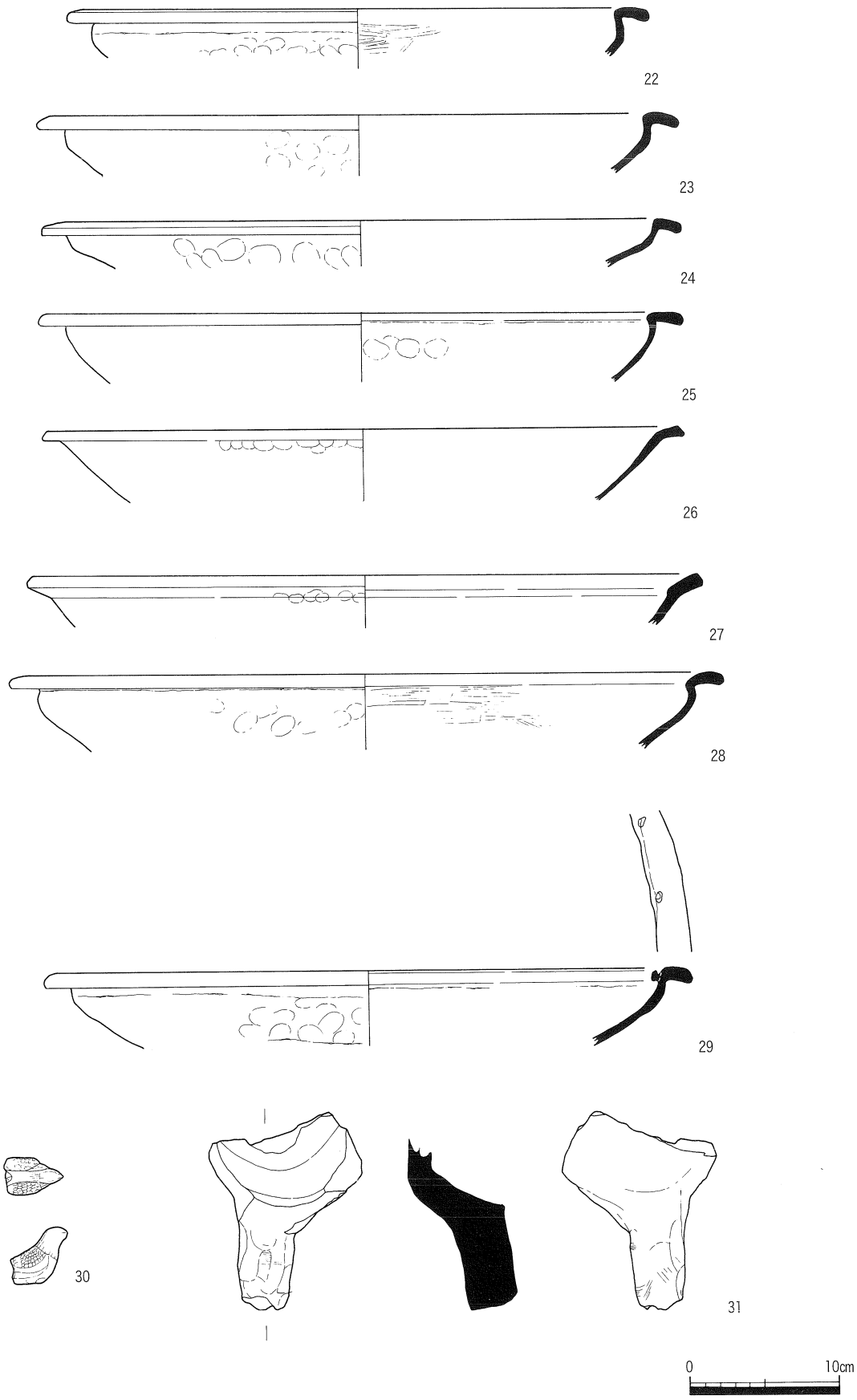
大量に見られたが，代表的なものを取り上げ図化した。

33～39はすべて瓦質のものである。33は軒平瓦。蓮（華文）を中心飾りとした文様が見られる。34，39は丸瓦。34は，凸面には刻印がなされ「飯田惣冶」と読める。「飯田」は地名を示すと考えられ，今も高松市飯田町がある。凹面はコビキＢ及び筵目が見られる他，凹線状の工具痕（？）が３条見られる。39には２箇所の釘穴がある。凹面は筵目が見られ，削り及びナデにより調整される。35，36，37は軒丸瓦である。すべて三巴文だが，尾の長さ，珠文の数にばらつきがある。

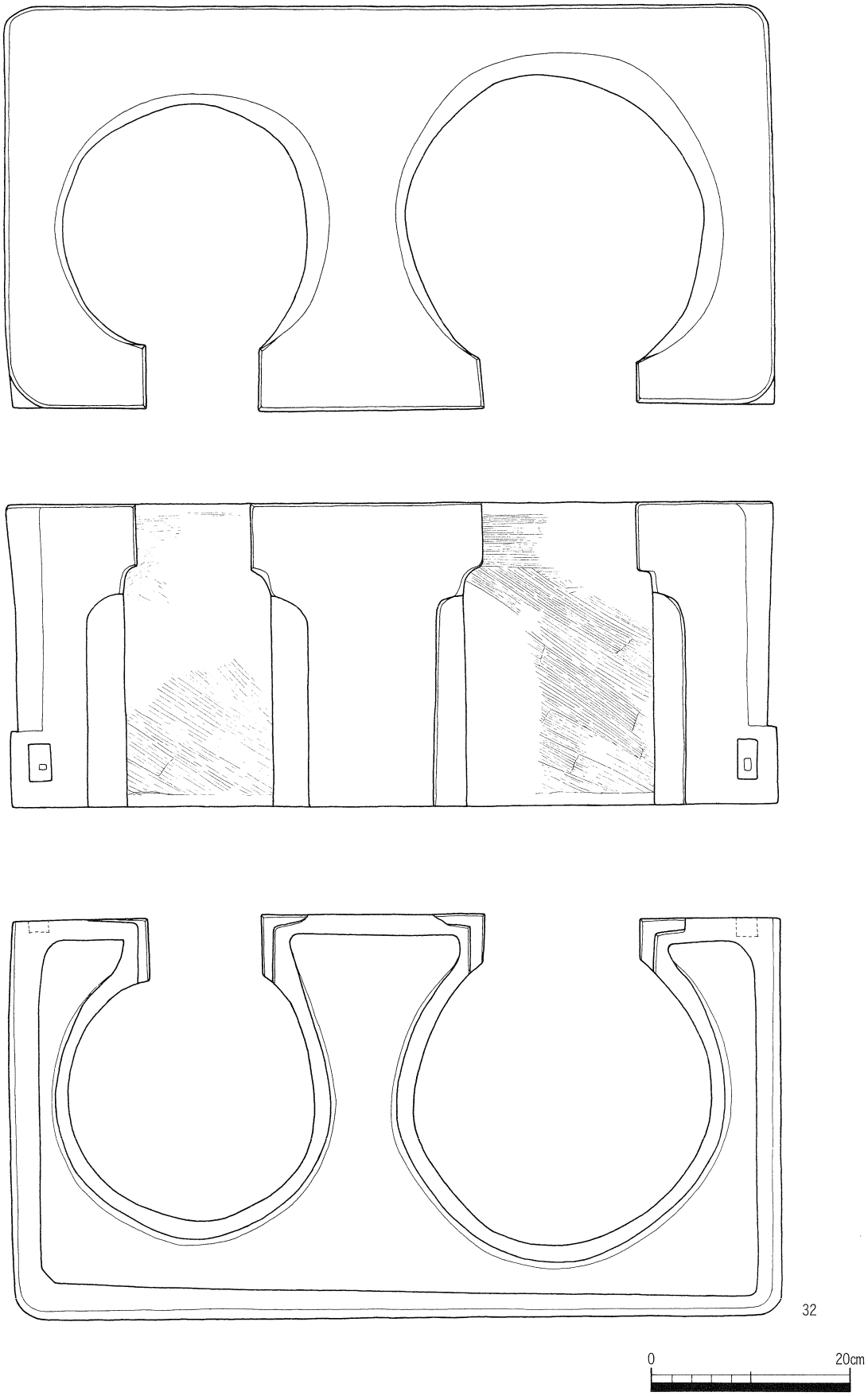
木製品

出土した木製品は，日用の生活用具と建材に大別される。生活用具としては折敷，椀，結桶，曲げ物，履物等が考えられる。建材には杭や束に使用されたと考えられる棒状の加工木がある。

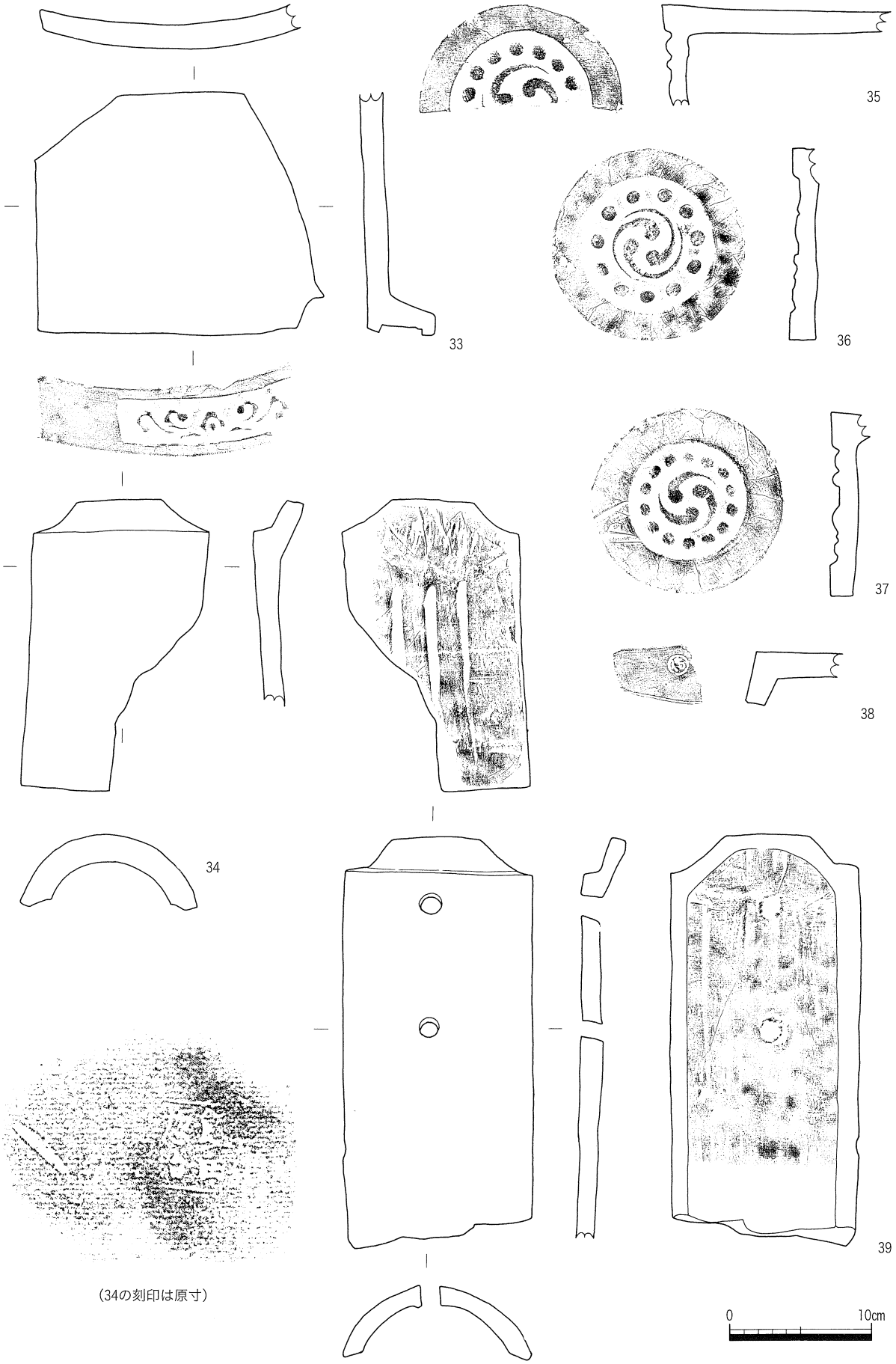
Ｗ１は漆塗り膳底板と考えられ，脚部接合のための溝が見られる。W2，3は結桶の側板である。Ｗ４は籠等の把手部と考えられる。Ｗ５は漆器椀である。Ｗ６は加工木で桶等の側板と考えられる。Ｗ７も桶側板。Ｗ８は桶等曲げ物の底板と考えられる。側面に釘穴が見える。Ｗ９は曲げ物。内面に縦方向の切れ込みをいれ，丸めて樹皮で綴じたもの。W10は加工木で側面に釘穴が見られる。W11，12，13は加工木。桶等の側板か。W14の加工木は折敷等の箱材。W15は折敷。漆塗りがされる。W16，17は加工木。箱材か。W18は杭である。W19，20は加工木。棒状のもので，垂直に切断した鋸引きの痕が見られる。W21は用途不明の部材。頭部を持ち先端部を尖す釘状の形態をなすもの。W22は杭である。W23は加工木で棒状のもの。W24は部材で先端部に臍状の突起を持つ。W25，27は加工木。切断面に鋸引きの痕が見られる。W26は履物で草履状の形態である。W28，29は両端部を垂直に切断された棒状の加工木。建材（束等）としての使用が考えられる。W30は先端部に臍が作り出された建築部材。W31は杭である。中位の削り痕が顕著に見られる。W32は加工木。櫂状をなすもので，断面三角状に成形する削り痕が顕著に見られる。



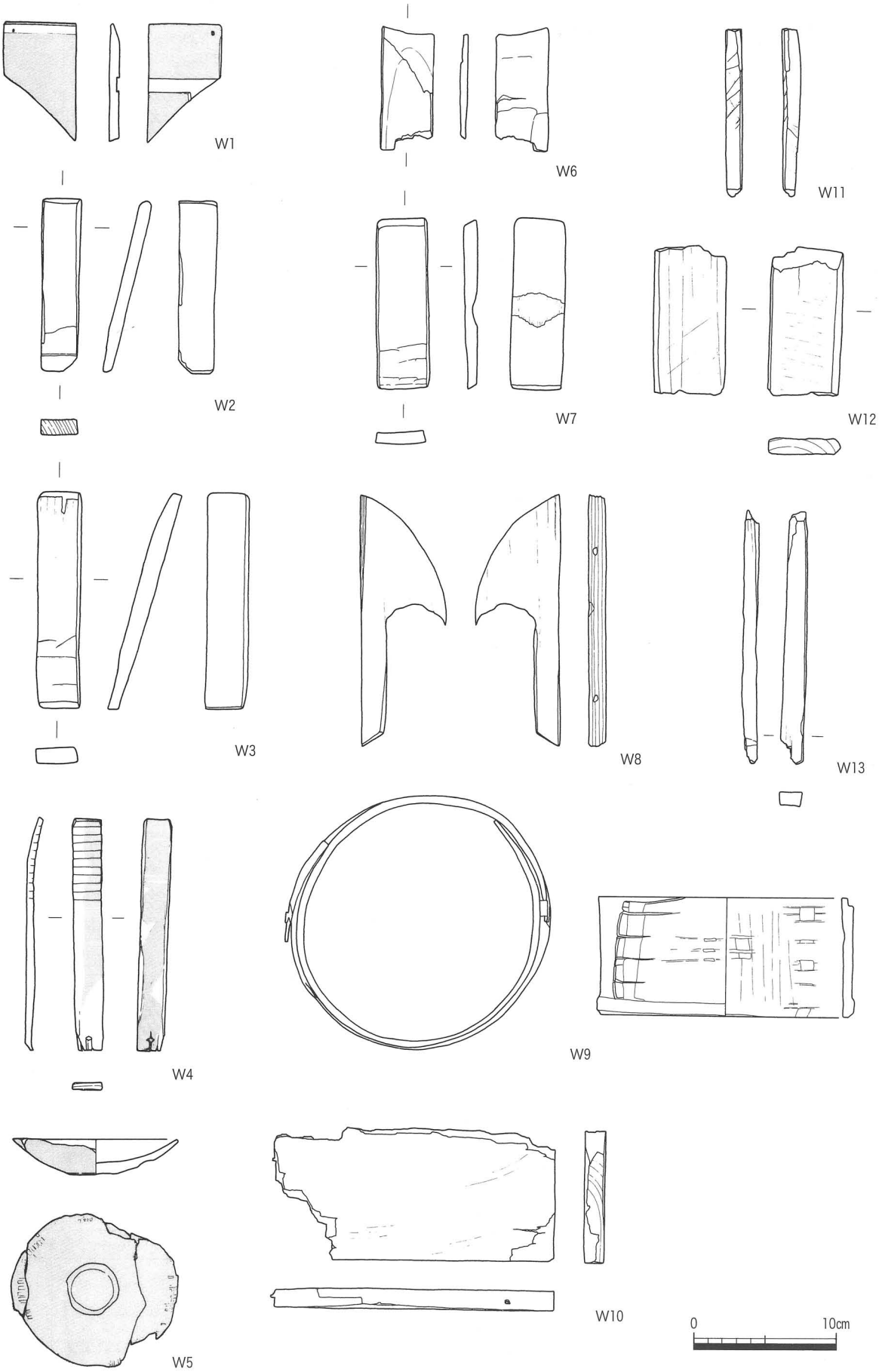
第185図　ＳＫ－Ｂ３－01出土遺物２



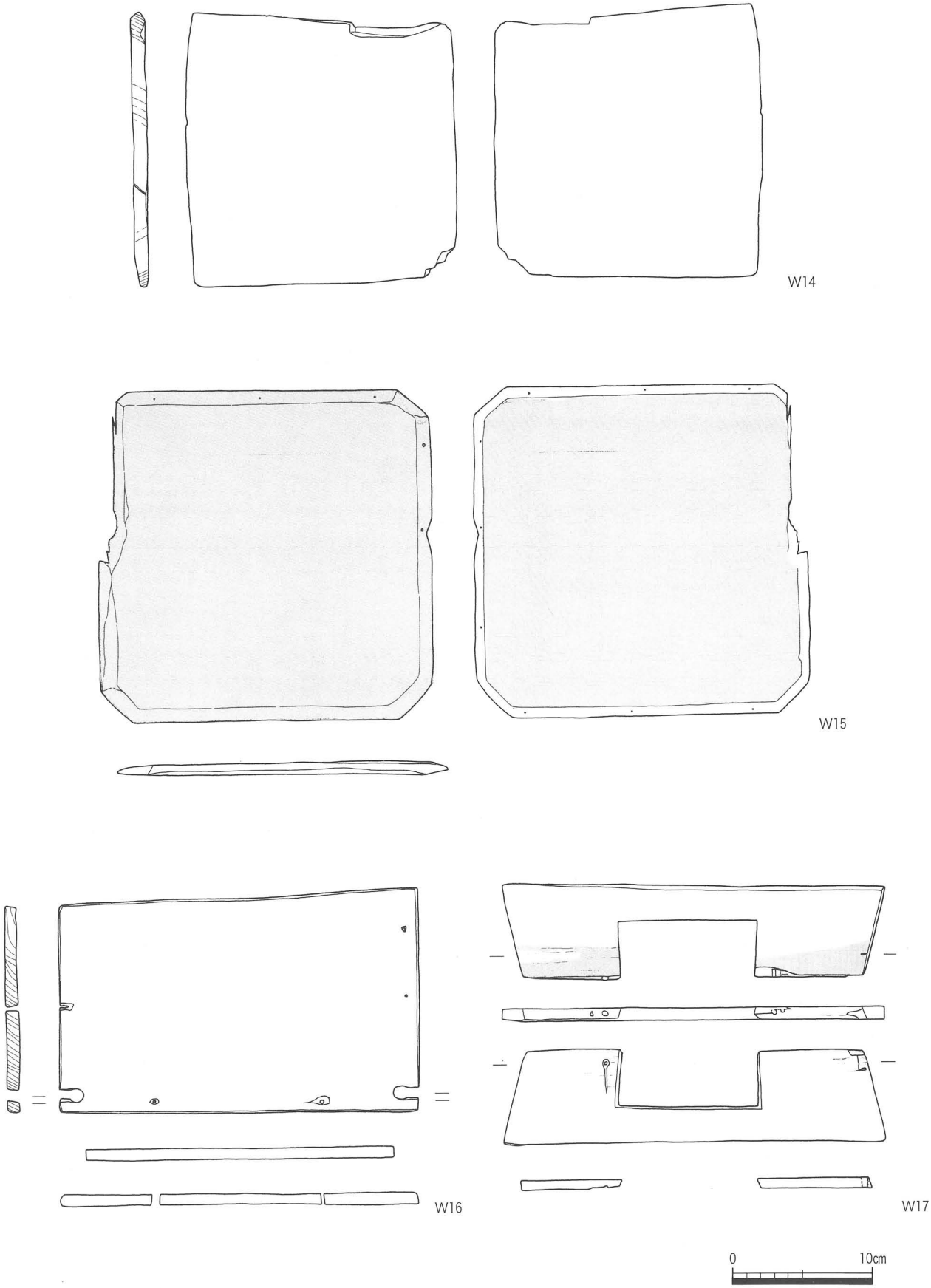
第186図　ＳＫ－Ｂ３－01出土遺物３



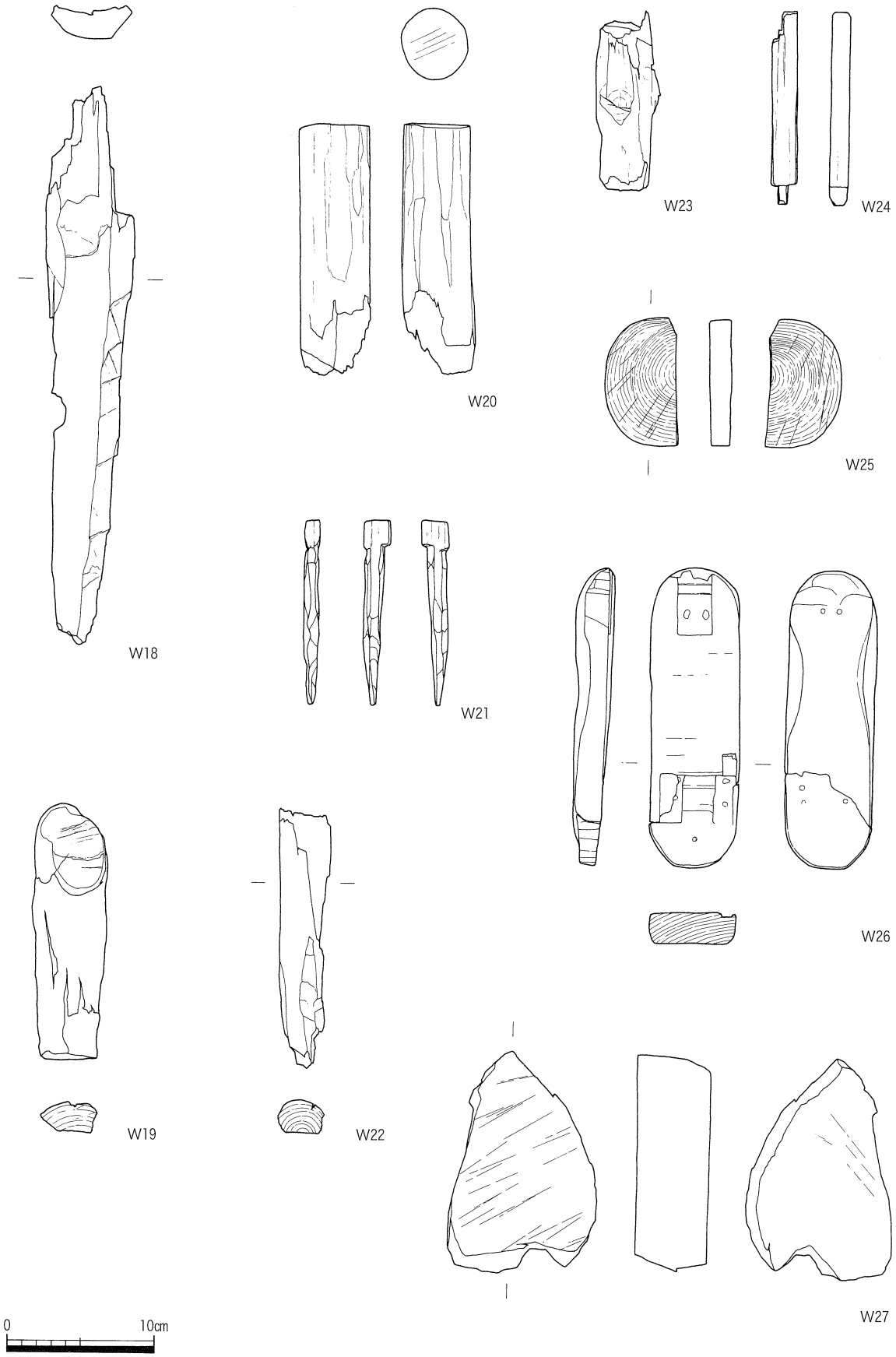
第187図　ＳＫ－Ｂ３－01出土遺物４



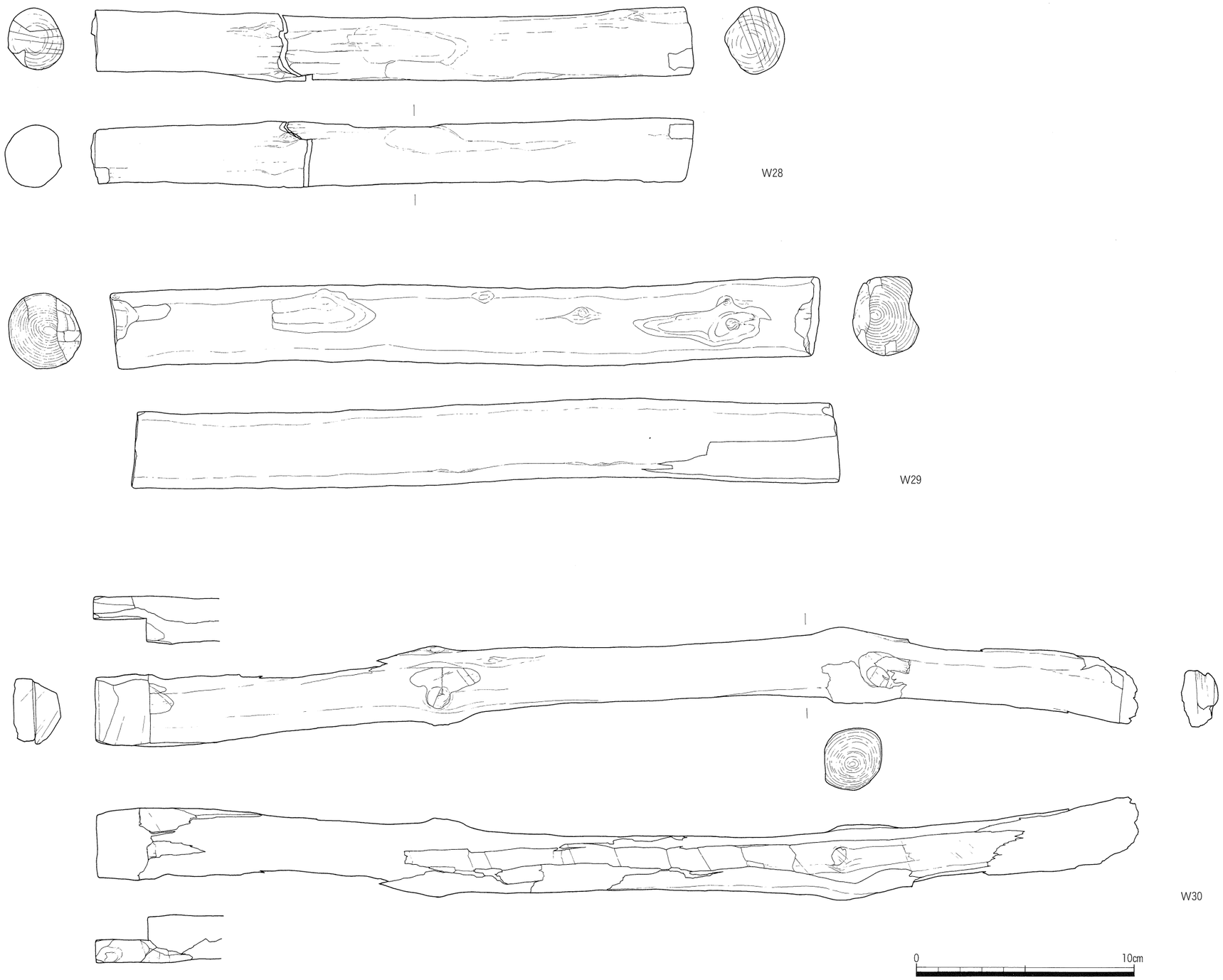
第188図　ＳＫ－Ｂ３－01出土木製品１



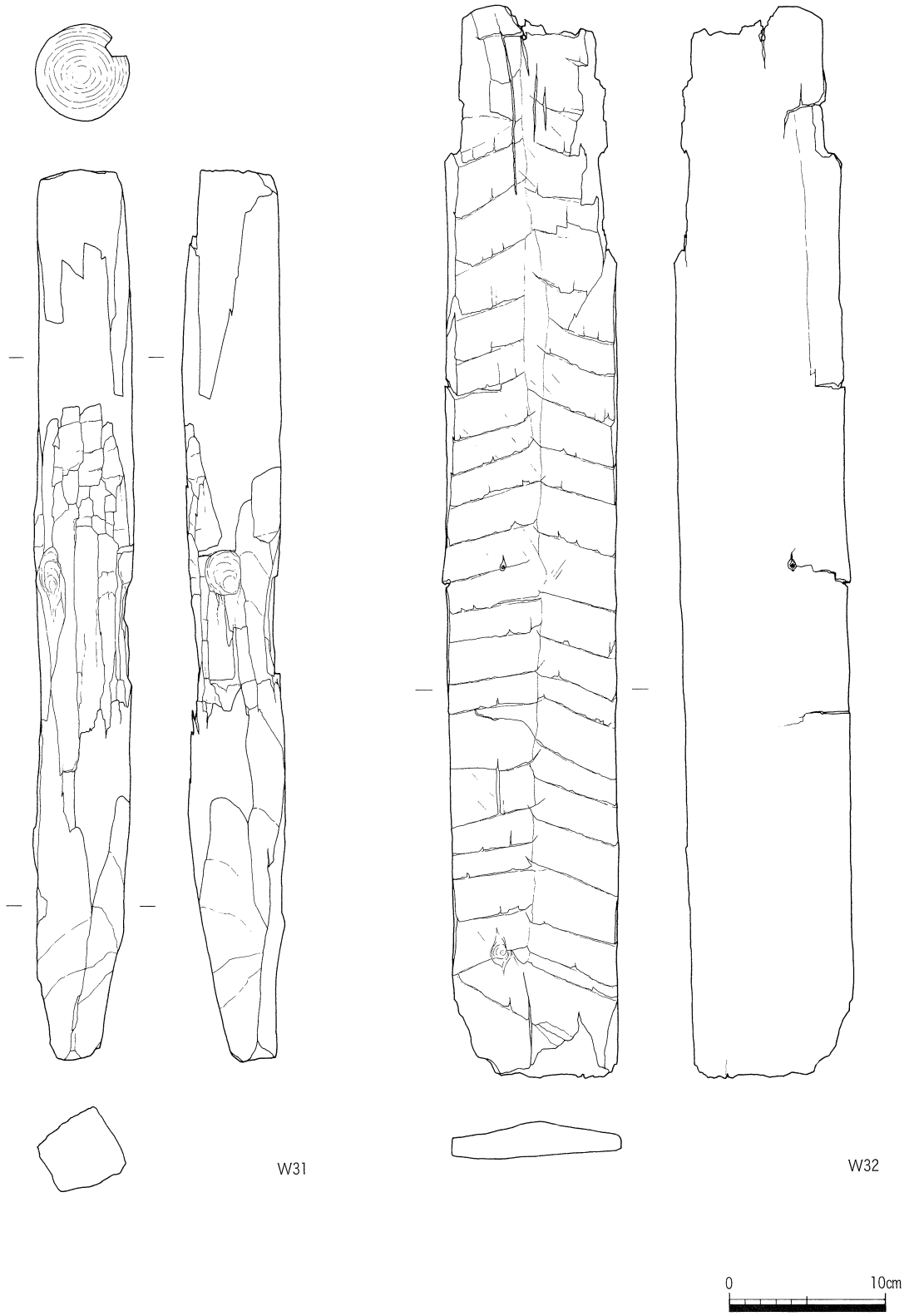
第189図　ＳＫ－Ｂ３－01出土木製品２



第190図　ＳＫ－Ｂ３－01出土木製品３



第191図　ＳＫ－Ｂ３－01出土木製品４



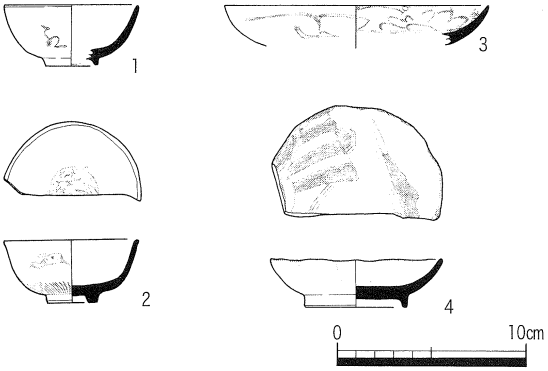
第192図　ＳＫ－Ｂ３－01出土木製品５

ＳＫ－Ｂ３－02

Ｂ３区北東隅で検出された土坑である。平面形状はＵ字形状となっており，深さ約0.5～0.6ｍを測る。埋土は概ね上層部に灰色シルト質粘土層，下層部に砂質土の堆積が見られた。遺物が出土したが，破棄土坑として考えるには出土量に対し規模が大きく性格は不明である。一応，北接するＳＫ－Ｂ２－15，ＳＤ－Ｂ２－03が排水施設に考えられることから風呂等の施設があったものと推定される。

ＳＫ－Ｂ３－02出土遺物

１～４は肥前系の磁器。１は盃。２は碗。３，４は皿である。



第193図　ＳＫ－Ｂ３－02出土遺物

ＳＫ－Ｂ３－03

Ｂ３区北東部で検出された土坑である。平面形状は楕円形状で，長径約2.4ｍ，短径約1.2ｍを測る。深さは５㎝前後と浅い。埋土は黄灰～黄褐色シルト質細砂の単層である。

ＳＫ－Ｂ３－04

Ｂ３区北東部，ＳＫ－Ｂ３－02に接して検出された土坑である。平面形状は隅丸方形状で，長径約1.4ｍ，短径約1.2ｍを測る。深さは約10㎝で，埋土は青灰色でグライ化したシルト質細砂の単層である。

ＳＫ－Ｂ３－05

Ｂ３区北西部で検出された土坑である。西側の掘り方でＳＤ－Ｂ３－01の上端部を壊す。平面形状は不定形で，長径約3.2ｍ，短径約2.2ｍを測る。深さは約0.5ｍで，埋土は黄灰色シルト及び砂が堆積している。

ＳＫ－Ｂ３－06

Ｂ３区西部で検出された土坑である。平面形状は不定形で，長径約1.1ｍ，短径約0.8ｍを測る。深さは約0.3ｍで，埋土は灰黄色粗砂シルト及び褐灰色シルトが堆積している。

ＳＫ－Ｂ３－07

Ｂ３区西部で検出された土坑である。平面形状はほぼ円形で，径約1.1ｍを測る。深さは約0.5ｍで，埋土は灰色砂質土が堆積している。

ＳＫ－Ｂ３－08

Ｂ３区南部で検出された土坑である。平面形状はほぼ円形で，径約1.5ｍを測る。深さは約0.5ｍで，埋土は灰色砂質土が堆積している。

ＳＫ－Ｂ３－09

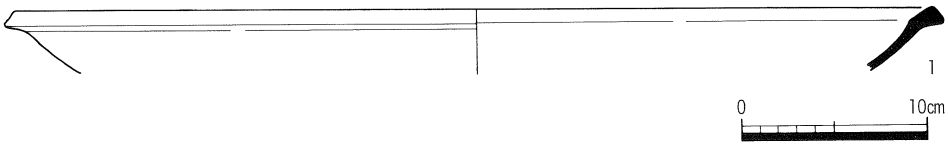
Ｂ３区南部で検出された土坑である。平面形状はほぼ円形で，径約1.5mを測る。深さは約0.5mで，埋土は灰色砂質土が堆積している。

ＳＫ－Ｂ３－10

Ｂ３区南部端で検出された土坑である。平面形状はほぼ長方形をなすが，南側は未検出である。深さは約0.5mで，埋土は灰色シルト及び砂質土が堆積している。切り合い関係ではＳＫ－Ｂ３－10より後出するものである。

ＳＫ－Ｂ３－10出土遺物

１は瓦質焙烙である。口縁部の特徴から佐藤編年のｃ形式に該当する。



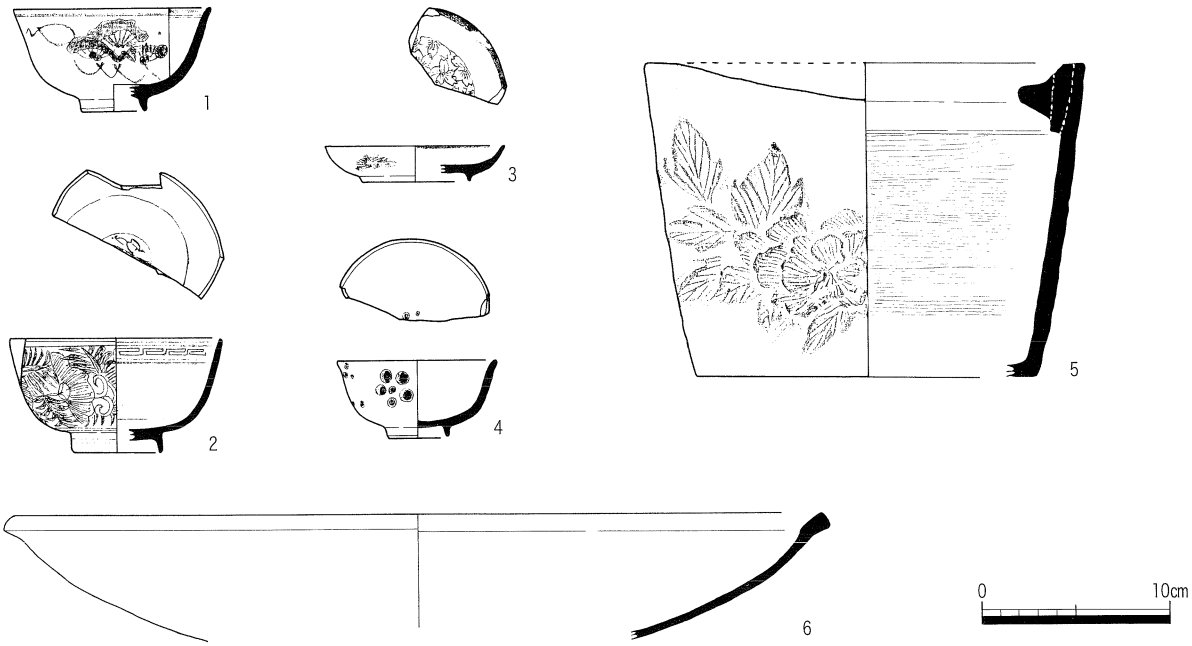
第194図　ＳＫ－Ｂ３－10出土遺物

ＳＫ－Ｂ３－11

Ｂ３区南部端で検出された土坑である。南側は未検出であるが，約４m四方のほぼ方形状をなすと考えられる。深さは約0.5mで，埋土は灰色シルト質極細砂及びグライ化した砂質土が堆積している。

ＳＫ－Ｂ３－11出土遺物

遺物は肥前系磁器，碗（1，2，4）・皿（３），土師質焜炉（５），瓦質焙烙（６）等が出土している。



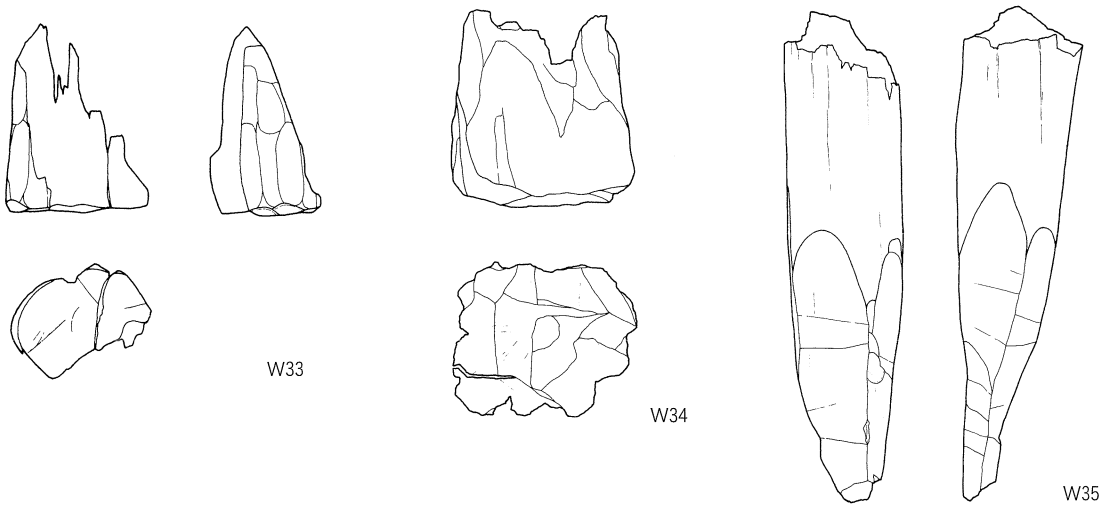
第195図　ＳＫ－Ｂ３－11出土遺物

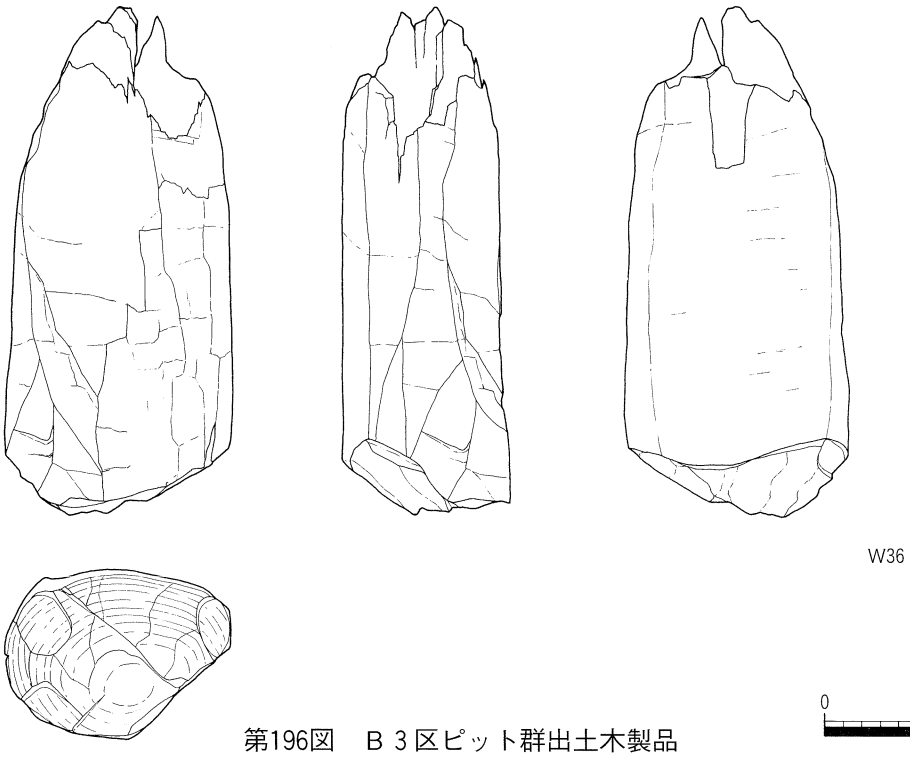
Ｂ３区ピット群　（第179図参照）

Ｂ３区において建物等に復原できなかったものを一括する。調査区南端部に見られる小規模なものは，杭状に加工された木製品が出土していることから柵列等の杭掘り方と考えられる。一方で柱跡と考えられる敷石をもつピットは掘削深度が浅く，削平されて検出できなかったものもあったと考えられる。またＳＢ－Ｂ３－01の北面，南面から約２ｍ外側で検出された柱穴等は，むしろＳＢ－Ｂ３－01を構成するものとも考えられ，本来４×６間相当の建物規模であったのかもしれない。

Ｂ３区ピット群出土遺物

W33，34，36は柱材である。W33，34は遺存状態が悪いが底部は平坦に加工される。W36は片側の側面に工具痕が顕著に見られるもので，断面は楕円形状となる。W35は先端部を尖らし杭状に仕上げたものである。





第196図　Ｂ３区ピット群出土木製品

第３節　Ｃ調査区

概要

現況と調査区の分割（第200図参照）

Ｃ区は当遺跡の中央部に位置し，条里呼称では香川郡10条18里16坪内に位置する。地図上で示される当地区周辺部は現地表面の標高はおよそ６ｍを測る。現況は一部の宅地等を除き条里型に区画された水田等の耕作地として利用されている。

Ｃ区は現有道路，線路，コンクリート畦畔等により５分割される。調査時においては調査範囲を東西に分断するＪＲ予讃本線を境に東側を３－②～④区，西側を７区として調査を行ったが，本報告にあたりＣ１～Ｃ５区に再編した。

調査期間

Ｃ３～５区は一部Ｄ区と調査を平行しながら平成９年６月11日～８月19日迄，Ｃ１区はＢ，Ｄ区と調査を平行しながら平成９年11月11日～平成10年１月29日迄で行った。Ｃ２区は平成10年３月17，18日で調査を行った。

調査の工程

調査は平成８年度に行った試掘により得られたデータを基に，概ね遺構面の上面までを重機により掘削しその後遺構の検出及び掘削を人力により行った。遺構等の測量はＣ２～Ｃ５区については本体工事の測量図等を基準に，調査員及び補助員が測量を行った。またＣ１区については航空測量を行った。

主な遺構（第200図参照）

Ｃ１区では，香川郡10条18里16・17坪界上に溝跡を検出している。近世～近代において廃絶されたものだが，下層より出土した遺物は10世紀代，13～14世紀代のものがある。またこの坪界溝跡に沿うようにＣ１及びＣ４区で13～14世紀代の道路状遺構が検出されている。

Ｃ４区では調査範囲が幅狭いため不明な個所もあるが，12世紀代及び13～14世紀代を中心に掘立柱建物跡７棟分を検出している。この他小規模な溝跡を多数検出しているが，10世紀代と考えられるＳＤ－Ｃ３－01，ＳＤ－Ｃ４－01等は条里方向とはやや異なる方向を示している。

近世・近代ではＣ１区において掘立柱建物跡，井戸跡を確認している。

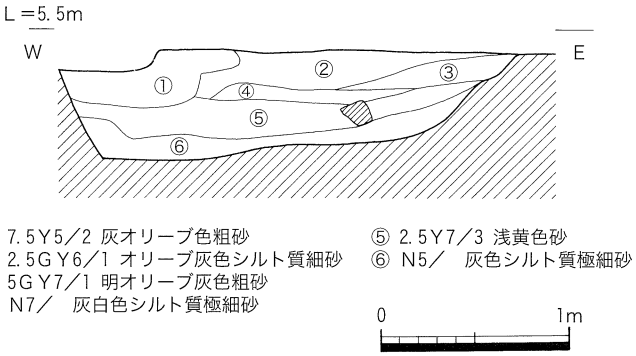
堆積状況（第201，202図参照）

Ｃ１～３区北半は本来低地であったと考えられ，礫及びシルト層が凹凸をなして堆積しているのが見られた。中世の遺構検出面付近においてほぼ水平な堆積層となり，中世には耕作地等として整地されていたことが窺える。Ｃ４区は微高地となり，現耕作土のほぼ直下で遺構が検出されている。安定した地盤となるＣ４区では前述のような掘立柱建物跡群が検出され，古代～中世の居住地であったことが分かる。

古代～中世の遺構・遺物

ＳＤ－Ｃ１－01

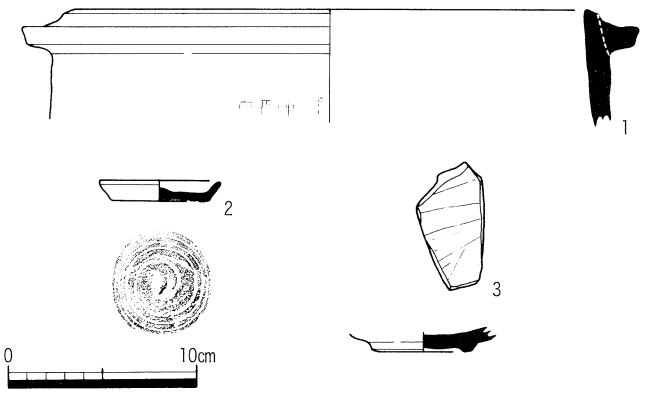
Ｃ１区西端で検出された南北及び東西方向の溝跡である。南北方向においては香川郡10条18里16・17坪界上となる現有道路に沿い検出されたもので，16・21坪界となる東西現道を挟みＳＤ－Ｂ３－01へ繋がる。検出レベルは5.11～5.20ｍで，底面レベルは4.70～4.87ｍで緩やかに北方向に下る。方位はＮ－10°－Ｅを示す。検出延長は約34ｍ，検出幅は最大2.3ｍを測るが，西側の上端部が調査区外となり未検出である。断面は東側上端部及び底面からすれば，逆台形状をなすと思われる。埋土の堆積状況からＳＤ－Ｂ３－01と同様に近世～近代にかけての埋没が認められ，現有の道路側溝に付替えられたものと推察される。図化したような土師器片も見られたことから，開削の時期が古代に遡るものと考えられる。



第197図　ＳＤ－Ｃ１－01断面図

ＳＤ－Ｃ１－01出土遺物

１は土師器羽釜の口縁部で，10世紀頃の年代が考えられる。２は土師質土器皿。底部は回転ヘラ切りがされたもの。口径より佐藤編年ＢⅢ－４形式に該当するもので，13世紀前半～14世紀前半と考えられる。３は須恵器椀の底部。高台が矮小化し，内面の調整は板ナデのみである。高台の法量より佐藤編年のＡⅡ－８形式に該当し，13世紀のものである。



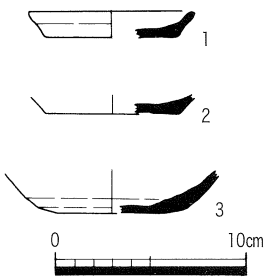
第198図　ＳＤ－Ｃ１－01出土遺物

ＳＤ－Ｃ１－02～04

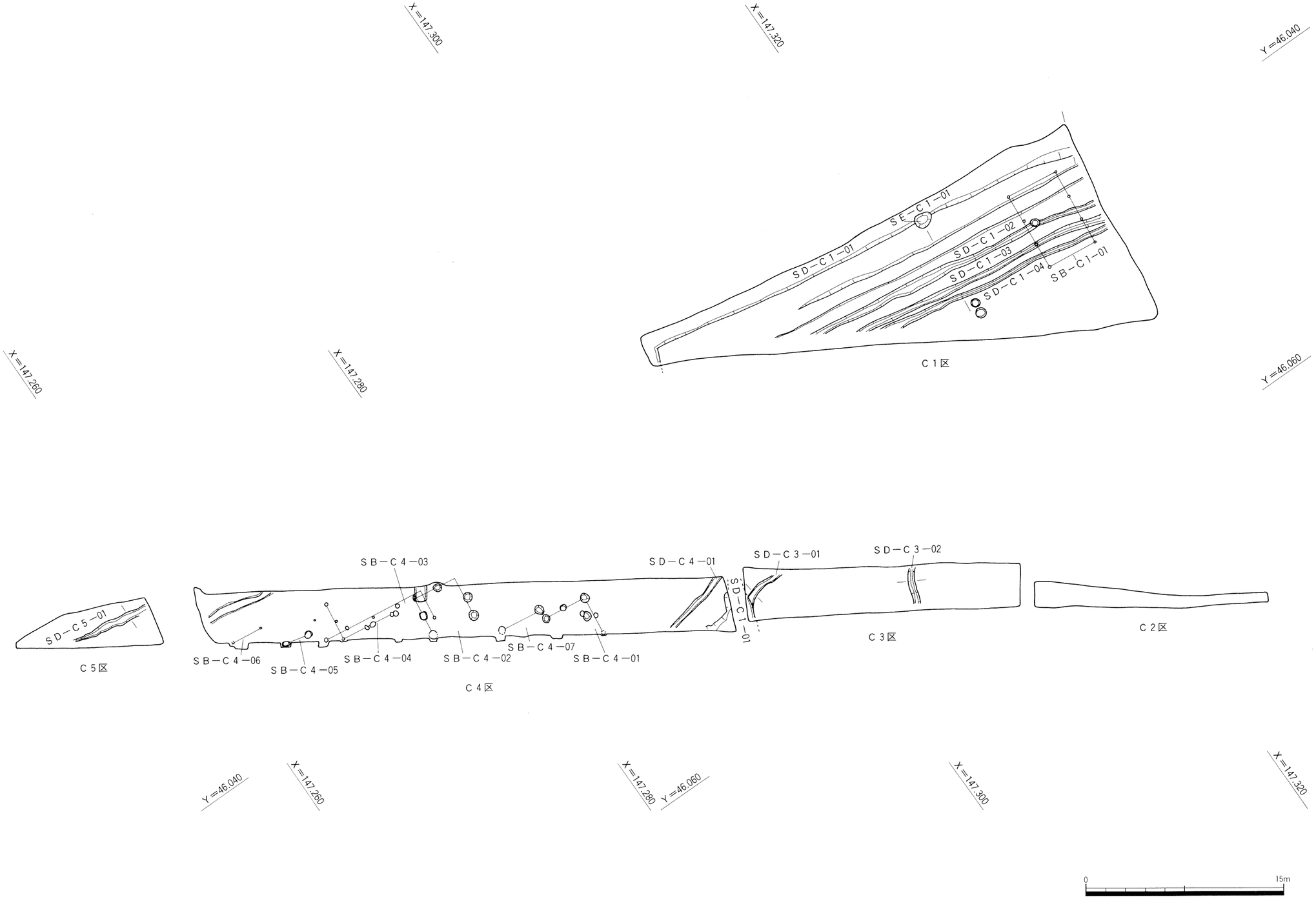
Ｃ１区において南北方向に並走して検出された３条の溝跡である。検出レベルは標高5.13～5.26ｍ，底面のレベルは標高5.08～5.20ｍを測り北方向に下る。方位は概ねＮ－10°－Ｗを示す。検出幅約0.3～0.9ｍで平面ではほぼ同規模だが，中央のＳＤ－Ｃ３－03は断面Ｕ字形をなし，遺存する深度も深い。埋土は灰黄色シルト質極細砂（2.5YR 6／2）の単層である。所属時期は出土遺物から13世紀前半～14世紀前半と考えられる。

ＳＤ－Ｃ１－02～04出土遺物

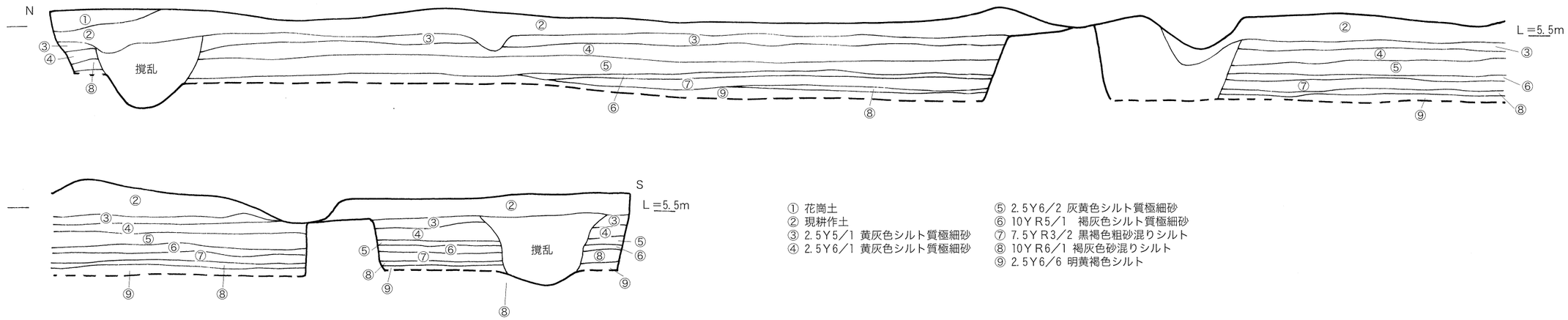
１は土師質土器皿。口径より佐藤編年ＢⅢ－４形式に該当するもので，13世紀前半～14世紀前半と考えられる。2，3は土師質土器坏の底部である。



第199図　ＳＤ－Ｃ１－02～４出土遺物

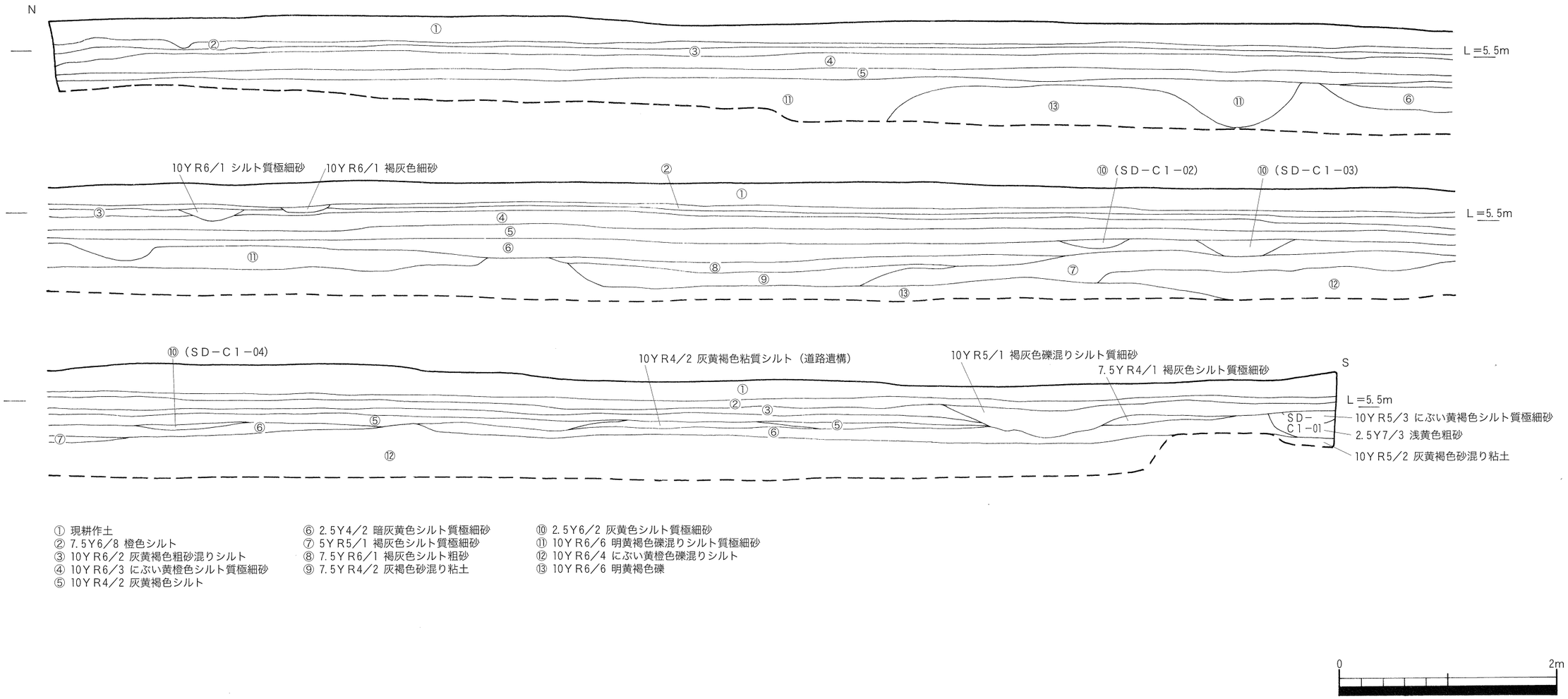


第200図　C区遺構配置図（1/300）



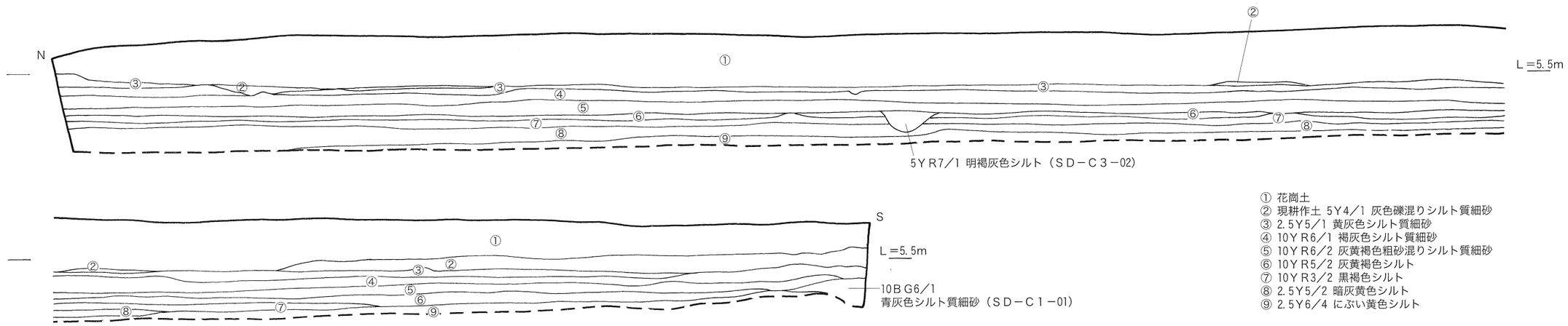
① 花崗土
② 現耕作土
③ 2.5Y5／1 黄灰色シルト質極細砂
④ 2.5Y6／1 黄灰色シルト質極細砂
⑤ 2.5Y6／2 灰黄色シルト質極細砂
⑥ 10YR5／1 褐灰色シルト質極細砂
⑦ 7.5YR3／2 黒褐色粗砂混りシルト
⑧ 10YR6／1 褐灰色砂混りシルト
⑨ 2.5Y6／6 明黄褐色シルト

第201－1図　C2区東壁土層図（1/40）

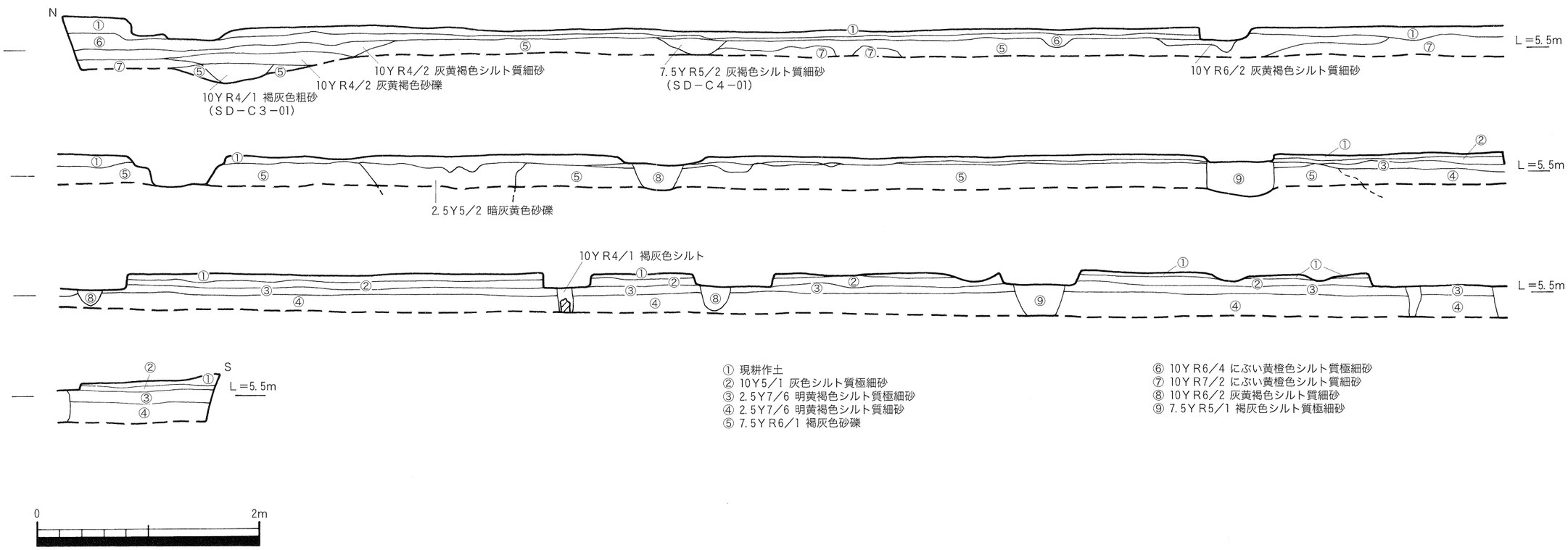


① 現耕作土
② 7.5Y6／8 橙色シルト
③ 10YR6／2 灰黄褐色粗砂混りシルト
④ 10YR6／3 にぶい黄橙色シルト質極細砂
⑤ 10YR4／2 灰黄褐色シルト
⑥ 2.5Y4／2 暗灰黄色シルト質極細砂
⑦ 5YR5／1 褐灰色シルト質極細砂
⑧ 7.5YR6／1 褐灰色シルト粗砂
⑨ 7.5YR4／2 灰褐色砂混り粘土
⑩ 2.5Y6／2 灰黄色シルト質極細砂
⑪ 10YR6／6 明黄褐色礫混りシルト質極細砂
⑫ 10YR6／4 にぶい黄橙色礫混りシルト
⑬ 10YR6／6 明黄褐色礫

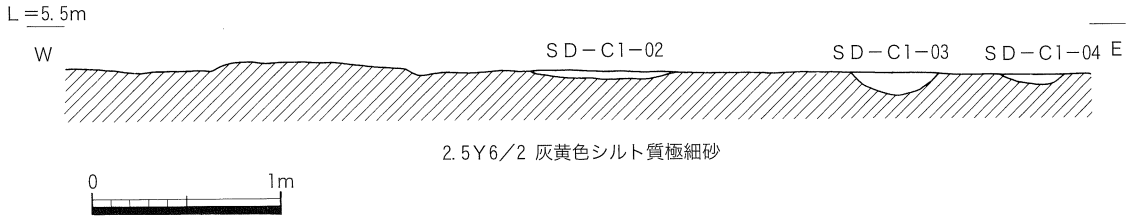
第201－2図　C1区東壁土層図（1/40）



第202－1図　C3区東壁土層図（1/40）



第202－2図　C4区東壁土層図（1/40）



第203図　ＳＤ－Ｃ１－02～４断面図

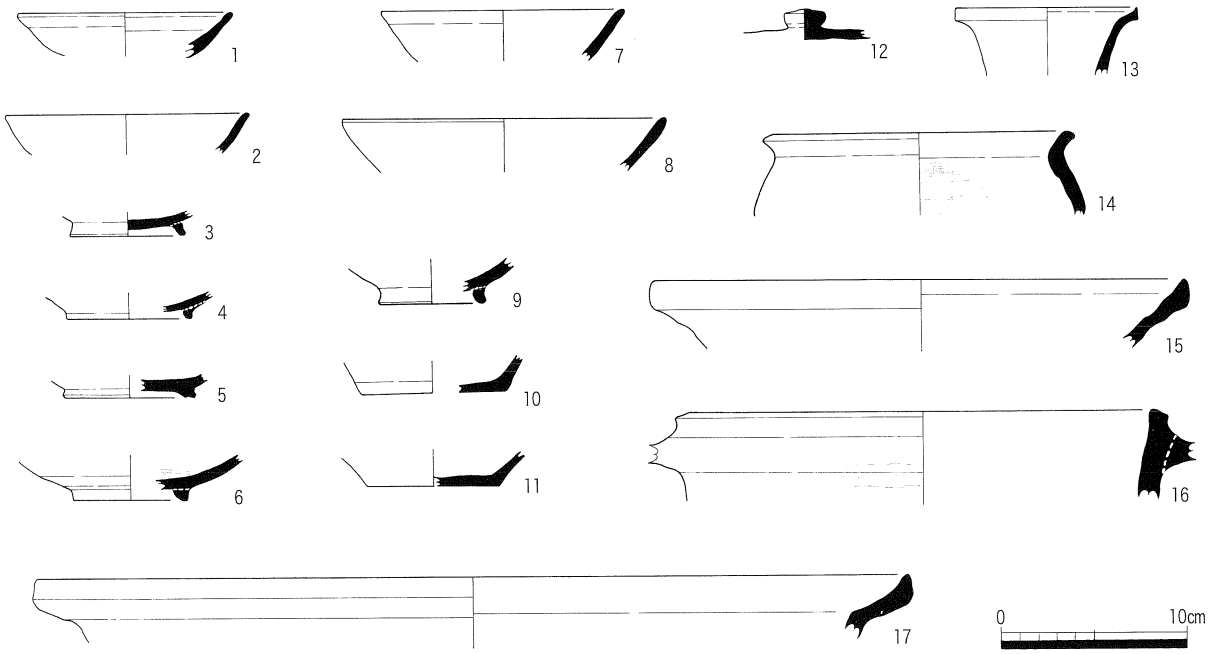
道路状遺構

Ｃ1，Ｃ５区において検出された。Ｃ１区ではＳＤ－Ｃ３－02～04検出の際，溝跡のベースとした灰褐色（10YR ４／２）シルト層がやや暗く粘性をもった帯状（検出延長約25m，幅約１～1.5m）を呈する形で確認された。溝跡に平行するもので，ほぼ条里方向となるＮ－８°－Ｅを示す。断面では約５㎝程の凸状をなすが，南部において削平の影響が大きい。Ｃ５区においてもほぼその延長上に検出（検出延長約4.5m，幅約0.8m）されている。所属時期は堆積関係から13世紀前半～14世紀前半と考えられる。

Ｃ３区包含層出土遺物

Ｃ３区の灰黄褐色（10YR ５／２）シルト層より出土した遺物である。遺物包含層直下に土壌化層（黒褐色シルト層）が堆積しており，耕作地と考えられる低地で出土する遺物の様相は，北部のＡ区と同じである。遺物より10～12世紀頃の堆積物と考えられ，南接する居住区より破棄されたものに推定される。

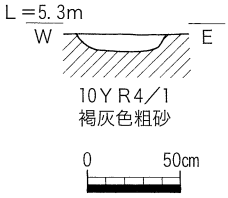
1，2は土師質土器坏口縁部である。３は黒色土器椀の底部。4，9は土師質土器椀の底部。６は須恵器椀底部。５は緑釉陶器椀の底部で，高台畳付部には圏線が見られる。10，11は須恵器坏の底部。7，8は土師器坏の口縁部。13は須恵器壷の口縁部。12は須恵器蓋のツマミ。14は土師質土器甕。15は東播系須恵器捏鉢の口縁部。16は土師器羽釜，17は土師質土器鍋の口縁部である。



第204図　Ｃ３区包含層出土遺物

ＳＤ－Ｃ３－01

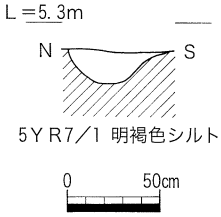
Ｃ３区南部からＣ４区北端部において検出された溝跡である。検出レベルは標高5.19～5.54m，底面のレベルは標高5.15～5.25mを測り，北方向に下る。C3, Ｃ４区の境界上において東西方向ＳＤ－Ｃ１－01と交差するが，切り合い関係は明確ではない。方位はＮ－15°－Ｗを示す。検出幅約0.4～0.6ｍで，断面は船底形をなす。埋土は褐灰色（7.5YR ４／１）砂質シルトの単層である。所属時期は埋土からすれば10世紀代と考えられる。



第205図　ＳＤ－Ｃ３－01断面図

ＳＤ－Ｃ３－02

Ｃ３区中央部において検出された溝跡である。南部の微高地から下る低地に設けられたもので，検出レベルは標高5.00m前後，底面のレベルは標高4.84m前後を測る。方位はＥ－23°－Ｓを示す。検出幅約0.6ｍで，断面はＵ字形をなす。埋土は明褐色（５ YR ７／１）シルトの単層である。掘削が後述の遺物包含層の上面より及ぶことから，13世紀以降の所産と考えられる。

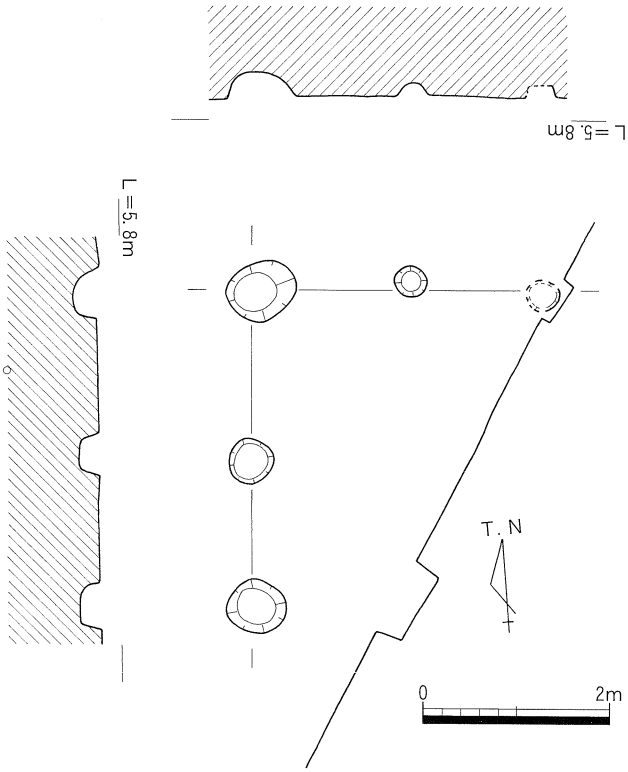


第206図　ＳＤ－Ｃ３－02断面図

Ｃ４区建物跡

ＳＢ－Ｃ４－01

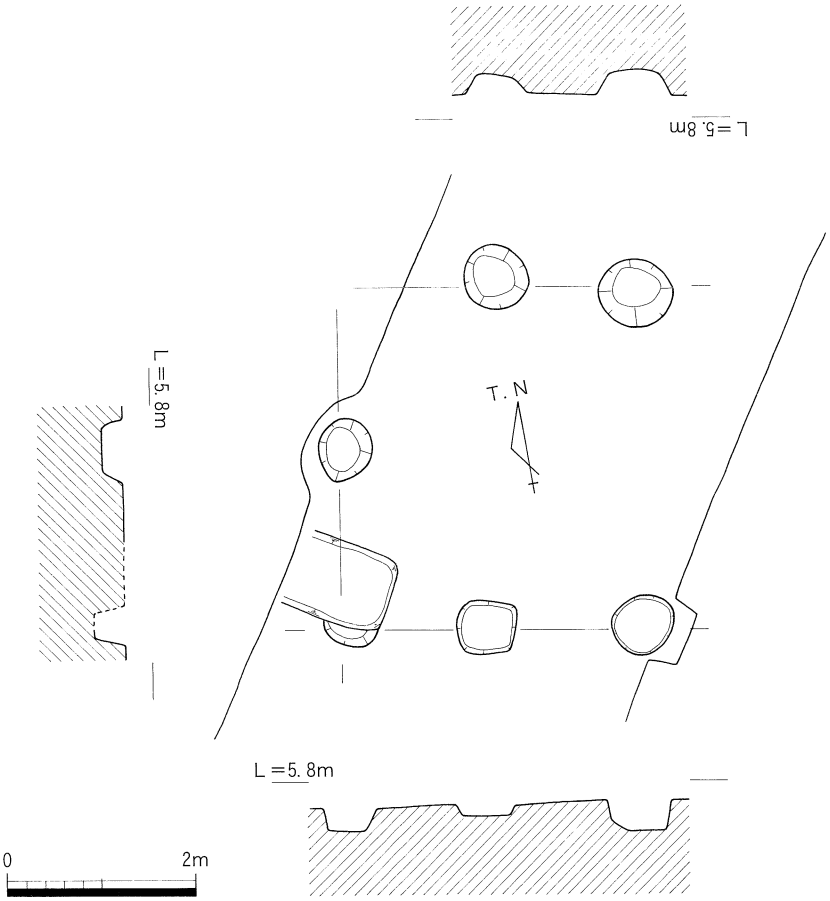
Ｃ３区北部において検出された掘立柱建物跡である。東面が調査区外となり東西，南北方向の柱穴数が確定せず，建物全体の規模は不明である。確認できた範囲では２×２間分である。柱穴間の距離は東西方向で平均約1.58m，南北方向で平均約1.68mである。柱穴の掘り方は円～楕円形をなし，長径約0.4～0.7mを測る。主軸方位はＮ－10°－Ｅを示し，条里方向にほぼ合致するものである。柱穴の埋土は概ね褐灰色（7.5YR ５／１）シルト質極細砂の単層であった。所属時期は柱穴の埋土及び周辺部との関係から12世紀代を中心とする頃と考えられる。



第207図　ＳＢ－Ｃ４－01平・断面図（１/80）

ＳＢ－Ｃ４－02

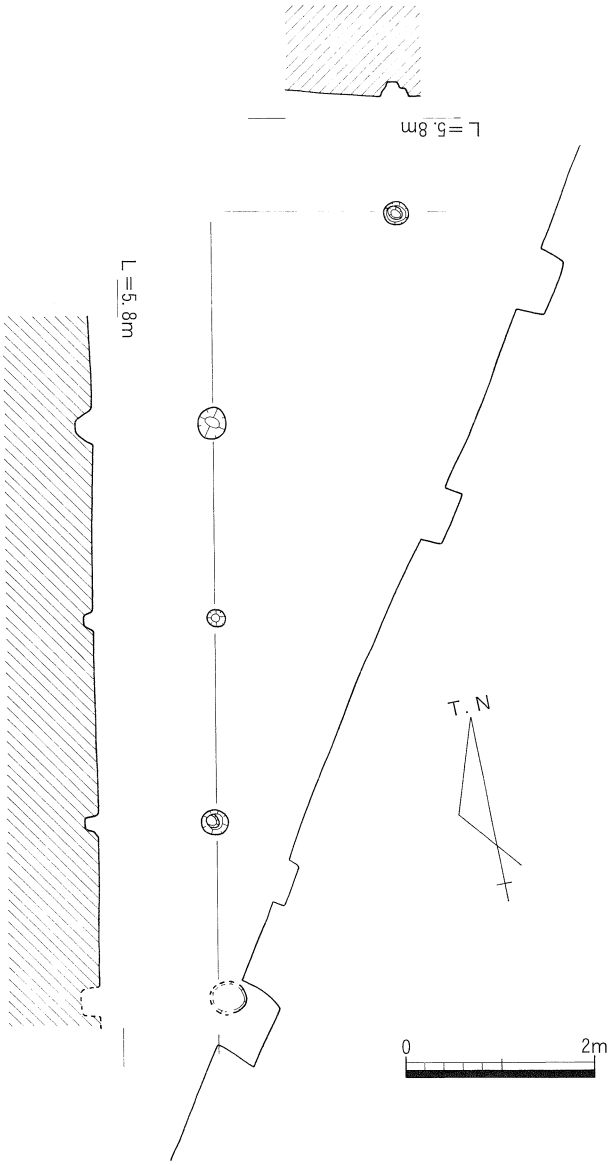
Ｃ３区中央部において検出された掘立柱建物跡である。東面が調査区外となり東西方向の柱穴数が確定せず，建物全体の規模は不明である。確認できた範囲では２×２間分である。柱穴間の距離は東西方向で平均約1.58m，南北方向で平均約1.8mである。柱穴の掘り方で円或は隅丸方形をなし，長径約0.6～0.8mを測る。主軸方位はＮ－10°－Ｅを示し，条里方向にほぼ合致するものである。柱穴の埋土は概ね褐灰色（7.5YR ５/１）シルト質極細砂の単層であった。所属時期は柱穴の埋土及び周辺部との関係から12世紀代を中心とする頃と考えられる



第208図　ＳＢ－Ｃ４－02平・断面図（１/80）

ＳＢ－Ｃ４－03

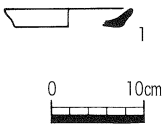
Ｃ３区南半において検出された掘立柱建物跡である。東面が調査区外となり東西，南北方向の柱穴数が確定せず，建物全体の規模は不明である。確認できた範囲では１×４間分である。柱穴間の距離は東西方向で約1.9m前後（推定），南北方向で平均約２mである。柱穴の掘り方は円形をなし，径約0.3～0.4mを測る。主軸方位はＮ－10°－Ｅを示し，条里方向にほぼ合致するものである。柱穴の埋土は概ね灰黄褐色（10YR ４/２）シルト質極細砂の単層であった。所属時期は柱穴より出土した遺物より13～14世紀前半と考えられる



第209図　ＳＢ－Ｃ４－03平・断面図（１/80）

ＳＢ－Ｃ４－03出土遺物

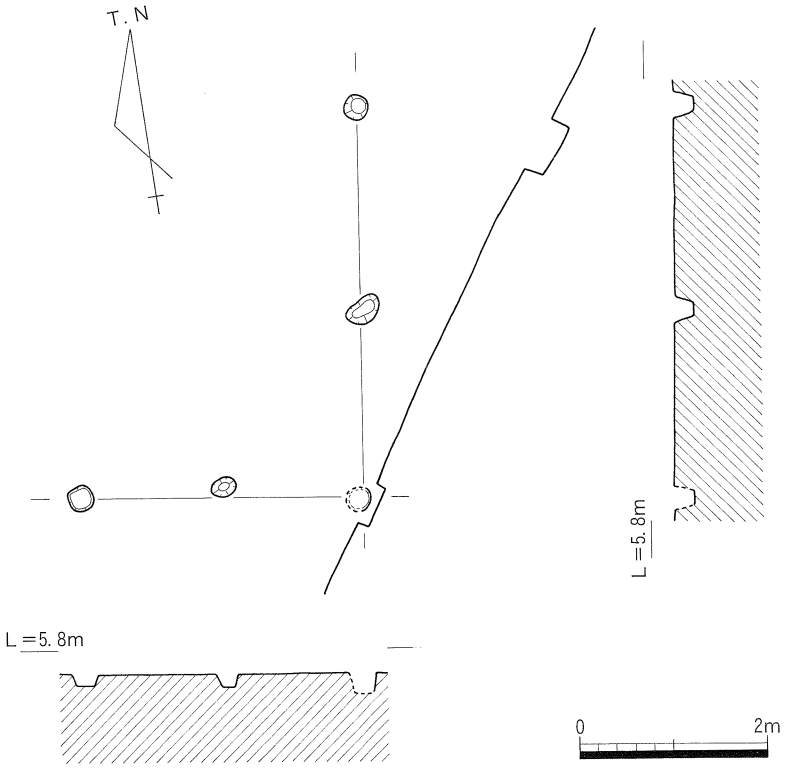
１は土師質土器皿である。外反する短い口縁をもつもので口径から，佐藤編年のⅢＢⅢ－４に該当し13世紀前半～14世紀前半と考えられる。



第210図　ＳＢ－Ｃ４－03出土遺物

ＳＢ－Ｃ４－04

Ｃ３区南半において検出された掘立柱建物跡である。東面が調査区外となり東西の柱穴数が確定せず，建物全体の規模は不明である。確認できた範囲では２×２間分である。柱穴間の距離は東西方向で約1.48ｍ，南北方向で平均約2.07ｍである。柱穴の掘り方は円形或は楕円形をなし，径約0.2～0.4ｍを測る。主軸方位はＮ－７°－Ｅを示し，条里方向にほぼ合致するものである。ＳＢ－Ｃ４－03と切り合い関係においては先行するものと考えられる。柱穴の埋土は概ね褐灰色（10YR ４/１）シルトの単層であった。所属時期は周辺の遺構との関係から12世紀代を中心としたものに考えられる。



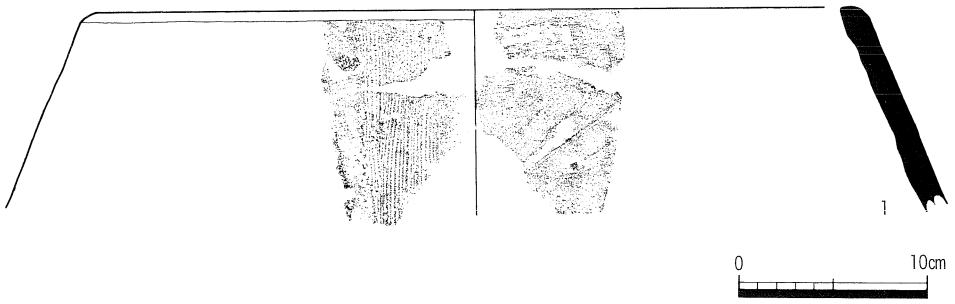
第211図　ＳＢ－Ｃ４－04平・断面図（１/80）

ＳＢ－Ｃ４－05

Ｃ３区南半において検出された掘立柱建物跡である。西面１間分のみの検出で，他は調査区外となり建物全体の規模は不明である。柱穴間の距離は約1.9mである。柱穴の掘り方は隅丸方形状もしくは円形をなし，径約0.6mを測る。主軸方位はおよそＮ－10°－Ｅを示すもので，条里方向にほぼ合致する。柱穴の埋土は概ね褐灰色（7.5YR ５/１）シルト質極細砂の単層であった。所属時期は出土遺物及び周辺部との関係から12世紀代を中心とする頃と考えられる。

ＳＢ－Ｃ４－05出土遺物

１は移動式竈の口縁部である。外面に粗い刷毛目が見られ，また焚口部の接合をナデにより仕上げている。



第212図　ＳＢ－Ｃ４－05出土遺物

ＳＢ－Ｃ４－06

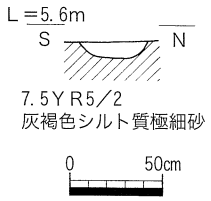
Ｃ３区南端において検出された掘立柱建物跡である。西面１間分のみの検出で，他は調査区外となり建物全体の規模は不明である。柱穴間の距離は約2.4ｍである。柱穴の掘り方は円形をなし，径約0.2～0.3ｍを測る。主軸方位はおよそＮ－10°－Ｅを示すもので，条里方向にほぼ合致する。柱穴の埋土が灰黄褐色（10YR ４／２）シルト質極細砂の単層でＳＢ－Ｃ４－03と同様であることから，所属時期は13～14世紀前半と考えられる

ＳＢ－Ｃ４－07

Ｃ３区おいてＳＢ－Ｃ４－01に並び，検出された掘立柱建物跡である。柱穴の特徴及び配置から，ＳＢ－Ｃ４－01を構成するものとも考えられるが，西面１間分のみの検出であり全様は不明である。柱穴間の距離は約3.3ｍで，ＳＢ－Ｃ４－01西面のほぼ２間分に相当する。柱穴の掘り方は円形，若しくはやや歪な方形状で長径約0.7ｍを測る。主軸方位はおよそＮ－10°－Ｅを示すもので，条里方向にほぼ合致する。柱穴の埋土は褐灰色（7.5YR ５／１）シルト質極細砂の単層であった。所属時期は柱穴の埋土及び周辺部との関係から12世紀代を中心とする頃と考えられる。

ＳＤ－Ｃ４－01

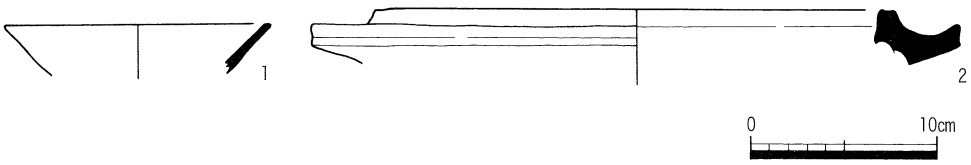
Ｃ４区北端部において検出された溝跡である。検出レベルは標高5.50～5.54ｍ，底面のレベルは標高5.42ｍ前後を測る。方位はＮ－10°－Ｗを示す。検出幅約0.5ｍで，断面は船底形をなす。埋土は灰褐色（7.5YR ５／２）シルト質極細砂の単層である。所属時期は出土遺物からすれば10世紀代と考えられる。



第213図　ＳＤ－Ｃ４－01断面図

ＳＤ－Ｃ４－01出土遺物

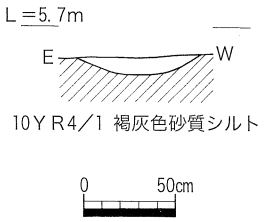
1，2は土師器坏，羽釜の口縁部である。



第214図　ＳＤ－Ｃ４－01出土遺物

ＳＤ－Ｃ５－01

Ｃ５区において検出された溝跡である。検出レベルは標高5.55ｍ前後，底面のレベルは標高5.47ｍ前後である。方位はＮ－11°－Ｗを示し，ほぼ条里地割に合致する。検出幅約0.2～0.7ｍで，断面は船底形をなす。埋土は灰黄褐色（10YR ４／２）シルト質極細砂の単層である。所属時期は埋土の特徴からすれば13～14世紀前半と考えられる。

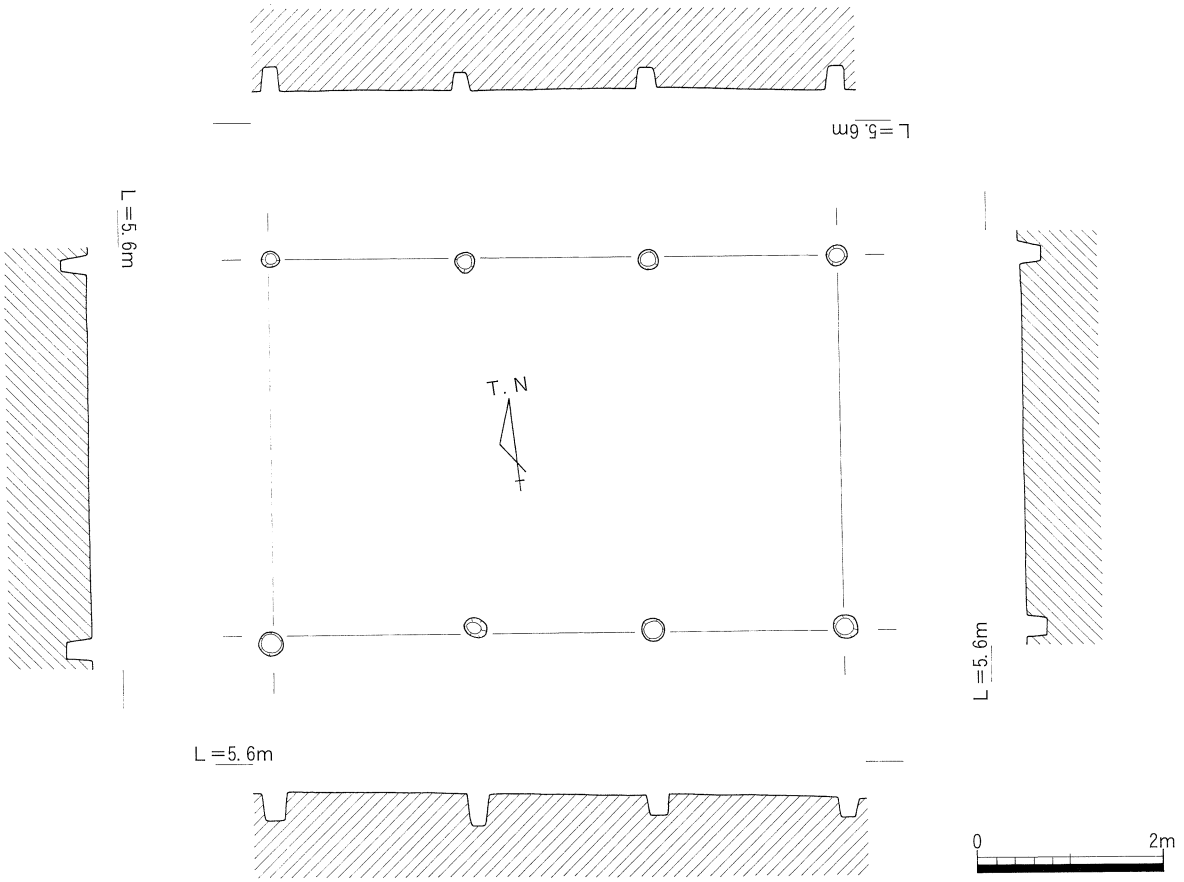


第215図　ＳＤ－Ｃ５－01断面図

近世以降の遺構・遺物

ＳＢ－Ｃ１－01

Ｃ１区北半で検出された掘立柱建物跡である。１×３間（梁間3.98m，桁行6.3m，床面積約25m²）で，主軸方位はＮ－10°－Ｅを示す。柱穴は円形をなすもので，ほぼ直線上に並ぶ。柱穴間の距離が桁方向で1.9～2.1mとなっている。所属時期は，周辺に瓦質瓦等の遺物が見られたこと及び埋土の特色から近世以降の所産に考えられる。



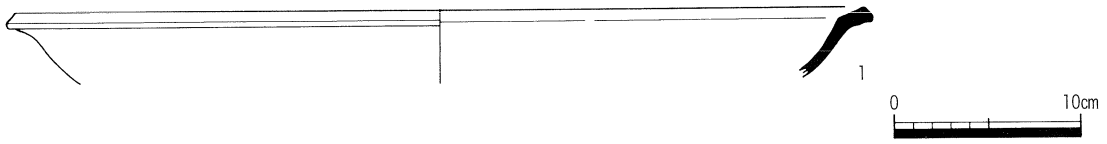
第216図　ＳＢ－Ｃ１－01平・断面図（1/80）

ＳＥ－Ｃ１－01

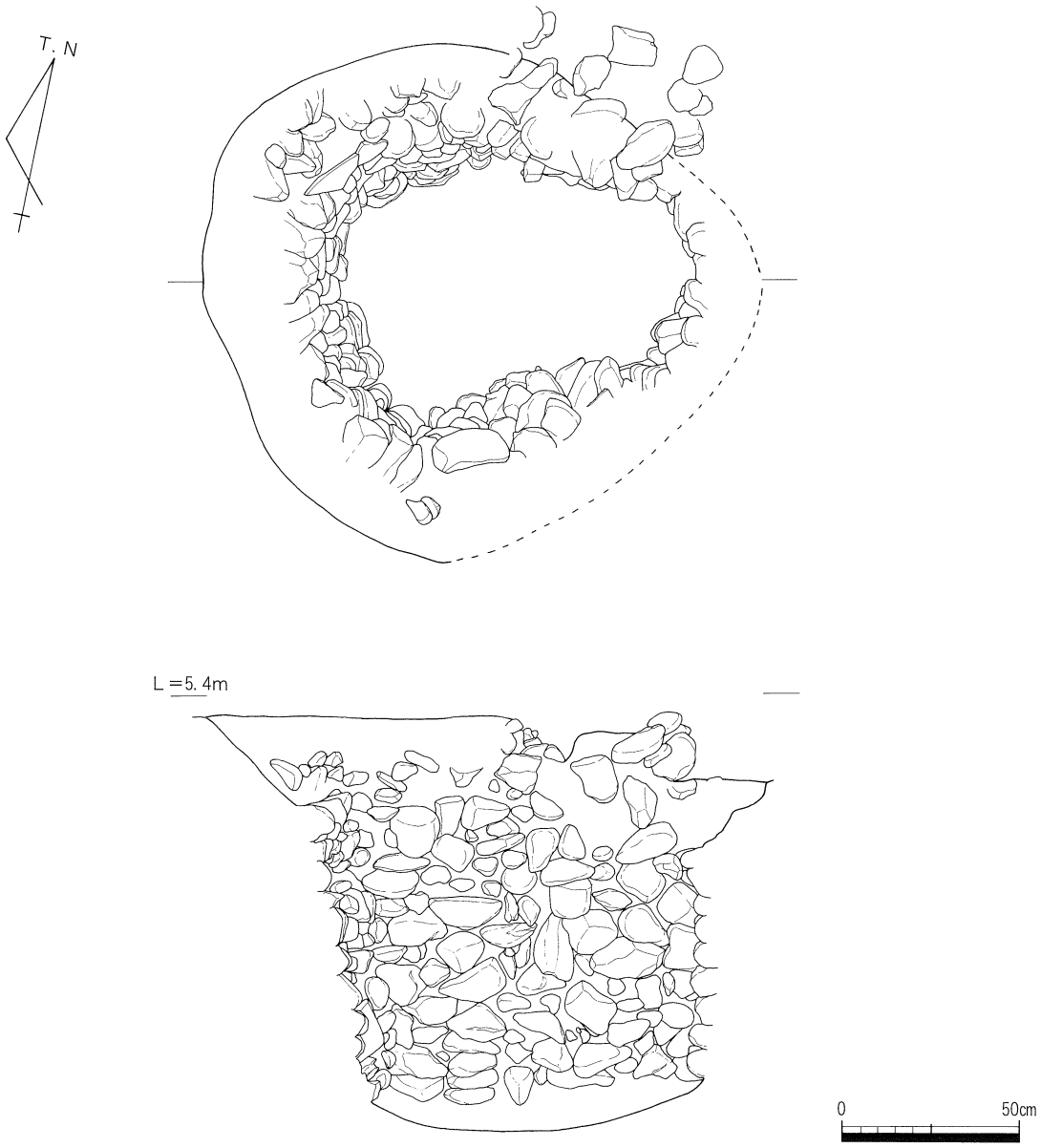
Ｃ１区西部で検出された井戸で，ＳＤ－Ｃ１－01東端部に設けられたもの。掘り方は上部に開く段掘りがなされ，平面形状が径約３ｍのほぼ円形を呈する。下部の井側は平面隅丸方形状に，断面がほぼ垂直に石積みがされている。深さ約１ｍの砂層に達した所で安全確保のため確認作業を停止した。出土遺物は井側より瓦，焙烙等があり，19世紀頃の埋没時期が考えられる。

ＳＥ－Ｃ１－01出土遺物

１は瓦質焙烙である。口縁部の特徴から佐藤編年のｃ形式に相当し，19世紀の年代が考えられる。



第217図　ＳＥ－Ｃ１－01出土遺物



第218図　ＳＥ－Ｃ１－01平・断面図（１/20）

第４節　　Ｄ調査区

概要

現況と調査区の分割（第227図参照）

Ｄ区は当遺跡では南部に位置し，条里呼称では香川郡10条18里８坪内に位置する。地図上で示される当地区周辺部は現地表面の標高およそ6.7m，現況は宅地，水田等の耕作地や果樹園として利用がなされている。

Ｄ区は現有道路，線路，コンクリート畦畔等により３分割される。調査時においては調査範囲を東西に分断するＪＲ予讃本線を境に西側を６区，東側を３－①Ｎ区及び３－①Ｓ区として調査を行ったが，本報告にあたりＤ１～Ｄ３区に再編した。

調査期間

Ｄ2，3区はＣ区と一部調査を平行しながら平成９年６月５日～８月13日迄，Ｄ１区はＢ，Ｃ区と調査を平行しながら平成９年12月１日～平成10年１月29日迄で行った。

調査の工程

調査は平成８年度に行った試掘により得られたデータを基に，概ね遺構面の上面までを重機により掘削しその後遺構の検出及び掘削を人力により行った。遺構等の測量はＤ2，3区については本体工事の測量図等を基準に，調査員及び補助員が測量を行った。またＤ１区については航空測量を行った。

主な遺構（第227図参照）

Ｄ区は古墳時代～近代の溝跡が検出されている他，Ｄ1，2区において中世～近世の耕作痕が見られたが全体として遺構密度は低い。これは当地区が低地にあたり耕作地として主に利用されたためと考えられる。本来西の山麓より下る埋没自然流路が存在したと考えられ，Ｄ１中央及びＤ３南端部は遺構検出面の下部において窪地状を呈する堆積が認められ，ローリングを受けた古墳時代初頭と考えられる土師器片が出土している。

Ｄ1，３にかけて検出されたＳＤ－Ｄ１－01（ＳＤ－Ｄ３－01）は，断面の形状がＶ字形若しくは段の付く逆台形状となる堅固なもので出土遺物，堆積関係から古墳時代に所属するものである。

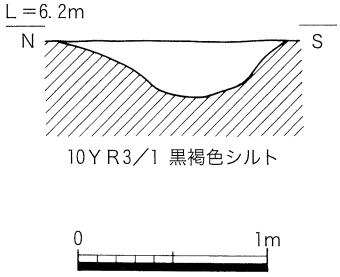
中・近世では，Ｄ２区の北及び東面が各々坪界線に近接しており，ＳＤ－Ｄ２－01はほぼその交点となる個所で検出されている。その他，条里方向を示す溝跡は上記のような状況からすれば灌漑用として使用されたものと推察できる。ＳＤ－Ｄ１－05（ＳＤ－Ｄ２－02）は近代の暗渠排水溝で，現況の区画にほぼ一致するものである。

堆積状況（第228，229図参照）

Ｄ1，2区には旧耕作土直上部に現況の果樹園等のため厚い盛土がなされている。その下位は中世～近世の耕作土と考えられる堆積層がほぼ水平に見られる。Ｄ１区中央部及びＤ３区南半においては上述のように褐灰色及び暗灰黄色シルトが堆積する窪みが見られ，その上面が遺構検出面となっている。Ｄ１区の南半以南は安定した微高地となっており，調査区南側においては現況で宅地となっている。

ＳＤ－Ｄ１－01

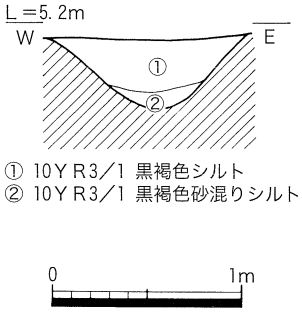
Ｄ１区中央部において検出された溝跡である。窪地の北側縁辺部に設けられたもので，検出レベルは標高6.02～6.12m，底面のレベルは標高5.8m前後を測る。方位はＮ－38°－Ｗを示す。検出幅約1.4mで，断面は逆台形状だが中位に段が見られる。埋土は黒褐色（10YR 3／1）シルトの単層である。時期の特定できる遺物が出土していないが，後述のＳＤ－Ｄ３－01と同一の遺構と考えられることから，古墳時代の所産と考えられる。



第219図　ＳＤ－Ｄ１－01断面図

ＳＤ－Ｄ３－01

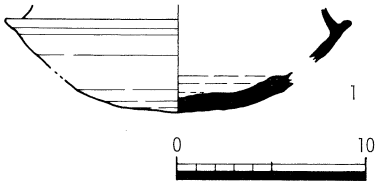
Ｄ３区南端部において検出された溝跡である。検出レベルは標高5.96～6.11m，底面のレベルは標高5.65m前後を測り，西のＳＤ－Ｄ１－01から緩やかに下る。方位はＮ－16°－Ｗを示す。検出幅約1.5mで，断面はＶ字形である。埋土は黒褐色（10YR 3／1）シルト及び砂混じりシルトが堆積する。４世紀初頭には埋没したと考えられる窪地の埋土をベースに掘削されていること，また６世紀後半の遺物が出土していることから古墳時代の所産と考えられる。



第220図　ＳＤ－Ｄ３－01断面図

ＳＤ－Ｄ３－01出土遺物

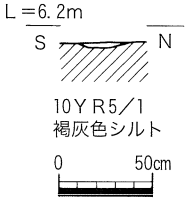
１は須恵器坏。６世紀後半のものである。



第221図　ＳＤ－Ｄ３－01出土遺物

ＳＤ－Ｄ１－03

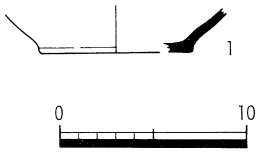
Ｄ１区南部において検出された東西方向の溝跡である。窪地の南上端に設けられたもので，検出レベルは標高6.11～6.17m，底面のレベルは標高6.07m前後を測る。方位はＥ－４°－Ｓを示し，ほぼ条里方向に合致する。平面の形状は直線的であるが，西端において溜り状となる。検出幅約0.4mで，断面は船底形をなす。埋土は褐灰色（10YR 5／1）シルトの単層で，切り合い関係でＳＤ－Ｄ１－02，03に先行する。出土遺物から10世紀頃の所産と考えられる。



第222図　ＳＤ－Ｄ１－03断面図

ＳＤ－Ｄ１－03出土遺物

１は土師器坏の底部である。体部が開きぎみで底部との境に段が見られる平高台状のもので，10世紀の年代が考えられる。



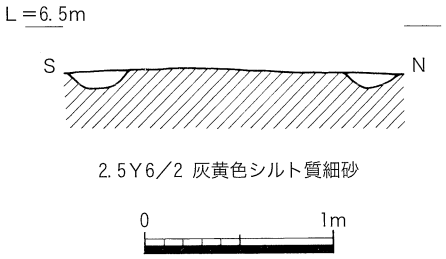
第223図　ＳＤ－Ｄ１－03出土遺物

ＳＤ－Ｄ１－02

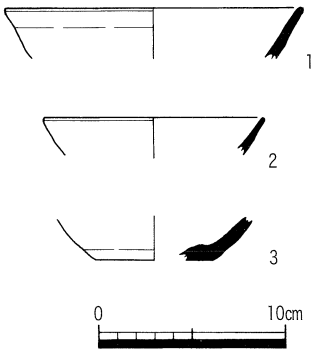
Ｄ１区南東部において検出された東西及び南北方向の溝跡である。中央部窪地の埋没後に掘削されたもので，検出レベルは標高6.23～6.27m，底面のレベルは標高6.11～6.18mを測る。方位はＮ－10°－Ｅ及び，Ｅ－10°－Ｓを示し，条里方向に合致する。検出幅約0.4m前後で，断面は船底形をなす。埋土は灰黄色（2.5YR 6／2）シルト質極細砂の単層である。所属時期は出土遺物より13世紀の所産と考えられる。

ＳＤ－Ｄ１－02出土遺物

１～３は土師質土器坏の口縁部，底部である。13世紀代のものと考えられる。



第224図　ＳＤ－Ｄ１－02断面図



第225図　ＳＤ－Ｄ１－02出土遺物

ＳＤ－Ｄ３－02

Ｄ３区において検出された溝跡である。検出レベルは標高6.04～6.09m，底面のレベルは標高5.95m前後を測る。方位はＥ－10°－Ｓを示し，ほぼ条里方向に合致する。検出幅約0.5～1.5mで，断面は船底形をなす。埋土は灰黄色（2.5Y 6／2）シルトの単層である。位置関係及び埋土からＳＤ－Ｄ１－02に繋がる同一の溝跡と考えられる。

ＳＤ－Ｄ２－01

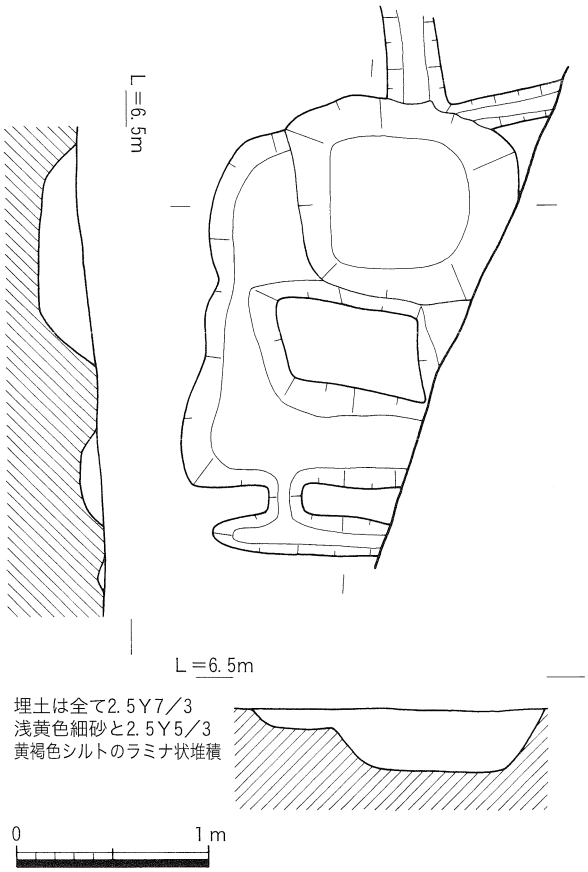
Ｄ２区北東隅で検出された香川郡10条18里８・９坪界上にあたる溝跡である。検出レベルは5.90m前後で，底面レベルは5.40m前後を測るが，片側上端部が調査区外に広がるため全容は不明である。平面で南北方向から西への屈曲が見られ，調査区の北面についても８・17坪界上に相当することから，あるいは東西と南北方向の坪界溝が交差する箇所とも考えられる。土師質土器片，須恵器片等が若干出土している。

ＳＤ－Ｄ１－04

Ｄ３区南東部において検出された溝跡である。南部のＳＫ－Ｄ１－01から発するもので，検出レベルは標高6.26～6.32m，底面のレベルは標高6.24～6.28mを測り北へ下る。方位はＮ－11°－Ｅを示す。検出幅約0.2～0.4mで，断面はＵ字形をなす。埋土は浅黄色（2.5YR 7／3）細砂の単層である。埋土の特色から近世の所産と考えられる。

ＳＫ－Ｄ１－01

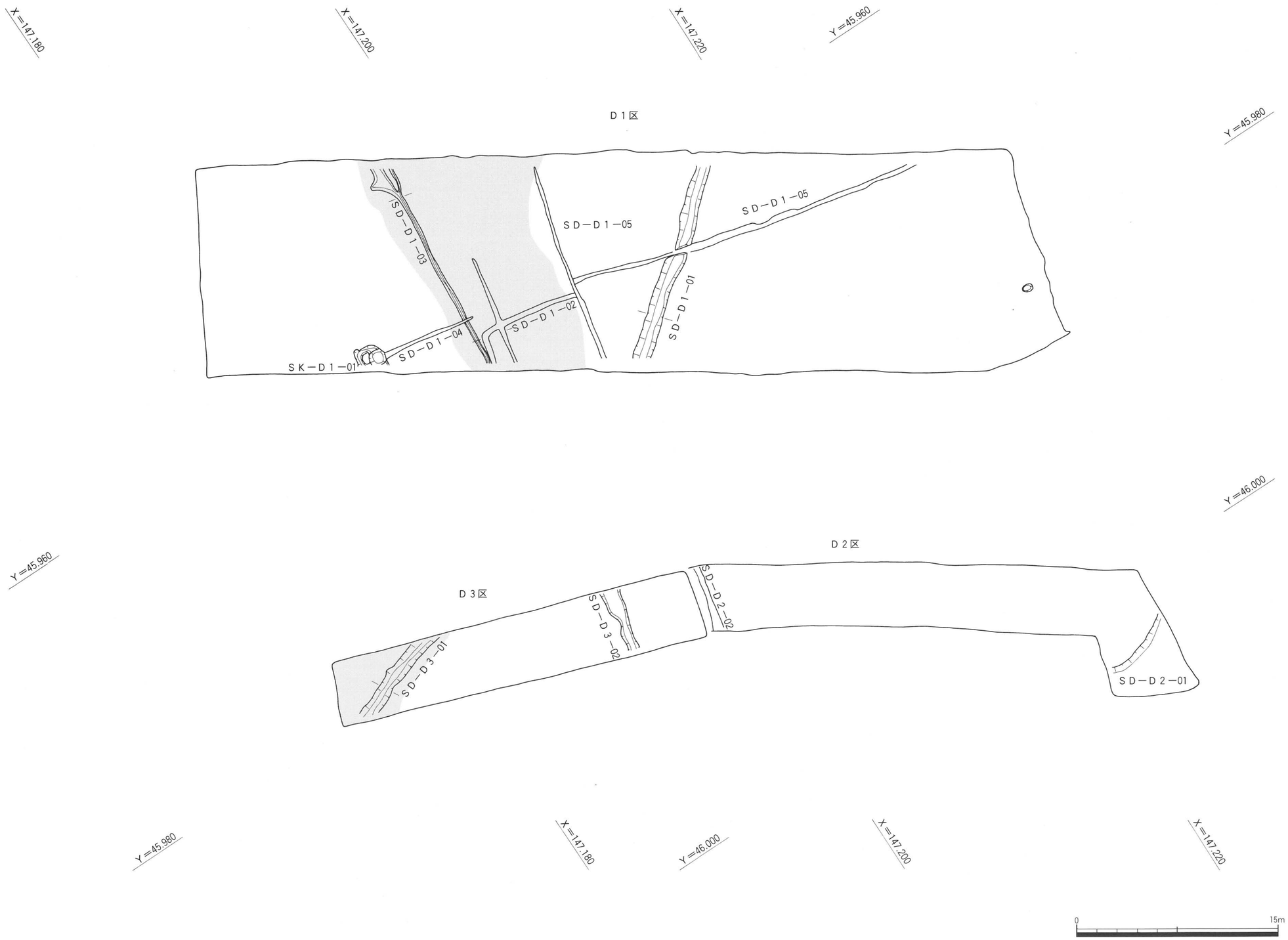
Ｄ１区南東部で検出した土坑である。ＳＤ－Ｄ１－04等溝の底面に掘削されたもので，平面形状は隅丸方形である。長軸方向に1.15m，短軸方向に1.05mを測る。深さは溝底面より約0.2mである。断面は台形状で，埋土は浅黄色（2.5Y 7／3）細砂，黄褐色（2.5Y 5／3）シルトがラミナ状に堆積する。周囲が耕作地に想定されることから，灌漑用水を一時溜置くものと考えられる。所属時期は埋土及び周囲の遺構との関係から近世の所産と考えられる。



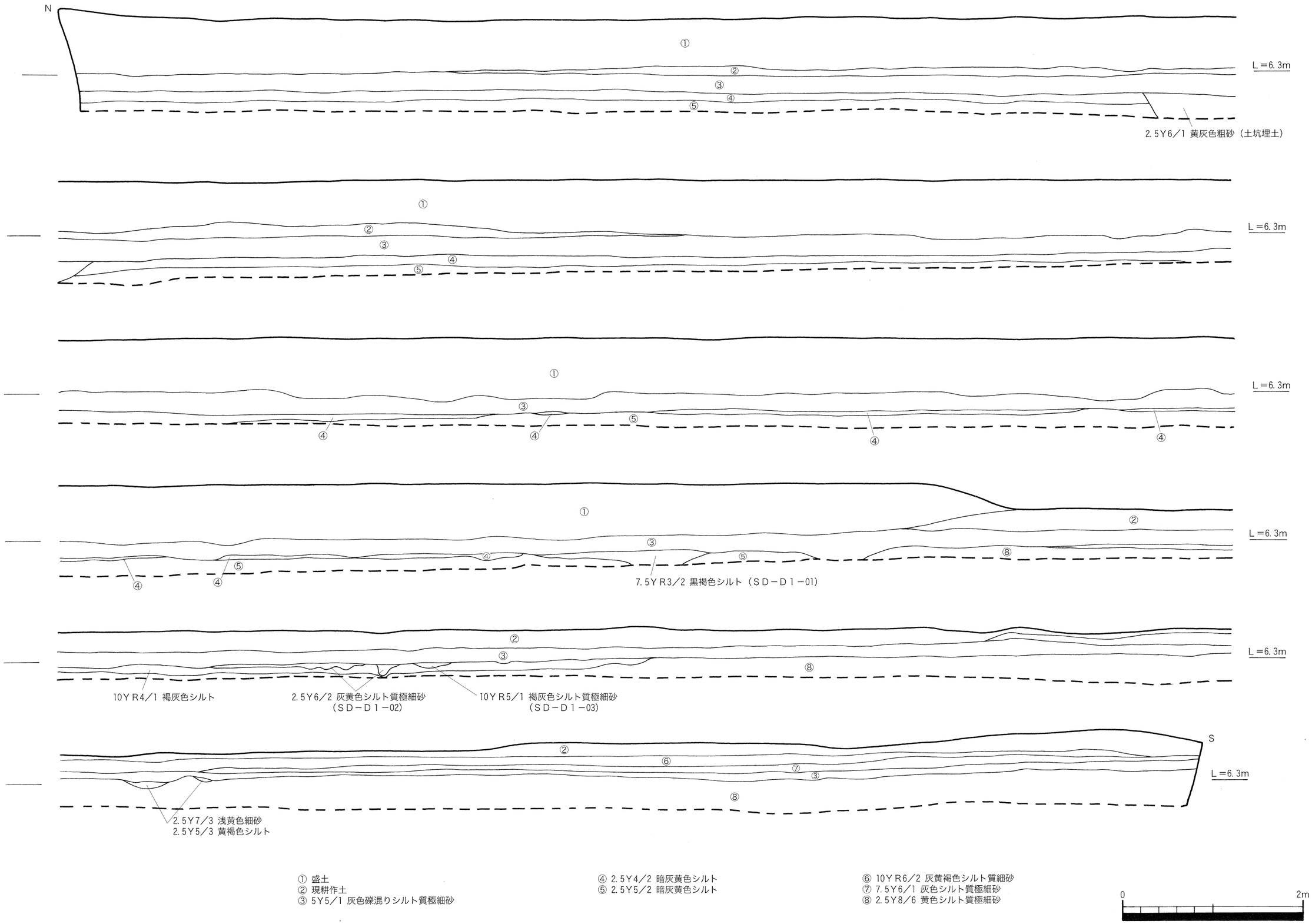
第226図　ＳＫ－Ｄ１－01平・断面図（1/40）

ＳＤ－Ｄ１－05，ＳＤ－Ｄ２－02

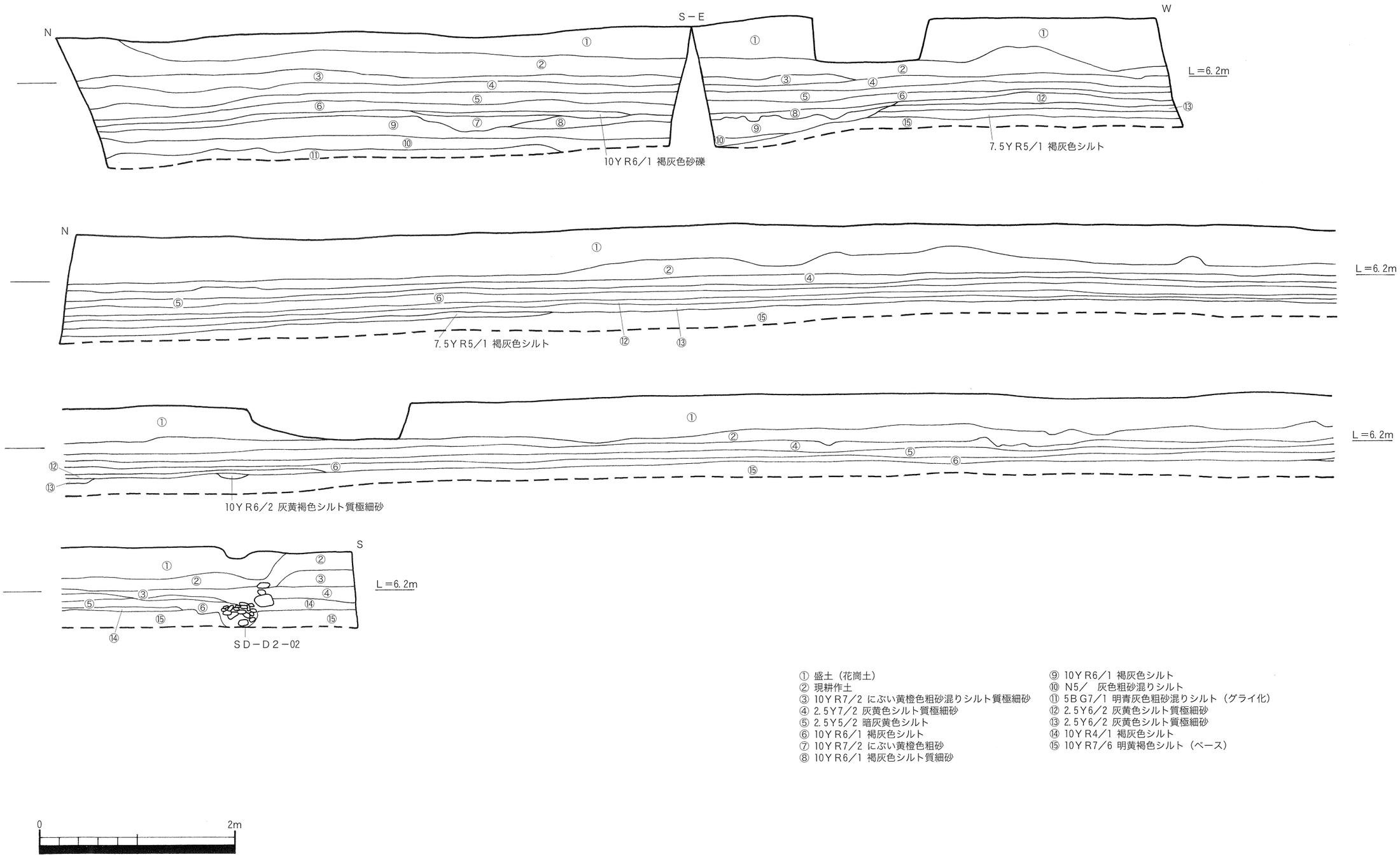
Ｄ1，2区において検出された暗渠排水の溝跡である。掘削溝の内部に石組がされたもので，平面ではＴ字形をなし東西及び南北方向に見られた。東西方向ものは現在の土地区画に一致するものである。旧耕作土直下から掘削されており，近代の所産と考えられる。



第227図　D区遺構配置図（1/300）

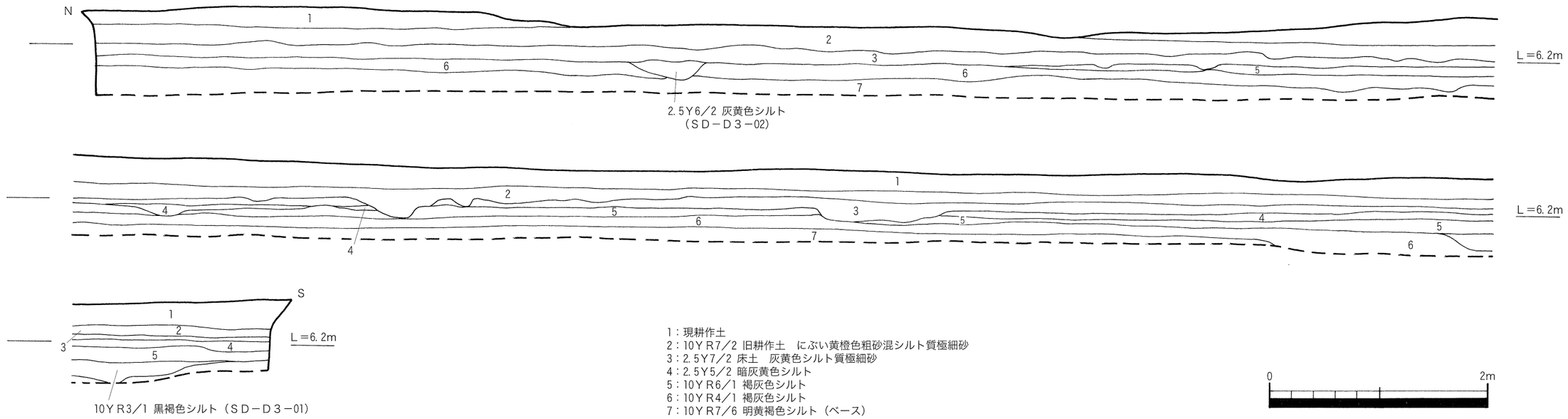


第228図　D１区東壁土層図（1/40）



① 盛土（花崗土）
② 現耕作土
③ 10YR7／2 にぶい黄橙色粗砂混りシルト質極細砂
④ 2.5Y7／2 灰黄色シルト質極細砂
⑤ 2.5Y5／2 暗灰黄色シルト
⑥ 10YR6／1 褐灰色シルト
⑦ 10YR7／2 にぶい黄橙色粗砂
⑧ 10YR6／1 褐灰色シルト質細砂
⑨ 10YR6／1 褐灰色シルト
⑩ N5／ 灰色粗砂混りシルト
⑪ 5BG7／1 明青灰色粗砂混りシルト（グライ化）
⑫ 2.5Y6／2 灰黄色シルト質極細砂
⑬ 2.5Y6／2 灰黄色シルト質極細砂
⑭ 10YR4／1 褐灰色シルト
⑮ 10YR7／6 明黄褐色シルト（ベース）

第229図　D２区東壁土層図（1/40）



第230図　D３区東壁土層図（1/40）

第５節　Ｅ調査区

概要

現況と調査区の区分（第231図参照）

Ｅ区は，当遺跡の南部に所在する。勝賀山東麓に形成された扇状地の末端付近に当たっており，ＪＲ予讃線の線路敷東側に沿い，南南西～北北東にのびる幅約７ｍ，長さ102ｍに亘る範囲である。海抜約７ｍを測り，本津川の氾濫を免がれた条里地割がかなり明瞭に残る一帯で，旧香川郡条里10条18里５坪（東南隅から西行の千鳥式なら）と想定される。

現存畦畔で区分し，南から北へＥ１～Ｅ４区を設定した。レベル差により土地利用に違いがある。Ｅ１区＝148.3㎡，Ｅ２区＝79.0㎡，Ｅ３区＝43.6㎡，Ｅ４区＝184.8㎡で，Ｅ１～Ｅ４区通算調査面積は455.7㎡である。

調査期間

調査は，平成９年３月14日～４月25日に亘って実施した。

主な遺構と遺物（第231図及び第237，238図参照）

Ｅ１区では，南端に近世に再掘削された東西方向の条里坪界相当の溝ＳＤ－Ｅ１－118があり，中ほどで北から東へと湾曲して掘られた弥生中期までとみられる溝を介したやや疎らな柱穴群がある。北寄りでは「下川津型*[1]」とみられる弥生後期頃の建物跡ＳＨ－Ｅ１－201を検出した。

Ｅ２区では，全域で，南北のほぼ同一方向に延びる古代～中世に属する複数の溝がある。Ｅ２区の北寄りには，これらの溝と重合・接続する中世の素掘り井戸ＳＥ－Ｅ２－201，ＳＥ－Ｅ２－202の２基がある。これに接続，又はこれらを切って，暗渠排水の機能を持つものを含めた中世以降の溝が繰り返し開・改削されている。

Ｅ３区では，断面逆台形を呈する中世の南北方向溝ＳＤ－Ｅ３－301が目立つ。周辺からピット群を検出したが，明確なプランを確認するには至っていない。Ｅ３区北端からＥ４区にまたがって，古代以降の遺物を豊富に出土する東西方向に狭長な土坑ＳＫ－Ｅ４－101がある。屋敷を区画する壕としての役割を持つ可能性についても検討する余地があろう。

Ｅ４区では，Ｅ３～Ｅ４区に亘る土坑ＳＫ－Ｅ４－101以南を除き，大半は中世以前からの耕作域とみられる部分で，条里の方位にほぼ正確に沿う東西および南北の用排水溝もしくは畝間溝が直交して掘られている。

なお，南北方向の柱穴列２条がみられ，敷地境界を示す柵もしくは塀であろうと考えられる。このＥ４区は，ほぼ全域に亘り一見「地山」とみられる層厚数10㎝以上のよく緊った黄褐色シルト混じり粘質土⑨層が広がり，古代末～中世にかけて安定した立地条件にあったと推測される。一方，Ｅ３区以南は素掘り井戸の存在や暗渠施設の重複が示すようにかなり低湿であったものと考えられる。

主な遺構には，柱穴・溝・土坑・井戸等がある。「溝」は，大別して開水面をもつ用排水用の通常の「溝」のほか，礫・瓦礫・籾殻等の透水性の材料や，土管を充填した「暗渠」の二つの態様がみられるが，記述の便宜上，ともに“ＳＤ－・・・”として，溝の範囲に収めている。

出土遺物は，土師質土器坏・椀類が多く，青・白磁片，須恵器，須恵質・土師質・瓦質土器，土鍋，羽釜，土錘，砥石，小児下駄等がみられた。一部の溝遺構・包含層で，摩耗が強いが焼成・胎土・色調等から弥生時代と判断される土器片も出土した。輸入陶磁器も所有・使用した階層の存在が確認される13～14Ｃ頃を盛期として，古代～中世を中心に弥生～近代に亘る複合遺跡といえよう。軒平瓦片１点を含んだ布目瓦の出土も注目されるが，直接これに関連するとみられる遺構は未確認である。

近世以降は，南北方向を主としながら部分的に東西に走行する例も含む暗渠網をほぼ全域に配して，湿潤な立地ながら二毛作も可能とする農耕域であったものとみられる。

堆積の状況（第232～234図参照）

調査区は，高低差のある地形に応じた旧水田の区画によりＥ１～Ｅ４の分区を設けたが，各分区が在来のコンクリート畦畔で隔てられており，この畦畔の設置に当たってはその両側に各々幅約50cm，深さ50～100cm程度の掘削工事が施されており，土層の直接の連続は確認できない。

またこの区画は近世以前の土地利用区分のそれを踏襲しているもののようであり，往時からの土層の形成・堆積状況には，各分区それぞれに若干ずつの差異が窺われる（なお，Ｅ３区〈亘長10余ｍ〉土層の断面については，Ｅ４区の南辺部分を平行移動した位置関係にあたり，両者はほぼ相似した層相をみせている）。

第１層：現水田耕作土である。基本的に調査区全域の現地表面を覆う。但し，Ｅ１区の現況は稲作転換による畑地としての利用がみられた。なお，Ｅ２区東端部では，約２ｍ以上に亘り近時充填された40cm厚の花崗土層がみられてこの層が失われているが，Ｅ１区には及ばない局部的なものである。

第２層：いわゆる床土を形成する層である。位置により差があるが灰オリーブ（５Ｙ５/３）もしくは類似の色調を呈する中礫混り細砂～砂質シルトである。土壌化の傾向が窺われるがさほどに著しいとはいえない。 Ｅ１区では，北辺約７ｍの範囲でこの第２層を切る攪乱土層が広がっているが，第１層形成時に第２層と同一面で削平されている。

Ｅ４（Ｅ３）区については，南寄り15mの範囲に亘って，最大層厚20cmを測る中礫混りで黒褐色の土壌化顕著な砂質土層が伸びている。本来この層はさらに広がって近世以降に耕作土層として形成されてきたものであろうが，近現代の深耕によっても削平されず第２層と同一面に頂部を残したものとみられる。

またこの層によって，Ｅ４区南端６ｍ以上に亘り第２層（及び第３層）を切る層厚約40cmの青灰色礫混り砂質土層が第２層と同一面で覆われている。

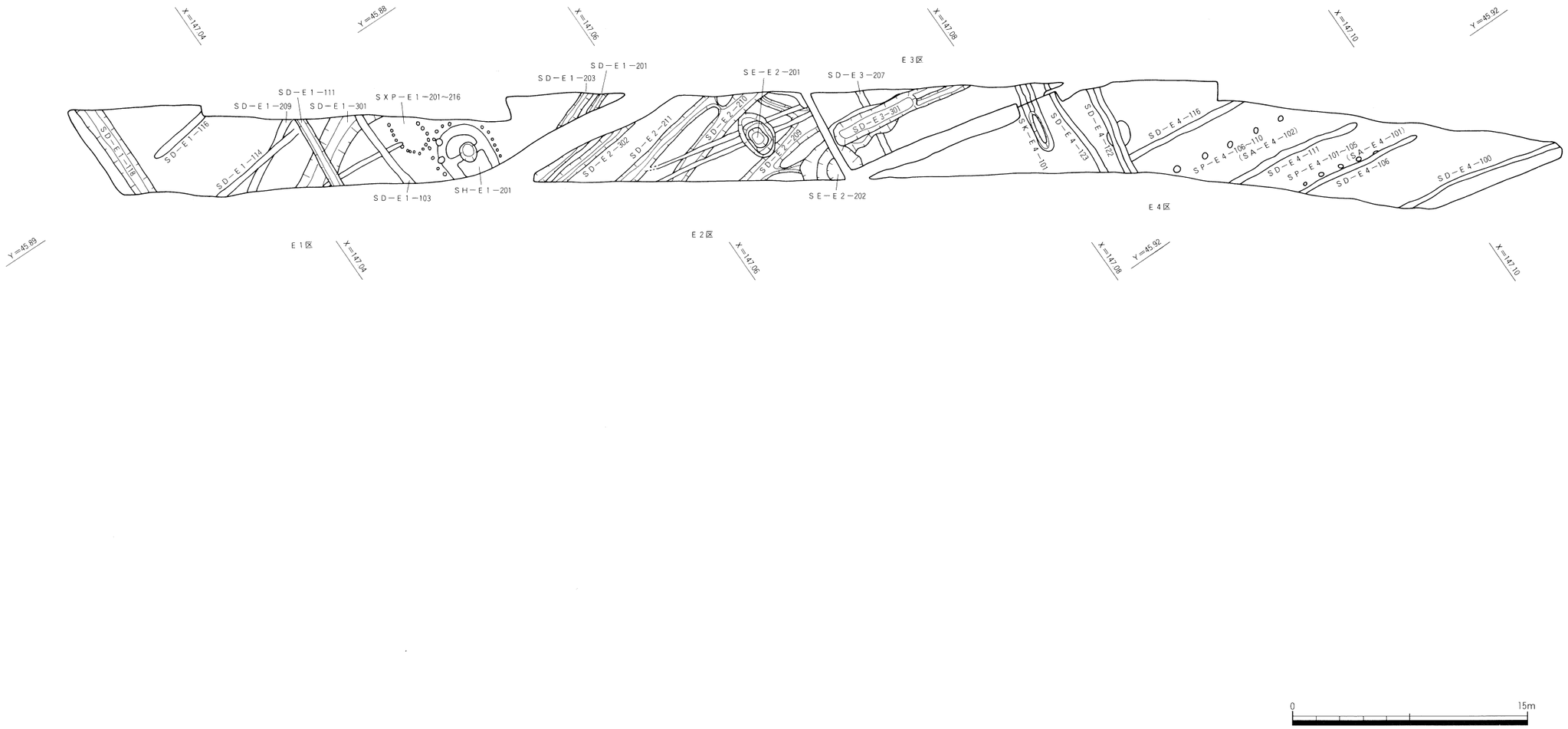
第３層：暗褐色中礫混り砂質シルトで，総じて層厚は薄いめで遺構の遺存が少ないという様相をみせる。但し，Ｅ１区南端では，条里型地割の坪界に相当するＳＤ－Ｅ１－118北岸に接する幅６ｍ余の範囲で，層厚が50cm以上に達し南へ傾斜するとみられる凹部があり，以北の全域とは異なる地形に遷移している。

第４層：層厚約10cm，暗褐色細礫混り砂質シルトである。第３層により所々で削平されながら断続的にＥ１～Ｅ４区全域に広がる。土層の性状・層厚・遺構の密度等，見かけ上は第３層にかなり類似するものの，包含層の遺物等からはかなり先行する時期からの層と推測される。

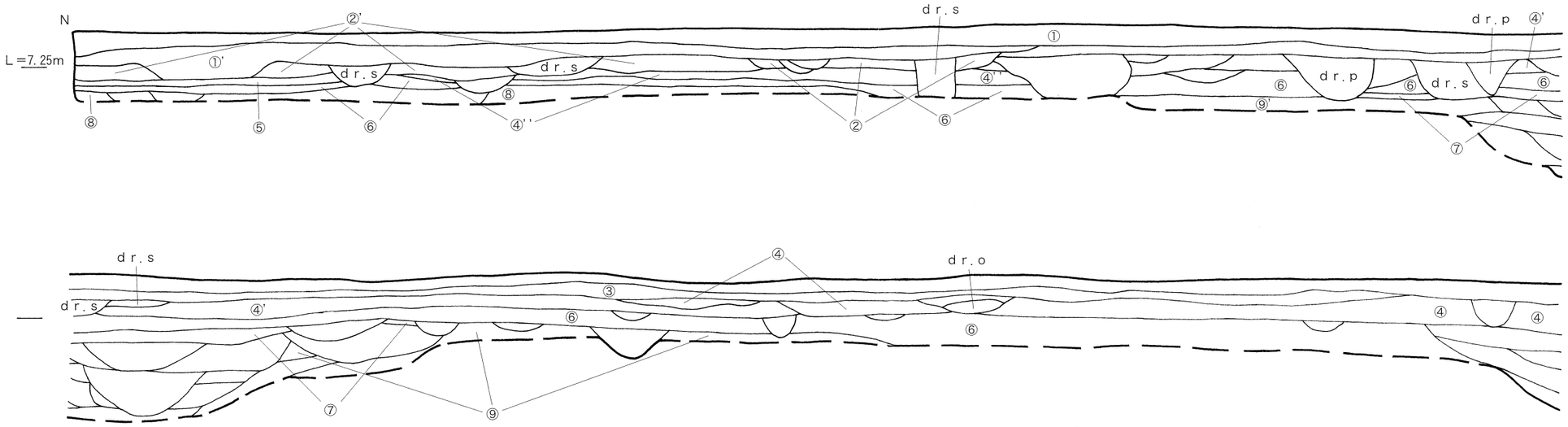
第５層：黄褐色粘土質シルトで，よく締まっており「ベース」と考えられる層（第234図⑨）である。

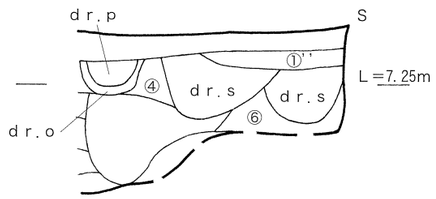
Ｅ４区に特徴的に広がる土層であって，極めて安定的に長期に亘って存続したものと考えられ，Ｅ４区に所在する遺構の大半がこの層にまで切り込まれている。但し，これら遺構は第４層以降の時期に営まれつつ削平が繰り返されて本層に達し，その後，第３層に被覆されたと考えられよう。

第６層：拳～鶏卵大の砂岩円礫堆積層で「洪積」礫層の頂部であろう。Ｅ４区は，本層（及び第５層）の存在によって以南の低湿なＥ１～Ｅ３区に比較して高燥であり，除湿のための暗渠施設等は必要とせずに農用地等としての土地利用が可能な立地であった事が窺われる。



第231図　E区遺構配置図（1/300）

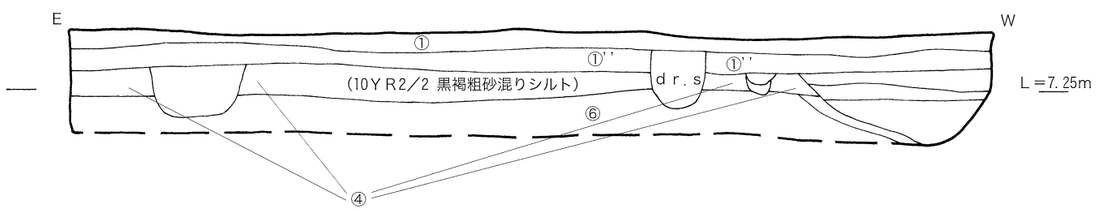


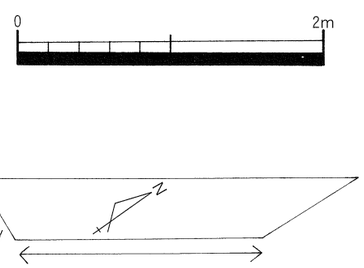


d r . s＝礫詰暗渠
d r . p＝土管暗渠
d r . o＝籾藁暗渠

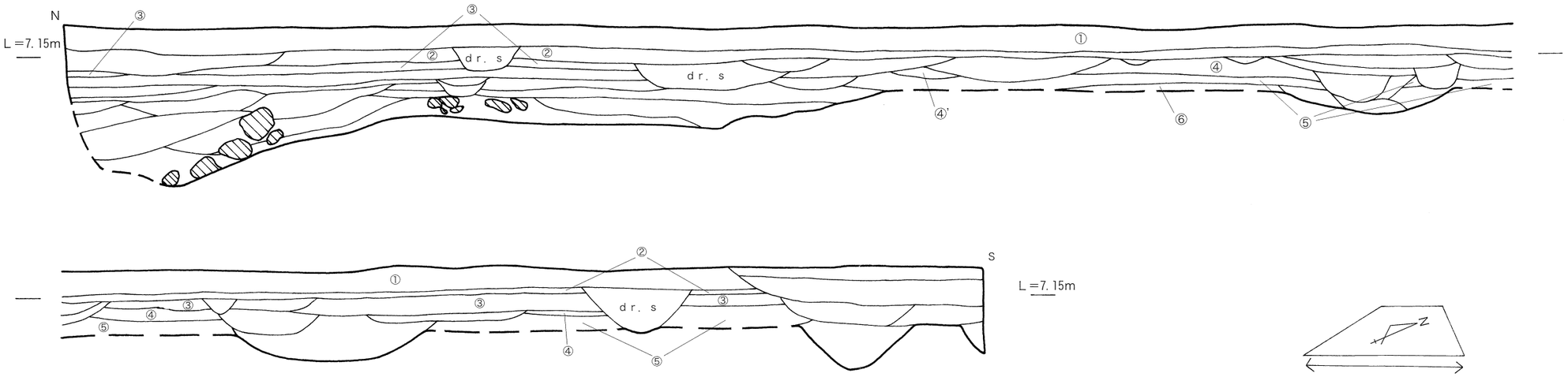
① 現耕作土
①' 2.5Y7／2 灰黄花崗土混り攪乱層
①'' 5Y5／2 灰オリーブ中礫混り細砂（客土）
② 10Y4／1 灰細礫混り粗砂
②' 5Y6／1 灰中礫混り粗砂
③ 10Y3／1 オリーブ黒中礫混りシルト
④ 7.5Y6／2 灰オリーブ中礫混り極細砂（客土）
④' 5Y6／2 灰オリーブ中礫・シルト混り細礫（客土）
④'' 10YR4／1 灰褐細礫混り細砂
⑤ 10YR6／2 灰黄褐色中礫混り細砂（客土）
⑥ 7.5Y3／1 黒褐中礫混り極細砂
⑦ 10YR2／1 黒細砂
⑧ N3／ 暗灰細礫混り粗砂
⑨ 10YR4／2 灰黄褐 FeO_2混りシルト
⑨' 10YR2／2 黒褐 FeO_2・礫混り中砂

第232－1図　E1区東壁土層図（1/40）





第232－2図　E1区南壁土層図（1/40）



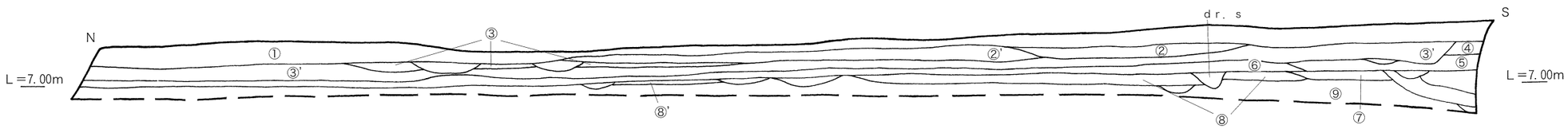
① 現耕作土
② 5Y5／3 灰オリーブ中礫混り細砂
③ 10Y2／1 黒細礫混り極細砂
③' 7.5Y3／2 オリーブ黒細礫混りシルト
④ 2.5Y5／3 黄褐シルト
④' 5Y4／1 灰極細砂
⑤ 5Y4／2 灰オリーブ細礫混りシルト
⑥ 2.5Y3／1 黒褐シルト

d r. s＝礫詰暗渠

0　2m

第233－1図　E 2区東壁土層図（1/40）

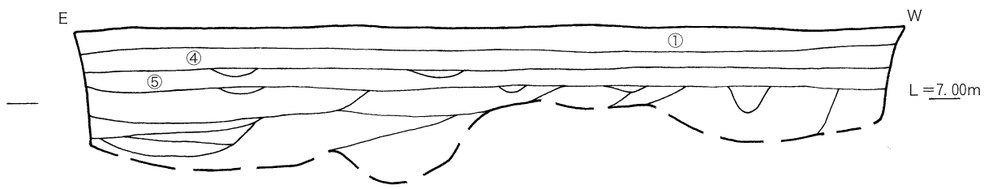
7.5YR2／2 黒褐色シルト質極細砂



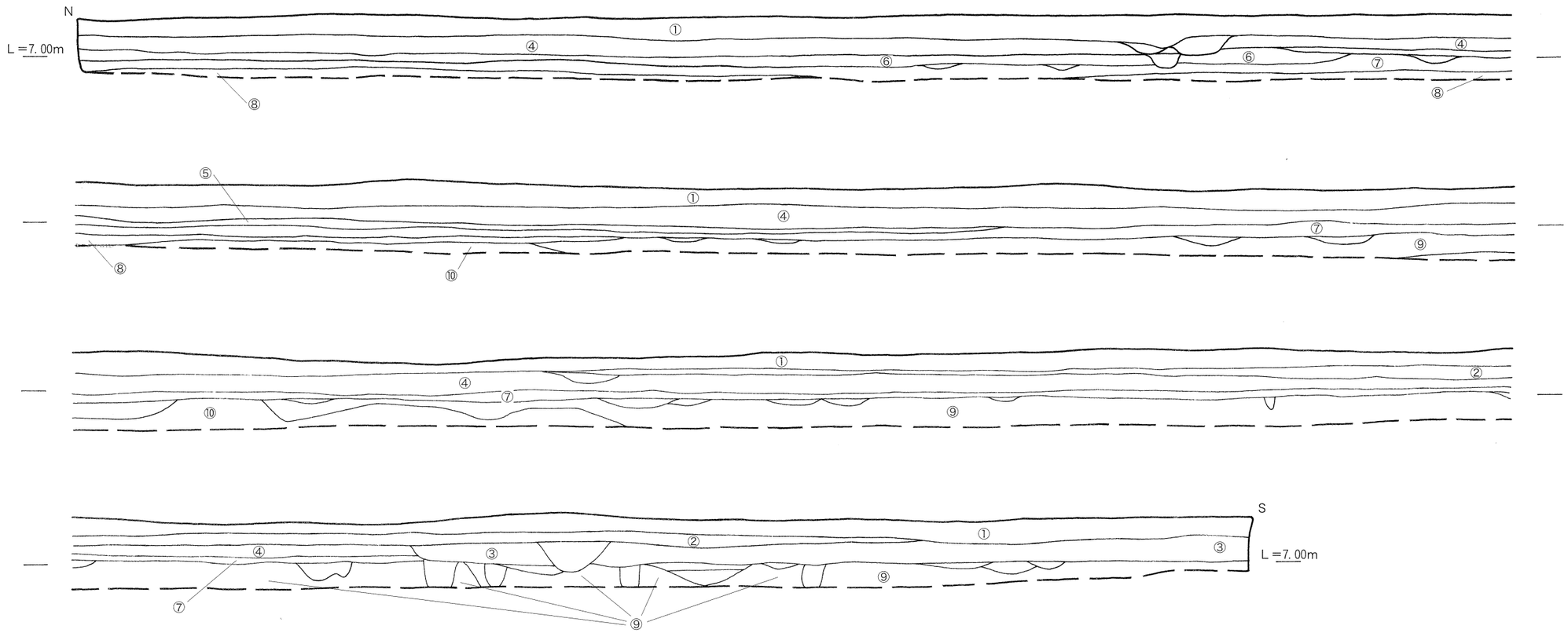
① 現耕作土
② 7.5YR3／3 暗褐中礫・シルト混り極粗砂
②' 7.5YR3／3 暗褐細礫混り中砂
③ 7.5YR7／1 明褐灰細礫混り中砂
③' 7.5YR5／1 褐灰中礫・シルト混り中砂
④ 7.5YR4／2 灰褐中礫混り砂質シルト
⑤ 2.5Y6／1 黄灰細礫混り粗砂
⑥ N3／　暗灰中礫・シルト混り中砂
⑥' 7.5YR7／1 明褐灰砂質シルト
⑦ 2.5Y6／1 黄灰細礫混り中砂
⑧ 2.5Y4／1 黄灰粗砂
⑧' 10YR3／3 暗灰極粗砂
⑨ 10YR5／6 黄褐シルト

d r. s＝礫詰暗渠

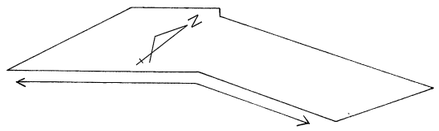
第233－2図　E 3区東壁土層図（1/40）

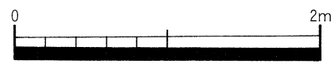


第233－3図　E 3区南壁土層図（1/40）



① 現耕作土
② 2.5Y3／1 黒褐中礫混り砂質土
③ 5BG6／1 青灰中礫・シルト混り砂
④ 7.5YR4／2 灰褐中礫混り砂質シルト
⑤ 10YR4／2 灰黄褐細礫・シルト混り中砂
⑥ 7.5YR4／2 灰褐細礫・シルト混り中砂
⑦ 7.5YR3／3 暗褐砂質シルト
⑧ 7.5YR3／3 暗褐細礫混り砂質シルト
⑨ 10YR5／8 黄褐粘土質シルト
⑩ 礫層（大礫。和泉砂岩？）





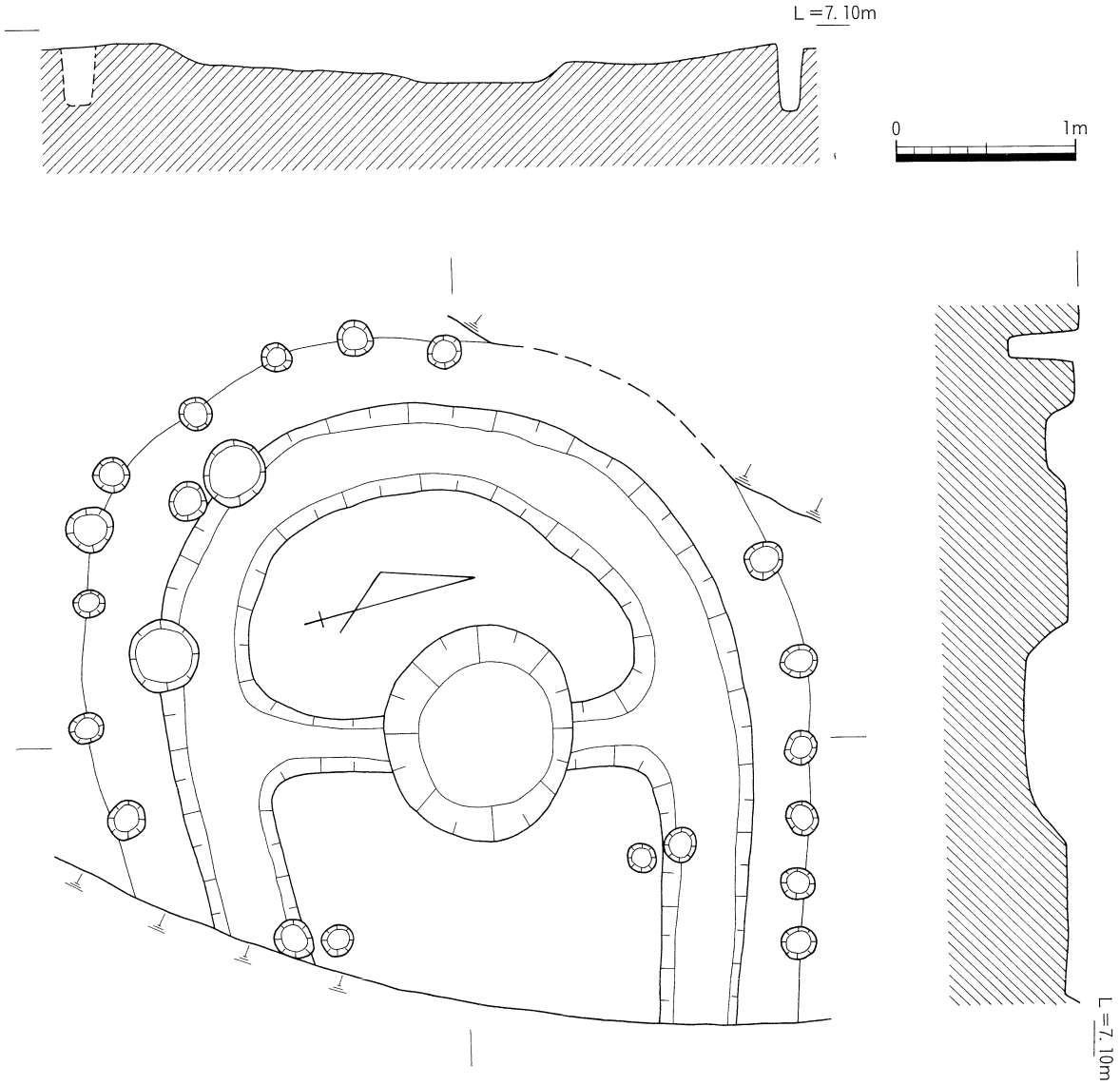
第234図　E４区東壁土層図（1/40）

遺　構

Ｅ１区

ＳＤ－Ｅ１－201･203は，調査区北西端でごく一部を検出した。Ｅ２区ＳＤ－Ｅ２－303に類似し，断面Ｖ字形を呈するもので機能を同じくする可能性があろう。遺物は僅少・細片であるが弥生時代後期～末期のものとみられる。

本調査区中ほどで，北から南東へとやや弯曲して掘られた溝が検出された。検出面での幅約2.0m，深さ約1.0mでカマボコ形断面を呈するＳＤ－Ｅ１－301である。遺物は，摩耗し図化できない壺・甕の小破片であり厳密な時期比定はできないが，胎土・焼成や埋土の性状等からおおまかに弥生時代中期までとみられる。



第235図　ＳＨ－Ｅ１－201平・断面図

３回以上の浚渫ないし再掘削がおこなわれており，一度廃絶・埋没してから一定の空白期を経て，後代に至り同じ流路を踏襲して一まわり規模を縮小した溝ＳＤ－Ｅ１－207が敷設されている。

ＳＤ－Ｅ１－301埋没の後に10cm内外の堆積層を介してＳＤ－Ｅ１－207が掘削されているところから，この間の地形環境には極端な変容は見られなかったと推測できる。

この溝ＳＤ－Ｅ１－207を介し，調査区北半部には柱穴群がみられる。北寄りの一角で検出した建物址の可能性が考えられる遺構ＳＨ－Ｅ１－201である。「下川津型」との類似点もみられ，弥生時代後期～終末期頃かと考えられるが定型的とはいえず，東半部は調査区外にのびて未検出である点もかかわって，全容は未詳である。下川津遺跡第１微高地にみられ「竪穴住居壁溝様の規模と断面形態を持つ幅0.2m，深さ0.1m程度の小溝を，概ね「日」字状に配する遺構で…中程に南北辺を繋ぐ間仕切り状の小溝が走る*2」，「長方形周溝状遺構」（「日」字形遺構）と称される「ＳＸＩ05・06・08・09」と類似点がみられるものである。但し，例示の遺構が隅丸方形状であるのに対して，本例平面は円ないし長円形を呈している。なお東側には未調査部分が延びており，細長い小判形を示す可能性も皆無でなかろう。加えて外周には垂木跡とも考えられる柱穴列がめぐり，「下川津型」にみられない炉跡状の窪みも確認されている。炉跡状遺構の埋土やその周辺には火の作用をうけた形跡はなく，炉とは考えにくい。

外周柱穴列は，何らかの覆屋をもった家屋の存在を推測させ，ＳＨＰ－Ｅ１－201，202が出入口柱穴にあたるとも考えられるが，遺構の床面には出入りに伴う土の汚れや凝結等は窺えず，居住用の可能性は低いのではなかろうか。現況では「用途不明建屋跡で，下川津遺跡「日」字形遺構ＳＸＩ05他と一部類似点を持つ遺構」としておく。

「下川津型」以外に，類似点が窺える例は未見である。ただ，時期･地域からみれば直接に関連するとも考えられない例ではあるが，青銅器時代前期，朝鮮半島京畿道坡州郡交河里にみられる次のような竪穴式住居が想起される。これは約４ｍ×10余ｍの狭長な平面形プランで，垂木跡状の小振りなピットがかなり密に外周をめぐって，短辺側の一部を低い畦で区画して，第三画が一方に偏した「日」字形を呈するものである*3。

本遺構の遺物は皆無に近く，摩耗した土器細片数点のみである。ＳＤ－Ｅ１－301との先後関係や下川津例との類似からみて，弥生時代後期～終末期のものと考えられる。

ＳＸＰ－Ｅ１－201～216の柱穴列は，列の内外の遺構面には埋土その他での差異はみられず，列内側に特段の遺構も認められない。柱穴径はＳＨＰ－Ｅ１－203～216よりもやや小振りではあるが，楕円形の配列である点や長軸の方位がＳＨ－Ｅ１－201にほぼ重なる点で，両者の関連性を推定できなくもない。

ＳＤ－Ｅ１－301の南縁沿いにあって，それに切られる径1.5m前後，0.5m以上の土坑ＳＫ－Ｅ１－301，302がある。遺物はみられず性格不明であるが，井戸の可能性があろう。

Ｅ２区

複数の断面Ｖ字形の溝があり切り合い等から若干の時期差がみられる。

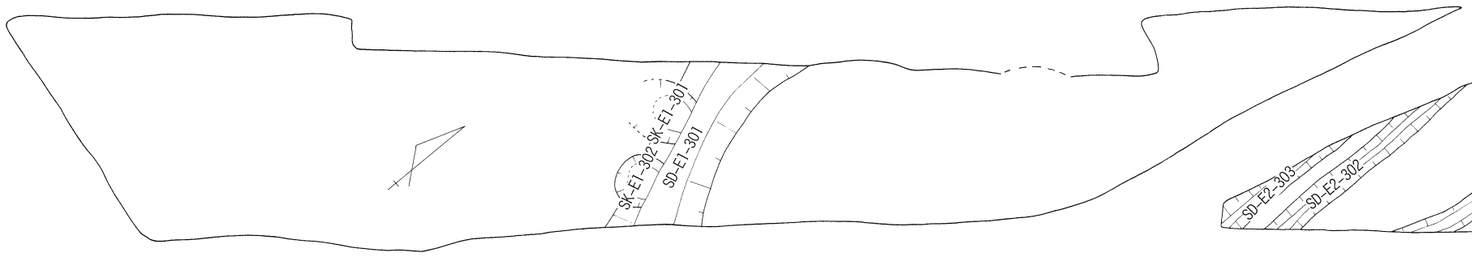
ＳＤ－Ｅ２－301，302，303等である。明確な遺物には乏しく厳密な時期決定は出来ないが，少量の土器細片の性状から，弥生時代にさかのぼる可能性が考えられる。

ほぼ南北に延びており自然の地形による傾斜に応じた方位をとるが，時期的に先行するＥ２－302，303の方に，むしろ規格性が窺われる。

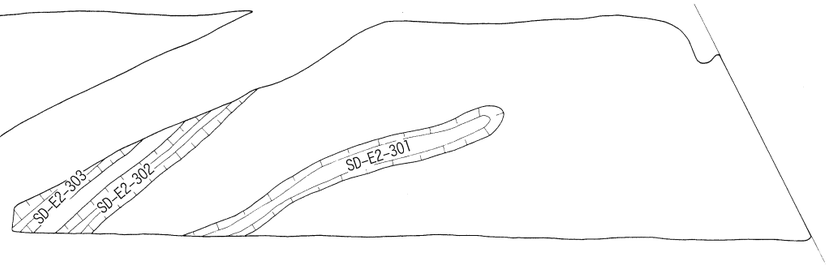
遺　物

Ｅ１区　第236図１（ＳＨＰ－Ｅ１－213）は，弥生土器壺底部片である。石英・長石粒を多く含む。

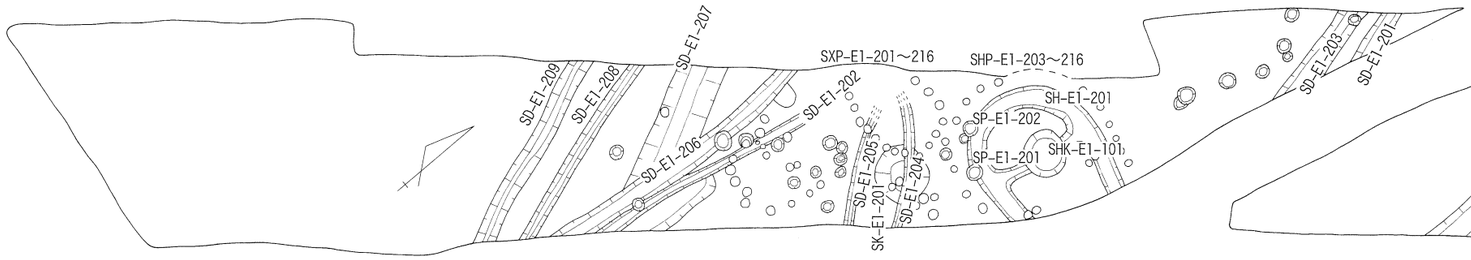
第236図　ＳＨＰ－Ｅ１－213出土遺物



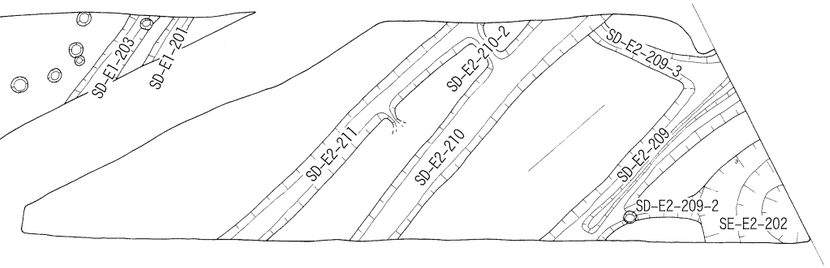
第237－１図　Ｅ１区弥生時代（前半期）



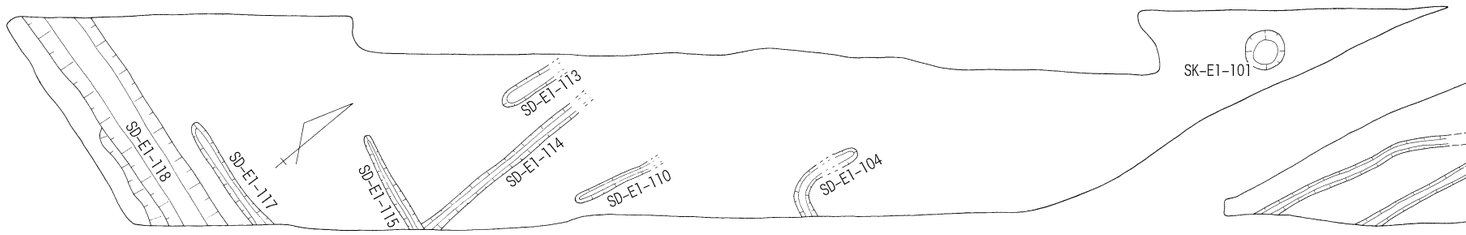
第237－５図　Ｅ２区弥生時代



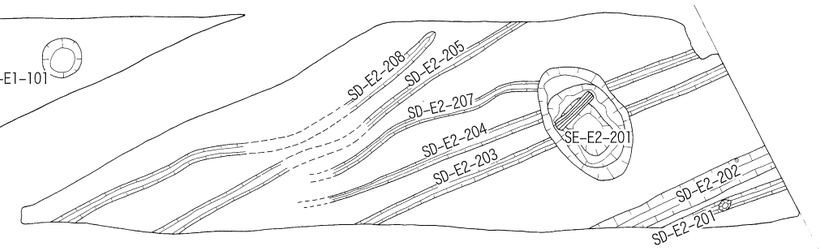
第237－２図　Ｅ１区弥生時代（後半期）



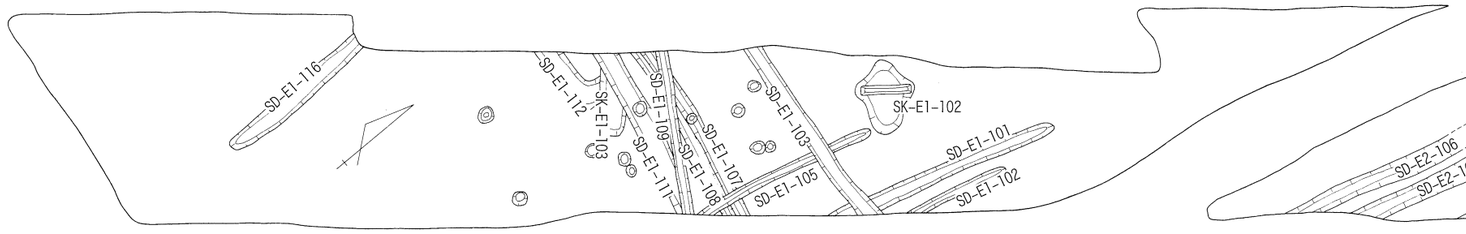
第237－６図　Ｅ２区古代～中世（前半）



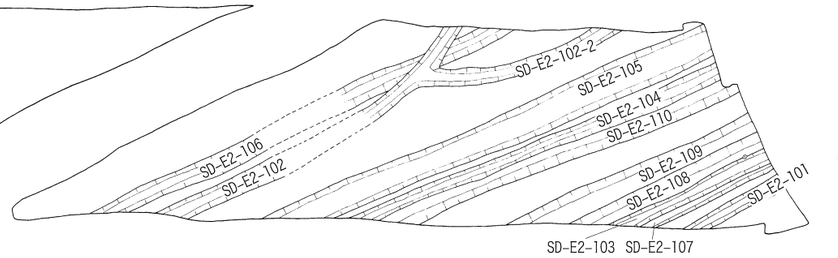
第237－３図　Ｅ１区古代～中世



第237－７図　Ｅ２区古代～中世（後半）



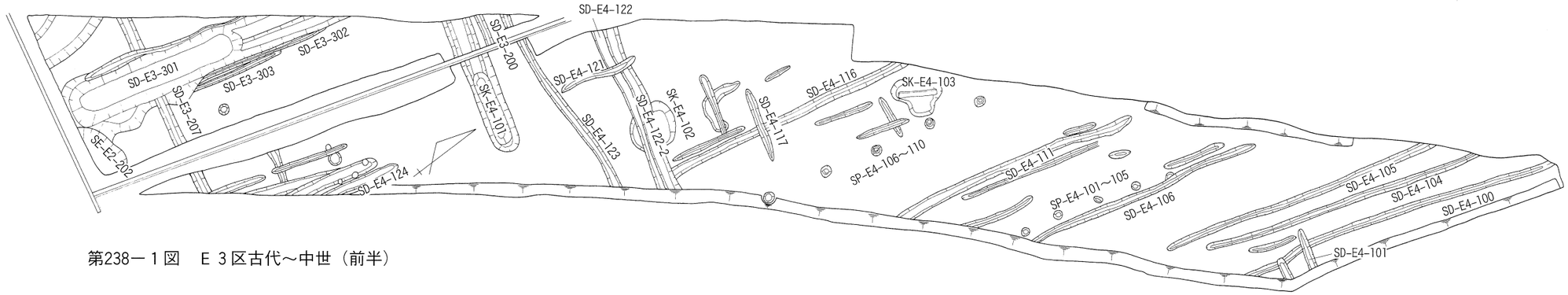
第237－４図　Ｅ１区近世以降



第237－８図　Ｅ２区近世以降

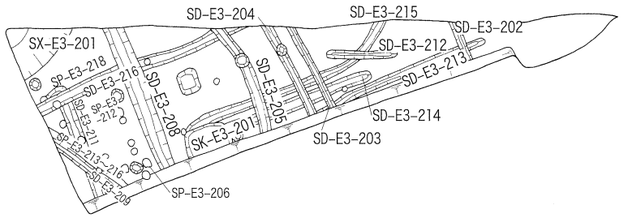
0　5m

第237図　Ｅ１・Ｅ２区遺構変遷図（１/150）

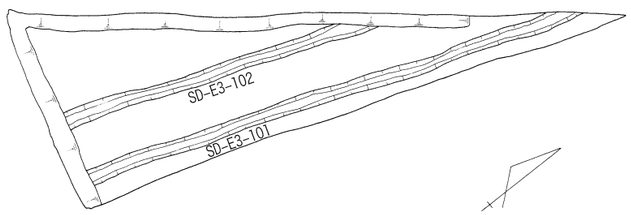


第238－１図　Ｅ３区古代～中世（前半）

第238－４図　Ｅ４区古代～中世



第238－２図　Ｅ３区古代～中世（後半）

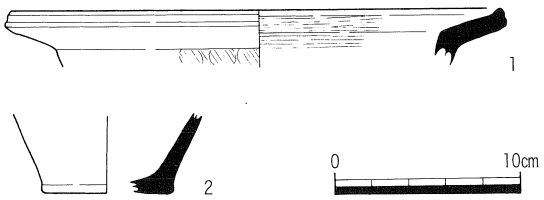


第238－３図　Ｅ３区近世以降

第238図　Ｅ３・Ｅ４区遺構変遷図（１/150）

第239図1（ＳＤ－Ｅ１－201）は，土師質土器甕口縁部。農耕時等の混入か。

２（ＳＤ－Ｅ１－209）は，弥生土器甕底部で，石英・長石を多く含み胎土・焼成等第236図１と共通する。



第239図　ＳＤ－Ｅ１－201等出土遺物

古代～中世の遺構・遺物

遺　構

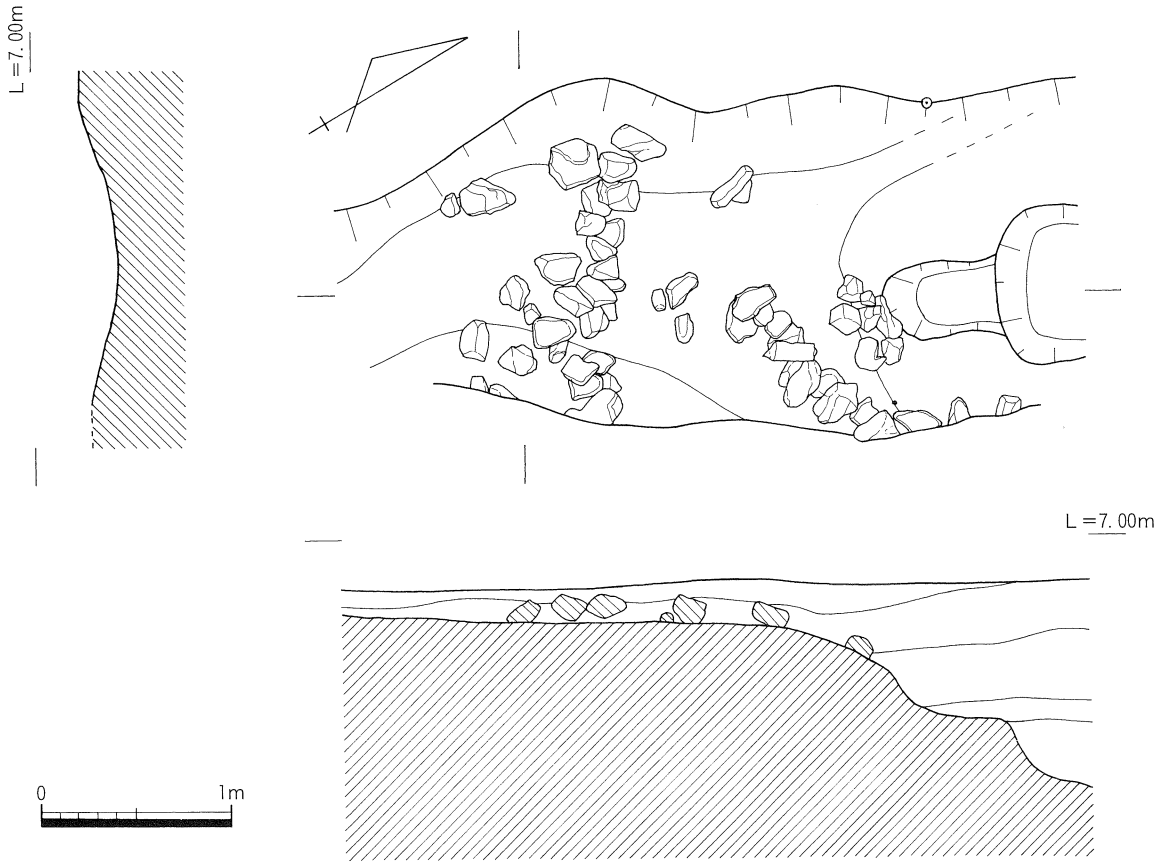
Ｅ１区

ここでは，南端に東西方向の条里坪界相当の溝ＳＤ－Ｅ１－118がある。断面は「かまぼこ」形を呈する。古代末までに開削された形跡がうかがわれ，中・近世に強度の浚渫行為ないし再掘削を行ったとみられる。北端近くでＳＫ－Ｅ１－101等に少量の須恵器片を伴う形状･用途不明確な例をも含む土坑が検出さている。遺物に極めて乏しいが，ＳＤ－Ｅ１－110，114，115，117が層位や遺構埋土の性状，包含層の出土遺物等から中世までの溝の遺構と考えられる。

方位は条里地割に対応したものであり，ほぼ南北又は東西に延びる直線状である。これら以外には古代・中世と考えられる特段の遺構・遺物は存在しない。

Ｅ２区

南北ないし北北西～南南東に延びる断面船底ないしかまぼこ形の溝が重畳している。暗渠排水機能を持つものを含めた古代以降の溝が繰り返し開・改削されている。これらのうちには，近世・近代のもの



第240図　ＳＥ－Ｅ２－202導水溝

を含めて，条里と方位が合致する用排水路及び暗渠もみられる。柱穴は認められない。

これらは規模・性状・流路方向等に差異がみられるものの，近世以降にも踏襲されるものである。

これら溝は，前段階で比較的広幅のＳＤ－Ｅ２－209／同－２／同－3，Ｅ２－210／同－2，Ｅ２－211が見られるが，南北方向の本流を互いに連結する分岐もしくは連結溝が特徴的である。後段階では，全体として溝幅が縮小する傾向がみられる。前・後段階とも給・排水機能を果たすものであろう。

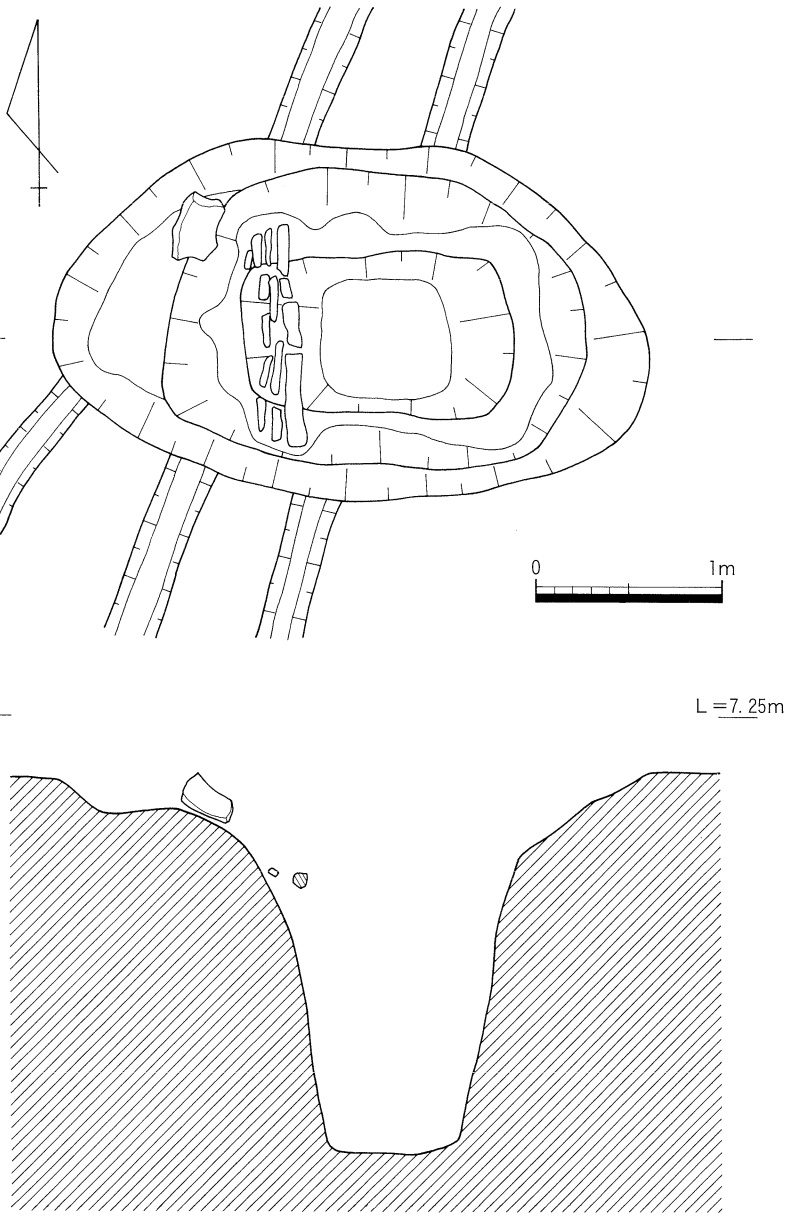
また，素掘りの井戸２基が確認されている。時期差が認められるが，それぞれが溝と連接した機能を持つ関係にあるらしい在り方を示すのは注目すべき点であろう。

先行して掘削されたＳＥ－Ｅ２－202は円形プランを持つ素掘り井戸であるが，その西側を北流するように設けられた幅１ｍ弱の溝から受水する導水溝を分岐させている。もともと厚い堆積砂層をそのまま掘抜いたもので現状でもかなりの湧水がみられるが，さらに地表水をも集めて貯水したとみられる。

若干後発のＳＥ－Ｅ２－201は，検出面で東西方向に長軸を持つ不整楕円形を示し，中位以下から底部にかけては長方形からやや隅丸の正方形に収斂する掘方となっている。砂層に掘り込まれて深さ２ｍを測り，現状でも検出面－20cm程度まで湛水しており，自噴の湧水量は極めて豊富である。その掘方が楕円形から長方形に推移する部位の西側短辺寄りに足場用とみえる簡単な構造物が設けられている。直径数cmの自然木を長さ約120cmに切り揃え幅約30cmに並べ渡したものである。ほぼ満水位に当る位置であろう。

ＳＥ－Ｅ２－201はＳＥ－Ｅ２－202のように本流から分岐する導水溝は持たず，中央部に並列して南北方向に井戸を横断する細幅の溝２条がみえる。完掘状態の遺構面では，一定量の水が常時流入・出したことを明示するような形跡はみられず，溝と井戸の直接の関連性の有無は確認できなかったが，機能的にこれと類似性を持つのではないかと推測される例がみられる。おおまかには同時期に属する高松平野東部の川南・西遺跡の例で，円形プランの素掘り井戸ＳＥ01と，これに並列して接続するＳＤ17／19，ＳＤ18／20の場合*4である。

当該期に共通にみられるタイプであるか否かについて，さらに類例を待ちたい。

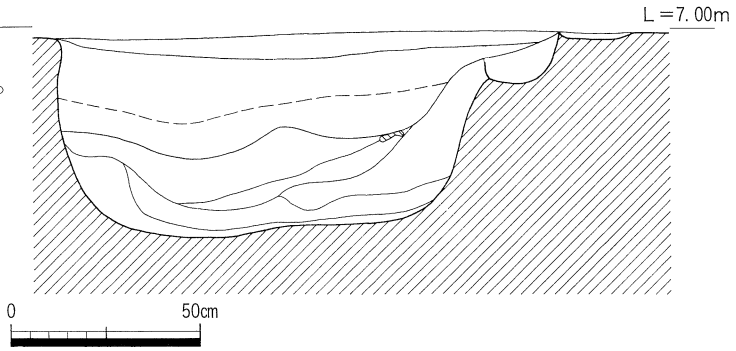


第241図　ＳＥ－Ｅ２－201平・断面図

Ｅ３区

断面逆台形を呈する中世までの南北方向の大形溝ＳＤ－Ｅ３－301が目立つ。

周辺からピット群を検出したが，明確な建物プランは確認するに至っていない。Ｅ３区北端からＥ４区にまたがっては，古代の遺物を豊富に出土する東西方向に狭長な土坑ＳＫ－Ｅ４－101があり，屋敷を区画する壕としての役割を持つ可能性についても検討すべき余地があろう。



第242図　ＳＤ－Ｅ３－301断面土層

第１遺構面直下の層にかかる遺構は，直線状に東西方向に掘られた溝が主体である。ＳＤ－Ｅ３－208は，西から東へ流れる礫詰めの溝で，明らかに暗渠排水溝であろう。ＳＤ－Ｅ３－204，211も僅かに前後があろうが，東流する同時期の溝である。ＳＤ－Ｅ３－208の下層でこれに接し同じく東流するＳＤ－Ｅ３－207がある。これらに切られＳＤ－Ｅ３－213～216等のやや幅が細い南北方向溝の一群がみられる。時間的前後関係と溝の方向性の変化は，地形条件ないしは土地利用の変遷を反映したものとも考えられる。

これらと同一面で検出された柱穴はＳＰ－Ｅ３－201～218である。ＳＰ－Ｅ３－202，203，206，212，218が径約30cmであり，他は約20cmである。分布は疎であり掘立柱建物として確認できるものはない。このうちＳＰ－Ｅ３－213～216はＳＥ－Ｅ２－202掘方の北縁ぞいに等間隔で直列しており井戸を区画する柵跡とも考えられる。また，その類似性を，後述するＥ４区のＳＤ－Ｅ４－106に沿うＳＰ－Ｅ４－101～105，106～110等との関連でも考慮すべきであろう。

調査区南西隅にＳＸ－Ｅ３－301がある。水路の一部分とも考えられるが遺構の一部のみで特段の遺物もなくて性格は確認できない。

また調査区北端で，現況はコンクリート畦畔で分断されているが，東西方向の土坑ないし溝遺構ＳＫ－Ｅ４－101が東西方向に設定されており，当時この部分ではＥ３／Ｅ４区を一体としての土地利用が行われていたことを示している。

ＳＫ－Ｅ４－101，ＳＤ－Ｅ３－201，212がそれにかかる遺構で，Ｅ４区の範囲にそのまま接続するものである。

上記一連の遺構に先行する大形の溝遺構ＳＤ－Ｅ３－301の末端部が確認された。検出面の幅約1.3m，深さ約0.6mである。調査区南端で溝の端末となっており，長さ約５mに亘って舟底形に掘り広げられて溜池状を呈している。なお，その北側上流部はやや浅くなるが底面東半部のみが掘り下げられ，改削・拡幅の後に溜池状に整備されたと推定される。地下水の湧出も顕著で，調査期間中でも容易に満水となった。南端に近い掘方の東縁部分で狭いテラス状をなす部分があり，洗場または水汲みの足場ともみられる。そのＳＤ－Ｅ３－301東縁沿いにＳＤ－Ｅ３－302，303がある。溝東側平坦部の集水を意図したのであろう。Ｅ３区南東隅部分はＥ２区ＳＥ－Ｅ２－202の掘方が切り込んでいる。素掘り施設とはいえ本格的な利水施設が縁辺部を接した状態で併存するとは考えられず，ＳＥ－Ｅ２－202はＳＤ3301埋没後のものとみられる。

Ｅ４区

ここでは，Ｅ３～Ｅ４区にまたがる遺構ＳＫ－Ｅ４－101で区画される以南を除き，大半はほぼ正確に条里の方位に沿う東西および南北の用排水路（もしくは畝間溝）が直交して掘られている。他区に比しこの溝遺構に密集・重畳がさほど見られないのは，暗渠排水の施設を欠いているためかも知れない。

本調査地は，勝賀山の東麓に形成された土石流扇状地帯の末端から移行したばかりの三角洲帯という地点に立地している。土地利用に上記のような差をみるのは，以下の原因によるものとも考えられる。即ち，土層観察の壁面では扇状地帯由来の中～大礫砂岩円礫の堆積層がこのＥ４区においてのみ見られ，耕作土直下に，随所にその頂部が確認されるのである。その上に，ほぼ全域に亘って一見「地山」風でよく緊った黄灰色シルト混り砂質土が拡がって，古代～中世にかけて安定した立地条件にあったと推測される。

以南のＥ１～Ｅ３区では素掘り井戸や暗渠施設の重複がみられ概して低湿であったと考えられるのとは対照的に，比較的に高燥な状況にあり暗渠排水等の土地改良設備を要せず，相対的に安定した耕作域として継続したようである。

両者間には，古代～中世においてＥ４区は農業専用域であり，Ｅ１～Ｅ３区では居住もしくはその関連施設が含まれるといった，土地利用についての区分が存在していたことを示唆している。

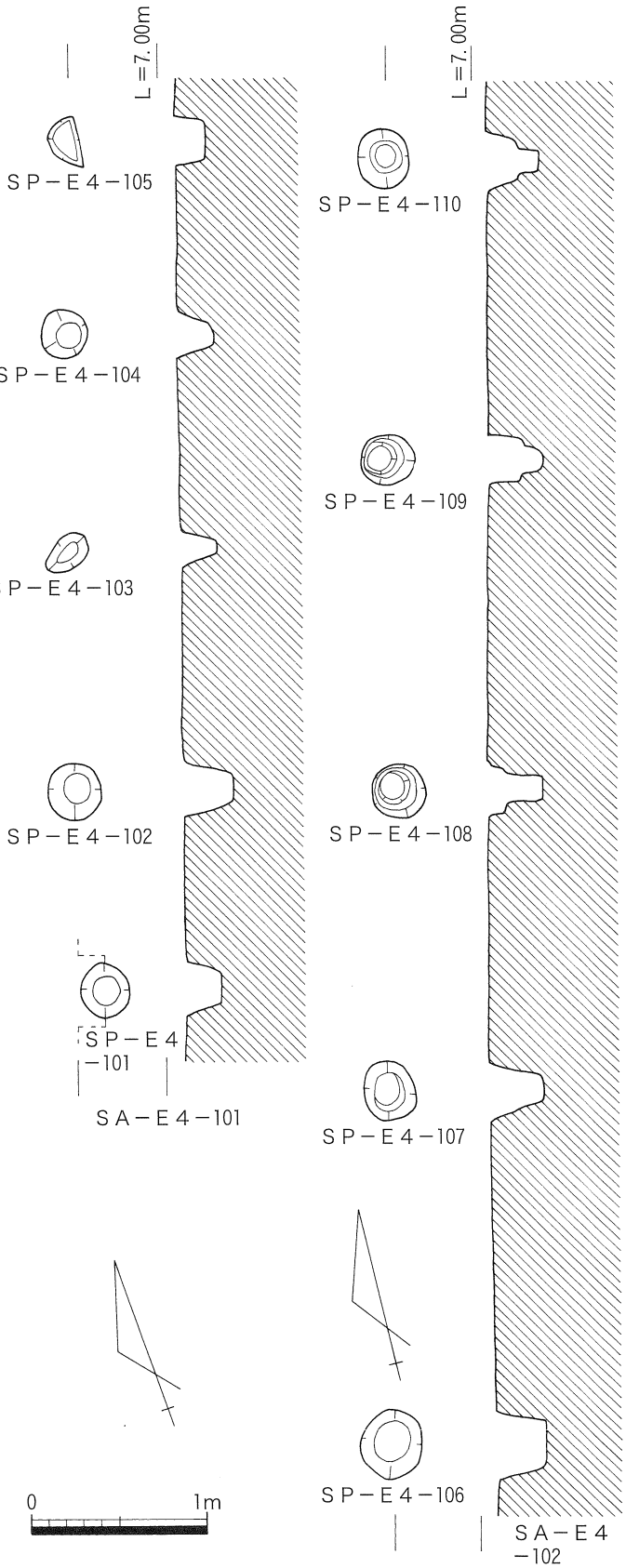
概ね東西方向をとった溝渠が先行し，南北の方向性を示す溝渠は，やや後代に属するとみられる（これは，Ｅ１～Ｅ３区においても観察される傾向である）。

この他注目される遺構では，敷地境界を示す柵もしくは塀であろうかと考えられる南北方向の柱穴列２条がみられる。

ＳＰ－Ｅ４－101～105の５基は，芯～芯間距離約1.5m，柱穴径35cm前後を測り，北限とみえる105がＳＤ－Ｅ４－106に切られ，先後があることが示される。更に南へと延びる可能性があろう（ＳＡ－Ｅ４－101）。

これらよりやや規模を大きくする柱穴列ＳＰ－Ｅ４－106～110が，西側約5.5mに位置する。これは東のＳＤ－Ｅ４－111と西のＳＤ－Ｅ４－116の中間にあたり２者とはそれぞれ等間隔を保っている。時期の先後は確認できない。径約40cmを測り芯～芯間距離は約2.5mである。柱穴列は，南及び北の調査区外にも連続する可能性があろう（ＳＡ－Ｅ４－102）。

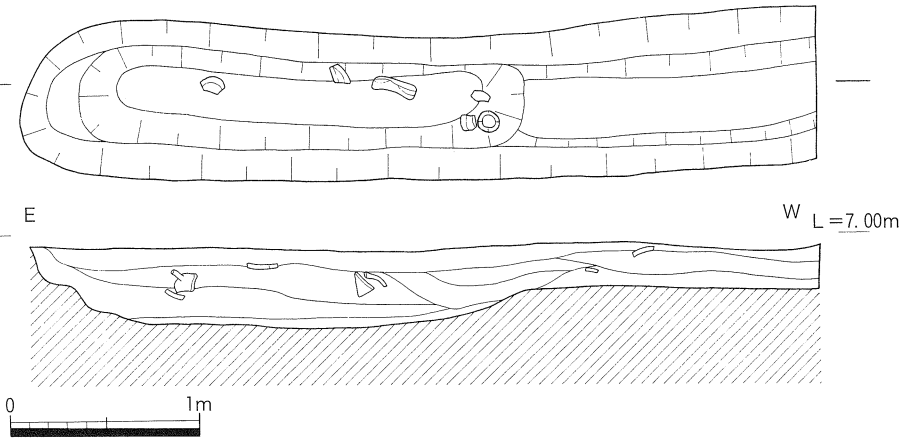
次に顕著な特徴を示す遺構としては，土坑（若しくは溝）ＳＫ－Ｅ４－101がみられる。



第243図　ＳＡ－Ｅ４－101・102柱穴列

条里地割に沿った可能性が高いと考えられる東西方向に直線的に延び，「溝」状を呈する遺構である。

しかし，通水を目的とする施設でなく東側で端部を半円形に収めて終結している。検出上端幅90cm，長さ4.25m以上であり西はＥ３区に跨って更に調査区外に延長する。



第244図　ＳＫ－Ｅ４－101平・断面図

或いは，調査区外でＬ字形に南側へ屈曲し，Ｅ３区ＳＤ－Ｅ３－301もしくは類似の「溝」状遺構に接続する可能性を考慮する余地があろう。

遺構の性格としては，むしろＥ３区及びその以南と一体の機能を持つ存在と想定すべきかも知れない。

ＳＫ－Ｅ４－101は遺物の量が多く，埋没までかなりの時間経過があったとみられ下層になるに従って古相を呈する。東寄り約３ｍの範囲は船底状の凹部が形成されており，Ｅ３区ＳＤ－Ｅ３－301南端部を連想させる。

自然湧水で，検出面下部10cmあたりまでの湛水がみられる。耕作域とみられる以北の部分と居住関連区域とみられる以南の部分との区画及び貯水の機能を兼ねた施設かとも考えられるが，類例については未確認である。

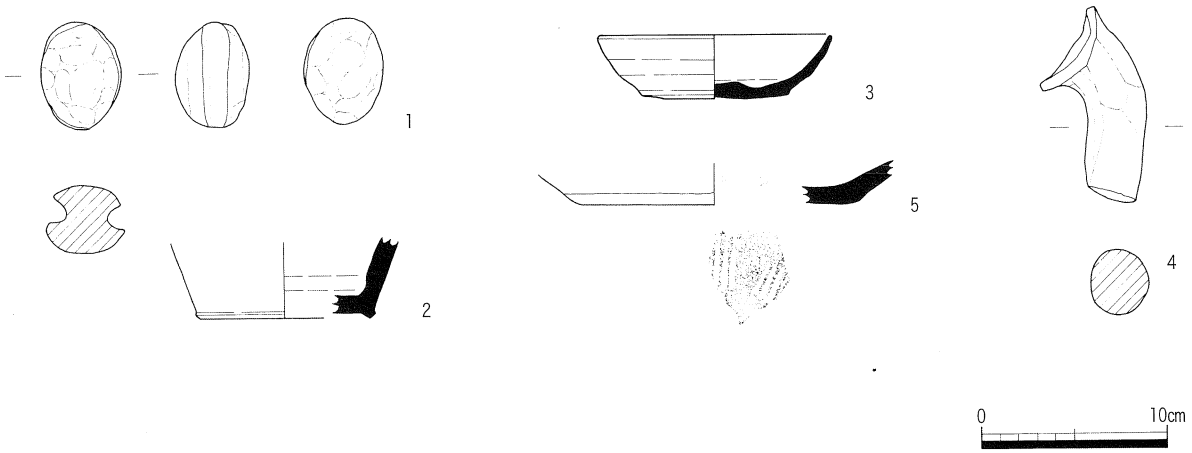
これより北約５ｍには円形皿状土坑ＳＫ－Ｅ４－102が位置する。遺物は皆無に近く，貯蔵の機能は考えにくい。径約２ｍである。ＳＤ－Ｅ４－122，122－２に切られてそれらに先行するものであるが，この溝を灌漑用とみれば，このＳＫ－Ｅ４－102は溝に先立つ時期の貯水・灌漑用の施設の可能性もあろう。

その他のＳＤ－Ｅ４－100～128等は，総じて用・排水を目的とし合せて用地の区画を兼ねるものであろう。

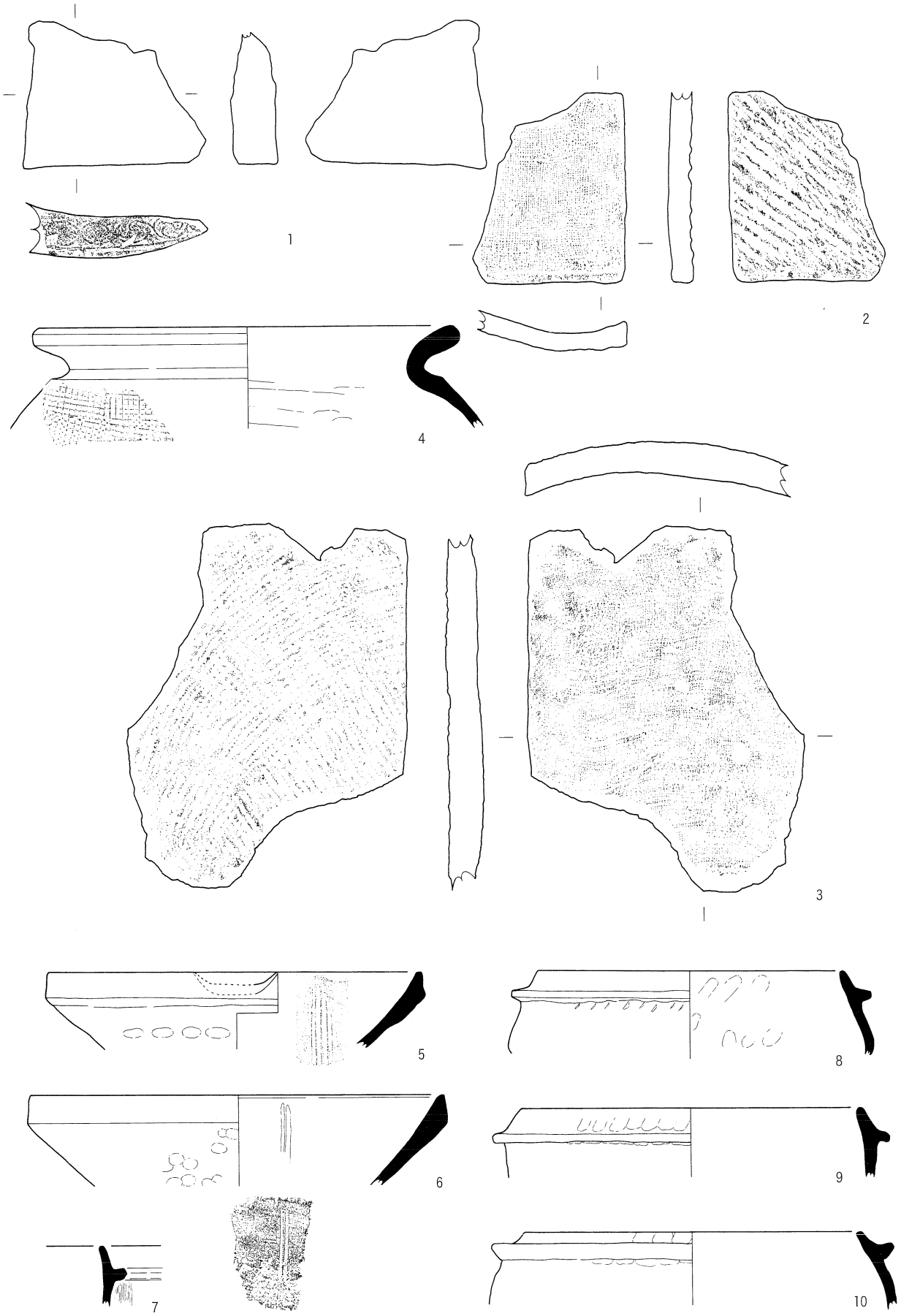
遺　物

Ｅ２区

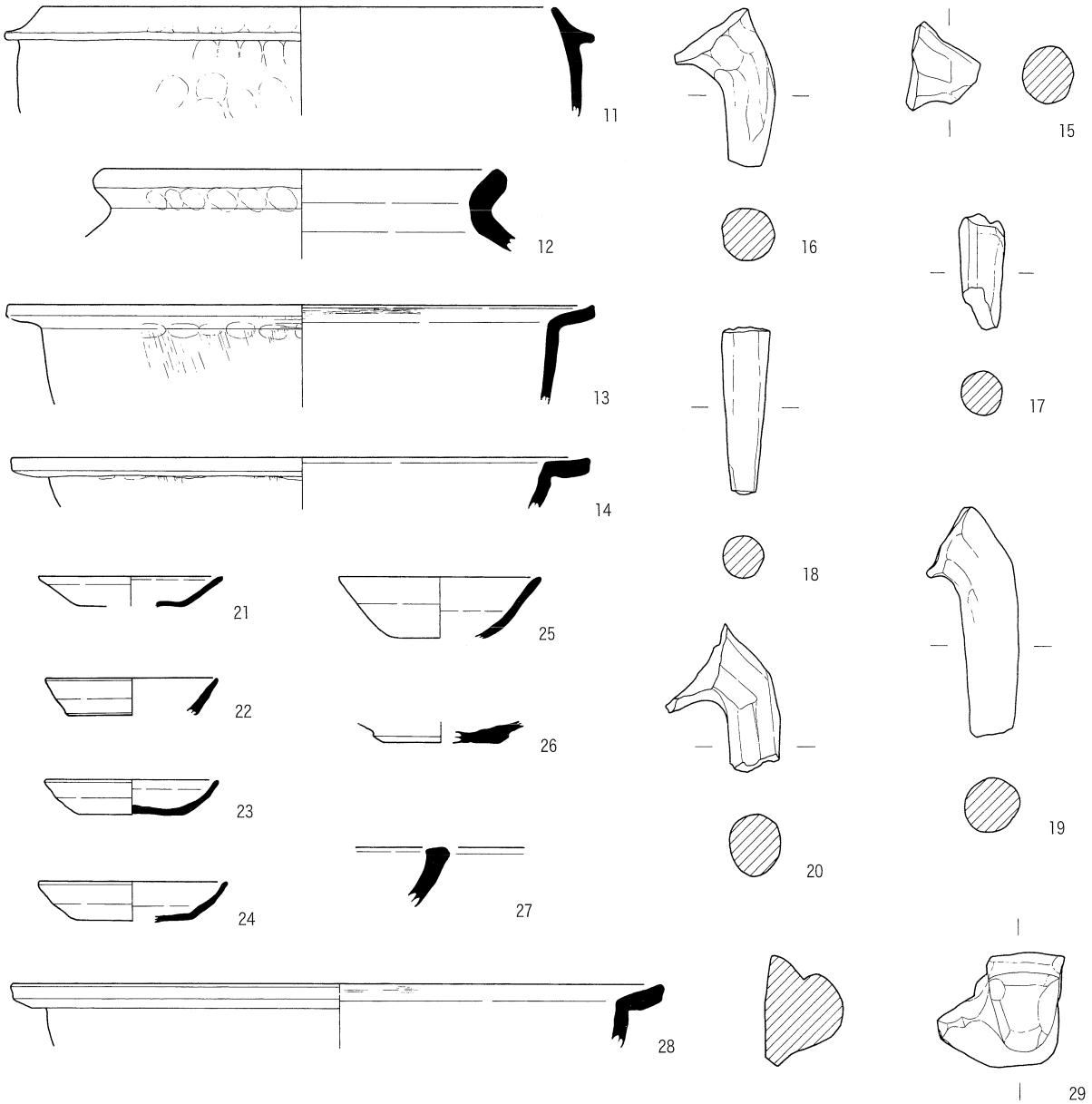
第245図１（ＳＤ－Ｅ２－201）は，土師質土器土錘の完形品である。やや偏平な卵形を呈し，5.8cmを測る。長径方向側辺にえぐりが入り横断面が「分銅」形となる。通例的にみかける筒状のものでなくど



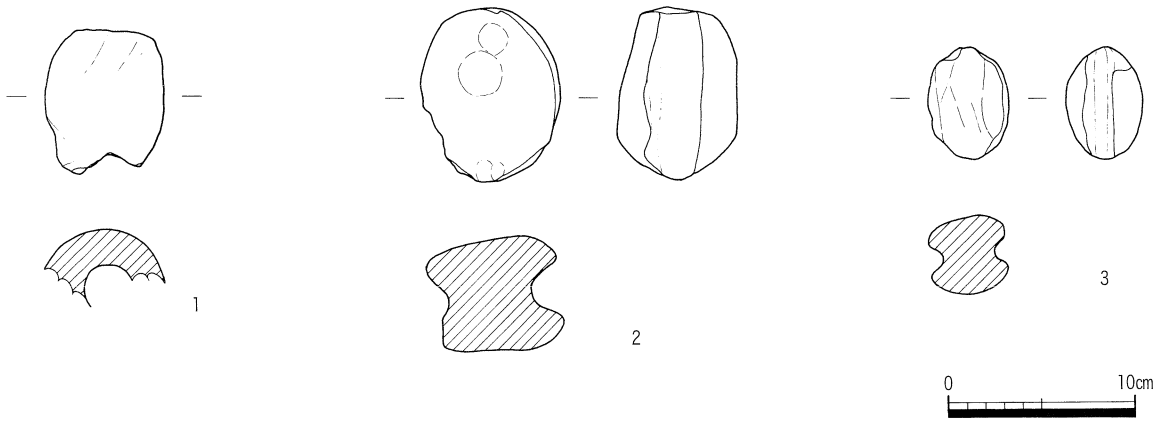
第245図　ＳＤ－Ｅ２－201～209出土遺物



第246図　ＳＥ－Ｅ２－201出土遺物



第247図－1　ＳＥ－Ｅ２－201出土遺物



第247図－2　ＳＥ－Ｅ２－201．ＳＥ－Ｅ２－202導水溝出土遺物

ちらかといえば類例が少ないようである。側辺に溝をもつ石錘で弥生時代の例*5がみられるが，遠い系譜にあたるのであろうか。因みに当遺跡検出土錘４点のうち，3点を本タイプが占めている。

２（ＳＤ－Ｅ２－203）は，須恵器の瓶と考えられる底部の破片で，焼成は良好･堅緻である。小片で確定できかねるが10～11世紀のものであろうか。３（ＳＤ－Ｅ２－209）は，土師質土器坏である。破断面にも摩耗があるが厚手の造りで完形に復元できる状態である。底面はヘラ切離しで，端部がほぼ垂直に約３㎜立ち上った後に器壁が開き，内弯しながら口縁に至る。４（同）は，土師質土器羽釜脚部である。５（同）は，東播系かとみられる擂鉢底部片である。櫛描条溝は４条（以上）を単位とする。放射状に施す条溝の間隔はかなり粗であり，口縁部付近では約10㎝に拡がると推定される。

第246図１（ＳＥ－Ｅ２－201）は，軒平瓦瓦当部片である。上（凹）面は布目，下（凸）面は板ナデである。瓦当部に向かって右半分足らずが残されている。扁行唐草文と推定するが，極めて形骸・簡略化されており，さらに瓦当面母型の陰刻が１㎜未満と極めて浅く，加えて型抜き作業時の押圧も不十分で文様は不明確で途切れがちである。胎土に径５㎜以上の石英・長石粒を多く含み焼成は良好である。

２（同）は，布目平瓦片である。上（凹）面は布目，下（凸）面は斜行する縄目である。縄目が側端にはみ出しており，桶づくりではないことを示している。３（同）は，布目平瓦片である。上（凹）面は布目。下（凸）面は縄目であるが，対角線の方向に沿い互いに直交しつつ施文されている。縄を捲いた工具で叩き締めた工程を示すのであろう。

なお。１～３は，布・縄目の粗・密や細部の調整等には差異がみられるものの，胎土・焼成・色調等の大要には共通性が窺われる。

４（同）は，瓦質土器甕口縁である。器表面の格子目叩き痕が顕著である。内面は当て具痕とそれを覆う板ナデ調整がみられる。器表を黒くする焼成もこの類の特徴である。

５（同）は，土師質土器擂鉢の片口部片である。櫛描条溝は４条を単位とする。６（同）は，土師質土器擂鉢片である。胎土・調整・焼成等は５にほぼ共通するが，ナデには異なる用具が用いられたようで口縁端面の成形が平坦である。櫛描条溝は２条が認められるが器面中位までは４条であった痕跡が残る。

７（同）は，土師質土器羽釜口縁片である。上方にわずか撥ねて端末とする鍔は短小化がみえる。内面はナデ，外面は粗いハケ調整である。８（同）は，土師質土器羽釜口縁である。内傾する口縁部に短く厚目の鍔が水平に引き出されている。鍔直下の部位にやや段差を設けて指頭の押圧を二巡させる調整を施しており爪の痕跡が残される。指によるヨコナデがみられる。９（同）は，土師質土器羽釜口縁である。08にほぼ同巧であるが，分厚くつくられている。鍔上面に指頭痕が連続し，体部器表は縦の粗いハケを施した後にナデている。10（同）は，土師質土器羽釜口縁である。外面の羽下部には煤が顕著である。09にほぼ同巧であるが，さらに分厚い。

第247図－１11（ＳＥ－Ｅ２－201）は，土師質土器羽釜口縁である。上述諸例に類似するが，これらに比しては指頭痕が顕著で器壁が薄い傾向がみえる。

12（同）は，土師質土器甕口縁である。復元口径22.8㎝を測る。低火度焼成のため剥落が多く胎土に径２～３㎜の石英・長石が顕著に含まれる。

13（同）は，土師質土器鍋口縁である。内外面ともに６条／１㎝程度のハケ調整が施されている。胎土に１㎜以下の石英・長石粒を含むがむしろ精良で，焼成も良好である。14（同）は，土師質土器鍋口縁である。13とほぼ同巧で，やや厚目の器壁をもつ。

15（同）は，土師質土器鍋脚部である。径約0.5㎜の微細な長石粒が目立ち，全体として比較的細密な胎土である。16（同）は，土師質土器鍋脚部である。15に近いとみられる胎土を使用。17（同）は，土師質土器鍋脚部である。本例の胎土も上記に近い。18（同）は，土師質土器鍋脚部である。胎土には径

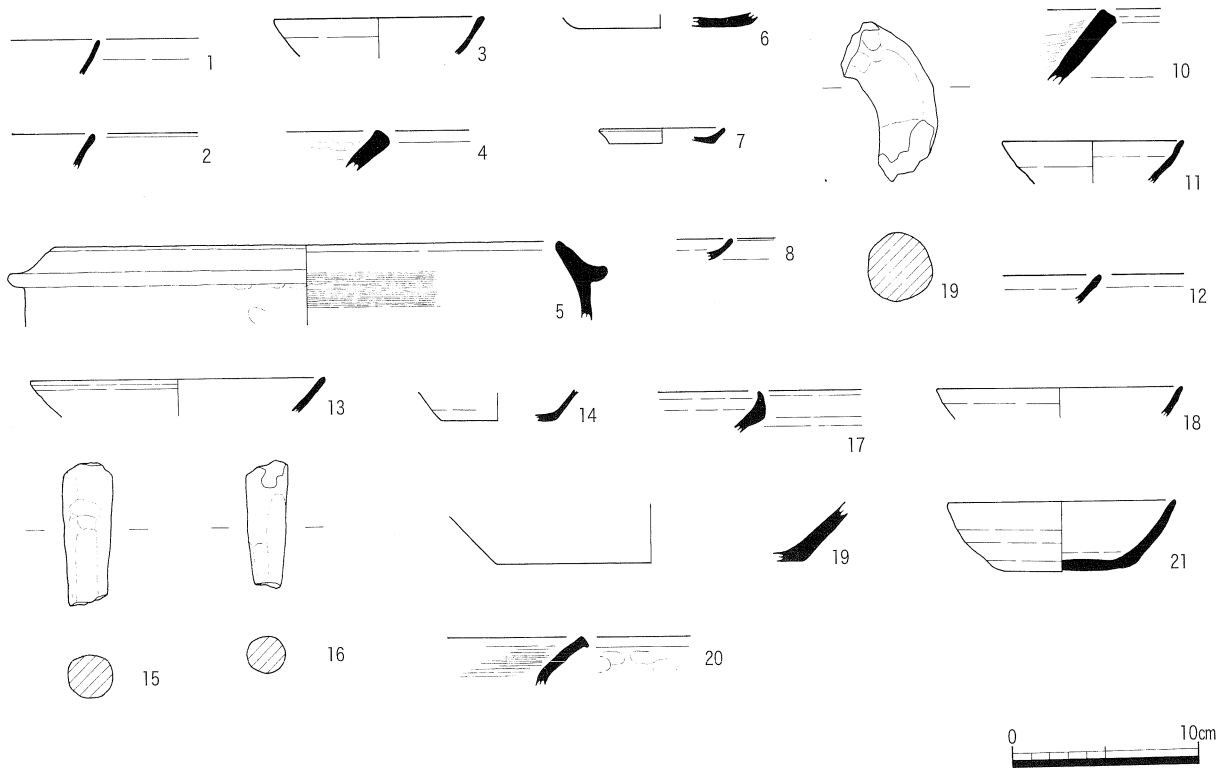
1～2㎜の石英・長石が含まれる。19（同）は，土師質土器鍋脚部である。ナデ調整を施す。20（同）は，土師質土器羽釜脚部である。形状は15～に類似するが，法量が一まわり大きく，「羽釜」とした。21（同）は，土師質土器坏片である。胎土はやや密で精選され，器壁は薄い。成型に粗放化が窺われる。22（同）は，土師質土器坏片である。体部は厚みのある底面から直線的に斜め上方に向かい，口縁端部近くで薄くまとめて終結している。23（同）は，土師質土器坏である。底部は回転ヘラ切りで，21に類似する。24（同）は，土師質土器坏片である。底部から口縁へかけては，体部中ほどで一度内側へ屈曲して立ち上る。25（同）は，土師質土器坏片である。ワラ様の圧痕が底面に残る。底部切離し後菰等敷物の上に仮置きしたか。

26（同）は，須恵器坏底部片である。破断面に僅かに摩耗がある。ほぼ10世紀のものか。

27（同）は，土師質土器鍋口縁片である。小片で確実な口径復元が難しいが大形に属すると考えられる。厚い口縁は外上方に延びたあと立ち上り気味になり肥厚して丸やかな端面をつくる。旧型に属するのか？胎土は，15等に類するようである。28（同）は，土師質土器鍋口縁片である。口縁は上面を殆ど水平にして外方に拡げている。

29（同）は，瓦器片である。器種未詳である。盤状容器の脚足部であろうか。

第247図－21（ＳＥ－Ｅ２－202導水溝）は，土錘片である。本遺跡で出土をみた計４点の土錘中唯一の筒状例で，最大径約７㎝を測り大形の部類であろう。長幅比の小さいタイプで焼成良好な灰白色を呈する。２（ＳＥ－Ｅ２－201）は，ほぼ完形の断面「分銅」形土錘である。若干欠損部があるが現状での重量は369ｇで約百（98.4）匁にあたり大形といえる。胎土・焼成は１に近い。３（同）は，完形土錘である。重量は103ｇ・三十匁弱（27.5）でやや小形である。第245図１も同型同大である。これらを通じて見ると２の（約）百匁は各種秤量の指標となる数値であり，3及び第245図１はその約１／３であり，これら相互の関係からみれば，土錘の製作にあたり一定の規格が存在した可能性を示唆するとも考えられる。



第248図　ＳＤ－Ｅ３－203～216出土遺物

Ｅ３区

第248図１（ＳＤ－Ｅ３－203）は，土師質土器坏口縁である。器壁内面に炭化物が付着しており，燈明皿と考えられる。２（同）は，土師質土器坏口縁である。１に似た付着物が認められる。３（ＳＤ－Ｅ３－205）は，土師質土器坏の口縁である。前２者に類似のものである。４（同）は，土師質土器鍋口縁である。やや弯曲して外上方にのびる口縁は端部を軽く丸め上縁を僅かにつまみ上げて収めている。５（同）は，土師質土器羽釜口縁である。体部は口縁端部に近くなるにつれて内弯の度が増している。鍔は幅せまくかなり退化傾向がみられる。６（同）は，土師質土器坏底部である。復元底径8.8cm，ヘラ切離しである。７（同）は，土師質土器小皿口縁である。復元口径6.8cm，同底径5.6cm，器高0.8cm。坏・皿類で最小の１群に当る規格に属する。８（同）は，土師質土器小皿口縁である。法量は７を僅かに上回る。７では底部から口縁への立ち上りに稜を形成するが，本例は緩やかに内弯しながら口縁に至る。

９（ＳＤ－Ｅ３－206）は，土師質土器鍋脚部である。胎土に径１mm以下の石英・長石を顕著に含む。焼成は良好・堅緻である。表面約１mm厚は鮮やかな橙（５YR ７／８）に発色し，以深は芯部まで暗青灰（10BG ４／１）を呈する還元状態である。10（ＳＤ－Ｅ３－209）は，土師質土器鍋口縁である。口縁幅約５cmを測り，小片で正確な口径復元は不能であるが大形に属する個体であろう。口縁上面に６条／cm程度の顕著なハケ目で調整する。11（同）は，土師質土器坏口縁である。復元口径9.6cmで胎土は密で精良，焼成も良好で灰白（10YR ８／２）である。内面と一部器外に及ぶ炭化物の付着がある。12は，土師質土器坏口縁である。13（同）は，土師質土器坏口縁である。復元口径は15.8cmながら見かけの数値で，実際は12cm未満か。14（同）は，土師質土器坏底部である。復元底径は６cmである。15（ＳＤ－Ｅ３－214）は，土師質土器羽釜脚部である。16（同）は，土師質土器羽釜脚部である。

17（ＳＤ－Ｅ３－215）は，須恵質鉢口縁小片である。東播系か。内・外面ともナデ調整で，内面は口縁部近くでほぼ垂直に立ち上り，外面は内面の立ち上り部位より約１cm下部で外反し約1.5cm幅のやや内傾する口縁端面が形成される。端面は炭素吸着で黒く焼成される。18（同）は，土師質土器坏口縁である。19（同）は，瓦質土器鉢底部である。摩耗が著しく調整等は確認できない。復元底径は16.0cmである。

20（ＳＤ3216）は，土師質土器鍋口縁である。10例に近いが全体にやや小振り・薄手である。口縁上面のハケ目調整は５条／cmで顕著である。21（同）は，土師質土器坏である。摩耗があるが厚手で完形品である。底部切離し後の板目圧痕がみられる。器の中心線からやや外れて相対する口縁上端の２点に，焼成前の変形又は使用による摩滅かの区別が困難な凹部が生じている。成因，目的等不明である。

第249図　ＳＰ－Ｅ３－201．ＳＫ－Ｅ３－201出土遺物

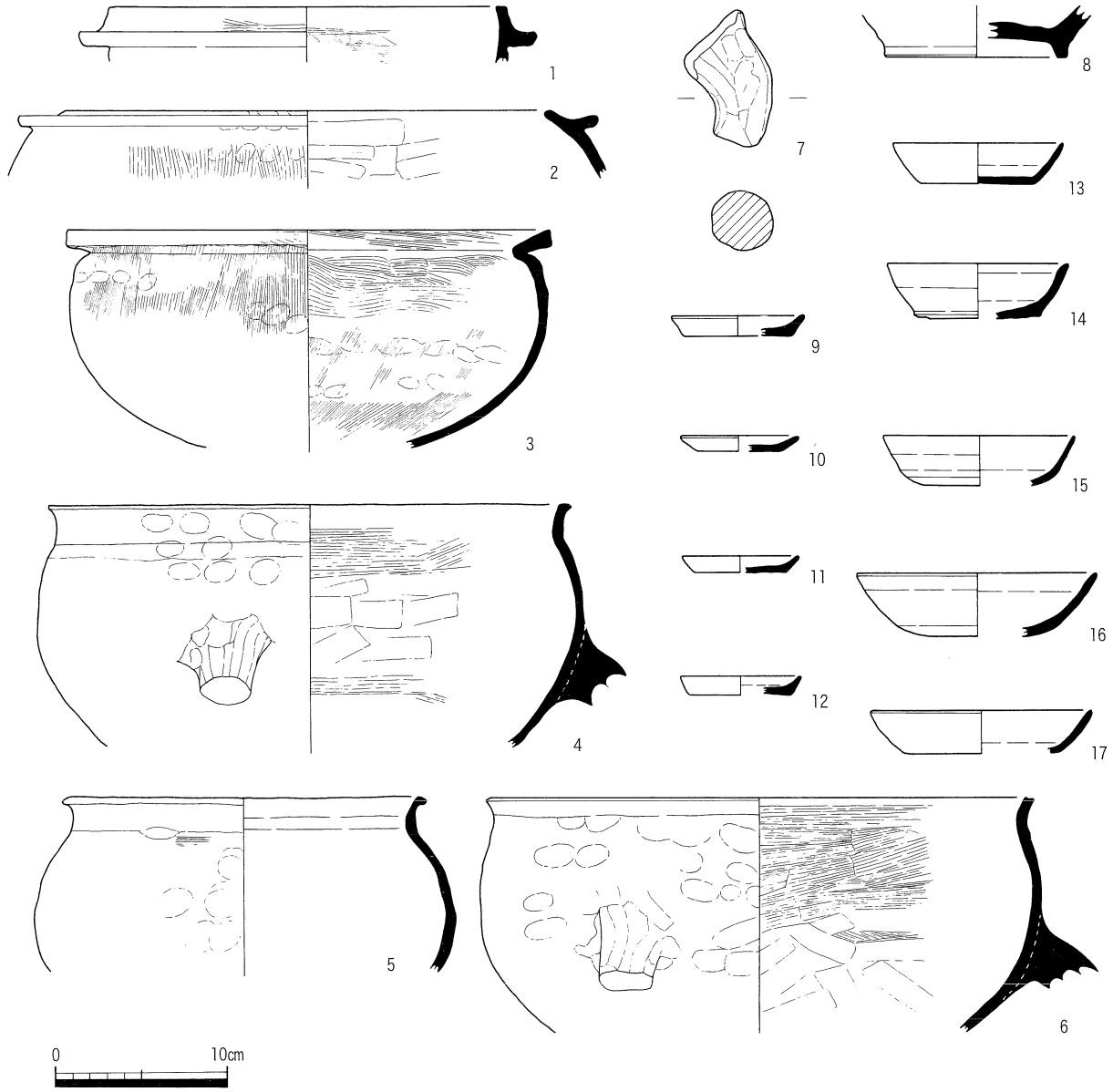
第249図１（ＳＰ－Ｅ３－201）は，土師質土器鍋の口縁である。焼成やハケ目による調整法などは第248図19他の系列に属するとみられるが，口縁の幅はやや狭く小形化している。２（ＳＫ－Ｅ３－201）は，土師質土器坏口縁である。

第250図１（ＳＤ－Ｅ３－301）は，土師質土器羽釜口縁である。水平に伸びた鍔上面と下面基部に強いタッチのハケ目調整が施される。口縁端面は水平に切断したように稜をなす成型である。２（同）は，土師質土器羽釜口縁である。体部は口縁に近づくに従い内傾が強くなる。約１cmに狭めた鍔に退化傾向が窺われる。３（同）は，土師質土器鍋である。底面中央部を欠くが完形に近い復元が可能である。但し脚部の有無が確認できない部位である。内面は口縁直下と体部中位をハケ及び指頭で強く押して器壁を拡張し，上半部で２～３cmごとに横ハケの操作を繰返す。下半面のハケは中心線に斜行する。外面には口縁下面から体部上半部にかけて縦に４条／cm幅のハケ目を２回以上重ねて施す。体部下半～底部は

約１cm角の格子目叩きである。器面調整は外面が先行し，内面からの圧痕で最終的な器形が定まる。

４（同）は，土師質土器鍋である。脚端部以外は復元してほぼ完形となる。外面全体に煤付着が顕著で，胎土に径１～３mmの石英・長石・角閃石を多く含む。焼成は良好で堅緻。口縁は僅かに外反している。５（同）は，土師質土器鍋の口縁及び体部である。復元口径は20.2cmと，この器種としてはかなり小さい。内面横ハケ，外面上半横ハケ・下半縦ハケに指頭押さえが覆う。煤の付着は多い。１～２mm以下の石英・長石粒の混入が目立ち，内面も全域に浮きだしている。６（同）は，土師質土器鍋である。ややハケ目調整が目立つが，全体に前４例に近似している。胎土に径１～３mmの石英・長石・角閃石を多く含む。焼成良好堅緻で口縁は僅かに外反する。底面にほぼ５mm角の格子目叩きを施すが，部分的・散漫であり形骸化が窺える。７（同）は，土師質土器鍋脚部である。

８（同）は，緑瓷瓶の底部片である。無釉の瓷器で，自然釉が底部にまで垂れたものである可能性もあろうが，僅かではあるが高台内面にも釉がみえ，一応緑瓷としておきたい。復元底径10.7cmである。釉はオリーブ黒（10Y ３/２），胎土は褐灰（7.5YR ５/１）。内面は顕著な回転指ナデ調整である。



第250図　ＳＤ－Ｅ３－301出土遺物

9（同）は，土師質土器小皿口縁である。復元口径7.7cm，同底径6.2cm，器高1.2cmである。内面には炭化物の付着がみられる。燈火具か。以下の諸例と小異はあるが同一類型と考えられる。10（同）は，土師質土器小皿口縁である。前者に比べ底面周縁の稜の形成が鈍い。11（同）は，土師質土器小皿口縁である。12（同）は，土師質土器小皿口縁片である。

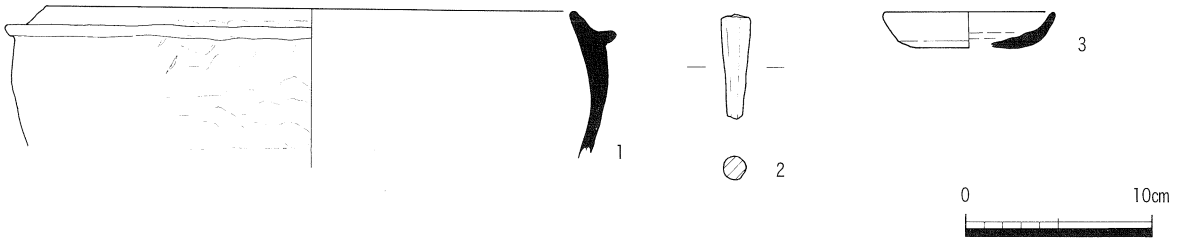
13（同）は，土師質土器坏である。完形に復元できる。内外面とも指ナデ調整。底部回転ヘラ切りで板目圧痕を残す。口縁の一箇所に横２cm・縦１cmほどの黒ずみがみられる。炭化物層の付着は認められないが燈芯の被熱によるのであろう。口径10.0cm，底径6.6cmである。14（同）は，土師質土器坏である。完形に復元できる。器壁が厚手のつくりである。底部はやや粗放な回転ヘラ切りである。器壁は底部から稜を成し数mm垂直に伸びた後外反する。口径10.5cm，底径は7.0cmである。15（同）は，土師質土器坏口縁である。底部から器壁への境界は曖昧なまま弯曲して立上って，薄手の器壁でほぼ直線的に口縁に至る。胎土はやや密である。復元口径11.2cm，同底径6.5cmである。16（同）は，土師質土器坏口縁である。底面中央部を欠き器形が確定できない。仮に坏としたが前３者とは規格を異にし，口径は14.0cmを測る。器形・調整は端正である。或いは椀とすべき物かも知れない。

17（同）は，土師質土器坏口縁片である。復元口径12.9cm，同底径8.0cm，器高2.5cmである。

Ｅ４区

第251図１（ＳＤ－Ｅ４－105）は，土師質土器羽釜口縁である。口縁部の内傾が目立って，鍔の幅が８mm以内までに退化。内面は板ナデの後に指ナデが重なり，外面は，ナデと指頭圧痕がみられる。

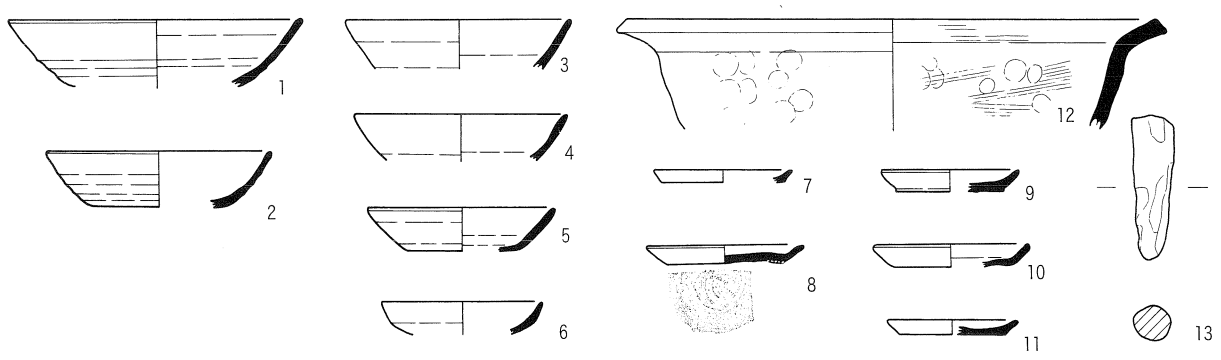
２（ＳＤ－Ｅ４－100）は，土師質土器鍋脚部である。残欠端部の最小径は0.6cmを測る。土鍋・羽釜類の脚部は，出土点数が少なくない割には欠損部のない例は稀である。特に先端部が逸失したものが多く本例は小形個体の一部分であろうが，先端が確認できる少数例の一つである。３（ＳＰ－Ｅ４－107）は，土師質土器坏である。復元口径9.1cm，同底径5.4cmである。完形に復元できる。



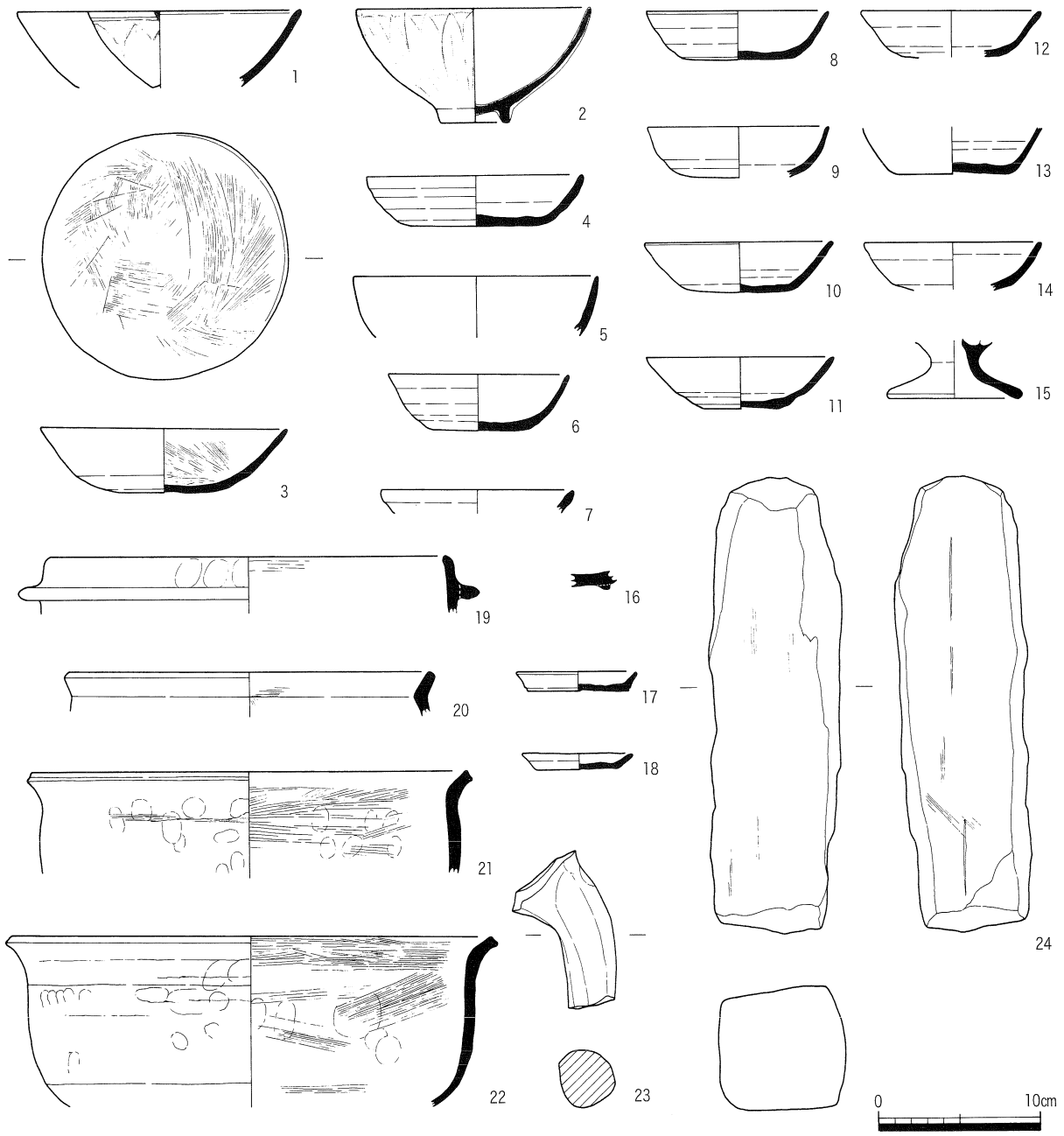
第251図　ＳＤ－Ｅ４－100．105．ＳＰ－Ｅ４－107出土遺物

第252図－１１（ＳＫ－Ｅ４－101－Ｉ）は，須恵質椀であろう。底部を欠き確定的な復元はできない。器壁は薄手で平均約２mmでかなり均一に成型されている。内外面とも回転ナデにより幅５mm前後の凹線状の段が形成されている。体部は灰白（Ｎ８／０）で口縁部は１cm余の幅で炭素を吸着した暗灰（Ｎ３/）の発色。高度な成形技術をみせるが必ずしも精製の印象を与えるものでもない。

２（同）は，土師質土器坏である。復元して完形となる。回転ナデによって器表面に顕著な段を形成している。復元口径12cm，同底径7.0cm，器高3.0cmであり，一連の「規格」的製品群の１例である。胎土に２mm以下の石英・長石を含み，灰白（2.5Y ８／１）で焼成は良である。３（同）は，土師質土器坏口縁部である。調整・胎土・焼成等，ほぼ２に類似するが，やや器壁厚目で回転ナデによる凹凸が抑制される。４（同）は，土師質土器坏口縁部である。上記諸例に類似するが，器壁は薄手である。５（同）は，土師質土器坏である。復元して完形となる。器形・法量・調整は上記諸例に共通するが，焼成良好で堅緻であり，劣化が抑制されて指ナデの調整痕まで明瞭に遺存している。



第252図－1　ＳＫ－Ｅ４－101Ⅰ層出土遺物



第252図－2　ＳＫ－Ｅ４－101Ⅰ・Ⅱ層出土遺物

6（同）は，土師質土器高坏坏部とみられる。通常見かける器形でない。第252図－２の15同巧の脚台部がつくものではなかろうか。極めて小型で特殊な用途が考えられる。

7（同）は，土師質土器小皿片である。完形に復元できる。第250図９他と同類のものとみられる。口径7.2cm，底径6.5cm。但し，器高が0.7cmにとどまるのは少数例といえよう。8（同）は，土師質土器小皿である。完形に復元できる。粗野な回転ヘラ切離しが目立つ。法量は第250図９他に近似し使途も類似と考えられるものの，調整は明らかに異なっており先行形態とも考えられる。9（同）は，土師質土器小皿である。完形に復元できる。７に酷似する。10（同）は，土師質土器小皿である。完形に復元できる。口縁端はやや内弯し端部は丸く収められる。８に次ぐ形態であろうか。11（同）は，土師質土器小皿である。完形に復元できる。８に近い様相を示す。

12（同）は，土師質土器鍋口縁である。内面は約４条／cmの粗い横ハケ調整である。外面は口縁部下面を横ハケ，体部は縦ハケの後ナデ・指押えが施される。

13（同）は，土師質土器鍋脚部である。先端部が完存する比較的稀な例である。圧痕等から指頭押さえで引伸し気味に成形されたことがわかる。

第252図－２１（ＳＫ－Ｅ４－101）は，青磁椀口縁である。龍泉窯であろう。釉色はオリーブ灰（10YR５/２）を呈する。内面（残存部分）は無文で外面は片刃彫り鎬蓮弁文である。２（同）は，青磁椀である。回転復元により完形となる。龍泉窯であろう。釉色は明緑灰（10GY ７/１）に近似する。外面は口縁端で1.5cm間隔の片刃彫り鎬蓮弁文を施す。復元口径14.2cm，底径4.0cm，器高6.9cm，釉の層厚１mmである。淡い鉄漿がみられる「畳付」を残して高台内も施釉されている。

３（同）は，須恵質坏である。完形品である。口径14.8cm，底径5.0cm，器高3.9cmである。調整は，内面ハケである。器体を左手で保持し幅約３cmの弾力ある板状のハケ目工具で，器体内面左側口縁下部から器体内面右側にかけて，器壁下半部と底面の半ばを経由するハケ目を施し，器壁右側中位の終点で一旦工具を止めるので，その角で器面に斜行する約３cmの直線圧痕が残る。圧痕は平均約２cm間隔で，12～３回で一周する。この後口縁内面に約１cm幅の指横ナデで整える。外面は横ナデ。底部はヘラ切離しで板目圧痕を残す。胎土はやや密に精選されて，灰白（Ｎ８/）を呈した焼成は良好･堅緻である。全体として精良・端正なつくりである。魚住系か。４（同）は，須恵質坏である。完形に復元できる。口径13.2cm，底径7.6cm，器高3.1cmである。調整は，内面回転ナデ。外面は，螺旋状に口縁端部から底部にかけて施される回転ナデである。強い押圧で幅約１cmの凹線状の段を形成する。口縁部には，端面と外面口縁端側１～1.5cm幅で炭素吸着焼成がみられる。同型器の重ね焼きと判断できる。焼成は良好・堅緻である。

５（同）は，土師質土器坏口縁である。復元口径14.8cm。内外面とも回転ナデ。焼成良好である。６（同）は，土師質土器坏完形品である。口径10.9cm，底径6.2cm，器高3.5cmである。調整は内外面とも回転ナデである。胎土はやや粗であるが，焼成良好・堅緻である。７（同）は，土師質土器坏口縁細片である。器壁は厚手，胎土はやや密である。８（同）は，土師質土器坏完形品。調整は内外面回転ナデ，底部ヘラ切離しに板目痕。焼成は良好・堅緻。口径11.0cm，底径6.6cm，器高3.0cm。９（同）は，土師質土器坏である。復元口径11.0cm，底径6.4cm，器高3.1cm。器壁薄く焼成堅緻である。10（同）は，土師質土器坏完形品である。口径11.4cm，底径7.0cm，器高3.1cmである。胎土はやや密である。灰白（2.5Y ８/１）を呈し，焼成は良好・堅緻である。11（同）は，土師質土器坏である。復元して完形。口径11.2cm，底径5.8cm，器高3.2cmである。内外面回転ナデ。焼成良である。12（同）は，土師質土器坏である。回転復元でほぼ完形となる。復元口径11.0cm，底径6.4cm，器高2.7cmである。焼成は堅緻。13（同）は，土師質土器坏底部である。底径6.4cm。内外面回転ナデ。底部ヘラ切り・板目痕。

14（同）は，土師質土器坏である。復元して完形となる。上述諸例と同巧である。

15（同）は，土師質土器高坏脚台部である。あまり類例をみかけない型である。「須恵系土師質土器」の系列に属するとみられる。胎土・調整・焼成とも精選・精製。何らかの儀式に用いられる物であろう。

16（同）は，土師質土器椀底部である。摩耗しており細部は不明である。粘土紐状の高台が貼付けられているが偏平な退化したともみえるものである。

17（同）は，土師質土器小皿完形品である。底部ヘラ切離し。一度目のヘラ操作で切離せず切口を残したまま下部２㎜ほどの位置で切離す。量産による粗放化であろう。第250図13等の系列に属する。

18（同）は，土師質土器小皿完形品である。底部ヘラ切離しは底部から口縁への推移が滑らかである。

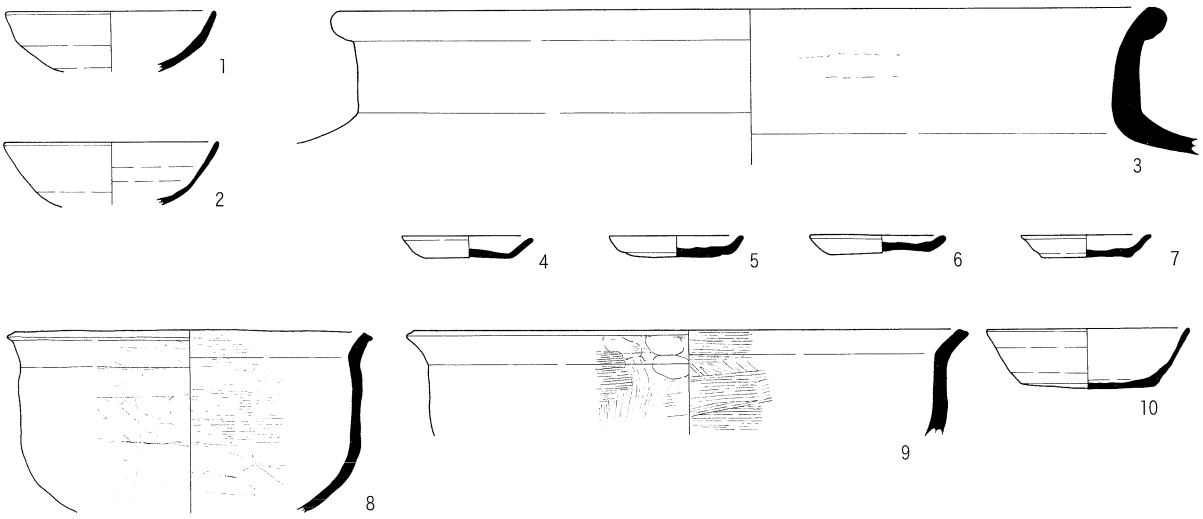
19（同）は，土師質土器羽釜口縁である。鍔は短小化している。

20（同）は，土師質土器鍋口縁である。口縁部幅は短小である。21（同）は，土師質土器鍋口縁である。復元口径26.2cmである。口縁部幅は短小である。22（同）は，土師質土器鍋口縁である。復元口径は29.2cmで，残存高10.3cm。内面横ハケ，外面縦ハケを顕著な指頭押さえが覆う。煤付着が著しい。

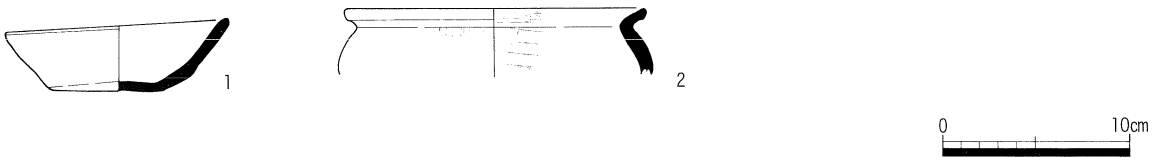
23（同）は，土師質土器鍋脚部である。

24（同）は，砥石完形品である。当調査区で該期の石製品としては唯一の出土例である。法量は製品として切出された状態に近い端部（縦横比の小さい側）での高さ7.5cm，幅6.8cm，長さ27.7cmである。中央部の摩耗量は上面1.1cm，下面0.7cmである。上･下両研磨面の使用頻度は等分ではないが，摩耗の程度からみてほぼ均等に使用しようと意識されていたのであろう。側面も，凹凸の少い片側の一面は一定回数使用して平滑である。研磨面は弯曲し精度の高いものは扱えない。材質はアルコース砂岩かとみられる。「中砥」で家事汎用であろう。重量は現状で3.0kgである。灰白（7.5Y ８／１）を呈する。

第253図－１１（ＳＫ－Ｅ４－101－Ⅲ）は，土師質土器坏片である。器壁中位で屈曲している。中心部の欠損で完形とはならず器形は確定しない。或いは反転して坏蓋とすべきかも知れない。



第253図－１　ＳＫ－Ｅ４－101Ⅲ層出土遺物



第253図－２　ＳＫ－Ｅ４－101Ⅴ層出土遺物

2（同）は，土師質土器坏の口縁である。復元口径11.2cm。薄手である。

3（同）は，須恵器甕口縁部である。復元口径は42.6cmである。やや外反した口縁内面及び器表肩部には自然釉に近い灰が「ゴマ」状にみられる。

4（同）は，土師質土器小皿完形品である。回転ヘラ切りである。本例以下計4点は，胎土・調整・焼成等に僅かに差を示すが法量は極めて近似。使途も共通であろう。5（同）は，土師質土器小皿完形品である。6（同）は，土師質土器小皿完形品である。7（同）は，土師質小皿完形品である。

8（同）は，土師質土器鍋口縁及び体部である。復元口径は18.4cmと，この種器種でも著しく小さい。残存高9.7cmで，約1／3個体分につき確認できるが，脚部を示す部分は残らない。外面に煤の付着はないが内底面は2次的な熱によると思われる黒ずんだ変色部分が拡がる。小振りの器体である事とともに相俟って，熰（おき）火利用による加熱等の場合も想定できよう。9（同）は，土師質土器鍋口縁である。復元口径29.1cmである。胎土・調整・焼成等でかなり類例がみられるものである。

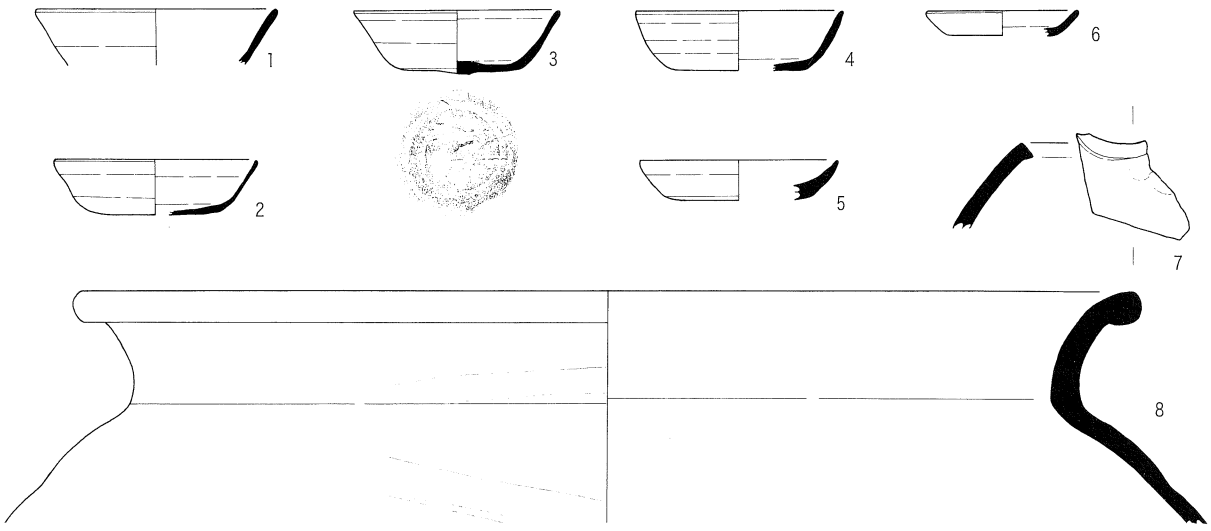
10（同）は，土師質土器坏完形品である。口径10.7cm，底径7.1cm，器高3.2cmの標準的規格品。

第253図－21（ＳＫ－Ｅ４－101－Ⅴ）は，土師質土器坏である。復元し完形となる。類似器型のものと大要では共通するが，分厚い原初的ともいえる調整である。この類型の祖型的存在とも考えられる。

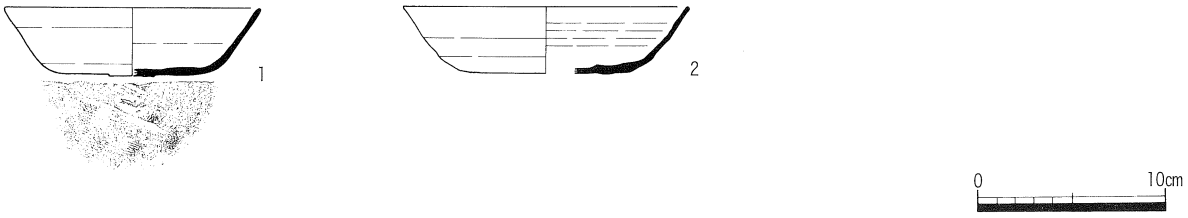
2（同）は，土師質土器鍋口縁小片である。復元口径15.8cmであり，他に類品を見ない小型個体である。器形・調整その他に差はあるが，法量の近い第253図－１８に類する用途が考えられる。

第254図－11（ＳＫ－Ｅ４－101－Ⅵ）は，須恵質坏口縁片である。復元口径12.6cm。灰白（Ｎ８/）を呈する。

2（同）は，土師質土器坏である。完形に復元。口径10.7cm。この種の「規格」品。3（同）は，土師質土器坏完形品である。口径10.9cm，底径6.5cm，器高3.4cm。4（同）は，土師質土器坏である。焼成



第254図－１　ＳＫ－Ｅ４－101Ⅵ層出土遺物



第254図－２　ＳＫ－Ｅ４－101底面出土遺物

良好である。回転復元して完形となる。復元口径11.0cmで，既述諸例の類似「規格」器種である。5（同）は，土師質土器坏である。底部の詳細を除き回転復元できる。10.6cmという口径は上記諸例の範疇であるが，器形・調整等は異なる。6（同）は，土師質土器小皿である。回転復元で完形となる。小皿類の中では唯一既述の諸例を上回り，口径8.0cmを測る例である。

7（同）は，瓦器鉢片口部である。小部分で，且つ摩耗もあり詳細は明確にできない。

8（同）は，須恵器甕口縁及び肩部である。復元口径は56.0cmである。胎土・調整・焼成等の特徴は第253図－13に酷似する。図上復元ではこれと口径差があるが，同一個体の可能性が高いと考えられる。

第254図－21（ＳＫ－Ｅ４－101底面）は，須恵器坏である。完形に復元できる。復元口径は13.5cm，底径7.8cm，器高3.7cmである。内外面とも回転ナデ，底部ヘラ切り・板目圧痕。内面口縁寄りの１～２cm幅と外面全体に還元色（灰Ｎ３/～Ｎ６/）を呈する。焼成良好・堅緻である。2（同）は，須恵器坏である。完形に復元できる。復元口径15.2cm，底径7.2cm，器高3.6cmである。調整は１に類似。内面のほぼ全域と外面上半部に還元色（灰Ｎ３/～Ｎ６/）がみられる。焼成良好・堅緻。

近世以降の遺構・遺物

遺　構

Ｅ１区

東西又は南北に方位をとって概ね直交した位置関係を示す溝遺構が，ほぼ全域に分布する。給水よりむしろ排水を主眼におくとみられる暗渠である。この傾向はＥ２区にも共通する。遺物から，近世・近代のものと分かる。概して近世末以降のものは土管を埋設し東西方向に敷設する傾向がみられる。ＳＤ－Ｅ１－107，108，109，116等である。土管形式のものよりは先行するＳＤ－Ｅ１－114は同じく近世末に属するとみられるが，南北方向をとって充填材には炭化した籾殻を用いている。これら以前とみられるものはＳＤ－Ｅ１－111，116等のように幅・深さがやや大ぶりで小児頭大までに至る亜円礫，亜角礫を詰めるものが目立つ。

ＳＫ－Ｅ１－102，103は，ＪＲ予讃線線路沿いに建てた旧国鉄時代通信線電柱（現在は廃棄）控え支線用重石の埋設孔跡である。

Ｅ２区

礫詰めの暗渠排水溝が特徴的である。溝の掘方内部は拳大前後の円・亜円礫を主体に瓦・土製品破片が混入した充填材で満たされ，現耕作土層直下の面を掘削している。出土遺物には，近代以降のものはみえない。ＳＤ－Ｅ２－101，102がこの面の遺構である。これと同一の方位をとりながら薄い層厚の堆積を挟む下位の面で，浅くて偏平な断面を見せて前２者よりは一定期間先行する一群が敷設されている。ＳＤ－Ｅ２－103，104，105，106，107，108，109，110である。このうちＳＤ－Ｅ２－107が礫詰めである。総じて，湿潤な耕地の排水を目的とするものと考えられる。

Ｅ３区

第１遺構面には，浅い皿状断面の２条の溝ＳＤ－Ｅ３－101，102が南北方向に平行している。給排水路と考えられるが，境界を画する意味と役割を併せ持つ水路としてその位置が移動したか単なる給排水路として平行・併存したか，2者間の約1.5m幅の部分が道路として機能したか等，各様の可能性が考えられるが，壁面土層では同一面で先後関係不明であり判定できない。図化できる遺物はないが，近世後葉以降のものである。

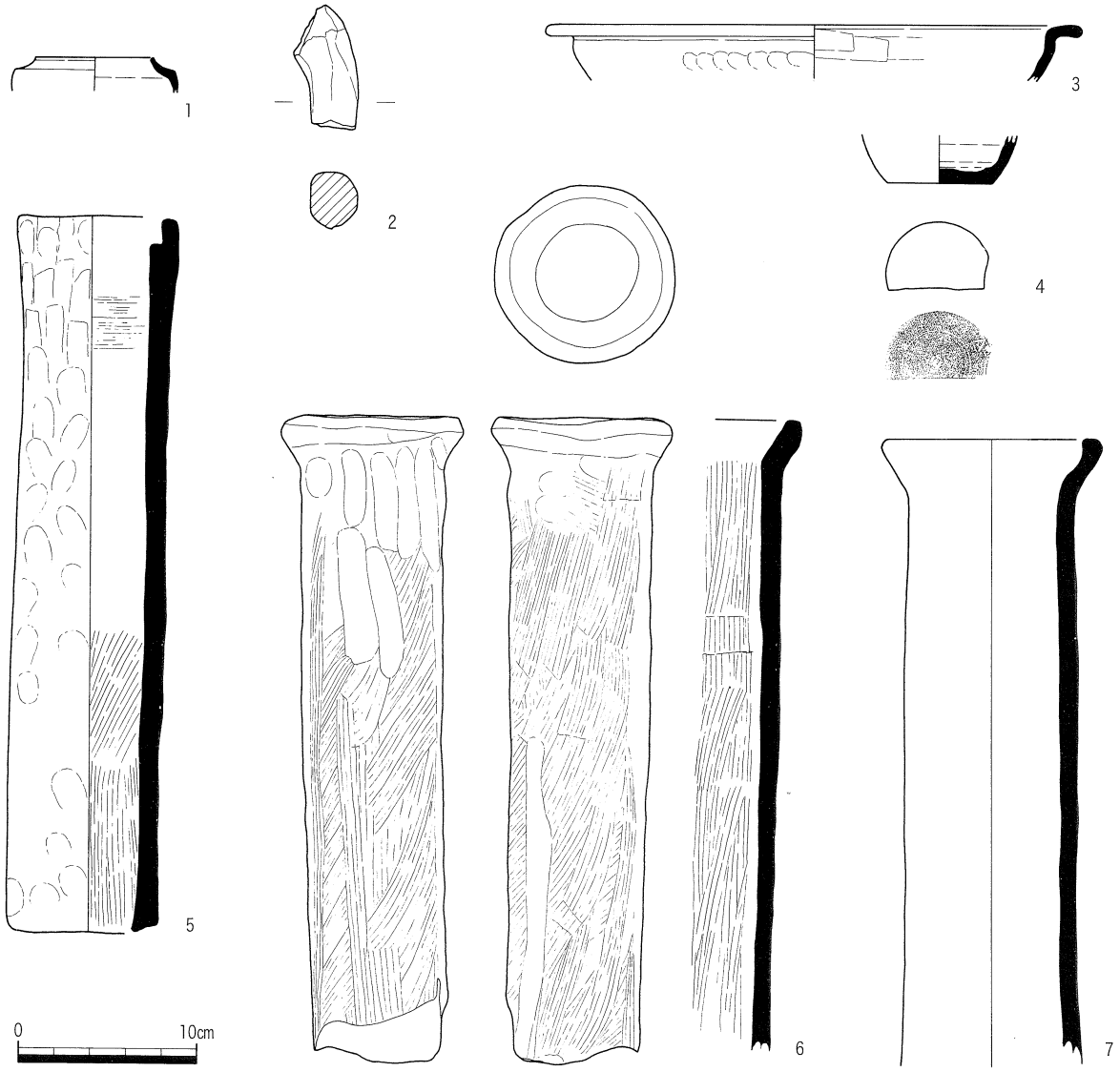
Ｅ４区

ＳＫ－Ｅ４－103は，旧国鉄通信線電柱の支線控え用に，枕木状の木材を埋設したものである。

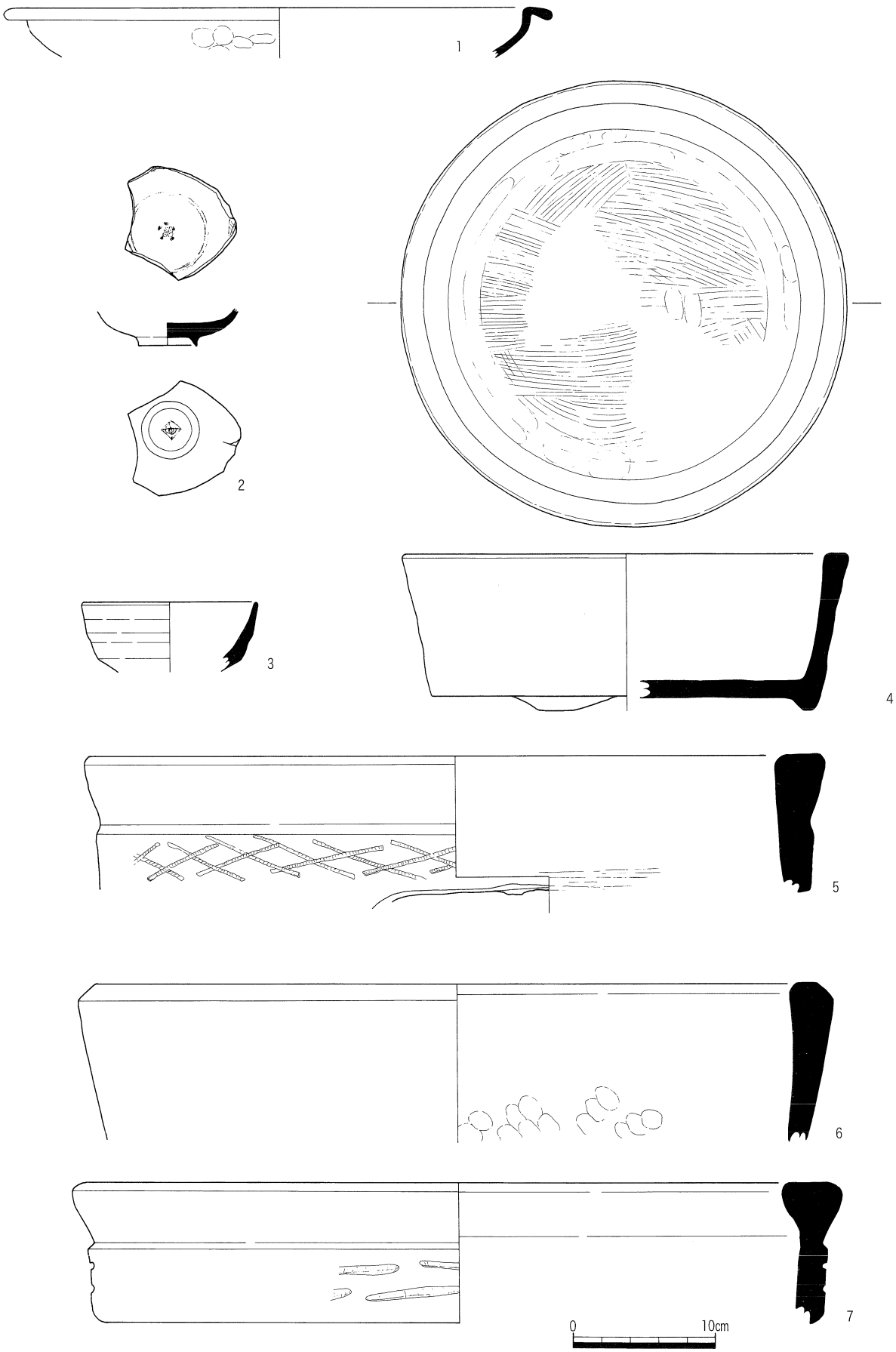
遺　物

Ｅ１区

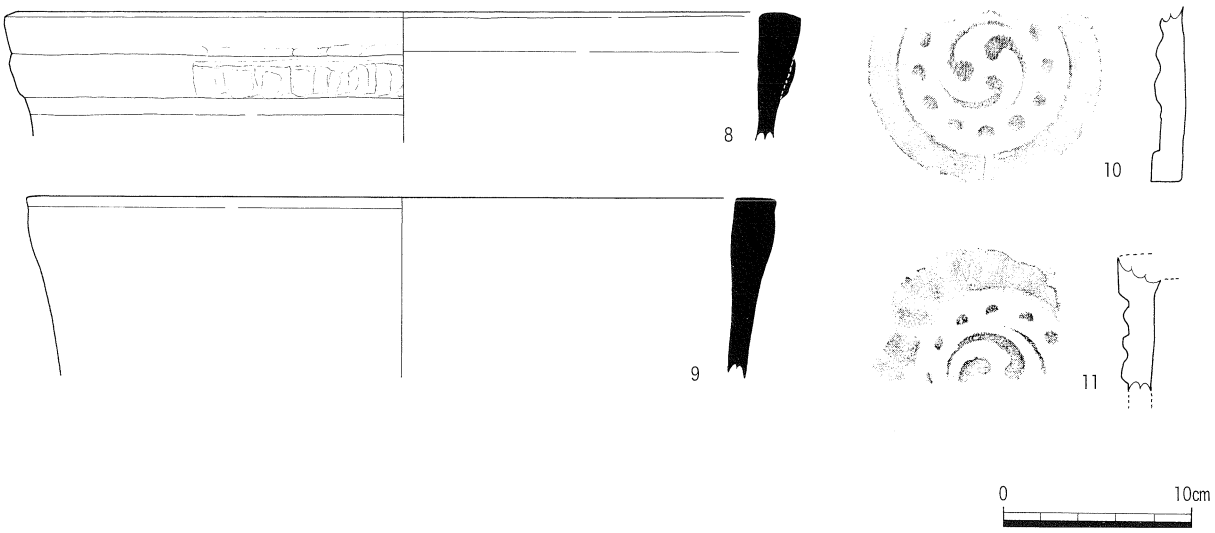
第255図１（ＳＤ－Ｅ１－108）は，陶製茶入れ口縁である。口径6.4cm，胴部残存径9.3cm。無光沢の釉は暗赤褐（５YR ３/４）。２（ＳＤ－Ｅ１－101）は，土師質土器鍋脚部である。３（ＳＤ－Ｅ１－103）は，瓦質炮烙口縁である。復元口径28.0cmである。焼成良・堅緻である。４（同）は，備前徳利底部である。底径5.8cmである。底面に「ヤマ上」の窯印を陰刻。５（同）は，土製土管である。完形である。管内部断面形は正円形である。成形は端部雌型部分を形成する母型を造り出した円筒形木型に，管長×外周の長方形ハケ目粘土板をやや捩じり気味に捲付け，掌・指頭で圧着・整形後に，木型を引抜いたと考えられる。６（同）は，土製土管である。完形である。５に比して古相と考えられる。成形は表裏ともハケ目顕著な長方形粘土板を曲げ，内径よりもかなり小さい棒状当具を内部の合せ目を中心にして当て，外部の合せ目を指ナデ，その周辺と反対側器表を再度ハケ目で整える。雌端部は指で広げヘラ状工具でラッパ形に削る。管の断面は不整円形。７（ＳＤ－Ｅ１－109）は，土製土管である。雌側端部を残す。近代のもの。



第255図　ＳＤ－Ｅ１－101～109出土遺物



第256図　ＳＤ－Ｅ２－102出土遺物



第257図　ＳＤ－Ｅ２－102．102－２出土遺物

Ｅ２区

第256図１（ＳＤ－Ｅ２－102）は，瓦質炮烙の口縁である。第255図３に胎土・調整・焼成とも近似。

２（同）は，肥前青磁染付皿である。見込み中心部に五弁花，高台内銘款は崩れた「渦福」である。

３（同）は，土師質土器坏口縁である。器壁が非常に厚く，或いは椀とすべきか。

４（同）は，土製浅鉢である。無文，三足でほぼ完形である。火鉢とすべきであろう。

５（同）は，環状土製品口縁片である。５下部中ほどの「切欠き」は，残存長のみでも25cmを測る。口縁端部から下方５cm幅には煤が付着する。「切欠き」部を焚口とする竈の上端部分とみてよかろう。

６（同）は，環状土製品口縁部である。無文である。円形竈の上端部分か。

７（同）は，土製大形甕口縁である。

第257図８（ＳＤ－Ｅ２－102）と，９（同）は，土製甕口縁である。凸帯の有無等相異あるが同一遺構出土。

10（ＳＤ－Ｅ２－102－２）は，左捲三巴文軒丸瓦である。12個（推定）の珠文帯を持つ。下記11と同一遺構からの出土である。11（同）は，右捲三巴文軒丸瓦である。６個以上の珠文帯を持つ。

包含層の遺物

Ｅ１区１面

第258図１は，弥生土器壺底部である。復元底径は10.6cm。胎土に３㎜以下の石英・長石及び少量の角閃石を含む。摩耗して調整は不明。

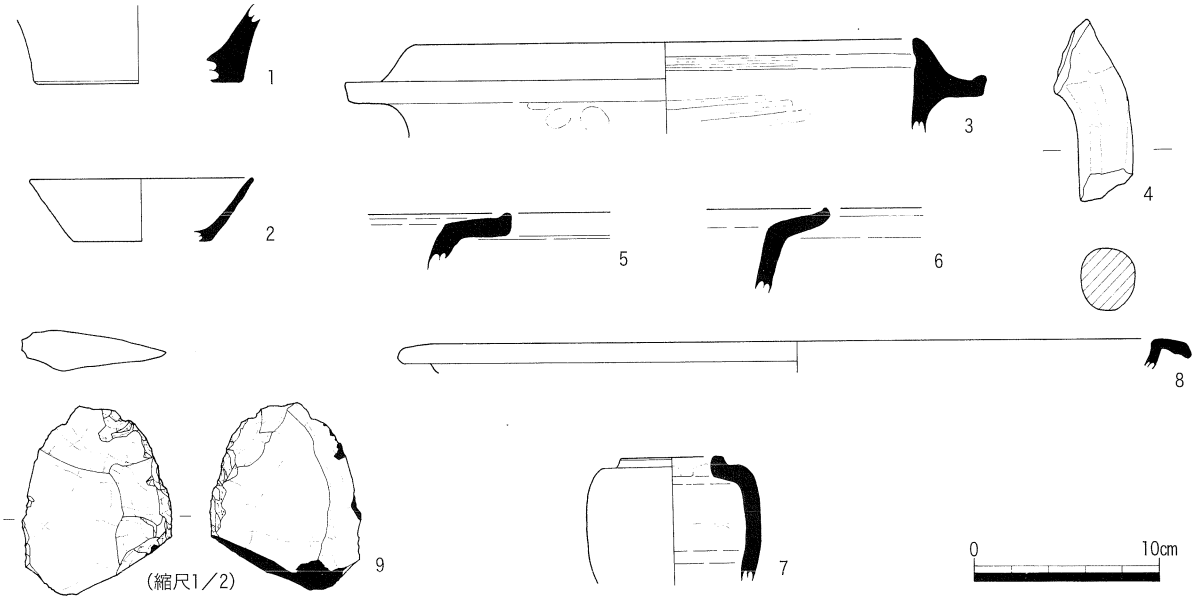
２は，須恵器坏である。回転復元で完形となる。復元口径12.0cm，同底径7.4cm，器高3.3cmである。さして摩耗はみられず，焼成良好・堅緻。緑灰（10Y ６/）の器表に灰（Ｎ５/）の「火襷」を生じている。

３は，土師質土器羽釜口縁である。鍔基部で器壁が顕著に肥大して極めて分厚い口縁をつくり水平に伸びた鍔を端部で上方へ約５㎜抓みあげる。例の少ない器形である。４は，土師質土器羽釜脚部である。硬い工具によるナデを施す。５は，土師質土器甕口縁である。僅かに上向いて外方に張り出した口縁は，上下に引き出し気味に端部を処理する。６は，土師質土器甕口縁である。口縁は，下端部を丸め上部に引き出し気味にして終っている。

７は，備前茶入れである。底部を欠く。口径5.4cm，胴部最大復元径9.3cmである。

8は，瓦質炮烙口縁である。復元口径は38.6cmである。内・外面ともナデ。胎土は精選，焼成良好。

9は，サヌカイト打製刃器である。一部欠損。刃部，側縁部に摩耗がある。



第258図　Ｅ１区１面包含層出土遺物

Ｅ１区２面

第259図１は，須恵器坏蓋小片である。摩耗があり「かえり」はかなり退化していると考えられる。

２は，須恵器坏蓋である。復元口径は16.2cmとなる。つまみの有無は確認できない。胎土密である。

３は，須恵器坏底部である。底面は回転ヘラ切りの後，貼り付け・回転ナデによる断面逆台形の高台を端正に造り出す。胎土密，焼成良好である。

４は，須恵器坏底部である。器形，調整等３に近似。胎土密である。焼成はやや低火度で軟質である。

５は，須恵器坏底部片である。復元底径は10.4cm。高台はない。胎土密。やや軟質ながら焼成良。

６は，須恵質坏底部である。復元底径は12.0cmである。調整では５に類似するが，胎土やや粗で１㎜以内の石英・長石を含み，焼成低火度で軟質である。

７は，土師質土器坏口縁小片である。器壁は厚く，推定口径は10数cmの大ぶりなものであろう。胎土には石英・長石粒を多量に含む。

８は，土師質土器甕口縁である。復元口径24.6cm。内外面ともナデ。口縁端上部を僅かに抓上げ。

９は，土師質土器甕口縁である。やや薄手の器壁であるが８に近い様相で，復元口径24.6cmである。

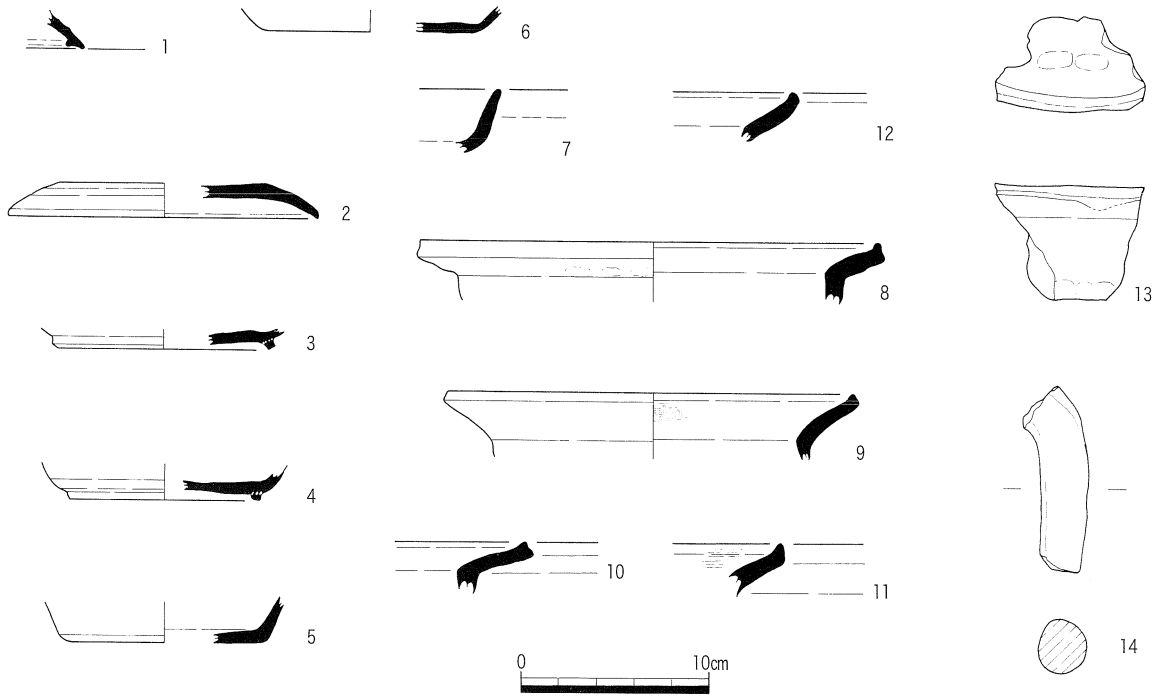
10は，土師質土器甕口縁小片である。8，9等と近似の一群に属する。口径はやや上回るか。

11は，土師質土器甕口縁である。上述諸例に類似する。

12は，土師質土器甕口縁である。上述の諸例類似する。

13は，器種不明の土師質土器片である。口縁部に不均一な弯曲がみられ，或いは器高の低い鉢状土器の片口部分でないかとも考えられる。径３㎜以内の石英・長石を多量に含む胎土で焼成良好，堅緻。

14は，土師質土器鍋脚部である。



第259図　Ｅ１区２面包含層出土遺物

Ｅ２区１面

第260図１は，須恵器甕口縁である。器形，胎土，調整，焼成等は，第253図－１　3，第254図－１8と殆ど差異はなく，口縁の玉縁が僅かに偏平で頸部高がやや低い。工房を同じくするか。

２は，須恵質甕口縁である。口縁は体部から立上って頸部に当る部分は殆ど形成せず外上方にのびて，やや外反し厚みを減じながら伸張方向と直角に切断して端面をつくる。器表には顕著な叩き目を施す。

３は，備前壺底部である。復元底径は13cmである。

４は，土師質土器鍋口縁である。復元口径26.0cm。５は，土師質鍋脚部である。体部接着に意を用いる。６は，土師質鍋脚基部である。

７は，陶質の灯盞式灯火具受皿脚台部である。受皿部は欠失している。脚部は回転ナデ調整，底部は糸切離しである。焼成良く堅緻である。施釉はない。

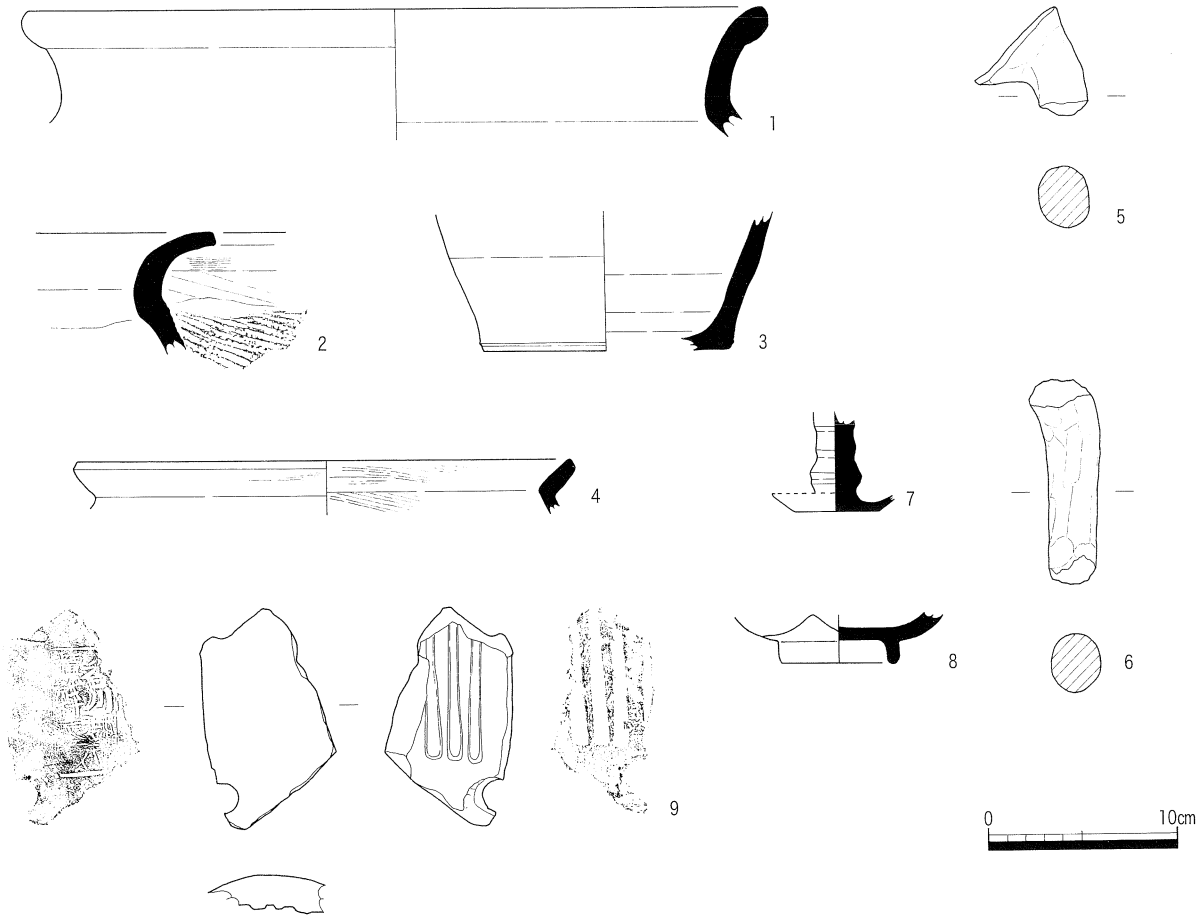
８は，磁器丼底部である。形態・胎土・焼成とも現用品に近い。施文は印刷。近代のものであろう。

９は，丸瓦片である。建物部材との固定用孔（径約1.5cm，間隔９cm）一対がある。外面には刻印が押捺されている（「香川郡檀紙村辰□□」）。

Ｅ２区２面

第261図１は，須恵器坏片である。回転復元して完形となる。調整･焼成等からみて数m離れた隣接調査区第259図３と同一個体の可能性が高い。２は，須恵器片口鉢口縁部である。推定復元口径が20cm未満で器壁も薄く華奢な造りの小型品である。

３は，瓦質甕口縁及び肩部である。外面は約４mm方角の格子目叩きを全面に確実に施す。口縁は体部からほぼ水平にそのまま外反して約４cm幅に形成される。この際屈曲部器表側を指頭で支え内面側からナデ調整を施すので口縁下面と屈曲部の叩き目は殆ど消失する。体部器壁は強いヘラ削りが施されたと考えられ，約５mm厚に調整されている。４は，瓦質甕口縁である。焼成はやや低火度ながら調整等に３との類似が窺われる。口縁は体部から直ちに外上方に屈折して直線的に延びて端部となる。



第260図　Ｅ２区１面包含層出土遺物

５は，土師質土器擂鉢口縁である。櫛描条溝は４条。焼成が低火度のためか内面の摩耗･剥落が目立つ。

６は，瓦質擂鉢口縁である。条溝は３。焼成良好・堅緻で器表は確実な燻し加工で保全されている。口縁端面の凹凸以外に器形の差は殆ど認めがたい。

７は，内面黒色土器椀底部である。摩耗がみられる小片である。厚さは控え目ながら外側にしっかり踏出す輪高台がつく。復元底径６cmである。

８は，土師質土器羽釜口縁である。摩耗大。鍔の幅は狭く，口縁は内傾し鍔上部に僅かに延びる。

９は，土師質羽釜脚部である。付根下部が底部とほぼ同位置から横に大きく張出してから下に伸す。

Ｅ３区１面

第262図－１１は，青磁坏底部片である。釉は明緑灰（10GY ７/１）に発色。内外面に疎らな貫入がある。器壁立上りは稜をなす。断面が鋭角三角形をなす高台の先端部のみ無釉。底径4.2cm。龍泉窯である。

２は，白磁坏口縁である。明緑灰（7.5GY ８/１）である。３は，青磁皿口縁である。輸入品であろう。

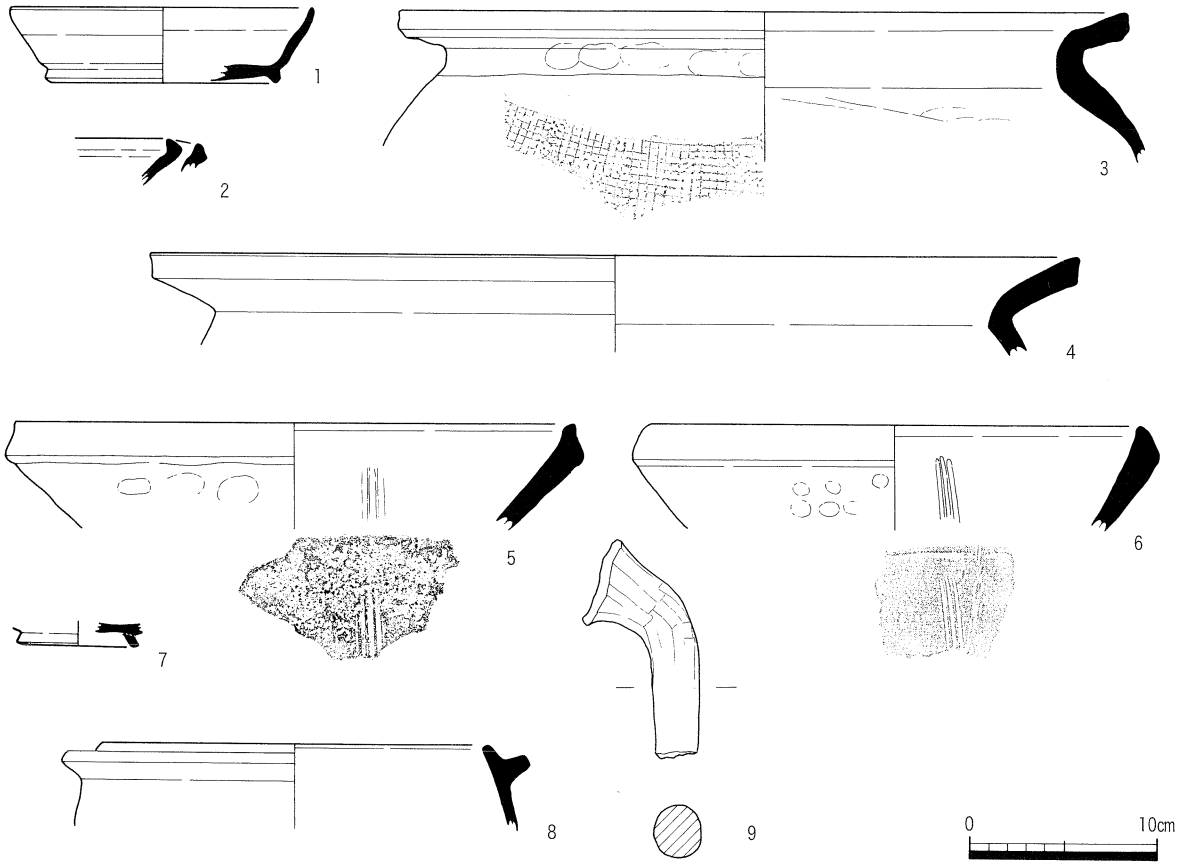
４は，サヌカイト石鏃である。縄文時代のものか。

Ｅ３区２面

第262図－２１は，白磁椀口縁である。明緑灰（7.5GY ８/１）である。仮に椀とするが鋭角に成形された口縁端部は釉を施していない。或いは倒立すべき器形かも知れないが，類例を未確認である。

２は，備前甕口縁である。口縁外縁下部に稜が残るが限りなく玉縁に近いといえる。内外面ともナデ調整である。復元口径35.0cm。口縁周辺は灰（５Ｙ６/１）を呈する。焼成は良好・堅緻である。

３は，土師質土器鍋口縁である。内面ナデ，外面ハケの後ナデ。幅広い口縁は外上方にのびて著しく



第261図　Ｅ２区２面包含層出土遺物

内弯し端部を抓み上げてまとめる。復元口径34.4cm。焼成は良好・堅緻である。

４は，土師質土器小皿口縁である。この種の「規格」品。内面は灯火用油煙ふうの炭化物が顕著。５は，土師質土器小皿口縁である。器壁の傾斜強く浅い器形で内面に炭化物。４と同器種である。

６は，小児下駄である。完形に復元。隅丸長方形の一木造り。小型品の通例として，歯を前後の両端に寄せ，それぞれ先端まで延長している。露地下駄・庭下駄等と呼ばれる形式である。

Ｅ３区３面

第262図－３１は，須恵質鉢口縁である。東播系捏鉢であろう。復元口径24.9cm。

２は，土師質土器羽釜口縁である。鍔は薄く短く形骸化。口縁端へ向け内傾著しい器形。３は，土師質土器羽釜口縁である。口縁がほぼ直立。鍔は形骸化。４は，土師質土器羽釜脚端部である。

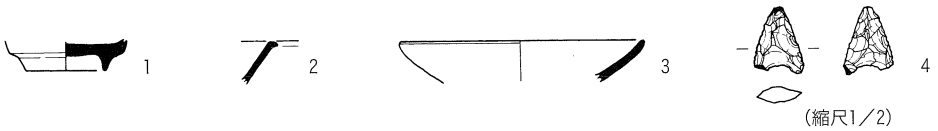
Ｅ３～Ｅ4，Ｅ４区

第262図－４１は，青磁椀口縁である。外面に簡略・象徴化した線描蓮弁文を施す。釉は緑灰（５GY６/１）で貫入が著しい。２は，染付皿口縁である。内面に草文らしい染付施文の一端が残る。線描文様の発色はオリーブ灰（10Y ５/２）で「青花」の紺青色ではない。３は，青磁椀体部片である。釉は明オリーブ灰（５GY ７/１）に発色し，貫入に富む。鎬蓮弁文椀の体部下半部にあたると推定される。

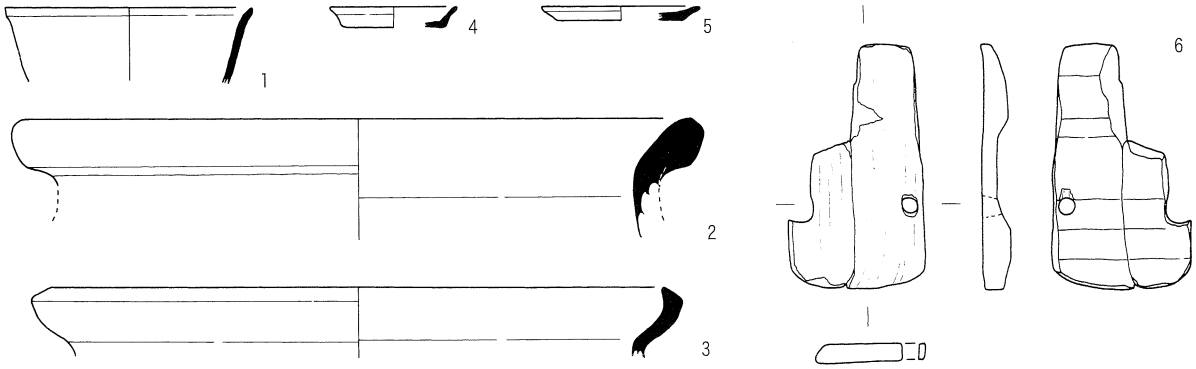
４は，土師質土器甕口縁である。僅かに外傾した器壁が口縁部でやや内傾し端部を斜内方に撫であげ。本調査区で一点のみの器種である。灰白（10YR ８/７）で，焼成良好である。川南・西に類品がみえる。

５，６，７は，ともに土師質土器鍋脚部である。８は，土師質土器羽釜脚部である。

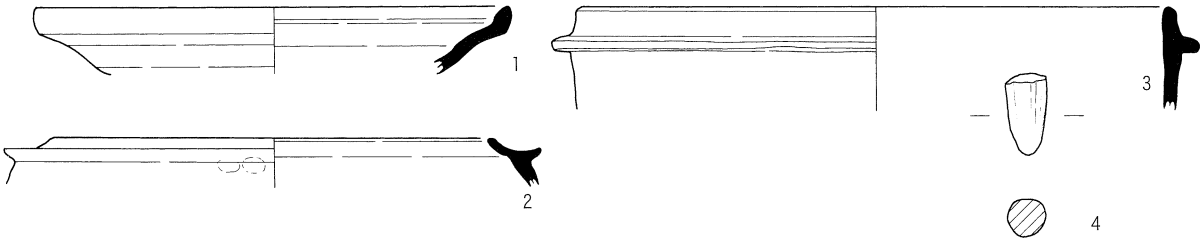
９は，サヌカイト石鏃である。無茎で，長五角形の形態をとる。弥生時代であろう。



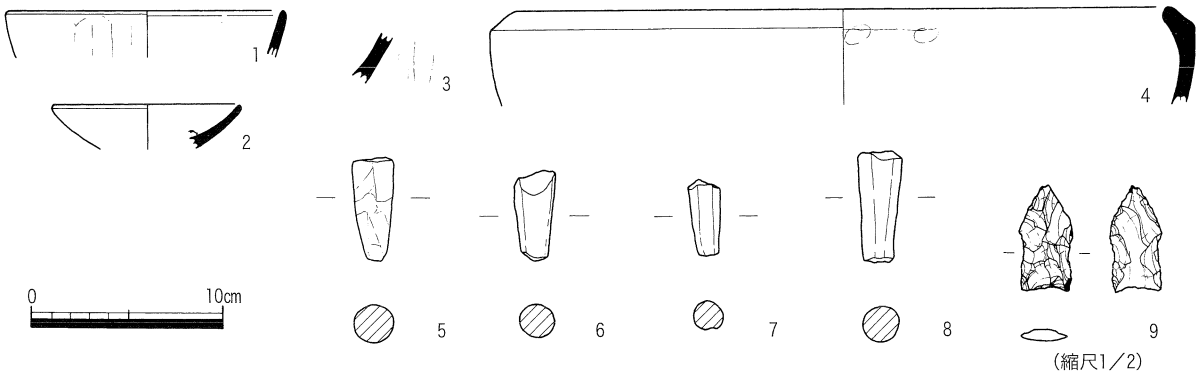
第262図ー1　E 3区1面包含層出土遺物



第262図ー2　E 3区2面包含層出土遺物



第262図ー3　E 3区3面包含層出土遺物



第262図ー4　E 4区包含層出土遺物

第６節　Ｆ調査区

概要

現況と調査区の分割（第270図参照）

Ｆ区は当遺跡では南端部に位置し，条里呼称では香川郡10条17里30坪内に位置する。地図上で示される当地区周辺部は現地表面の標高およそ9.5～10m，現況は宅地，水田や畑の耕作地として利用されている。

Ｆ区はコンクリート畦畔等により２分割される。調査時においては調査範囲を北側を１－Ｎ区，南側１－Ｓ区をして調査を行ったが，本報告にあたりＦ1，2区に再編した。

調査期間

Ｆ２区は高松港頭地区再開発関連事業に伴う当遺跡及び香西南西打遺跡の試掘調査と平行し，平成８年12月11日～平成９年３月31日迄，Ｆ１区はＢ４区と調査を平行し平成10年５月25日～平成10年７月６日迄で行った。

調査の工程

調査は平成８年度に行った試掘により得られたデータを基に，概ね遺構面の上面までを重機により掘削しその後遺構の検出及び掘削を人力により行った。遺構等の測量は本体工事の測量図等を基準に，調査員及び補助員が測量を行った。

主な遺構（第270図参照）

Ｆ１区は近世・近代の遺構が中心であり掘立柱建物跡１棟（ＳＢ－Ｆ１－01），香川郡10条17里30・31坪界溝跡，暗渠排水溝等を検出した他，同時期と考えられるピット，土抗が多数見られた。

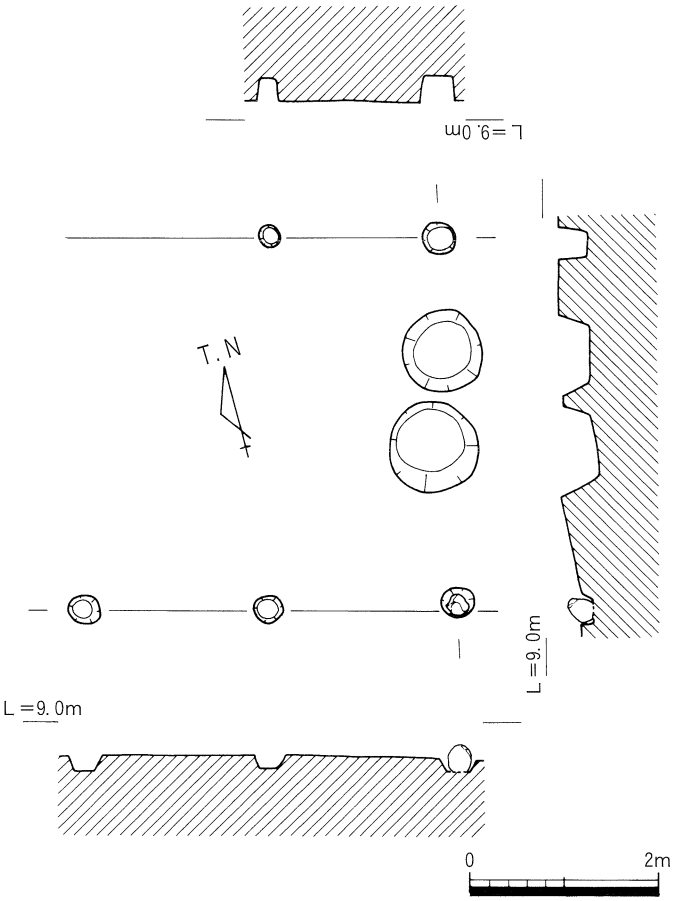
Ｆ２区は微高地上に位置し，掘立柱建物跡とも考えられるＳＡ－Ｆ２－01や堅固に段掘りがなされたＳＤ－Ｆ２－04，05が確認された他，東西条里方向の溝跡が多数検出されている。これらＦ２区検出の遺構は概ね中世に比定されるが，遺物が希少でまた調査範囲の制限もあり詳細は不明である。

堆積状況（第271，272図参照）

Ｆ区は北半が低地となっており，遺構検出面の下位には西から東へ下る自然流路が想定される。Ｆ１区北部に堆積する黒褐色砂層等には流入品と考えられる弥生土器片が見られた。Ｆ1，2区の遺構検出面はほぼ洪水層と考えられる砂礫混じりシルト層上面であり，Ｆ１区においては遺構検出面より下位の堆積層が凹凸をなし複雑な層位となっている。旧耕作土面ではＦ1，2区を境に約0.5mの段差が認められ，Ｆ１区では現況の樹木畑のため厚い盛土がなされている。

ＳＢ－Ｆ１－01

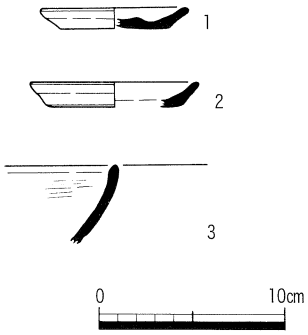
Ｆ１区中央部に検出された掘立柱建物跡である。調査区が幅狭いために東西の柱穴数が確定せず，建物全体の規模は不明である。確認できた範囲では１×２間分である。柱穴間の距離は東西方向で1.78～２ｍ，南北方向で3.88ｍを測る。柱穴は径約0.25～0.35ｍのほぼ円形で，根石が敷かれたものがある。主軸方位はＮ－13°－Ｅを示し，条里方向にほぼ合致するものである。また東面の柱穴はほぼライン上に径0.8～１ｍの土坑が２基並ぶ。掘削の深度や埋土が類似するが，建物との関連は不明である。柱穴より出土した遺物には，中世と考えられる皿が出土しているが遺構検出時に瓦片，陶磁器片が見られたこと等から所属時期は近世以降と考えられる。



第263図　ＳＢ－Ｆ１－01平・断面図（１/80）

ＳＢ－Ｆ１－01出土遺物

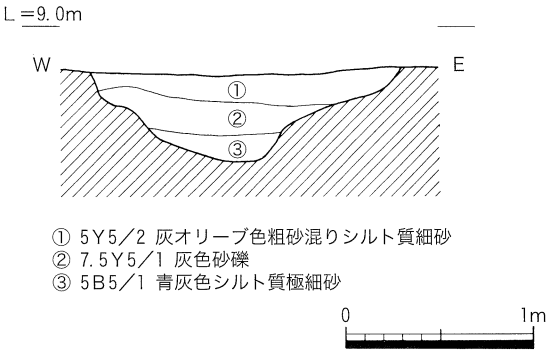
1，2は土師質土器皿である。外反する短い口縁部をもつもので，口径からは12～13世紀の年代が考えられる。３は土師質土器の口縁部。器種は不明だが胎土及び焼成からすれば，近世の所産と考えられる。



第264図　ＳＢ－Ｆ１－01出土遺物

ＳＫ－Ｆ１－01

Ｆ１区北部で検出した土坑である。平面の形状はやや不定形な隅丸方形で，長軸方向に約２ｍ，短軸方向に約1.7ｍを測る。深さは約4.5ｍである。断面は逆台形をし，段が見られる。埋土は３層に分割でき，概ね上層に砂礫層が，下層部にグライ化したシルト質極細砂層が堆積する。土坑とした



第265図　ＳＫ－Ｆ１－01

が，ＳＤ－Ｆ１－01の南端部に位置することや現在も近接して井戸が存在することから，現存する井戸がＳＫ－Ｆ１－01より移し替えられた可能性が考えられる。所属時期は染め付け等の磁器片が見られたことから近世以降と考えられる。

ＳＤ－Ｆ１－01（第271図土層図参照）

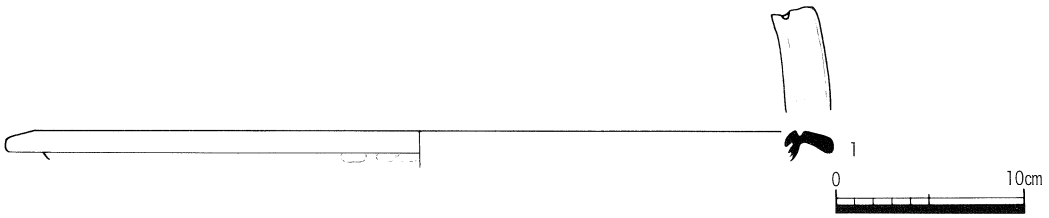
Ｆ１北端で検出された東西方向の溝跡である。香川郡10条17里29・32坪界にあたる現有道路に沿って検出されたもの。検出延長は約４ｍ，検出幅は最大1.2ｍを測るが，北側の上端部が調査区外となり未検出である。断面は南側上端部及び底面からすれば，逆台形状をなすものと思われる。旧耕作土直下から掘削が認められることから，近代以降まで使用されたと考えられる。埋土は陶磁器片等を含む近世の堆積物で充鎮されていた。

ＳＤ－Ｆ１－02

Ｆ１区西端において検出された溝跡である。ＳＢ－Ｆ１－01南面付近より発するもので，検出レベルは標高8.72～8.82ｍ，底面のレベルは標高8.50～8.76ｍを測り南に下るが，西へ屈曲する箇所から急激に底面が下がり，西端においては土坑状となる。方位はほぼ条里方向を示す。検出幅約0.3～0.85ｍで断面はＵ字形をなすが，南半において段掘り状となっている。埋土は暗灰黄色（2.5YR ５/２）砂混じりシルト質極細砂の単層である。所属時期は出土遺物より18世紀後半～19世紀前半と考えられる。

ＳＤ－Ｆ１－02出土遺物

１は焙烙である。内耳の穴が貫通していないことから，佐藤編年のｂ形式に該当し18世紀後半～19世紀前半の所産と考えられる。



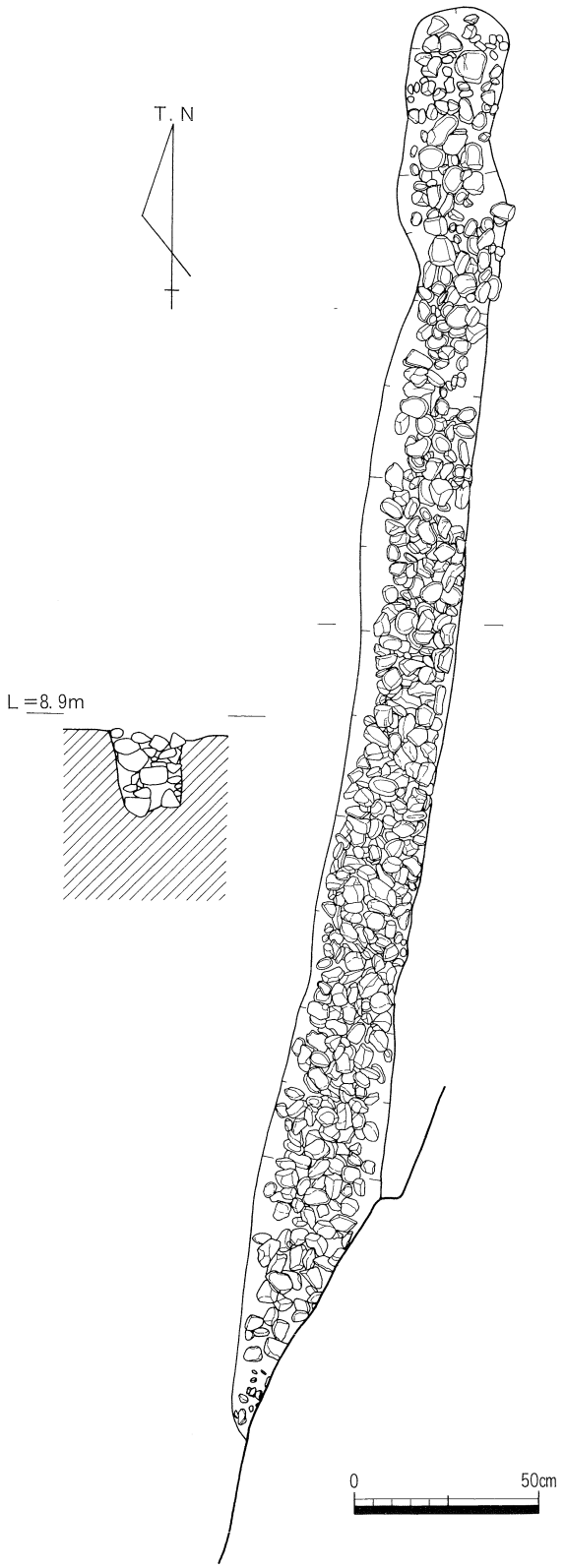
第266図　ＳＤ－Ｆ１－02出土遺物

ＳＤ－Ｆ１－03

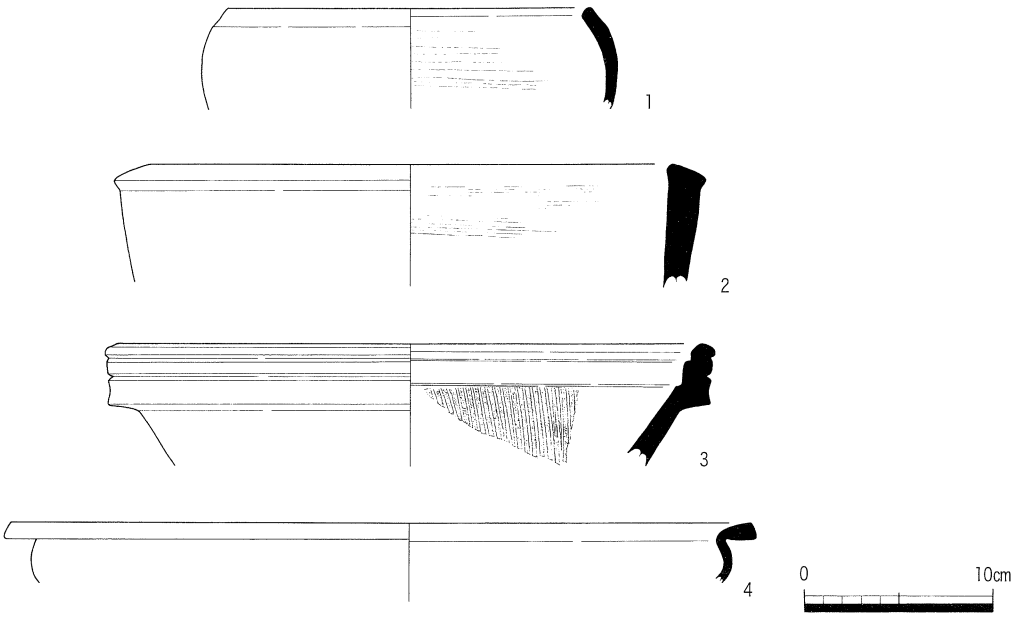
Ｆ１西端区において検出された暗渠排水の溝跡である。掘削溝の内部に石組がされたもので，石積みされた上端部のレベルからすれば，南方向に下るものと考えられる。調査区中央部において途切れるが，ＳＤ－Ｆ１－02の南端部で土坑状となる箇所まで石が散在しており，東へほぼ直角に屈曲していたものと推察される。出土遺物より18世紀後半～19世紀初頭と考えられる。

ＳＤ－Ｆ１－03出土遺物

1，2は器種不明の土師質土器口縁部。羽釜，火鉢等と考えられる。３は備前系陶器擂鉢。18世紀後半～19世紀初頭のものである。４は焙烙である。



第267図　ＳＤ－Ｆ１－03平・断面図（１/20）



第268図　ＳＤ－Ｆ１－03出土遺物

ＳＤ－Ｆ１－04，05

Ｆ１区中央部において並走して検出された溝状の遺構である。幅15～25cm，深さが５cm程で，方位はＮ－10°－Ｅ前後を示す。埋土は灰黄褐色（10YR ５/２）砂混じりシルトの単層で，切り合い関係においてＳＤ－Ｆ１－03に先行する。鋤溝等の耕作痕に考えられるが，位置関係から幅0.5m程の道の可能性も考えられる。周辺の遺構・遺物及び埋土の特色から近世の所産と考えられる。

ＳＤ－Ｆ１－06（第271図土層図参照）

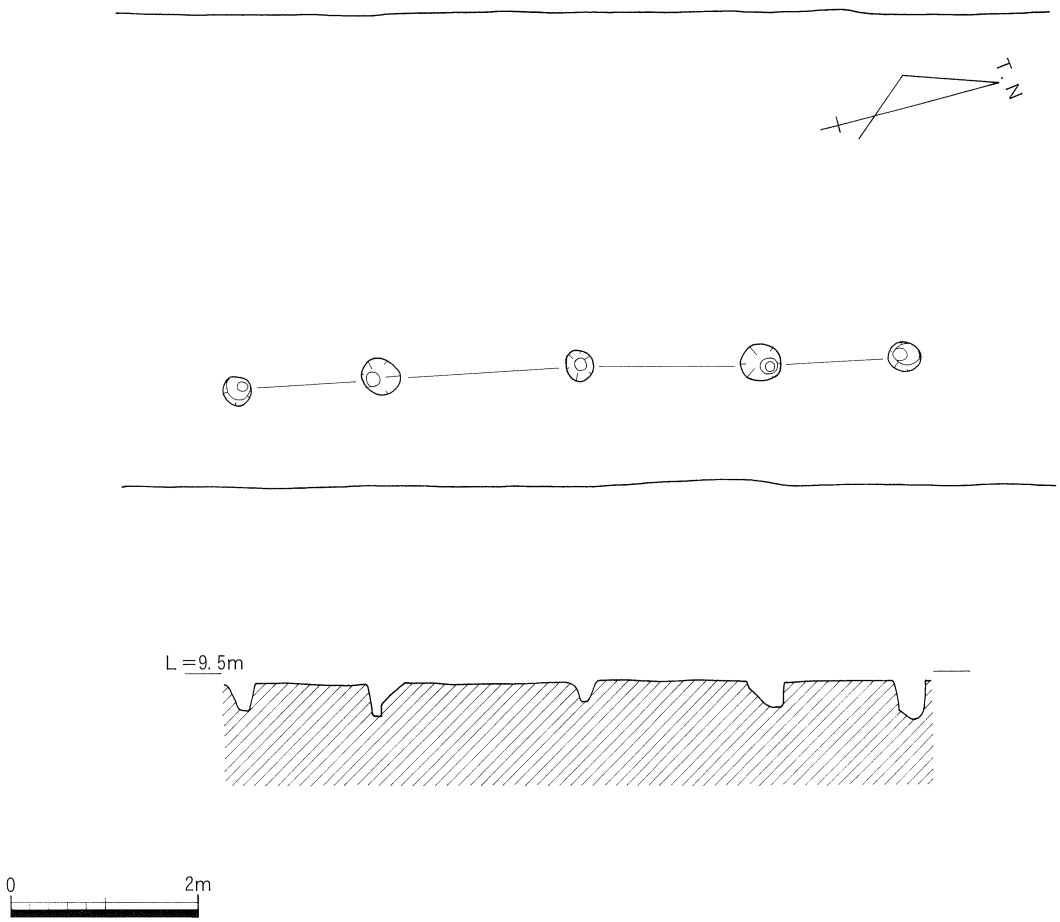
Ｆ１区南端部において検出された東西方向の溝跡である。検出レベルは標高8.82～8.90m，底面のレベルは標高8.75m前後を測る。方位はＥ－７°－Ｓを示し，条里方向に合致する。検出幅約0.3mで，断面はＵ字形をなす。埋土は黒褐色（10YR ３/２）シルト質極細砂の単層で，また切り合い関係においてはＳＤ－Ｆ１－05に先行する。出土遺物はない。所属時期は，周辺に古代の遺構・遺物が見られないことや埋土の特色が近世以降のものと異なることから中世の所産と考えられる。

Ｆ１区ピット及び土坑群

Ｆ１区で検出されたピット及び土坑群を概括する。出土遺物及び埋土の特徴からすれば，所属時期の大半が近世･近代と考えられる。ピットは調査範囲の制限等のため建物跡に復原できなった。土坑は石，礫層が堆積する大型のものが多く見られた。

ＳＡ－Ｆ２－01

Ｆ２区南半部で検出した柵列状の遺構である。４間分に相当する掘立柱建物の西面とも考えられるが，調査区に制限され東の柱穴が未検出であることから，柵列状の遺構とした。柱穴間の距離は南北の両端が1.38mと狭く，中央の２間分は2.06～2.22mを測る。柱穴はほぼ円形で，深さは約25～42cmを測り，真中のものが浅くなっている。遺物は出土していない。所属時期は堆積関係及び周辺部の様相から中世の所産と考えられる。



第269図　ＳＡ－Ｆ２－01平・断面図（１/80）

ＳＤ－Ｆ２－01（第272図土層図参照）

Ｆ２区北端部において検出された溝跡である。検出レベルは標高9.45～9.51m，底面のレベルは標高9.28～9.40mを測る。方位はＥ－11°－Ｓを示し，条里方向に合致する。検出幅約0.3～0.5mで，断面はＵ字形をなす。埋土は黒褐色（10YR ３/１）礫混じりシルトの単層である。時期の特定できる遺物は出土しなかった。埋土及び周辺部の様相から中世の所産と考えられる。

ＳＤ－Ｆ２－02（第272図土層図参照）

Ｆ２区北部において検出された溝跡である。検出レベルは標高9.45m前後，底面のレベルは標高9.31～9.36mを測る。方位はＥ－６°－Ｓを示し，条里方向に合致する。検出幅約0.45～0.65mで，断面は船底形をなす。埋土は黒褐色（10YR ３/２）礫混じりシルトの単層である。時期の特定できる遺物は出土しなかった。埋土及び周辺部の様相から中世の所産と考えられる。

ＳＤ－Ｆ２－03（第272図土層図参照）

Ｆ２区北部において検出された溝跡である。検出レベルは標高9.44m前後，底面のレベルは標高9.39～9.41mを測る。方位はＥ－10°－Ｓを示し，条里方向に合致する。検出幅約0.15～0.25mで，断面はＵ時形をなす。埋土は褐灰色シルト（10YR 4／1）の単層である。時期の特定できる遺物は出土しなかった。埋土及び周辺部の様相から中世の所産と考えられる。

ＳＤ－Ｆ２－04（第272図土層図参照）

Ｆ２区中央部において検出された溝跡である。検出レベルは標高9.37～9.42前後，底面のレベルは標高9.07～9.10mを測る。方位はＥ－３°－Ｓを示す。検出幅約0.55～1.5mで，断面は逆台形状をなすものだが，西半については南側へ幅が広くなり段掘りとなる。埋土は黒褐色（10YR 3／1）礫混じりシルトの単層である。時期の特定できる遺物は出土しなかった。埋土及び周辺部の様相から中世の所産と考えられる。

ＳＤ－Ｆ２－05（第272図土層図参照）

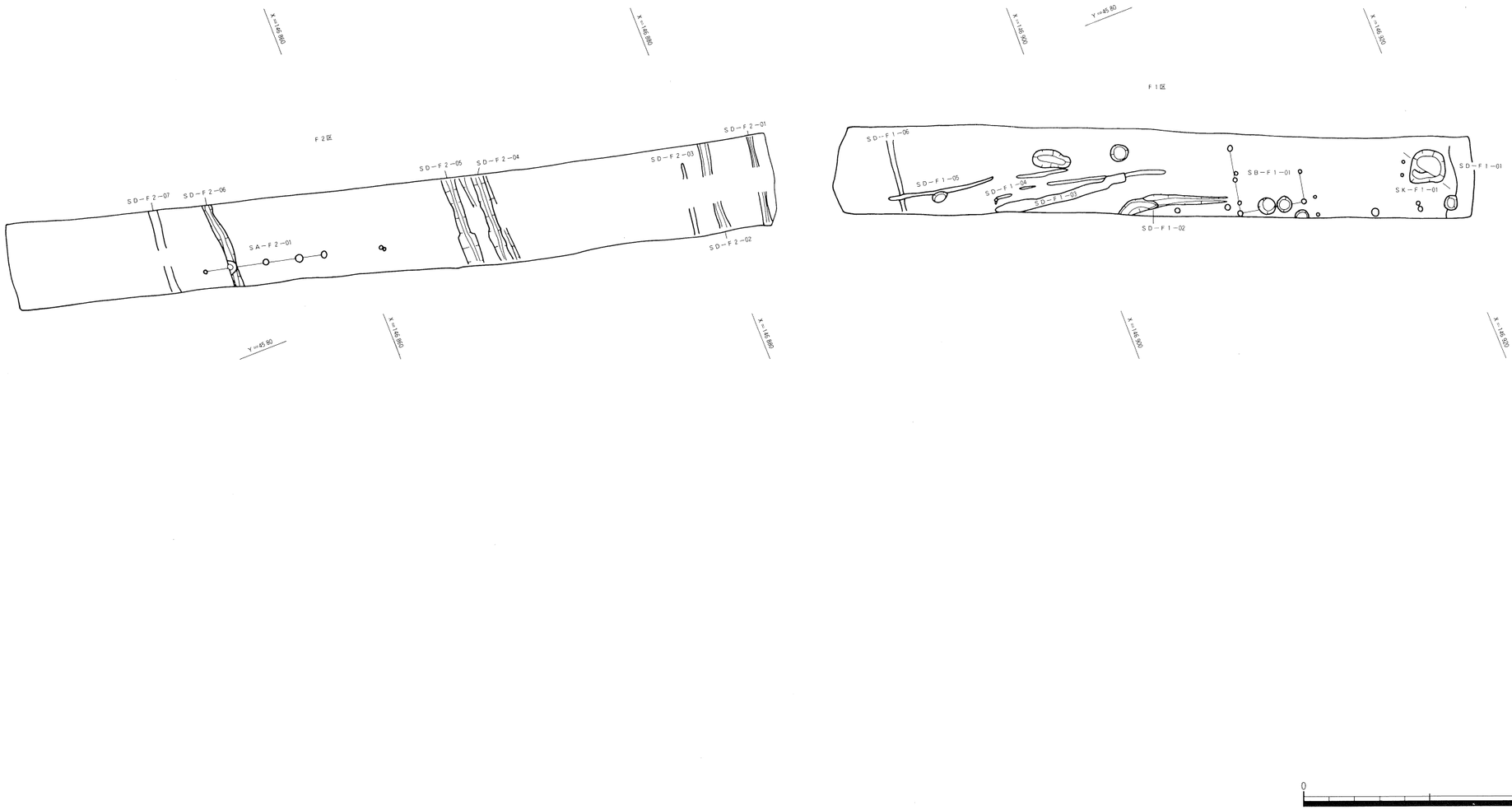
Ｆ２区中央部においてＳＤ－Ｆ２－04と並走して検出された溝跡である。検出レベルは標高9.37～9.42前後，底面のレベルは標高9.04～9.13mを測る。方位はＥ－２°－Ｓを示す。検出幅約0.6～1.05mで，断面は逆台形状をなす。埋土は黒褐色（10YR 3／1）礫混じりシルトの単層で，北側の上端部はＳＤ－Ｆ２－04に繋がる。時期の特定できる遺物は出土しなかった。埋土及び周辺部の様相から中世の所産と考えられる。

ＳＤ－Ｆ２－06（第272図土層図参照）

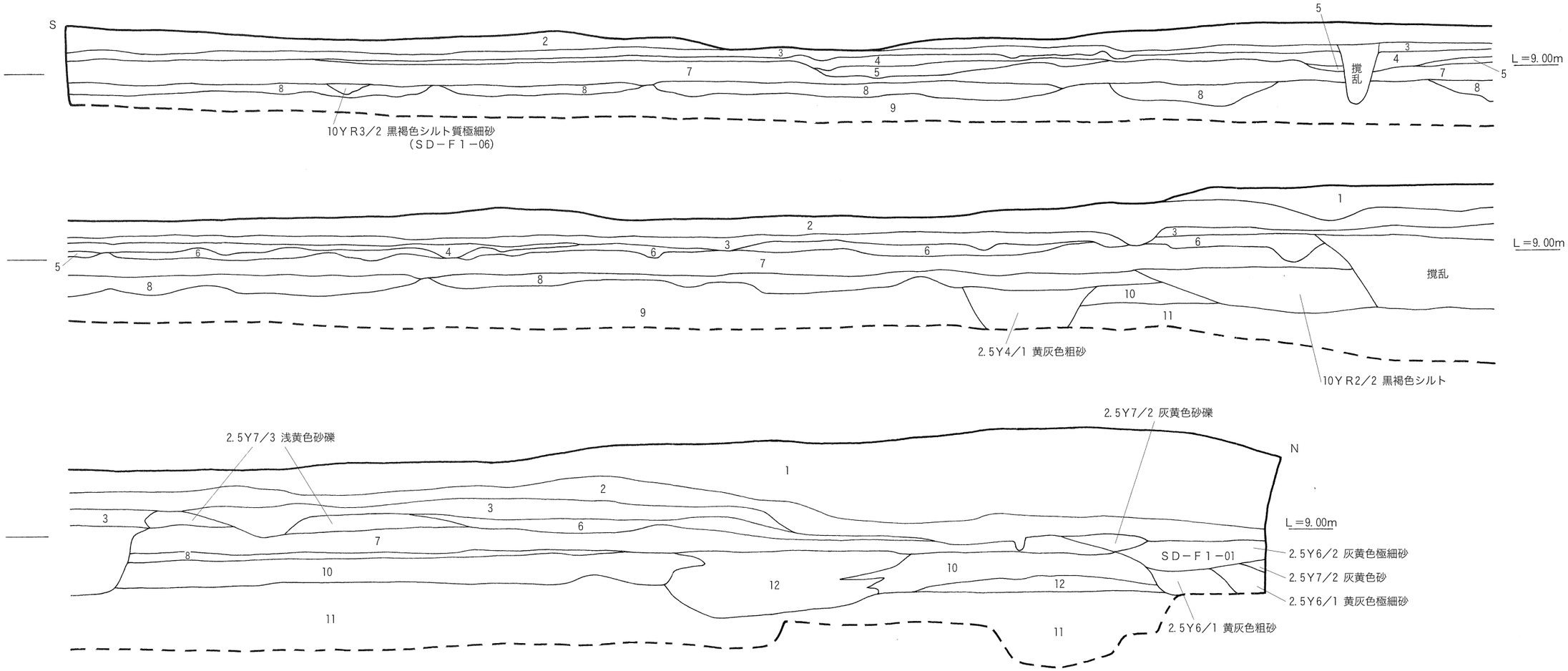
Ｆ２区南部において検出された溝跡である。検出レベルは標高9.37～9.44m，底面のレベルは標高9.18～9.27mを測る。方位はＥ－１°－Ｓを示す。検出幅約0.36～0.55mで，断面は逆台形状をなす。埋土は灰黄褐色（10YR 4／2）～褐色（10YR 4／4）礫混りシルトの堆積が見られる。ＳＡ－Ｆ２－01に切り合い関係で先行するが，時期の特定できる遺物は出土しなかった。埋土及び周辺部の様相から中世の所産と考えられる。

ＳＤ－Ｆ２－07（第272図土層図参照）

Ｆ２区南部において検出された溝跡である。検出レベルは標高9.42～9.49m，底面のレベルは標高9.33～9.36mを測る。方位はＥ－９°－Ｓを示し，条里方向に合致する。検出幅約0.4～0.5mで，断面はＵ字形をなす。埋土は上層部に黄灰色（2.5Y 6／1）砂礫が，下層部には黒褐色（10YR 3／2）礫混りシルトの堆積物が見られる。時期の特定できる遺物は出土しなかった。埋土及び周辺部の様相から中世～近世の所産と考えられる。



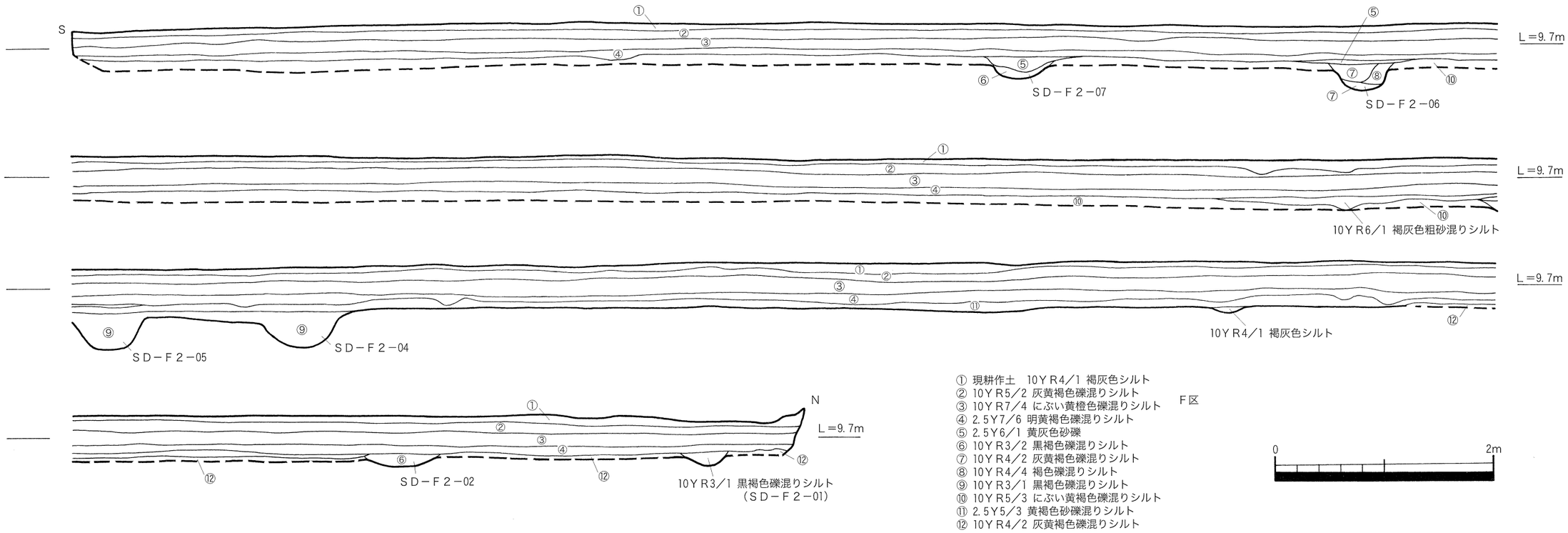
第270図　F区遺構配置図（1/300）



1：花崗岩
2：現耕作土
3：2.5Y5／2 暗灰黄色シルト質極細砂
4：2.5Y6／4 にぶい黄色シルト質極細砂
5：2.5Y6／2 灰黄色砂
6：2.5Y6／3 にぶい黄色極細砂
7：2.5Y6／3 にぶい黄色
8：9YR4／2 灰黄褐色砂礫まじりシルト
9：10YR3／2 黒褐色粗砂まじりシルト
10：2.5Y4／2 暗灰黄シルト質極細砂
11：10YR3／2 黒褐色砂
12：7.5YR6／1 褐灰色粗砂

0　2m

第271図　F1区西壁土層図（1/40）



第272図　F 2 区西壁土層図（1 /40）

第３章　まとめ

第１節　遺構の変遷

≪縄文時代以前≫

本遺跡より北約300mの地点（香西南西打遺跡[1]）では，ＡＴ包含層及び中世堆積物よりまとまって旧石器の出土が見られた。当調査においては旧石器に類する風化したサヌカイト片が僅かに旧河道より出土したのみで，西からの流入品と考えられる（図未掲載）。本遺跡の方がより本津川や西の山麓に発する河川の影響が大きく，調査にあたり地山としたシルト質土或いは砂礫層は新しく沖積された堆積物と推定される。縄文時代では草創期に属する有舌尖頭器が香西南西打遺跡[1]で，前期に所属する遺構・遺物が西打遺跡[2]で確認されているが本遺跡では当該期のものは見られず，晩期中葉に至り土器片がＳＲ－Ａ－01より採取されており，その流域で土坑状の不明遺構も（ＳＸ－Ａ１－01～03）検出されている。また同堆積物については検討を要するものであるが稲のプラント・オパールが一定量検出されたことが指摘されており（第４章参照），後出する弥生時代前期集落を暗示させる。

≪弥生時代・古墳時代≫

前期では遺跡北部となるＡ区で環濠を確認し，その内部において検出されたピット及び土坑等から住居址，掘立柱建物跡を復原した。谷状の地形（ＳＲ－Ｂ－01）を挟むＢ１区微高地上では環濠と並存したと考えられる土坑が多数検出された。環濠外部に位置しながら，細長い楕円形のものが多く墓域等が想起されるが出土品によりその性格を明確にできない。前期以降では空白を生じ，後期末～古墳時代初頭においても遺構・遺物とも希薄で，土器片が出土したＳＤ－Ｂ５－20やＤ区に見られた浅い窪地を確認したのみである。検出状況からは灌漑用水路及び耕作地に類推され香西南西打遺跡[1]で確認された溝跡等と同じ様相を示す。またこのＤ区の窪地埋没後となる古墳時代には断面Ｖ字形を呈するＳＤ－Ｄ１－01（ＳＤ－Ｄ３－01）が開削されており，規模から主要な用水路であったと考えられる。またＥ区においても後期末に比定される規模及び形状の類似した溝跡が確認されている。これらは当該期の地形に沿った幹線用水路が検出されたものと考えられるが，前期環濠を更に外周するものとして想定されるＳＤ－Ａ１－01も同様の形態，規模を示しており同遺構については現時点でその性格は不明である。

≪古代≫

本遺跡において古代前半に該当する遺構は検出されていないが，Ａ１区で検出された水田跡等低地において一定量の遺物が見られ周辺部での遺構の存在は窺える。10世紀頃になるとＢ及びＣ区で遺構が散見されるようになる。Ｂ２区北半においてはピット，土坑群が出現し，建物跡等には復原できなかったが遺物の出土状況から居住区の一角をなしていたものと推察される。また当該時期にまで遡ると考えられるＳＤ－Ｃ１－01等南北方向の坪界線上に位置する条里遺構が検出されている。同坪界線上にはB3，C1，Ｄ２区で検出され，香西南西打遺跡[1]においてその延長部が確認されている。現況において推定される香川郡10条18里，19里内の条里地割にあって南北方向では際立って直線状をなし，調査結果からもほぼこの現況に沿って確認されている。その一方では居住地周辺で検出された当該期の溝跡ＳＤ－Ｂ１－05，ＳＤ－Ｃ４－01等条里方向と異なるものが見られ，Ｂ，Ｃ区にあたる坪内の土地利用については条里による制限が少なかったものと窺える。同じ状況は香西南西打遺跡においても見られ[3]，また既に正箱遺跡等でも指摘される[4]ように当地区に限らずある程度普遍性を持つものとして理解されよう。これら坪内の比較的小規模な区画溝とは別にＡ３区からＢ区の北部にかけて自然流路（ＳＲ－Ｂ－01）内に複数の溝が開削されている。谷状の地形に沿って取り付けられたもので，各々溝は堅固な規模を示

しまたその交差箇所が溜池状を呈することから広範にわたる灌漑を担っていたものと考えられ，調査結果からすれば13世紀代に至るまである程度の規模を有する幹線用水路であったことが窺える。

≪古代末～中世初頭≫

中世初頭ではB5，C４区の坪を異にした２箇所において集落の様相をなしている。C４区については掘立柱建物跡群を検出している。調査区が狭小のため居住域の全容及び詳細は不明であるが，12世紀を中心とした複数の建物が存在していたと推定される。また当地区は切り合い関係で後出するＳＢ－Ｃ４－04や13～14世紀の所属時期が考えられるＳＢ－Ｃ４－03，06が検出されたことからすれば比較的長期に継続した居住域と推察される。10世紀頃の居住域（Ｂ２区）に近接するＢ５区では12～13世紀において掘立柱建物跡２棟を検出した。このうちＳＢ－Ｂ５－01は未検出箇所を残すがある程度規模をもつものと推定され，周辺で出土した白磁，瓦片等はその性格を暗示するものかもしれない。また当地区周辺では小区画の溝跡や鋤溝が検出されていることから耕作地としても利用されていたと推察される。その他，耕作地としてはA区北端部において12世紀前半に埋没した水田跡が検出されており，包含された遺物より香西南西打遺跡[1]で確認された水田層と並存するものと考えられる。

≪中世前半≫

当該時期では本遺跡のほぼ全域において条里方向を示す溝跡が多数検出されるようになり，13～14世紀にかけて条里地割が顕著となる点で周辺部の本津川扇状地に位置する西打遺跡や筑城城跡の状況と合致したものとなっている。この中でＳＤ－Ａ２－01，04等は条里方向を示すものの上述したＳＲ－Ｂ－01流域付近で大きく蛇行し流路内の溝跡を避けるように掘削されており，その状況からは両溝間でその使用にあたり何らかの差異が推察されるものである。また遺跡南部に位置するE区では区画溝とも考えられるＳＫ－Ｅ４－101や井戸跡（ＳＥ－Ｅ２－201，202）が検出されているが，布目瓦，青磁碗等遺物量が豊富なもので近隣にはこれらを所持できる居住者層が類推される。この他ＳＤ－Ｅ３－301からは県内において類例の乏しい脚が付けられた土師質土器鍋（第250図04，06）が２点見られる。

埋没したＳＤ－Ａ５－01において出土した人骨は，集石等が上部に存在した塚に類すると思われ周辺域に点在する伝承塚の一端が窺えられる。

≪中世後半≫

当該期に所属する遺構･遺物は僅かでＡ５区において条里溝（ＳＤ－Ａ５－02～４），掘立柱建物跡１棟が堆積関係により比定されたに留まる。このうちＳＤ－Ａ５－02～04はＡ１区検出のＳＤ－Ａ１－02～４の示すライン上に位置し，またこれは現況において推定される香川郡10条18里28・29坪界上にあたり，古代末～中世初頭に遡る坪界溝に想定されるものである。

≪近世・近代≫

遺跡の南部において当該期の遺構・遺物が比較的多く，E，F区において建物跡，井戸跡等が検出されている。Ｂ３区では，ＳＢ－Ｂ３－01を母屋とし，ＳＤ－Ｂ３－01，06及び現有の境界付近を区画する幕末～明治期の屋敷跡が確認され，ＳＫ－Ｂ３－01には当時の日用品等がまとまって見られた。また遺跡全般にわたり石組がなされた暗渠排水溝が見られ，現況の水路に繋がる箇所もあることからある程度旧耕作地の区画を反映したものと考えられる。

第２節　鬼無藤井遺跡の前期弥生土器と環濠集落

鬼無藤井遺跡の調査により二重の環濠集落の存在を確認した。集落東側半分の状況のみの確認ではあるが，環濠を含めた規模は直径60m強の楕円形に近い集落形態を持ち推定面積は約1900㎡を誇っており，当該期の環濠集落としては日本列島において標準的な規模を保持しているといえる。高松平野の環濠集落は汲仏遺跡(二重環濠・多肥下町)，天満・宮西遺跡(一条環濠・松縄町)が確認されており，環壕集落として可能性のあるものとして諏訪神社遺跡(一条環壕・東山崎町)，光専寺山遺跡(一条環壕・池田町)が存在している。また高松平野以外の讃岐地域において龍川五条遺跡・五条遺跡(二重環濠・善通寺市)，中ノ池遺跡(三重環濠＋外環濠帯付属・丸亀市)，鴨部・川田遺跡(一条環濠・志度町)が認知されており，単条から多重環濠構造をもつ集落モデルが普遍化して讃岐全域に多数散在している。

＜前期弥生土器＞

鬼無藤井遺跡の調査で出土した前期弥生土器は実測を可能にした約150点（コンテナ10箱弱分）であり，他地域の環濠集落出土土器と比較すると量的頻度が遙かに低いといえる。これらは内環濠・外環濠・ＳＫ－Ａ２－05出土の土器群を中心に小規模土坑に散在している。内・外環濠資料は比較的短期間に堆積したと考えられる溝の最下層のシルト質極細砂に集中し，それより上層部は環濠廃絶以降の自然堆積を為し，環濠の拡張及び掘り直し等の再掘削は実施してはいない。そのため一括資料の各土坑資料群をはじめ両環濠資料も同様に一括性が比較的高いといえ，時間幅が少ない良好な資料群と考えられるものであり土器様相がコンパクトに纏まっている。またその反面，短期間の集落存続しかみせていないことから出土遺物からみた環濠集落を考える上で非常に興味深い事例を提供しているといえよう。

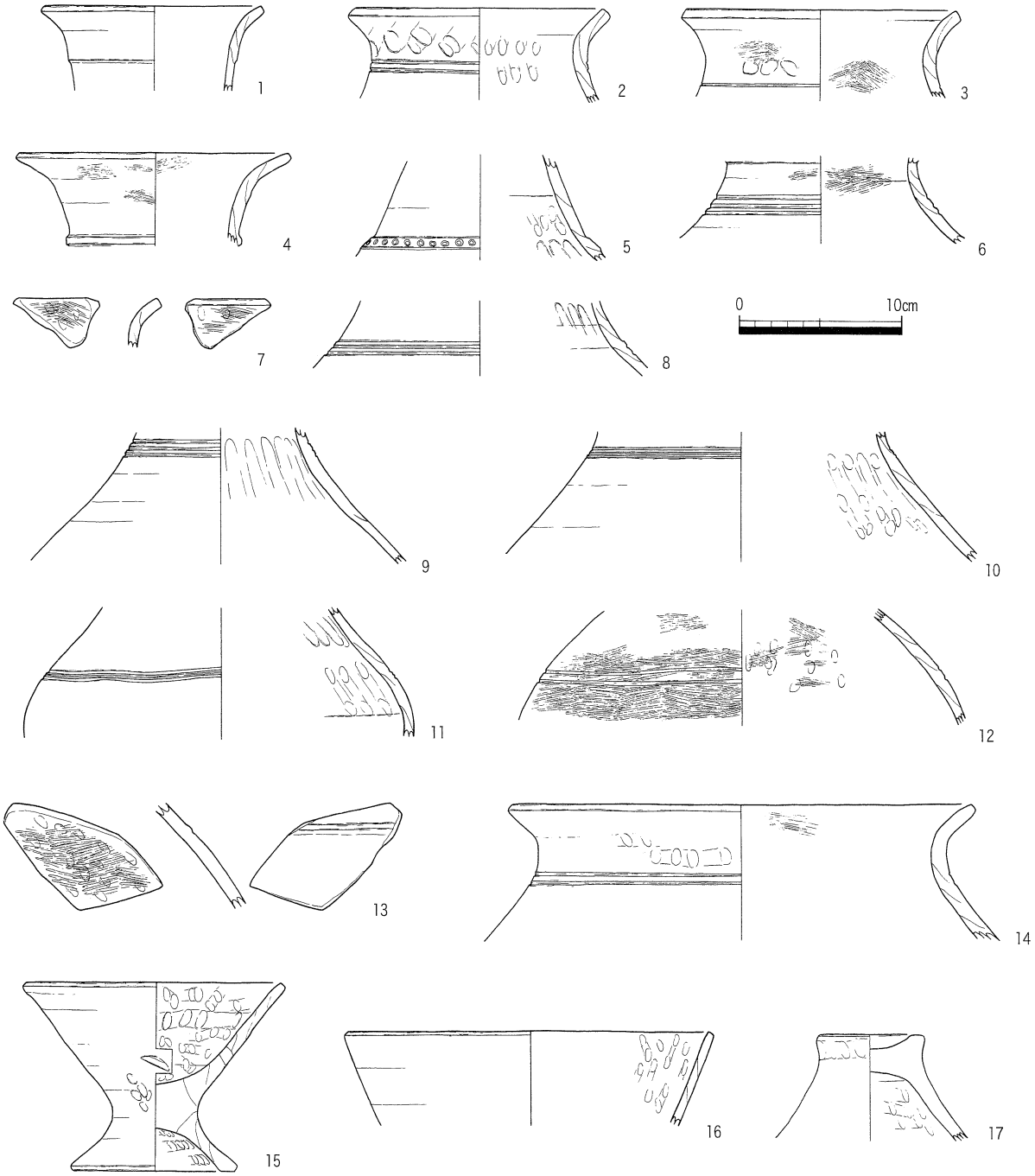
内環濠出土土器群と外環濠出土土器群を対比することでその様相差や時間的関係を明確化することを目的に以下若干の検討を進める。

・壺形土器

中小形壺は胴部が扁平なもの(９・10・42)，算盤玉状のもの(11)，球形のもの(12・40)などが存在しており，幾つかのバリエーションがある。概ね胴部最大径部位から内傾しながらスムーズに窄まりをみせる頸部をもった形態である。頸胴部の区画紋様には削出突帯や篦描沈線，列点紋などを採用しており，特筆されるのが半截竹管紋を多用している点である。段＋沈線をもつもの(８)，削出突帯をもつもの(５・13・41)，篦描沈線をもつもの(６・11・12・40・42)などがある。また頸部紋様は段(１・33)，篦描沈線(２・３・39)，削出突帯(４・34・36)，無紋(35)などがあり，ここでもバリエーションに富んでいる。段の起用や削出突帯第Ｉ種少条及び篦描沈線は最大３条を上限とし，依然として少条傾向であるが半截竹管紋の採用により多条化の素地を生成しているものと考えられる。 大形壺は口頸部のみの残存であるが，頸部紋様を段(43)と篦描沈線(14)が存在しており，前者は前段階から続く古い様相を留めている。

・甕形土器

如意形口縁で頸胴部の紋様として削出突帯をもつもの(20・26)，篦描沈線間に列点紋をもつもの(19・46)，篦描沈線をもつもの(21～25・47～50)があり，貼付口縁をもつもの(23)も存在している。また段をもつものはＳＫ－Ａ２－05の１に確認されるのみである。ここでも壺と同様に半截竹管紋の多用傾向が看取され特徴的である。口縁部の外反は概ね緩やかで口縁部先端を尖らせたものより面をもたせたもののほうが多く，前段階より刻目施紋の欠落が浸透してきているといえる。また大形甕を除いた中形甕に



第273図　鬼無藤井遺跡内環濠出土土器1

は内・外面ヘラミガキ調整を加えた資料は確認できず，後出する属性と考えられる。

・鉢形土器

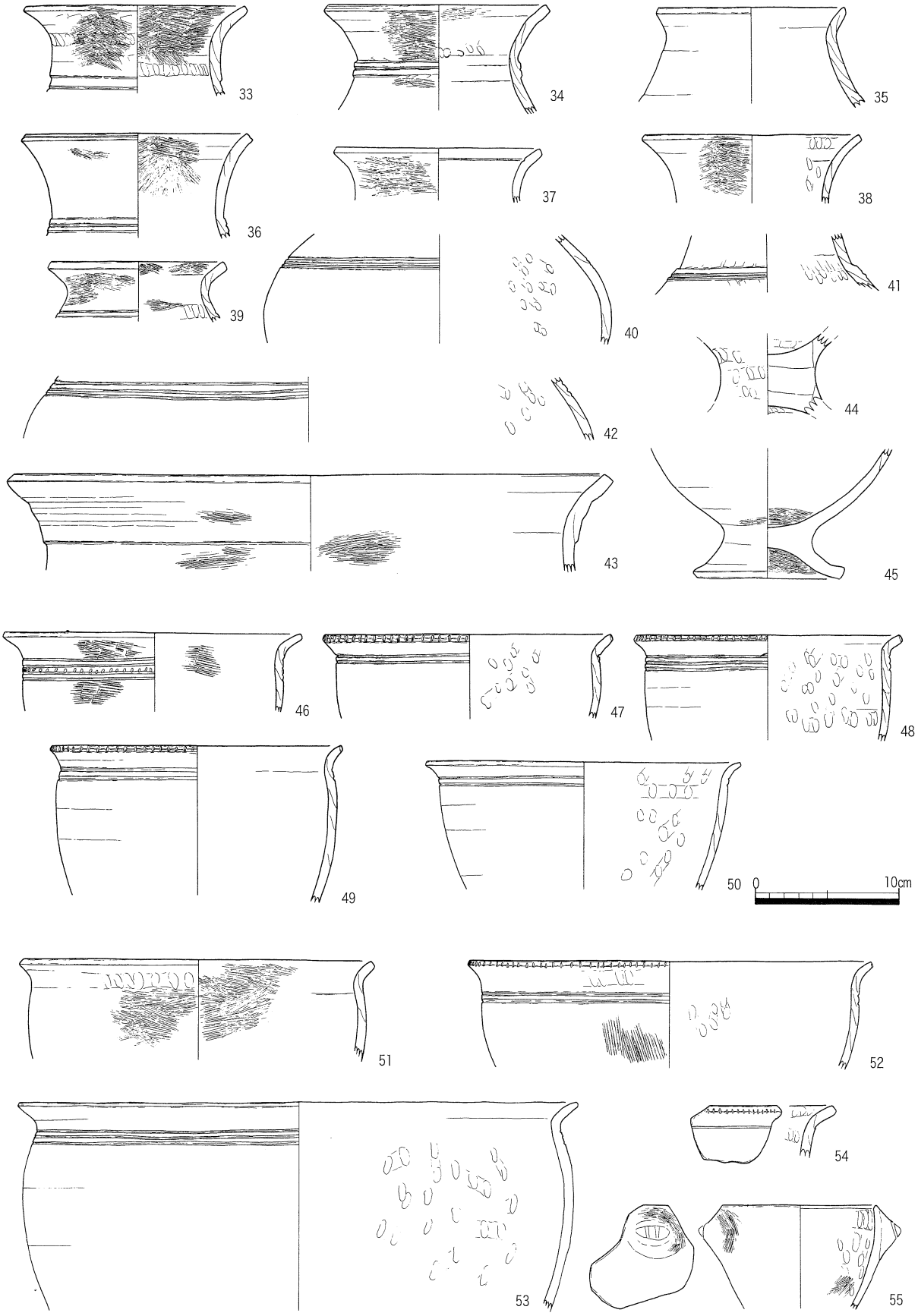
如意形口縁をもち頸胴部境に篦描沈線をもつもの(29・31・52～54)，如意形口縁で無紋のもの(27・28・51)，口縁部が斜め上方に直線的に開口する形態をもち無紋のもの(30・32)が存在しており，無紋の鉢の大半が成形の粗いものであるが，ナデ調整のみで仕上げるものと最終調整にヘラミガキ調整を採用するものがある。鉢は成形が粗くとも内・外面ヘラミガキ調整を加える属性が存在しており，甕よりも前段階から内在する要素として認識できる。また甕と違い貼付口縁形態の鉢は確認されていないが，S

第274図　鬼無藤井遺跡内環濠出土土器２

Ｋ－Ｂ１－07の５のように口縁部が強く折れ曲がる形態をもった鉢が見受けられることから甕に先駆けて逆Ｌ字状の折り曲げ口縁を有し，新相属性を部分的に採用していた可能性が高いといえる。

・高坏形土器

当該期の高坏が一遺跡において４点も確認されることは稀であり，土器総点数において高坏の割合が高いのも本遺跡の特徴といえよう。やや低脚で脚柱部が比較的高く，坏部が斜め上方に直線的に立ち上がっているもの(15・16・44)と低脚で坏部が内彎しながら立ち上がる椀形のもの(45)の大別二形態が存



第275図　鬼無藤井遺跡外環濠出土土器

在しているといえる。バリエーションは少ないといえ，脚柱部に突帯をもつものは確認できない。

以上，内・外環濠出土土器を概観してみたが器形や紋様構成など共通する要素・属性が多分に存在しており，両者を時間的な前後関係に導くことはできなかった。ゆえに両者は掘削時期や環濠機能間，廃棄・埋没時期が同時進行していたと考えられる。また，比較的良好な土坑資料であるＳＫ－Ａ２－05の出土土器を照合してみても，ここでも明確な差異を確認することはできない。

鬼無藤井遺跡が段階を踏みながら徐々に集落形成を為したのではなく，短期間で環濠集落を構成するが非常に短命であり，集落の廃絶へ移行していったことが出土土器から類推されることである。

・龍川五条遺跡ＳＤ49最下層資料との関係

鬼無藤井遺跡出土土器を検討した結果，土器組成，器形や紋様構成，各属性などから龍川五条遺跡ＳＤ49最下層資料[1]の様相に近似しているといえる。このことにより鬼無藤井遺跡は弥生前期後半前葉の範疇に属しており，森下編年[2]前期Ⅱ-ａ期に該当している。

鬼無藤井遺跡の壺・甕などの区画紋様を施紋する際に，器表面への沈線施紋を最大３条までと原則している点や，粘土帯積み上げ単位が前段階よりも幅が狭く緊密となり，粘土紐作り的な土器成形を実施していることが本遺跡出土土器の特徴であり，前期Ⅱ-ａ期の属性とも認識できる。しかし本遺跡出土土器において瀬戸内型甕を確認できるものの貼付突帯を施した壺形土器は皆無であり，この欠落現象が龍川五条遺跡ＳＤ49最下層資料との相違点でもある。また突帯紋系土器の有無も特筆される。

・瀬戸内型甕の検討

内環濠（ＳＤ－Ａ１－03＋ＳＤ－Ａ５－06）から出土した瀬戸内型甕は共伴資料から前期Ⅱ-ａ期に属しており，現在瀬戸内地域中心に確認されている瀬戸内型甕のなかで最古段階の資料と位置付けることができる。ここでは突帯紋系甕との系譜関係を検討していきたい。

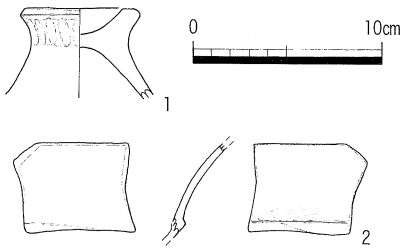
前期Ⅰ-ｃ期（下川津第２低地帯流路１上層[3]・一の谷土器溜まり[4]）や前期Ⅱ-ａ期（龍川五条ＳＤ49最下層）では突帯紋系甕が僅かに含まれているが瀬戸内型甕は組成していない。逆に鬼無藤井内環濠には後者はあるが前者は含まれていない。こうした関係を整理すると共伴関係は依然として不明ではあるが，ほぼ同時期には突帯紋系甕と瀬戸内型甕が存在していたことになる。鬼無藤井遺跡の瀬戸内型甕は刻目など突帯紋系土器に影響されたであろう属性を持ちながらもしっかりとした貼付口縁や貼り付け位置，器形などが後出する様相に近いため，本地域の前期Ⅱ-ａ期には既に出現していた可能性が高いといえる。このことにより瀬戸内型甕の祖形と認知できる資料の存在が前期Ⅰ-ｃ期以前に連想され，系譜関係はそこに求められるべきであろう。瀬戸内型甕の成立は突帯紋系甕や如意形口縁甕をはじめ，他器種との複合的な影響関係によって出現したと考慮される。しかしながら他地域の初期瀬戸内型甕との関係や胎動も併せて検討していくことが必要であり，系譜を明確にできる手続きのひとつといえよう。

＜環濠＞

微高地を取り巻くようなかたちでほぼ自然地形に沿い環濠を構成している。遺構上面が削平を受けているが，検出時のデータとして幅２ｍ前後で内・外環濠間を３ｍ前後に保ちながら溝が緩やかに弧状を描くものの蛇行気味となり，そのため平面形態は部分的に弧状が歪みをみせながらも楕円形を呈するように巡らしている。今回の調査では集落内・外部へ行き来する陸橋のような出入口施設の検出及び確認はされておらず，その存在には注意を要するであろう。

外環濠の北方にＳＤ－Ａ１－01が存在しており，ほぼ南北方向にその軸を揃えＳＤ－Ａ４－01に続く

であろう溝が存在している。ＳＲ－Ａ－01埋没後に掘削された溝であり，二重環濠のさらに外側に構成をみせるしっかりとした溝であることから，環濠の可能性が高くその評価を積極的に考慮されるものである。しかし遺物量が内・外環濠と比較すると極少頻度であり，両環濠と併存していた確証が十分でないものの土器小片の包含が確認されている。一つは前期弥生土器のしっかりとした摘み部を作出する甕用蓋である。二つめは埋没したＳＲ－Ａ－01の遺物を巻き上げて包含されていた精製屈曲型浅鉢であり，縄紋晩期中葉の居石遺跡ＳＲ03資料[5]に併行もしくは若干先行する資料である。本資料の取り扱いには慎重に成らざるを得ないのが現状であり，弥生前期段階の遺物としては甕用蓋のみの確認であるため積極的に外周環濠の存否の検討が困難である。しかしながら外周環濠が弥生前期段階に不存であった確証が無く，その存在は十分に考慮されるものであろう。



第276図　ＳＤ－Ａ１－01出土土器

＜居住域＞

遺構上面が削平されているためか遺構密度が希薄であり，遺構は重複しておらず併存していた可能性が高いと考えられる。住居遺構は竪穴住居４棟，掘立柱建物１棟が復元されて内環濠に囲まれた範囲の中央部及び南方に分布しており，また幾つかの土坑群が住居跡の西側へ隣接するような配置をとるため，ある程度の空間利用区分が示唆される遺構分布を示している。しかしながら龍川五条遺跡，鴨部・川田遺跡[6]，中ノ池遺跡[7]で確認される施設を取り囲むような方形区画溝などの区画設備は採用していない。

＜周辺集落との対比＞

鬼無藤井遺跡の存在時期よりも一段階古い集落が本遺跡と北接している。西打遺跡は前期Ⅰ-ｃ期に帰属する前期弥生土器と共に少量の突帯紋系土器を共伴しており[8]，本遺跡との関係が示唆される集落である。現時点で遺跡名から窺えるようにこの二遺跡は区別されているが，当初は両者を含めた同一集落として考えるほうが妥当といえる。しかしながら前期Ⅰ-ｃ期の西打遺跡の集団が南方に位置する前期Ⅱ-ａ期の鬼無藤井遺跡に環濠集落を構えることにより何らかの相互関係を想定することが可能であろう。これを前提にして考えると，西打遺跡の集団が移動したか分村という選択を為したのか，もしくは西打遺跡他集団による産物かは検討が必要であるが，鬼無藤井遺跡の外周環濠（ＳＤ－Ａ１－01＋ＳＤ－Ａ４－01）は南方には巡らさず西打遺跡方向の北方のみの掘削造作を特徴としていることや環濠内部の住居をやや南方に位置していることなどから遺跡北方を少なくとも意識した集落構成を採用している。これは共同体意識の結束性を維持し誇示したか，或いは防御機能の保全を意図したものと類推することができる。さらには同時期掘削の環濠をもち，土器一型式のみの存続しかみせない集落であることや，環濠集落という集落形態からも少なからず緊張的状態を反映しているものと想定されるであろう。

また鬼無藤井遺跡とほぼ同時期併存で同質性格をもつ集落が存在しており，高松平野中央部の環濠集落形態を採った前期Ⅰ-ｃ期から前期Ⅱ-ａ期の天満・宮西遺跡を挙げることができる。当遺跡は一条環濠であるが集落立地や出土土器の少量頻度状況，存続期間の比較的短命さが共通項として指摘できる。天満・宮西遺跡の周辺にも前段階の集落であろう大池遺跡[9]や林・坊城遺跡[10]，やや距離をとる汲仏遺跡[11]などが既に存在しており，高松平野西縁部以上に様々な集落展開が予想される。しかしこれらも集落間の影響関係から導かれる動態であると解釈することができよう。

参考・引用文献

第２章

第１節

鈴木道之助　著『石器入門辞典－縄文』1991　柏書房

平井勝　著『弥生時代の石器』　ニュー・サイエンス社

森下英治・信里芳紀1998「讃岐地方における弥生土器の基準資料Ⅰ－下川津遺跡出土前期弥生土器を中心に－」『研究紀要Ⅵ』（財）香川県埋蔵文化財調査センター

『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財調査報告第７冊　鴨部・川田遺跡』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター1997．12

『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告第29冊　龍川五条遺跡Ⅱ　飯野東分山崎南遺跡』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター1998．10

第２節～４節，第６節

『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会2000．2

『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編1995　真陽社

『香川の民家』社団法人香川県建築士会1987．5

『大宰府陶磁器研究』森田勉氏遺稿集・追悼集刊行会1995

『山陽自動車建設に伴う発掘調査３　亀山遺跡など』岡山県教育委員会1988．10

『摂津高槻城　本丸跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会1984．3

『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅰ～Ⅴ』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編　広島県教育委員会1993～1996

『香川県埋蔵文化財調査年報　平成８年度』香川県教育委員会

『県道山崎御厩線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　正箱遺跡・薬王寺遺跡』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター1994．3

『高松市歴史資料館収蔵資料目録～民俗資料～』高松市歴史資料館1999

『都市計画室町新田線埋蔵文化財発掘調査報告書第二冊　川南・東遺跡』高松市教育委員会2000．3

『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第一冊　浴・長池遺跡』高松市教育委員会1993．3

片桐孝治1992「考察－古代から中世にかけての土器様相」『川津元結木遺跡』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター

佐藤竜馬2000「高松平野と周辺地域における中世土器の編年」『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第４冊　空港跡地遺跡Ⅳ』　香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター

佐藤竜馬1994「18～19世紀の土器・瓦」『空港跡地遺跡発掘調査概報　平成５年度』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター

佐藤竜馬1995「楠井産土器の編年」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター

佐藤竜馬1993「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」『関西大学考古学研究室開設40周年記念考古学論叢』

第５節

註

＊１『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ　下川津遺跡第１分冊』1990．３（財）香川県埋蔵文化財調査センター

＊２『　同　上　』

＊３『韓国考古学概説増補改訂』金元龍著・西谷正翻訳1984．４．25　六興出版

＊４『都市計画道路室町新田線埋蔵文化財発掘調査報告書第一冊　川南･西遺跡』1999．３　高松市教育委員会

＊５『都市計画道路福岡多肥上町線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　日暮･松林遺跡』1997．３　高松市教育委員会

参考文献

『高松港頭地区土地区画整理作業平成８年度埋蔵文化財発掘調査概要　高松城跡（西の丸町）西打遺跡』1997．３　香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター

『笠居郷風土記高松市西部の民俗・高松市の文化財第十編』Ｓ61．７．１　高松市西部民俗調査団

『高松港頭地区再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　香西南西打遺跡』2000．３　高松市教育委員会

『高松市ふれあい福祉センター勝賀建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　香西南西打遺跡』2000．３　高松市教育委員会

『高松市立弦打公民館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　筑城城跡』1999．10　高松市教育委員会

石上英一1993「弘福寺領讃岐国山田郡田図の分析（４）」『弘福寺領讃岐国山田郡田図比定地域発掘調査概報Ⅳ』高松市教育委員会

伊藤隆三1985．11「宿場町（富山県桜町遺跡）」『季刊考古学第13号』雄山閣出版

片桐孝治1990「古代から中世にかけての土器様相－香川県における予察」『中近世土器の基礎研究Ⅵ』日本中世土器研究会

金田章裕1988「条里と村落生活」『香川県史１原始・古代』香川県

佐藤竜馬2000「讃岐における平安期の土器研究」『中近世土器の基礎研究ＸＶ』日本中世土器研究会

第３章

第１節

註

１『高松港頭地区再開発関連事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　香西南西打遺跡』2000．３　高松市教育委員会

２『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第１冊　西打遺跡Ⅰ』2000．11　香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター

３同報告書の第４章第２節参照

金田章裕1999「高松平野における条里地割の形成」『讃岐国弘福寺領の調査Ⅱ　第２次弘福寺領讃岐国山田郡田図調査報告書』1999．11　高松市教育委員会

第２節

註

1．森下英治1998『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第29冊　龍川五条遺跡Ⅱ・飯野東分山崎南遺跡』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター

2．上記と同じ。

3．藤好史郎・西村尋文・大久保徹也1990『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ　下川津遺跡』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター

4．西岡達哉1988『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第６冊　一ノ谷遺跡群』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター

5．山元敏裕1995『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第７冊　居石遺跡』高松市教育委員会

6．森　格也1997『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第７冊　鴨部・川田遺跡Ⅰ』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター

7．丸亀市教育委員会・（財）元興寺文化財研究所2001『中ノ池遺跡現地説明会資料』

8．（財）香川県埋蔵文化財調査センター・信里芳紀氏の御教示による。

9．正報告は為されていないが，前期Ⅰ-ｂ期の壺形土器数点が確認されている。

10．宮崎哲治1993『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第１冊　林・坊城遺跡』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター

11．山元素子1999『香川県警察本部機動隊舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　汲仏遺跡』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター

参考文献

森下英治・信里芳紀1998「讃岐地方における弥生土器の基準資料Ⅰ－下川津遺跡出土前期弥生土器を中心に－」『研究紀要Ⅵ』（財）香川県埋蔵文化財調査センター

乗松真也・森下英治・信里芳紀2000「讃岐地方における弥生土器の基準資料Ⅲ－前期後半～中期前葉の土器を中心として－」『研究紀要Ⅷ』（財）香川県埋蔵文化財調査センター

信里芳紀2000「北四国における弥生文化の成立」『弥生文化の成立』埋蔵文化財研究会

第 4 章　自然科学的分析

高松港頭地区再開発関連事業に伴う埋蔵文化財発掘調査事業

鬼無藤井遺跡における樹種同定

環境考古研究会

1. はじめに

木材は，セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり，その構造は年輪が形成され針葉樹材や広葉樹材で特徴ある組織をもつ。そのため，解剖学的に概ね属レベルの同定が可能となる。木材は大型の植物遺体であるため移動性が少なく，堆積環境によっては現地性の森林植生の推定が可能になる。考古学では木材の利用状況や流通を探る手がかりになる。

2. 試料

試料は，鬼無藤井遺跡の第Ⅷ調査区より検出の住居跡等遺構（幕末から明治期）に伴う木製品，建築部材および加工木など39点と第Ⅲ調査区より出土の小児用下駄（中世中葉）１点の計40点である。

3. 方法

試料はカミソリを用いて，新鮮な基本的三断面（木材の横断面，放射断面，接線断面）を作製し，生物顕微鏡によって60～600倍で観察した。樹種同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4. 結果

結果は表１に示し，各試料の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

モミ属　*Abies*　マツ科

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は比較的緩やかである。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は小型のスギ型で１分野に１～４個存在する。放射柔細胞の壁が厚く，じゅず状末端壁を有する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質より，モミ属に同定される。モミ属は日本に５種が自生し，その内ウラジロモミ，トドマツ，シラビソ，オオシラビソの４種は亜寒帯に分布し，モミは温帯を中心に分布する。常緑高木で高さ45m，径1.5mに達する。材は保存性が低く軽軟であるが，現在では多用される。

マツ属複維管束亜属　*Pinus subgen. Diploxylon*　マツ科

仮道管，放射柔細胞，放射仮道管及び垂直，水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急で，垂直樹脂道が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが，水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質より，マツ属複維管束亜属に同定される。マツ属複維管束亜属には，クロマツとアカマツがあり，どちらも北海道南部，本州，四国，九州に分布する。常緑高木である。材は水湿によく耐え，

広く用いられる。

スギ　*Cryptomeria japonica* D.Don　スギ科

仮道管，樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急で，晩材部の幅が比較的広い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で，1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で，10細胞高以下のものが多い。樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりスギに同定される。スギは本州，四国，九州，屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で，高さ40m，径2mに達する。材は軽軟であるが強靭で，広く用いられる。

ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa* Endl.　ヒノキ科

仮道管，樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで，晩材部の幅はきわめて狭い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は，ヒノキ型で1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で，1～15細胞高である。

以上の形質よりヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州，四国，九州，屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で，通常高さ40m，径1.5mに達する。材は木理通直，肌目緻密で強靭，耐朽，耐湿性も高い。良材であり，建築など広く用いられる。

サワラ　*Chamaecyparis pisifera* Endl.　ヒノキ科

仮道管，樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急で，晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が見られる。

放射断面:放射柔細胞の分野壁孔は，ヒノキ型からややスギ型を示し，1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりサワラに同定される。サワラは岩手県以南の本州，四国，九州に分布する。日本特産の常緑高木で，高さ30m，径1mに達する。材は木理通直，肌目緻密であるが，ヒノキより軽軟でもろいが，広く用いられる。

ヒノキ科　Cupressaceae

横断面，放射断面，接線断面共にヒノキ科の特徴を示し，分野壁孔の型及び1分野に存在する個数が不明瞭なものはヒノキ科とした。

ハンノキ属ハンノキ節　*Alnus* sect. *Gymnothyrsus*　カバノキ科

横断面：小型で丸い道管が，放射方向に連なる傾向をみせて散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で，階段の数は10数本～30本ぐらいまでである。放射組織は平伏細胞からなる同性である。

接線断面：放射組織は，同性放射組織型で単列のものと大型の集合状のものからなる。

以上の形質よりハンノキ属ハンノキ節に同定される。ハンノキ属ハンノキ節は落葉の低木から高木である。材は器具，旋作，薪炭などに用いられる。

クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　ブナ科

横断面：年輪のはじめに大型の道管が，数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が，火炎状に配列する。早材から晩材にかけて，道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる同性である。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道の西南部，本州，四国，九州に分布する。落葉の高木で，通常高さ20m，径40cmぐらいであるが，大きいものは高さ30m，径２mに達する。耐朽性強く，水湿によく耐え，保存性の極めて高い材で，現在では建築，家具，器具，土木，船舶，彫刻，薪炭，椎茸ほだ木など広く用いられる。

ブナ属　*Fagus*　ブナ科

横断面：小型でやや角張った道管が，単独あるいは２～３個複合して密に散在する散孔材である。晩材部において，道管の径とその分布数がやや減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔および階段穿孔である。放射組織はほとんど平伏細胞からなるが，ときに上下端のみ方形細胞が見られる。

接線断面：放射組織は上下端のみに方形細胞が見られるものもあるが，ほとんどが同性放射組織型であり，単列のもの，2～数列のもの，大型の広放射組織のものがある。

以上の形質よりブナ属に同定される。ブナ属には，ブナ，イヌブナがあり，北海道南部，本州，四国，九州に分布する。落葉の高木で，通常高さ20～25m，径60～70cmぐらいであるが，大きいものは高さ35m，径1.5m以上に達する。材は堅硬，緻密，靱性あり，保存性は低い。容器などに用いられる。

5. 所見

同定の結果，第Ⅷ調査区より出土の木製品は，モミ属1，マツ属複維管束亜属20，スギ3，ヒノキ4，サワラ3，ヒノキ科5，ハンノキ属ハンノキ節1，クリ1，ブナ１であった。マツ属複維管束亜属が多く特徴である。水湿によく耐える材であり，二次林を形成するアカマツと海岸林を形成するクロマツとがある。西南日本においては，古墳時代から古代にかけてヒノキ材ないしヒノキ科材が主要に使われるが，中世以降はマツ属複維管束亜属材が増加する。二次林であるアカマツ林の増加に対応した用材とみられる。ヒノキ，ヒノキ科，スギの針葉樹は木理直通な良材であり，古墳時代以降多用され，流通した木材と考えられる。サワラも同様とみられるが，地域によって使われる木材であり，本遺跡の周辺地域の特徴的な用材である可能性がある。クリやブナの広葉樹材は重硬で耐朽保存性がよく，建築材に比較的よく使われる。第Ⅲ調査区より出土の小児用下駄（中世中葉）はサワラであり，特徴的な用材である。

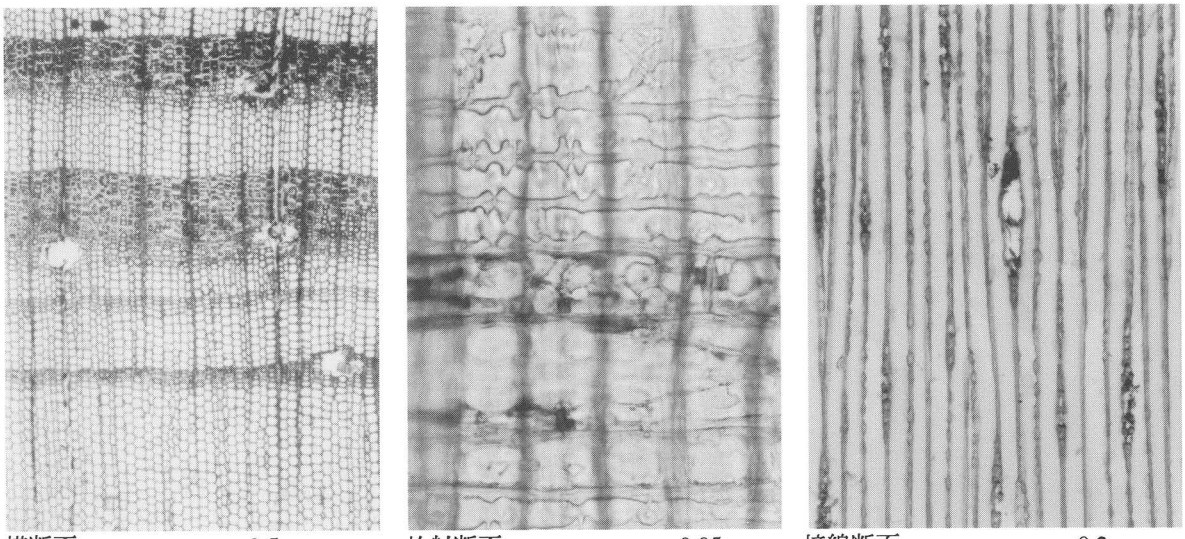
参考文献

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20－48.
佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49－100.
島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，296p.

表１　鬼無藤井遺跡における樹種同定結果

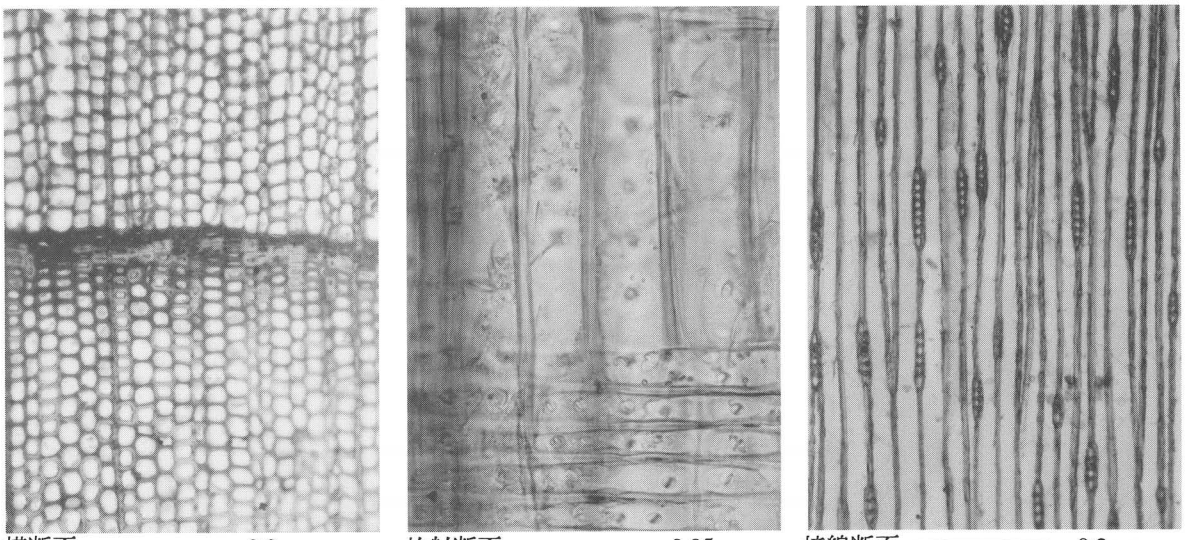
整理番号	出土位置	種類	品目	備考	結果（和名／学名）	
1	Ⅷ区 pit-Z	建築部材	杭（支柱）		マツ属複維管束亜属	Pinus subgen. Diploxylon
2	Ⅷ区ＳＫ01	生活用具	折敷	黒塗りの漆器	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa Endl.
3	Ⅷ区ＳＫ01	建築部材	柱		クリ	Castanea crenata Sieb. et Zucc.
4	Ⅷ区ＳＫ01	生活用具		曲物の蓋（底）板	スギ	Cryptomeria japonica D. Don
5	Ⅷ区ＳＫ03	加工木			ヒノキ科	Cupressaceae
6	Ⅷ区ＳＫ01	生活用具	籠	握り（把っ手）部	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa Endl.
7	Ⅷ区ＳＫ01	履物	草履状下駄		マツ属複維管束亜属	Pinus subgen. Diploxylon
8	Ⅷ区ＳＫ01	建築部材	杭（支柱）		マツ属複維管束亜属	Pinus subgen. Diploxylon
9	Ⅷ区ＳＫ01	加工木			ヒノキ科	Cupressaceae
10	Ⅷ区ＳＫ01	生活用具	桶	側板	マツ属複維管束亜属	Pinus subgen. Diploxylon
11	Ⅷ区ＳＫ01	加工木		作業台か	マツ属複維管束亜属	Pinus subgen. Diploxylon
12	Ⅷ区ＳＫ01	加工木			ヒノキ科	Cupressaceae
13	Ⅷ区ＳＫ01	生活用具	漆器（椀）		ブナ属	Fagus
14	Ⅷ区ＳＫ01	建築部材		梁，柱材か	マツ属複維管束亜属	Pinus subgen. Diploxylon
15	Ⅷ区ＳＫ01	部材		木釘，栓か	ヒノキ科	Cupressaceae
16	Ⅷ区 pit-R	建築部材	杭（支柱）		マツ属複維管束亜属	Pinus subgen. Diploxylon
17	Ⅷ区 pit-Ⅰ	建築部材	柱		マツ属複維管束亜属	Pinus subgen. Diploxylon
18	Ⅷ区ＳＫ07	建築部材		板材	マツ属複維管束亜属	Pinus subgen. Diploxylon
19	Ⅲ区ＳＤ301	履物	下駄		サワラ	Chamaecyparis pisifera Endl.
20	Ⅷ区ＳＫ01	生活用具	桶	側板	スギ	Cryptomeria japonica D. Don
21	Ⅷ区ＳＫ01	加工木		櫓，櫂の類か	マツ属複維管束亜属	Pinus subgen. Diploxylon
22	Ⅷ区ＳＫ01	生活用具	膳	底板	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa Endl.
23	Ⅷ区ＳＫ01	加工木		板材	マツ属複維管束亜属	Pinus subgen. Diploxylon
24	Ⅷ区ＳＫ01	建築部材		梁，柱材か	ヒノキ科	Cupressaceae
25	Ⅷ区ＳＫ01	生活用具	桶	側板	サワラ	Chamaecyparis pisifera Endl.
26	Ⅷ区ＳＫ01	加工木		28と接合か	サワラ	Chamaecyparis pisifera Endl.
27	Ⅷ区ＳＫ01	加工木			マツ属複維管束亜属	Pinus subgen. Diploxylon
28	Ⅷ区ＳＫ01	加工木			サワラ	Chamaecyparis pisifera Endl.
29	Ⅷ区ＳＫ01	生活用具	曲物		ヒノキ	Chamaecyparis obtusa Endl.
30	Ⅷ区ＳＫ01	建築部材		梁，柱材か	マツ属複維管束亜属	Pinus subgen. Diploxylon
31	Ⅷ区ＳＫ06	加工木			モミ属	Abies
32	Ⅷ区ＳＫ01	加工木			マツ属複維管束亜属	Pinus subgen. Diploxylon
33	Ⅷ区ＳＫ01	生活用具	桶	側板	マツ属複維管束亜属	Pinus subgen. Diploxylon
34	Ⅷ区ＳＫ01	建築部材		梁，柱材か	マツ属複維管束亜属	Pinus subgen. Diploxylon
35	Ⅷ区ＳＫ01	加工木			マツ属複維管束亜属	Pinus subgen. Diploxylon
36	Ⅷ区ＳＫ01	建築部材	杭（支柱）		マツ属複維管束亜属	Pinus subgen. Diploxylon
37	Ⅷ区ＳＫ01	加工木			マツ属複維管束亜属	Pinus subgen. Diploxylon
38	Ⅷ区ＳＫ01	生活用具	桶	側板	スギ	Cryptomeria japonica D. Don
39	Ⅷ区ＳＫ01	建築部材	杭（支柱）		マツ属複維管束亜属	Pinus subgen. Diploxylon
40	Ⅷ区ＳＫ01	加工木			ハンノキ属ハンノキ節	Alnus sect. Gymnothyrsus

鬼無藤井遺跡の木材　Ⅰ



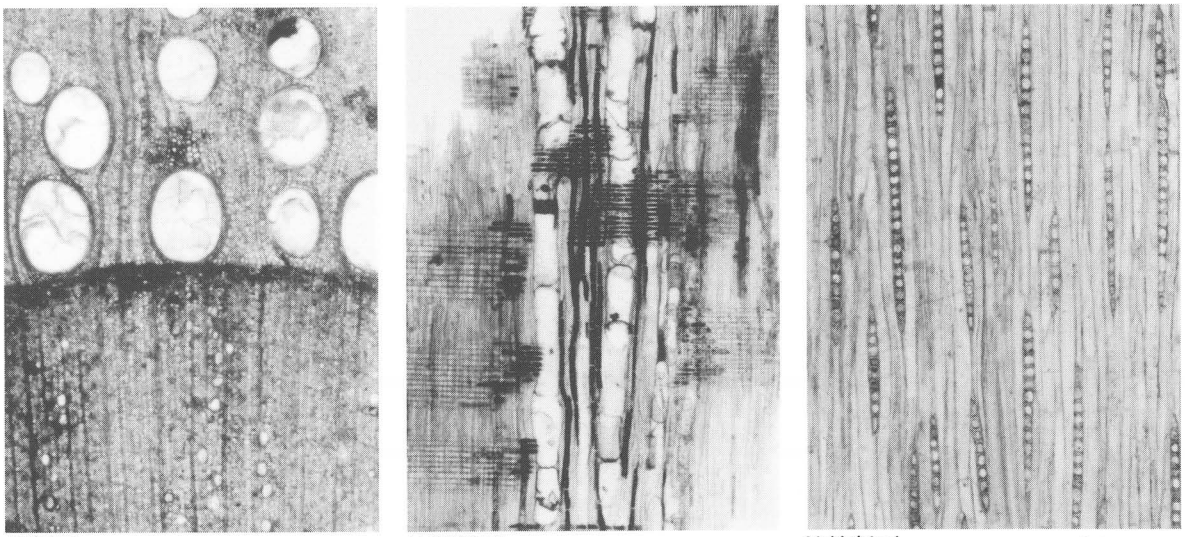
横断面 ―――― ：0.5mm　放射断面 ―――― ：0.05mm　接線断面 ―――― ：0.2mm

1．Ⅷ区　pit-Z　建築部材　杭(支柱)　マツ属複維管束亜属



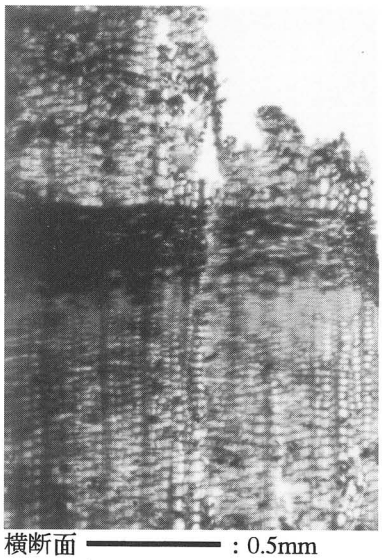
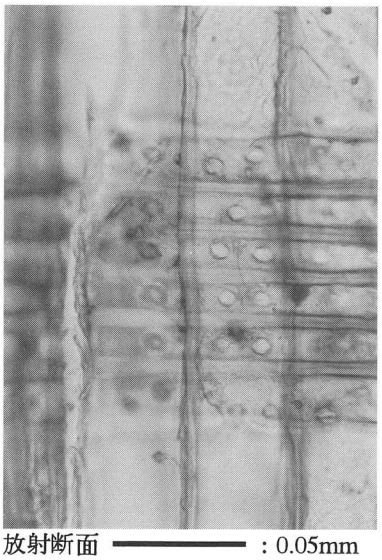
横断面 ―――― ：0.2mm　放射断面 ―――― ：0.05mm　接線断面 ―――― ：0.2mm

2．Ⅷ区　SK01　生活用具　折敷　黒塗りの漆器　ヒノキ



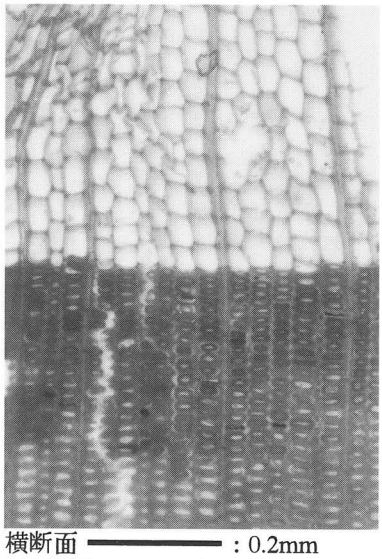
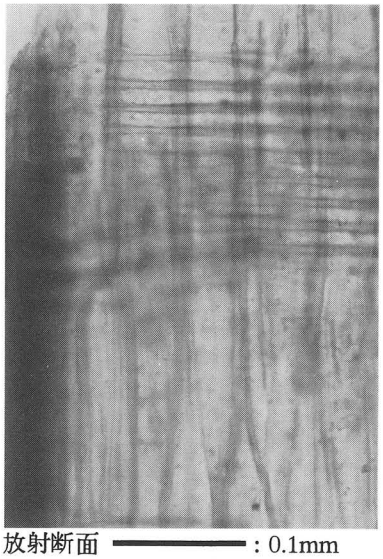
横断面 ―――― ：0.5mm　放射断面 ―――― ：0.5mm　接線断面 ―――― ：0.2mm

3．Ⅷ区　SK01　建築部材　柱　クリ

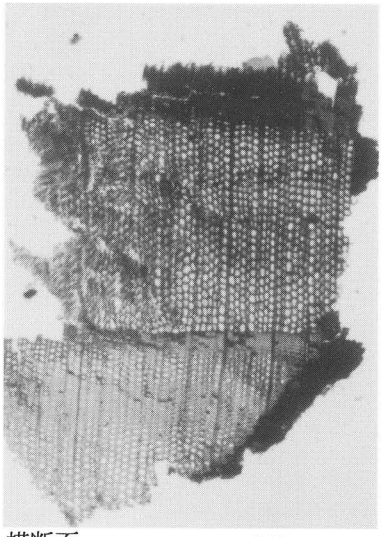
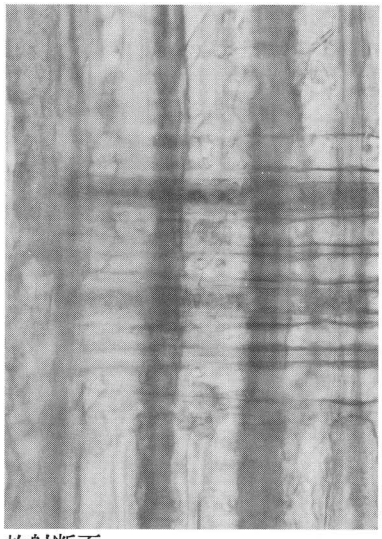
横断面 ―――― ：0.5mm　放射断面 ―――― ：0.05mm　接線断面 ―――― ：0.2mm

4．Ⅷ区　SK01　生活用具　曲物の蓋(底)板　スギ

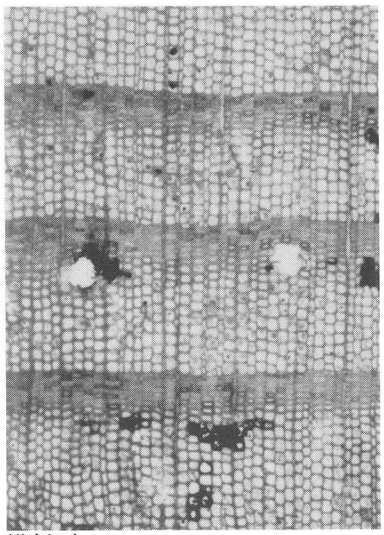
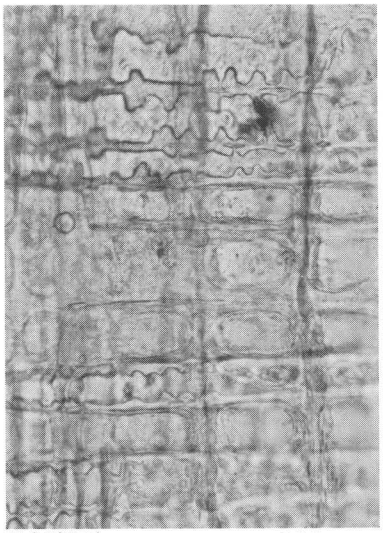
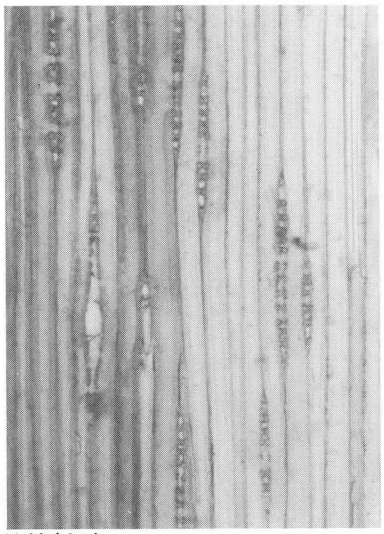
横断面 ―――― ：0.2mm　放射断面 ―――― ：0.1mm　接線断面 ―――― ：0.2mm

5．Ⅷ区　SK03　加工木　ヒノキ科

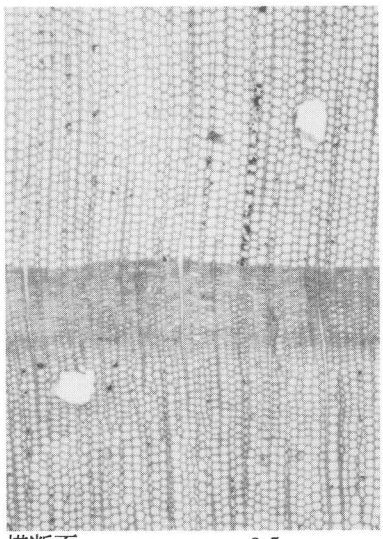
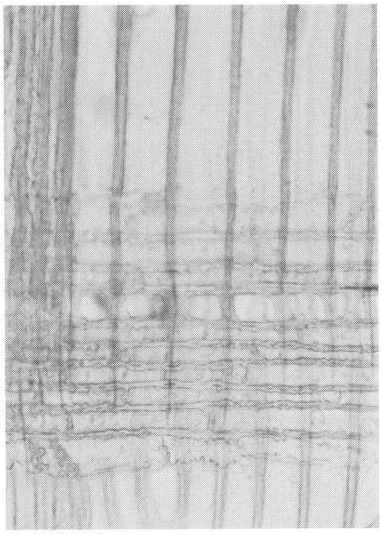
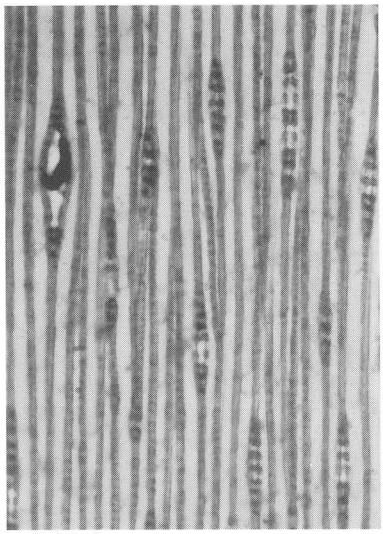
横断面 ―――― ：0.5mm　放射断面 ―――― ：0.05mm　接線断面 ―――― ：0.2mm

6．Ⅷ区　SK01　生活用具　籠　握り(把っ手)部　ヒノキ

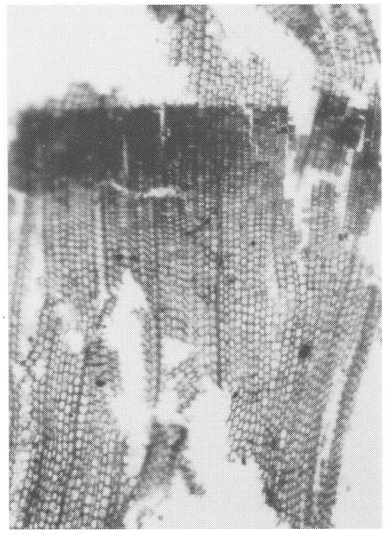
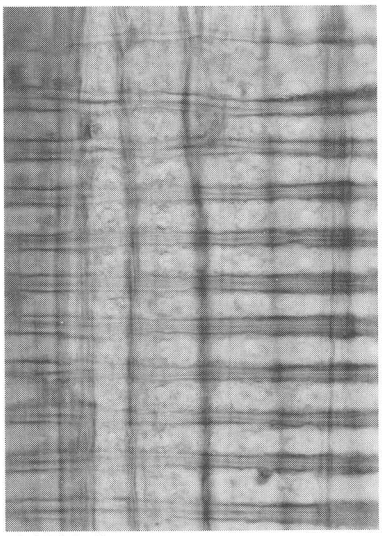
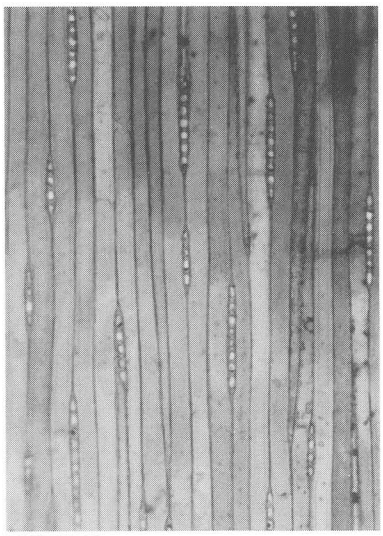
横断面 ―――― ：0.5mm　放射断面 ―――― ：0.05mm　接線断面 ―――― ：0.2mm

7．Ⅷ区　SK01　履物　草履状下駄　マツ属複維管束亜属

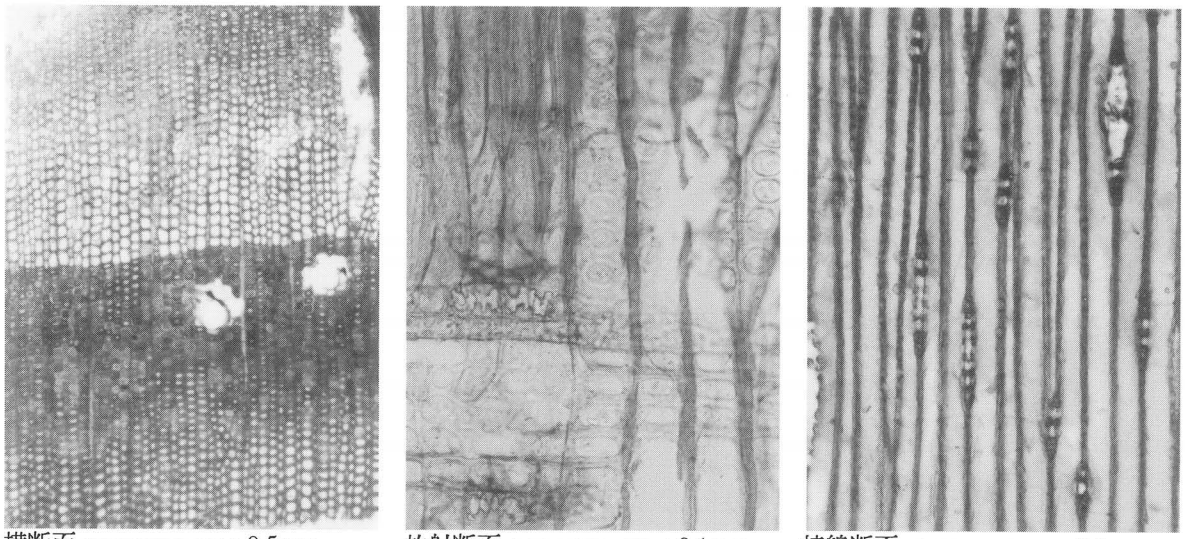
横断面 ―――― ：0.5mm　放射断面 ―――― ：0.1mm　接線断面 ―――― ：0.2mm

8．Ⅷ区　SK01　建築部材　杭(支柱)　マツ属複維管束亜属

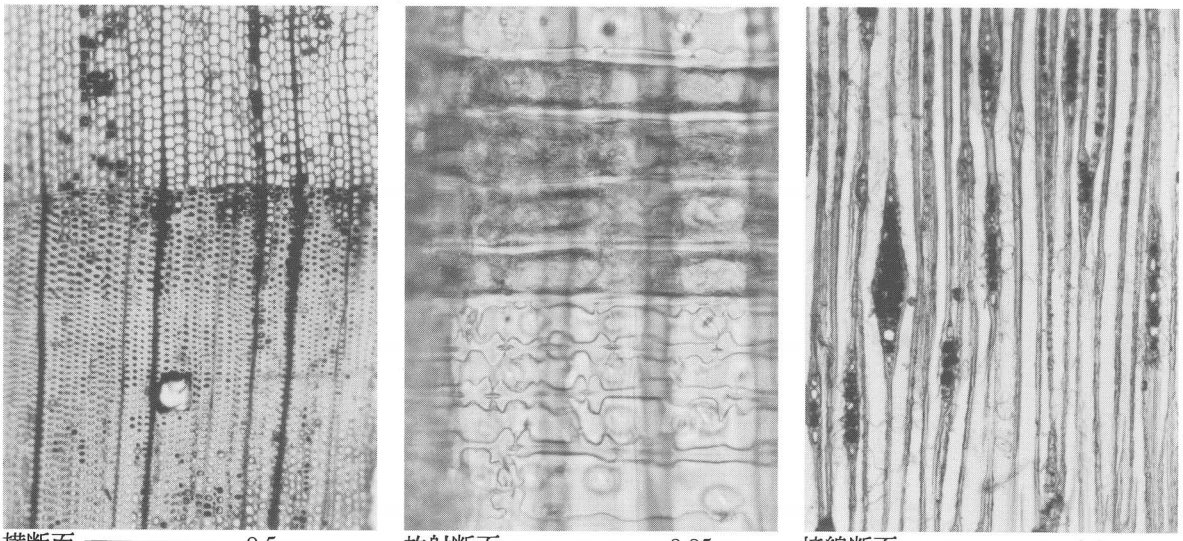
横断面 ―――― ：0.5mm　放射断面 ―――― ：0.05mm　接線断面 ―――― ：0.2mm

9．Ⅷ区　SK01　加工木　ヒノキ科



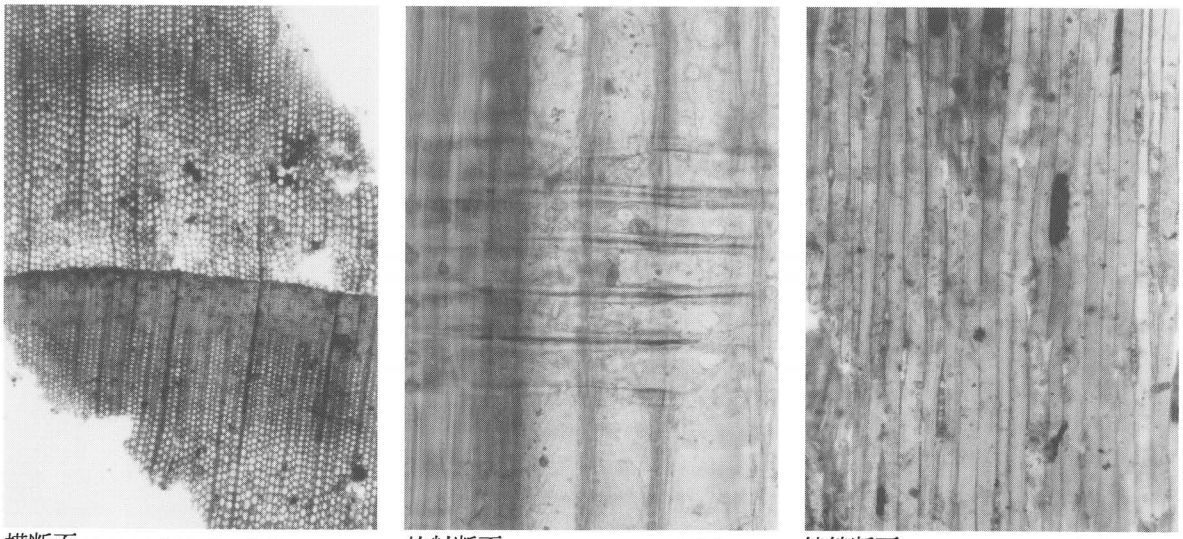
横断面 ―――― ：0.5mm　放射断面 ―――― ：0.1mm　接線断面 ―――― ：0.2mm

10.　Ⅷ区　SK01　生活用具　桶　側板　マツ属複維管束亜属



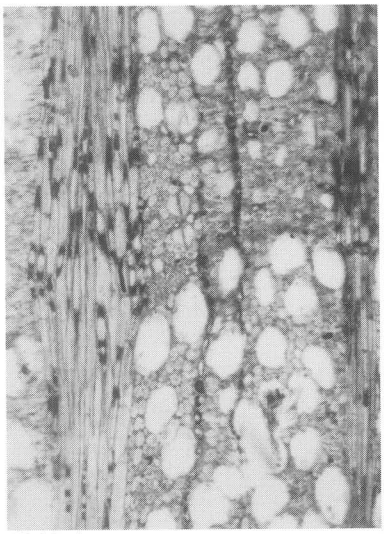
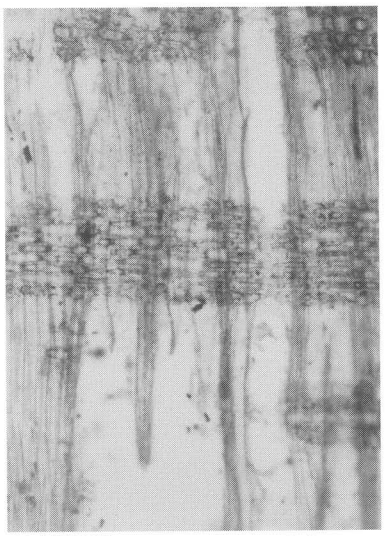
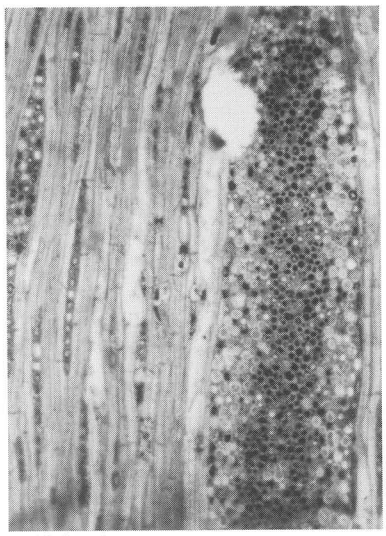
横断面 ―――― ：0.5mm　放射断面 ―――― ：0.05mm　接線断面 ―――― ：0.2mm

11.　Ⅷ区　SK01　加工木　マツ属複維管束亜属



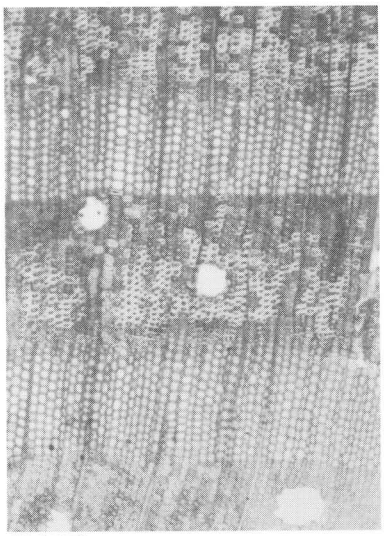
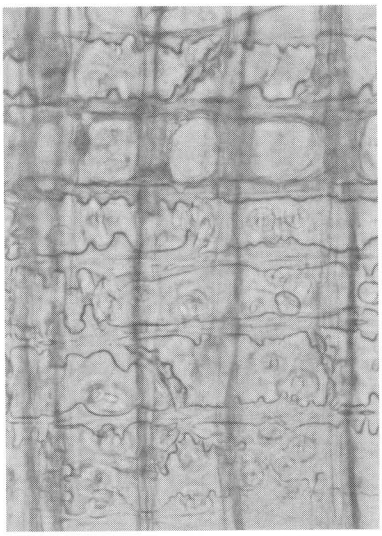
横断面 ―――― ：0.5mm　放射断面 ―――― ：0.05mm　接線断面 ―――― ：0.2mm

12.　Ⅷ区　SK01　加工木　ヒノキ科

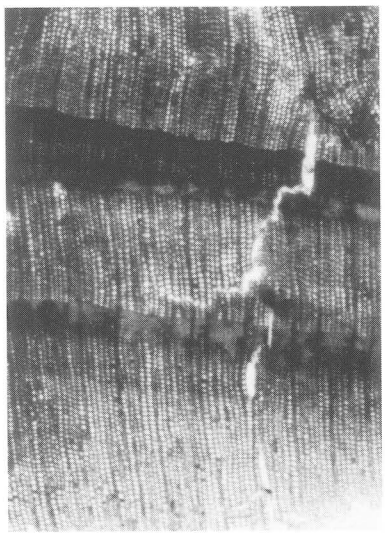
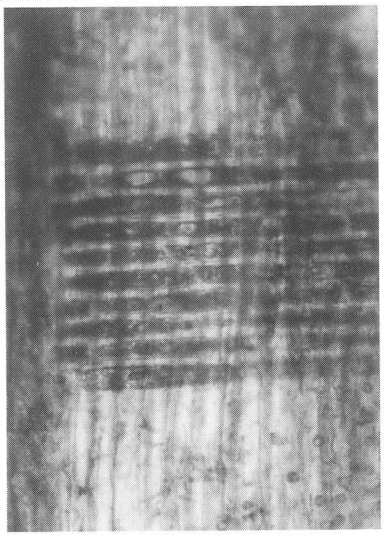
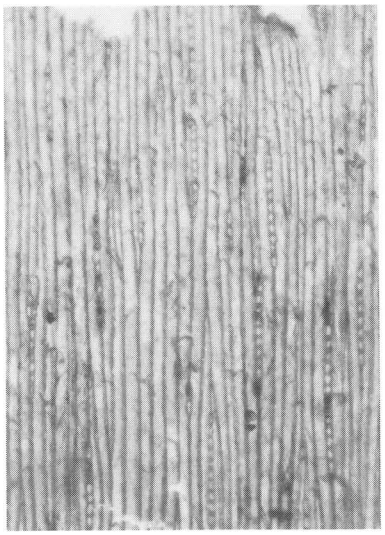
横断面 ―――― ：0.2mm　放射断面 ―――― ：0.2mm　接線断面 ―――― ：0.2mm

13.　Ⅷ区　SK01　生活用具　漆器(椀)　ブナ属

横断面 ―――― ：0.5mm　放射断面 ―――― ：0.05mm　接線断面 ―――― ：0.2mm

14.　Ⅷ区　SK01　建築部材　マツ属複維管束亜属

横断面 ―――― ：0.5mm　放射断面 ―――― ：0.1mm　接線断面 ―――― ：0.2mm

15.　Ⅷ区　SK01　部材　ヒノキ科